

学 位 請 求 論 文

中上健次文学における「路地」

——語誌的研究から抑圧の構造論へ

平成 30 年 1 月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

劉 国勇

目次

序章	1
注	5
第一章 中上健次初期文学における「路地」前史	6
はじめに	6
一、「路地」の原義	8
二、「路地」の初出『日本春歌考と僕』について	8
三、『日本春歌考と僕』から『蛇淫』までの「路地」のイメージ	16
四、「路地」ではなかった部落・故郷のイメージ	20
五、結論	39
注	40
第二章 部落を指す用語「路地」の誕生：「蛇淫」論	44
はじめに	44
一、語義上における「路地」の誕生：「駅裏」から「路地」へ	45
二、被差別の歴史性を背負う「路地」の誕生：「蛇」と「路地」について	49
三、結論	62
注	64
第三章 中上健次『不死』論——〈被慈利〉・〈観音〉・〈性〉	67
はじめに	67
一、〈被慈利〉に関する歴史上の実像	68
二、救済する〈観音〉、殺されるべき〈観音〉	69
三、〈性的なもの〉について	75
結論	77
注	77
第四章 「火まつり」論：差別の起源	79
はじめに	79
一、『火まつり』の粗筋	80
二、達男は「王＝神」である	81
三、日本における「王殺し」の不可能性について	83
四、「火」、「血」そして「毒」	86

五、「火」と「原子力発電所」	90
六、結論	92
注	93
第五章 『千年の愉楽』論：「大逆事件」の記憶及び「帝国」を脱構築する道程	97
はじめに	97
一、『千年の愉楽』の粗筋	97
二、「大逆事件」の記憶	100
三、帝国を脱構築する	107
四、結論	121
注	121
第六章 中上健次と俳句	125
はじめに	125
一、中上健次と新宮在住の俳人松根久雄	128
二、中上健次と角川春樹	131
三、熊野大学俳句部の講師たち：茨木和生・宇多喜代子・後藤綾子・夏石番矢	137
四、熊野大学俳句部のその後	146
五、結論	147
注	148
終章	153
一、各章のまとめと結論	153
二、今後の課題	155
謝辞	157
主要参考文献一覧	158

凡例

- 一、年代表記は原則として西暦を用いた。
- 一、引用文中の旧漢字は原則的に新漢字に改め、仮名遣いは文献のままとした。
- 一、引用文中の／は改行を表し、ルビ・傍点の一部省略した。
- 一、参考文献番号は章ごとに改める。
- 一、本文で引用した中上健次の文章は、原則として『中上健次全集』（集英社、一九九五年～翌年）を底本とし、同『全集』に未収録のものは引用のつど底本を注記した。また、『中上健次全集』は本文において、『全集』と省略表記した。
- 一、中上健次の文章には、社会的差別に関わる用語がしようされている場合があるが、差別構造の自明性を疑うことが中上文学の主題であるため、原文のまま引用した。

序章

一九四六年八月二日、和歌山県新宮市春日で生まれた中上健次は、一九九二年八月十二日、那智勝浦で四六歳の生涯を閉じる。一九六五年、高校卒業を前に故郷・新宮から上京し、一九六六年に同人雑誌『文芸首都』を中心に文学活動をし始めた頃から、九二年に、その早すぎる死がその生を奪うまで、それが、作家・中上健次の主たる創作時期だと言える。

『岬』(一九七六年)で芥川賞を受賞し、『枯木灘』(『文藝』一九七六年十月号～七七年三月号)で毎日出版文化賞(一九七七年)、続いて芸術選奨文部大臣賞新人賞(文学評論部門、一九七八年)を受賞し一躍人気作家となった中上健次は、一九八三年、長編『地の果て 至上の時』を書き下ろした。また、紀州熊野の被差別部落を巡る旅によって書かれたルポルタージュ『紀州 木の国・根の国物語』も『朝日ジャーナル』に、七八年から七九年にかけて連載されている。この時期、これらの展開に平行し、短編連作集『化粧』『熊野集』『千年の愉楽』『重力の都』といった連作集が、ほぼ同時的に世に出されていった。その間、中上は、紀州・熊野、アメリカ、韓国と移動し続けてもいる。

小説家であると同時に、稀代の批評家でもあった中上健次において、こうした創作の豊穡期が、批評における展開にも支えられていたこともまた、忘れることはできない。『紀州』で、「切って血の出る物語」と、差別との親和性が見出され、物語批判の試みが、『物語の系譜』(『國文学』一九七九年から一九八五年にかけて断続的に連載)といった批評において深められていくと、その成果が小説テキストの中に、実践として取り入れられていく。

その後、現実の路地＝被差別部落、つまり、現実の新宮の被差別部落は、同和行政によって取り壊しに遭い、その姿を消していく。こうした現実と拮抗し、中上のテキストにおいても、「路地」の解体が、大きな主題となり、新しい突破口として、『熊野集』が創作される。現実の「路地」が完全に解体された後には、『日輪の翼』、『奇蹟』、『異族』などが書かれ、「路地」を世界へと拡げるのである。

中上健次の文学は、批評理論との親和性が高いため、早くから注目されている。代表的な先行研究としては、中上健次の作品全体について歴史物語の観点から捉えている四方田犬彦の著書『貴種と転生 中上健次』¹、中上健次の代表作である「秋幸三部作」²の主人公「秋幸」を敢えて作家中上自身に比し、その変化を追った渡部直己の著書『愛しさについて』³、丹念に作家の時系列を追いつつ、語りの新しさを説く高澤秀次の『評伝 中上健次』⁴、同時代の批評を受け持つ立場として、作品間レベルで脱構築を見る柄谷行人『坂口安吾と中上健次』⁵、ノイズの存在を指摘し対社会的権力のあり方を問う桂秀実「異化するノイズ 中上健次著『奇蹟』を読む」⁶、反「物語」の立場から中上健次を高く評価した蓮實重彦の一連の論文⁷などが、「物語に抗する作家・中上健次」という評価の基盤を形成した。

その上、渡邊英理⁸や山田夏樹⁹はカルチャル・スタディーズの視点から、ニーナ・コーニエッツ¹⁰などはジェンダーの視点から、また、野口武彦¹¹や梁石日¹²はポストコロニアリズム

ム視点から、佐藤康治¹³は「語り」論から研究が行っている。それに、中上健次の研究動向をまとめたものとして、栗坪良樹¹⁴や永島貴吉¹⁵又は浅野麗¹⁶がいる。

中上健次文学に関する従来の研究を、大きく捉えて言うと、二つの系列に分けられる。初期小説における大江健三郎の影響、「一番はじめの出来事」から『岬』『枯木灘』『千年の愉悦』にかけての血縁と地縁にまつわる物語空間の生成を研究する系列と、『熊野集』『地の果て 至上の時』以降の物語の解体（解体の物語とも言う）を研究する系列である。

物語空間の生成系列で、中上健次の小説の読みの方向を大きく規定する論文には、蓮實重彦の「物語としての法」¹⁷がある。蓮實は『枯木灘』における「王位継承者の反復譚」を法・制度=物語として論じている。その他、秋山駿は、内向派の「自己否定の苦い味」と違って、自殺した兄の「否定の声を克服し」、「血縁という自己発見」での生の「肯定」の「強い欲望」を指摘する¹⁸。この流れの中の批評者には、「路地」をめぐる物語の世界生成と構造を析出した¹⁹吉本隆明、物語の世界に「近代の否定」を見出した²⁰江藤淳などがある。

物語の解体（あるいは解体の物語）を研究する系列で、「いま・ここ」という現実の現前に注目する柄谷行人の「物語のエイズ」、また同氏が中上との対談「路地の消失と逃亡」は特に注目すべきものである。物語空間の生成系列は近代批判の言説で、物語の解体系列は脱近代性若しくは現代性批判だと見られているが、上述の両方を同時に問題の視野にして、研究している論もある。代表的なものには、四方田犬彦の著作『貴種と転生・中上健次』や渡邊英理の博士論文『路地と文学——中上健次の文学における遍在化する路地、および歴史のなかで蠢く者たちをめぐる文化研究』などがある。

中上健次文学を語る上で、欠くことができないキーワードには「路地」がある。「路地」とは、中上が生れ育った故郷、紀州・熊野の新宮にある被差別部落に触発され、中上が、言葉によって生み出した時空である。三部作『岬』『枯木灘』『地の果て 至上の時』の「紀州サーガ」、『熊野集』や『千年の愉楽』といった短編連作集、あるいは、『紀伊物語』『鳳仙花』らの「女物語」など、多くの中上の小説言語は、路地という時空をもって紡ぎだされる。物語に対する最高水準の批評度を携えた、視点人物・竹原秋幸も、定型としての物語の完結を語りによって拒む語り部、オリュウノオバも、夭折する若衆、中本の一統・半蔵も、この「路地」において、生を与えられた。

中上健次文学において、「路地」はあたかも日常に通用する言語であるかのように新宮サーガの登場人物によって口にされ、『千年の愉悦』を支えるもっとも重要なキーワードとして機能してきた。多くの批評者も中上の「路地」を評論している。高澤秀次は、論文「中上健次と「路地」」において、「路地」を、「虚構と現実の緊張した関係」や、「『千年』の物語を掘り起こす」もの、又は「輝く野性と知性」²¹の空間と規定し、また、インタビュー「中上健次と「路地」の記憶を追って」²²においては、中上健次作品上、「路地を離脱することは一切なかった」と述べ、「日本近代文学からギリシア神話、上田秋成からフォークナーまで、使えるものはすべて動員」して、「路地」を「仮構する」、と言っている。そして、四方田犬

彦は、中上が設定した「路地」を「二重の隠蔽を経過した」後に、「人為的に作あげられた言葉」²³として捉え、柄谷行人は「歴史的敗北が生み出した屈従の姿しかない『路地』」と規定している。また、富岡幸一郎の「中上健次の『小説』と物語の力」²⁴によると、血の系譜に織られてきた「路地」は、「時空間の制約をこえて、過去・現在・未来という時間の流れに拘束されることなく、その語りのコトバのなかで生と死のドラマをくりかえす」という超越的な空間である。一方、フェミニズム研究者ニーナ・コーニエッチは、「路地は、日本の社会において支配的である父権的権力——パラダイムを顛倒させるのである」²⁵と論じている。これに同調し、高艶は『深沢七郎論：近代を見つめる土俗の目差し』²⁶において、五〇年代以降の経済高度成長と盛んな近代化の下で、深沢の『甲州子守唄』における「前近代的土俗世界の崩壊」と中上の『地の果て 至上の時』における「被差別空間の近代都市への変貌」の「路地」を比較し、「土俗の路地の近代化と都市化の進展は、母権的空間が父権的権力に崩されるプロセスである」と結論した。

以上のように、言葉「路地」は、中上健次文学に於ける重要なトポスを示し、多くの批評者にも使用されている。しかし、その語誌について、十分に明らかにされているとは言えない。中上健次研究において、言葉「路地」の語誌と同様、まだ研究の積み重ねが必要とされる部分がある。「研究動向中上健次」で浅野麗が次のように指摘している。

初期（六〇～七〇年代前半）及び後半（九〇年代）作品の分析、そして中上健次のアジア認識や天皇認識の諸相、そしてさらに、中上が主導した文化会議や熊野大学といった運動をめぐる研究が積み重ねられる必要性を痛感したことを記しておく。²⁷（傍点は筆者）

上述を踏まえ、本論文の研究課題、論述内容や研究方法、または現実的意義を記しておきたい。論文の課題は、言葉「路地」について、中上健次文学テキストにより初出から定着までの来歴を、その発展変化を、類義語の検討、また日本の歴史の総体を捉えることを加えて検証し、これまで雑駁な「路地」論について整理・考察し、また「路地」作品を分析しながら、他の昭和作家の作品や被差別部落の作品との比較を加えて、中上健次文学における「路地」の抑圧構造を解明することである。本論文の目次構成を考案するにあたり、論述内容の基準は、「路地」が書かれている作品だけに置くのではなく、「路地」が誕生する前の中上の初期作品や、「路地」解体以降、中上健次が主導していた熊野大学での俳句評論や、俳人関係などにも置く。具体的に言えば、序論では、イントロダクションとして、中上健次の生い立ちを簡単に紹介し、先行研究をまとめ、問題を提起し、研究課題、論述内容や研究方法、または現実的意義を述べる。第一章では、「路地」という単語が、中上健次の生まれ育った新宮の被差別部落を指示するものとして最初にテキストの中に登場した『蛇淫』（一九七五年）より以前の、数多くの現代詩、エッセイや短編小説を検討対象として、その初期のエクリチュールにおいて既に使われている「路地」という言葉の内包と、中上自身の出自に関連

して、或る程度言及されている被差別部落についての具体的なイメージ、さらには「路地」という言葉の原義を検討する。第二章では、中上の「蛇淫」と上田秋成の「蛇性の姪」を分析の視座に据え、被差別の歴史性を背負う「路地」を分析し、さらには中上特有の「路地」を創造していく中上文学の過程を詳しく追究する。第三章においては、『不死』を〈被慈利〉、〈観音〉、〈性的なもの〉という三つのキーワードに焦点を当てて分析する。〈被慈利〉は、歴史喚起の発動装置として、高德の僧の聖ではなく、賤視を受け、様々な差別に直面していた下層の〈ひじり〉を語り、その人たちの現実の抑圧により、救済への渴望と加害の行為を繰り返す。〈観音〉という言葉は、補陀落渡海という隠蔽された歴史を喚起し、裏に生への渴望を引き出しながらも、無意味な死を再確認し、廃仏毀釈から神風特別攻撃隊まで、〈死んでもよい〉という観念を作り出した天皇制の〈正史〉に疑問を呈する。〈性的なもの〉というのは、現代社会の政治や経済に再編成され、封建制と現代性の二重の重荷を背負った「路地」の人の、反抗する捌け口となる。中上が理論として〈性的なもの〉を未来的な視点から見据えていることを論じる。第四章では、東日本大震災に伴い発生した福島第一原子力発電所事故により、多くの人々が避難生活を強いられ、福島県民への差別や排除も跡を絶たない背景に、『火祭り』における「路地」差別の現代性を考察する。第五章では、『千年の愉楽』における「大逆事件」の記憶を考察し、「路地」が定着してから、「帝国」を脱構築する道程を検討する。第六章では、中上と俳人の影響関係から、つまり俳句というユニークな視点から、「路地」世界の抑圧構造を考察する。最後に終章では、各章を纏めた上、今後の課題を提出する。

本論文の研究方法は、作家の生い立ちを追尋しながらも、その体験が反映されている一つの作品を丁寧に読み込むことを第一とした。同時に、作品の考察を行う際に、歴史的・社会的な背景の中で、作家のエッセイや対談などを参照し、必要に応じて前後の作品の関連性に留意し、他の作家・作品と比較しながら、実証的かつ客観的に論述することに努めていた。さらには、現代俳句界のトップクラスの俳人で、中上健次の争友である宇多喜代子にインタビューし、熊野大学の瓦版資料などから、中上健次と俳人の関係を詳しく調べた。

中上健次の初期作品や後期の文化運動の研究は少ないため、中上健次文学テキストの初期作品、または、中上が主導した熊野大学俳句部に検証を加えることは、未熟のところが多いとは言え、中上健次研究にとって、現実的な意義があると考えられる。そして、「路地」の成立と変遷に伴う中上健次の思想変化について考察を進めていくことは、古代以来の長い天皇のことの葉の記憶との総体に対する「物語の物語」的な挑戦の視点や、いわゆる近代化以降、高度経済成長期以降も、爪痕がそのまま残った「大逆事件」から浮かび上がる帝国主義を脱構築する視点につながると思う。「特定秘密保護法」が成立し、また「組織的犯罪処罰法改正案」という「共謀罪」法が成立した現在、可能性として私たち全員が中上健次の描いた「路地」の者になりうる。このような時代を生きているわれわれにとって、「路地」の語りに、又は「大逆事件」の警鐘を世界的に鳴らした中上の文学的語りに耳を澄ませることから、何か新たな示唆となるものがみつかるはずであり、またそこに文学の現実的な意義

があるのではないだろうか。

注

- 1 四方田犬彦『貴種と転生 中上健次』筑摩書房、二〇〇一年。
- 2 「路地」を舞台にした、「秋幸」という主人公をめぐる三つの小説、『岬』（一九七五年）、『枯木灘』（一九七七年）、『地の果て 至上の時』（一九八三年）の通称。
- 3 渡部直己の著書『愛しさについて』河出書房、一九九六年。
- 4 高澤秀次の『評伝 中上健次』集英社、一九九八年。
- 5 柄谷行人『坂口安吾と中上健次』講談社、二〇〇六年。
- 6 絃秀実「異化するノイズ 中上健次著『奇蹟』を読む」（『文学界』一九九八年六月、三一～三十八頁）
- 7 蓮實重彦『絶対文芸時評宣言』河出書房、一九九四年
- 8 渡邊英理「媒介者の使命——中上健次『熊野集』「葺き籠り」（『日本文学』二〇〇六年二月、二八～三九頁）
- 9 山田夏樹「＜路地＞の廃棄と文体の変容：中上健次『賛歌』における＜サイボーグ＞性」（『日本近代文学』二〇一〇年五月）
- 10 ニーナ・コーニエツツ著、竹森徹士訳「中上健次論--風景とジェンダー・ナラティヴの政治」（『すばる』一九九五年七月、四七～七一頁）
- 11 野口武彦「ディアスポラとしての中上健次」（『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』明石書店、二〇〇九年、二〇五～二四四頁）
- 12 梁石日「中上健次における＜近代＞の倒錯：韓国に行って何を見てきたのか」（『アジア的身体』平凡社、一九九九年、六五～八三頁）
- 13 佐藤康智「『奇蹟』の一角」（『群像』二〇〇三年六月、一一四～一四六頁）
- 14 栗坪良樹「中上健次評価の現在」（『国文学解釈と教材の研究』一九九一年十二月、一二六～一二九頁）
- 15 永島貴吉「研究動向中上健次」（『昭和文学研究』一九九六年七月、一四四～一四六頁）
- 16 浅野麗「研究動向中上健次」（『昭和文学研究』二〇一〇年九月、九五～九八頁）
- 17 蓮實重彦「物語としての法」（『現代思想』青土社、一九七七年八月）
- 18 秋山駿「新しい時代の駄々っ子」（『新潮』新潮社、一九七八年五月）
- 19 吉本隆明「『紀州 木の国・根の国物語』解説」（『紀州木の国・根の国物語』角川文庫、一九八〇年）
- 20 江藤淳「『路地』の他界」（『文藝』河出書房、一九八三年十一月）
- 21 高澤秀次「中上健次と「路地」」（『部落解放』解放出版社、一九九九年十一月、八二～八九頁）
- 22 高澤秀次「中上健次と「路地」の記憶を追って」（『すばる』集英社、一九九八年八月、二一〇～二一六頁）。
- 23 四方田犬彦「中上健次の初期の詩について」（『全集 14』月報 14、十五頁）
- 24 富岡幸一郎の「中上健次の『小説』と物語の力」（『関東学院大学人文科学研究報告』二〇〇五年）（『すばる』集英社、一九九五年七月号。）
- 25 ニーナ・コーニエツツ著、竹森徹士訳「中上健次論——風景とジェンダー・ナラティヴの政治」
- 26 高艶『深沢七郎論：近代を見つめる土俗の目差し』東京外国大学博士論文、二〇一四年、五七～五八頁。
- 27 浅野麗「研究動向中上健次」（『昭和文学研究』二〇一〇年九月、九八頁）

第一章 中上健次初期文学における「路地」前史

はじめに

中上健次は、腎臓癌で倒れる十ヶ月ほど前の一九九一年十一月二十六日に、国際日本文化センターでの国際研究集会「現代における人間と文学」で、「小説の想像力」¹と題して講演した。この講演で中上は、「日本においては、文化の構造の一番奥にあるのが、はっきり言えますと被差別部落」と前置きにし、「僕自身、日本の被差別部落で生まれました。僕は、被差別部落民です」と表明した上で、「路地」に関し次のように語っている。

僕は自分の小説の中で、被差別部落、あるいはさっき言った日本の構造の一番奥深いところの核——小説の中で被差別部落という語を使うと政治的文脈だとか社会的文脈で文学そのものが妙な形で読まれてしまう。そこで、テキストに対してそういう破壊が行われないようにバリアを張っておこうと思う。そういうことなんでしょうか、「路地」という言い方に変えて、僕は書いてきたんですが——その核である「路地」を中心にものを考えてきたし、「路地」を中心に、日本とは何なのか、あるいは文化とは何なのか、あるいは我々がいま生きている時代とは何なのか、我々がいまこれこそ価値だと思っている人間というのはいったい何なのかということを、解こうとしてきました。²

文学テキストにおいて、「被差別部落」を使わず、「路地」を使う理由は、被差別部落に関する「政治的」や「社会的」な先行「文脈」を避けるためだ、ということがわかる。つまり、「路地」とは、「バリア」を張る防壁・障壁である。このことについて、中上はまた次のように明言している。

僕は日本で、いつも路地に関心を持っている。路地というのは被差別部落の別名である。それを政治文脈、社会文脈を外してもっと徹底して考えるために、被差別部落と言わないで路地という言葉をつかって考える。³

この講演で中上はさらに、「路地」の境界性（松阪牛の霜降りのように、部落が散らばっている状態）や、「路地」の不思議な力（国家・民族・言語への問い）などをも言及している。ただし、ここで問いたいのは、この「路地」の内包に関して、中上健次の考えは、二十年あまりの創作生涯の中で、一貫して変わらずに語られてきたのだろうか、ということである。

中上健次文学において、「路地」はあたかも日常に通用する言語であるかのように新宮サーガの登場人物によって口にされ、『千年の愉悦』を支えるもっとも重要なキーワードとして機能してきた。多くの批評者も中上の「路地」を評論している。高澤秀次は、論文「中上

健次と「路地」において、「路地」を、「虚構と現実の緊張した関係」や、『千年』の物語を掘り起こすもの、又は「輝く野性と知性」⁴の空間と規定し、また、インタビュー「中上健次と「路地」の記憶を追って」⁵においては、中上健次作品上、「路地を離脱することは一切なかった」と述べ、「日本近代文学からギリシア神話、上田秋成からフォークナーまで、使えるものはすべて動員」して、「路地」を「仮構する」、と言っている。そして、四方田犬彦は、中上が設定した「路地」を「二重の隠蔽を経過した」後に、「人為的に作あげられた言葉」⁶として捉え、柄谷行人は「歴史的敗北が生み出した屈従の姿しかない「路地」と規定している。また、富岡幸一郎の「中上健次の『小説』と物語の力」⁷によると、血の系譜に織られてきた「路地」は、「時空間の制約をこえて、過去・現在・未来という時間の流れに拘束されることなく、その語りのコトバのなかで生と死のドラマをくりかえす」という超越的な空間である。

一方、フェミニズム研究者ニーナ・コーニエッチは、「路地は、日本の社会において支配的である父権的権力——パラダイムを顛倒させるのである」⁸と論じている。これに同調し、高艶は『深沢七郎論：近代を見つめる土俗の目差し』⁹において、五〇年代以降の経済高度成長と盛んな近代化の下で、深沢の『甲州子守唄』における「前近代的土俗世界の崩壊」と中上の『地の果て 至上の時』における「被差別空間の近代都市への変貌」の「路地」を比較し、「土俗の路地の近代化と都市化の進展は、母権的空間が父権的権力に崩されるプロセスである」と結論した。

以上のように、言葉「路地」は、中上健次文学に於ける重要なトポスを示し、多くの批評者にも使用されている。しかし、その語誌、つまり「路地」の起源や意味・用法などについての変遷に伴う中上健次の思想変化は、十分に明らかにされているとは言えない。本論では、言葉「路地」について、中上健次文学テキストにより初出から定着までの来歴を、その発展変化を、類義語の検討、また中上健次に影響を与えた先行テキストの分析をも加えて検証し、これまで雑駁な「路地」論について、整理・考察を試みたい。

すでに四方田犬彦が指摘しているように、「路地」という単語は、中上健次の生まれ育った新宮の被差別部落を指示するものとして最初にテキストの中に登場したのは、『岬』と同じ一九七五年に書かれた短編『蛇淫』においてであった¹⁰。筆者は基本的に、四方田犬彦の説に賛同する。しかし、中上健次文学には、『蛇淫』より以前も、数多くの現代詩、エッセイや短編小説が存在している。その初期のエクリチュールにおいて、「路地」という言葉はすでに使われているし、被差別部落、または中上自身の出自についても、或る程度言及されている。その初期において、テキストに使用されている「路地」とは、具体的にどのようなイメージを持つのであろう。そして、「路地」の語が部落を明確に指していなかった時代には、どのような言葉を使って、部落のことを表現していたのであろうか。また、そもそも「路地」という言葉の原義は何であらうか。

「路地」前史を究明するには、上記の三つの問題を考察しなければならない。本章では、「路地」の語の原義、「路地」の初出、または『蛇淫』までの「路地」のイメージ、それに、

「路地」ではなかった部落と故郷に関する文学表現について検討してみようと思う。

一、「路地」の原義

「路地」の原義について、各辞典には次のような解釈が見られる。

『全訳古語辞典』¹¹では、「ろぢ【露地・露路】(・・ジ)(名)①むきだしの地面。野天の地。②茶室に付属している庭。また、茶室に通じる通路」；

『日本語大辞典』¹²では、「ろじ【路地】①門内や庭の通路。lane ②家と家の間の狭い通路。alley；ろじ【露地・露路】①屋根などのおおいがない土地。bare ground ②草庵式の茶室に配された庭。ふつう内露地と外露地からなり、飛び石、植え込みなどが配置される」。

『広辞苑』¹³では、「ろじ【露地・路地】・・ヂ①(「露地」と書く)⑦屋根などのおおいがなく、露出した地面。「一栽培」④〔仏〕煩惱を離れた境地。法華経の火宅喩に基づく。②草庵式の茶室の庭園。石灯籠・蹲踞つくばい・飛び石などを配する。外露地・内露地に区分。③門内または庭上の通路。④人家の間の狭い道路」；

『国語大辞典』¹⁴では、「ろじ【露地・露路・路地】(・・ヂ)①(露地)おおうものの何もないむきだしの土地。屋根などのない土地。地面。地上。② 門内、または庭内の通路。③ 建物の間の狭い通路。特に、切見世などの細い道。④ 茶室に付属する庭のこと。腰掛、石灯籠、飛石、蹲踞(つくばい)などが配され、多くは、露地門によって内露地と外露地とに分けた二重露地になっている。茶庭。露地庭。⑤ (露地)仏語。三界の火宅を離れた境をたとえていう語。煩惱を離脱した境界。法華経譬喩品に説く火宅の喩えによる。⑥王土、国土」；

以上のように、「路地」の原義に関し、各辞典は一致している。つまり、その原義は、「露地・露路」である。「地面」、「庭」、「茶室に通じる通路」の原義から、「人家の間の狭い道路」の義を生み、「路地」になるのである。

なお、『広辞苑』や『国語大辞典』では、「ろじ」は、「火宅」に対し、「煩惱を離れた境地」とあるというような見解が見られる。それは、法華経譬喩品に説く喩えであるが、「火宅」も「路地」も、そのまま中上初期短編小説のタイトルになったところからみると、「路地」の内包には、どうしても「煩惱を離れた境地」を含める一面があると考えられるのであろう。さらに、『国語大辞典』では、「ろじ」は、「王土」や「国土」の意味もする。この二つの点については後の節で論じる。まず、中上健次文学における「路地」の初出とその意味を考察しよう。

二、「路地」の初出『日本春歌考と僕』について

「路地」の語は、中上文学においてどこまで遡ることができるのであろうか。一九六七年、二十一歳の中上健次が『文藝首都』に発表したエッセイ『日本春歌考と僕』¹⁵では、次の一文が見られる。

大島はそう云う歌のもつ明るいメロディを喪くしています。大島の屍がいつまで

も路地の暗闇にほうっておかれることを知っています。(『全集 14』九九頁、傍点は筆者)

筆者の検証に遺漏がなければ、これは中上文学の文献上においての、「路地」の初出である。『日本春歌考』については、一九六六年光文社出版の、添田知道(一九〇二～一九八〇)の『日本春歌考:庶民のうたえる性の悦び』と、一九六七年の大島渚(一九三二～二〇一三)監督の映画作品『日本春歌考』がある。ここで、中上健次の指している『日本春歌考』が、大島渚の作品であるに間違いがないが、問題なのは、一九六七年に活躍し、まだ健在している監督の「大島の屍」とは、また、その「屍」が置かれる「路地の暗闇」とは、一体何を指しているのだろうか。これに関し、分析していく。

1. 大島渚の『日本春歌考』と中上健次の『日本春歌考と僕』

エッセイ『日本春歌考と僕』の冒頭には、フランスの作家、ポール・ニザンの名言「二十歳と云う年令がひとの一生でもっとも美しくとしごろでない」が引用され、中上健次の自らの「睡眠薬のもたらす惨めな感覚」、つまり、他人が「陽気」で、自分が「悲しい」という歪みの感覚が説かれている。その次に中上は、大島渚の『日本春歌考』に言及する。

僕は映画をみました。大島の「日本春歌考」です。その画像は僕をしっかりとつかまえていてくれました。文芸首都に誰もまだ書いたことのない激しい欲望の願いにみちています。僕はその映画をみて映画の勉強をしたいと思ったほどです。(『全集 14』九八頁)

大島渚の『日本春歌考』は、題名から推測されるような春歌のオン・パレードでもなく、あるいは春歌の映像的解説でもない。それは、春歌を媒介して抑圧されるような少年少女の性が想像力を昂揚させ、戦後民主主義を扼殺する政府が批判され、日本の中の朝鮮が覚醒しはじめる映画である。つまり、李英載が博士論文『東アジアにおけるトランス／ナショナルアクション映画研究』で指摘しているように、大島渚の『日本春歌考』は、「在日朝鮮人の少女・従軍慰安婦の身体を通しての、紀元節の復活という国家的プロジェクトと安保闘争時代の無能、ベトナム反戦平和運動世代の「当事者意識」の欠如に対する大島の切実な内部批判だった」¹⁶。この映画の略筋は以下のようなものである。

大学受験のため、上京してきた地方の高校生の中村ら少年四人は、試験場で見た少女藤原眉子に、性欲を感じた。試験の終わった後、街へ出た中村らは、建国記念日反対のデモに合い、加わった。そこで突然、デモのなかから離れる男女、すなわち、かつての彼らの教師で、いま大学の博士課程に騎馬民族を研究している大竹とその恋人の高子を見つけた。翌日、クラスメートの女生徒早苗や幸子と会った彼らは、大竹を訪ねる。大竹は、居酒屋で中村らの性的欲求不満を看破し、春歌を歌い始めた。それに、春歌の政治的な隠喩を説明した。しか

し、中村らはいっそう性的になった。その夜、忘れ物を取りに大竹を訪ねた中村は、ガスマスクを蹴飛ばして寝ている大竹を見たが、助ける気にならなかった。翌朝、大竹の死体が発見された。中村らは、大竹から教えてもらった春歌を歌い、眉子を犯す場面を想像した。中村は、高子を訪ね、大竹を助けなかったこと告白した、一番から十番まで春歌を歌い、十一番目に高子とセックスした。その後、高子と中村と一緒に眉子を訪ね、空想上で眉子を犯したことを告白しようとした。眉子の邸の庭で開かれたベトナム戦争反対集会のフォークソング大会で、眉子に会い、それを告白したが、意外にも眉子が空想を実現して欲しいと言う。中村らは教室でそれを実現したのであった。

そして、エッセイ『日本春歌考と僕』では、中上健次が大島の映画をみて、その粗筋を解説しながら、感想を述べている。中上に特に印象に残ったものを、纏めてみると以下の幾つある。一つは、紀元節反対デモで揚げられた「黒丸」と「黒旗」。一つは、主人公の大竹先生が、生徒とのパーティで、春歌（よさほい節）を歌い、また、春歌について政治的な意味を解釈すること。一つは、ベトナム戦争反対集会でのフォークソング大会で、少女・金田が歌う朝鮮の娼婦のみじめな歌。一つは、少女・眉子（別名四六九、受験番号に因む）が同大会で「黒い太陽が昇る」と演説する場面。一つは、少女・眉子を犯すことを試そうとする少年達の前にして、死去した大竹の愛人が、天皇は朝鮮人だと述べる場面。一つは、少女・眉子の最後の台詞「真実」、である。これらを検証してみよう。

2. 春歌という反体制の構造

大島の映画において、中村らの行動は抑圧された性欲に根ざしていたが、現代の社会で抑圧されているのは若者の性欲ばかりではなかったのであろう。

映画のなかで、中村らは大竹の如き進歩的な男が、生徒の前に突然春歌を歌い始めたことにびっくりした。春歌とは何か。大竹（すなわち監督の大島の分身）が、春歌の意味を次のように説明している。「すべての春歌は、猥歌は、そしてエロ歌は、性歌は、民衆の抑圧された声である。抑圧された民衆の労働、生活、愛、これらが意識されたときに自ずと歌になった。だからこそ、春歌は民衆の歴史である」¹⁷という。

大竹の歌う春歌は、「ひとつでたほいのよさほいのほい。ひとりむすめとやるときにや。おやのゆるしをえにやならぬ……」である。小川徹が『『日本春歌考』裏目読み』¹⁸で指摘しているように、大島渚の「ジリジリした不安感、焦燥感」は、そのまま「性的不安・焦燥感と重なり合っている」。同じように、中上健次も次のように述べる。

それは先生の屈折した心理でもあるわけです。大島の心理でもあるわけです。いや、未来を信じると云う行為をできなくなったたくさんの人間どもの心理であるわけです。（『全集 14』頁）

大島渚自身の発言によると、『日本春歌考』という題は、添田知道の同名のポケットボッ

クから取った¹⁹。添田知道の『日本春歌考』²⁰における「春歌」とは、抑圧のなかで生きる人間の、抵抗と生の歓びとが交じり合った、秘かな叫びであるらしい。『添田知道著作集』の解説で大島渚は、そもそも「猥歌」と呼ばれるべきである「春歌」が、「性に飢えた民衆のイメージーションが生み出した歌である」²¹と述べた上、更に次のように言う。

性において人間は完全にプライベートである。性が持つその私性は権力者にとって我慢できないものである。しかし性は統制できない。そこで権力者は、性を統制する代わりに性についての思想を統制しようとする。²²

つまり、「性を歌うことを通しての反権力」²³と捉える大島渚は、添田知道と姿勢が一致しているため、添田のボックの題名を借りたのであろう。

このことについて、中上健次と同時代の批評家は、如何に捉えているのであろう。佐藤忠男は、春歌を、「みじめな者も歌」、「みじめな者の自己回復の軍歌」、「攻撃できない他人に対する空想的な攻撃の歌」、「同じようなみじめたらしい連中が己が共犯者に誘い込む歌」²⁴と規定している。佐藤はさらに、中村ら男女七人の受験生と先生の大竹が居酒屋にいるシーンに注目し、その他の客の歌う軍歌と、大竹や生徒の歌う春歌が入り乱れている場面を、次のように評している。「現代日本のいたるところによどんでいる消耗したみじめたらしい殺気や、その裏返しである陽気な共犯感情のドキュメントとなっていて卓抜である」²⁵。要するに、春歌は、「共犯」を引き起こす「空想」的な、草の根の反権力の「犯罪」である。

一方、若い中上は、上述のような深い思想を、すでに鋭い目をもって、本能的に洞察していた。映画の中で、反戦フォークソング大会のシーンがある。その大会の前半は、中上健次の言葉を借りれば、「We shall overcome」のような「緩した願いだけ」の、「アメリカ的な陽気さ」にみちた歌だけであった。その後、金田は、マイクを奪い、朝鮮の娼婦のみじめな歌を歌った。中上は、金田の行動を賞賛する。が、同じく金田の歌に拍手する若者を、中上は次のように罵倒する。

若者たちは新しいフォークソングだと思って拍手します。愚かな若者たち！アメリカの大新聞かなんかに反戦広告をだした良識者たちのように、健康さにみちみちている若者たち。睡眠薬に酔っぱらって、何かを求めてさまよいあるく少年を理解すらいけないでしょう。幸せな家庭と、幸せなセックス、インテリであろうとつとめる俗物の作家たち。（『全集 14』一〇二～一〇三頁）

反戦集会で、若者たちは春歌を、新しいプロテストソングと間違えて喝采するが、実はそれは、「朝鮮人の屈辱」に「威厳が示している」²⁶歌である。中上は、反ベトナム戦争の裏は、反政府体制や反権力だと看破している。つまり、病気でもないのに呻吟するような、うわずって真実の感情がこもらない若者を、「愚かな若者たち」と罵倒し、春歌を歌う金田の

真実の行動、春歌による反権力の行動に賛同するからである。

いわば、中上は、ベトナム戦争反対の集会で、自ら屈辱の側の人間であることを春歌で宣言し、朝鮮服に着替える女子高校生の金田のそのふるまいをすでに見事に看破し、いわゆる反ベトナム戦争の深層は反日本政府（体制）なのものだと思っているのであろう。換言すれば、中上健次による反ベトナム戦争は大義であり、建前でありながら、その深層には統制された草の根の無力の反抗があるのである。

金田は日本の中の朝鮮人であろう。日本名のこの朝鮮人の少女が、級友もそのことを知らなかったが、大竹の最後の春歌に誘発されるかのように、日本支配時代の朝鮮の娼婦の歌を口ずさむ。大竹の歌った春歌「ヨサホイのホイ」は「建国記念日の虚妄をブチやぶって引き裂いていく」²⁷ものであれば、金田の歌った娼婦の春歌は、反ベトナム戦争の裏を現像させるものである。

金田の歌った春歌は、中上のエッセイの中に、全部再録されている。一部分を引用しよう。

アメノ ショボショボ フルバンニ
カラスノ マトカラノソイテル
マテツノ キンポタンノ パカヤロウ（後略）（『全集 14』一〇二頁）

実に、映画の中のこの歌は、大島によると、添田知道から引用したものではなく、「怪しげな本屋の店先で買ったチャチな宴会用の替え歌のハンドブック」の中から、発見したものである。大島によると、この歌は、「どこまでつづくぬかるみぞ、ということばで始まる軍歌で戦争中は調子が暗いということで禁止され、戦後になって、それははてしない泥沼にめりこんでいった日本帝国主義の姿を予感していたのだとわたしたちに思わせた歌の替え歌で、満州へ売られた朝鮮人娼婦の歌」²⁸である。

大島渚は、映画『日本春歌考』を作るとき、「世界各国の春歌をぜひ知りたいと思った」らしい。そして、一九六六年は、中国では、紅衛兵の嵐が吹き荒れはじめる年でもある。大島渚はこう断言していた。

北京へ往還する紅衛兵の誰かは必ずや、
「江青夫人とやる時は
語録片手にせにやならぬ」
と歌っているに違いないと確信する。²⁹

大島渚は、勿論、日本で「皇后陛下とやるときにや、直立不動でせにやならぬ」との類推として、反権力の普遍性を見た。しかし、思想統制がもっとも厳しかった六十年代においての中国では、その断言は誤りであると思う。つまり、イギリスの作家ジョージ・オーウェルの小説『1984年』（*Nineteen Eighty-Four*）のような思想統制の世界で、最高権力者の夫人

を犯すという想像上の犯罪である猥歌さえも、あり得ないのであろう。しかし、反ベトナム戦争の深層は反日本政府であると同じように、現在の中国における反何々（例えば、反日デモ）を名目にする集会に、反政府体制の思想がひそんでいるということは、全くあり得ないとは言えないであろう。

いずれにせよ、中上健次は大島の『日本春歌考』から、反体制反権力の思想を読み取ったのである。そればかりではなく、中上は「春歌」を挽歌としても解説している。

民主主義教育を地道に行う大竹先生の春歌は、中村にも、金田にも受け継がれている。すでに、上述で論じたように、金田の歌う春歌は、正真正銘の春歌となっている。

一方、中村の歌う春歌はどうであろう。中村は、大竹から教えてもらった春歌を歌いながら、大竹を見殺した。魯迅の有名な小説『薬』³⁰を想起させる。独裁の暗闇の政府を倒そうとする若い革命者夏瑜が、捕まえられ、斬首される。その血が、無知蒙昧の民衆に使われ、肺病の小栓を治すための人血饅頭となる。人血饅頭は小栓の命を救うわけがない。革命者の血は、無知蒙昧の民衆を救わなかった。革命者も、小栓も死ぬのである。同じように、大竹が民主主義を、まだ蒙昧の中にいる中村らに教えていたが、大竹も救わなかったし、中村も啓蒙されなかった。

ゆえに、中上健次は、中村の歌う春歌が、「安保闘争で敗れた先生への挽歌」³¹だと規定する。中村の歌う春歌は大竹を葬る挽歌となり、独裁の暗闇の中での人血饅頭ともなっている。

映画では、デモのシーンがあった。雪が降りつづく東京の街を歩いているデモのシーンである。赤旗ではなく黒旗、赤い日の丸ではなく黒い日の丸を林立させ、遺骨のような白い箱を抱き、卒塔婆のような木片を手をしている。そこには、「紀元節反対」と書かれていた。一九六七年の二月十一日、建国記念日と名をかえ、紀元節が復活されたのである。紀元節反対とは、その復活の反対である。しょぼくれたデモ隊は、雪の中で、一段と厳粛に見える。

このデモのシーンを、「百五十人ぐらいのエキストラ」を組み、実際「その紀元節が復活する日」に撮った大島渚の言葉を借りれば、それは、「戦後の民主的変革の一つの死を、シンボライズしていた」³²のである。

これに対し、中上は如何に受け取っているのでしょうか。やや長いですが、引用してみよう。

雪の中を歩いていると「黒丸」と「黒旗」をもった紀元節反対のデモといっしょに歩いているとき、先生が女といっしょに歩いているところをみつけたのです。デモは大島の現実に対する挑戦をあらわしています。赤旗でなしに黒旗をもち黙々と巨大な芋虫のように行進するのは、赤旗の歌で象徴する華々しいヒーローのイメージを拒みます。大島は孤独です。自分の政治に対する認識が正しいと思っているにもかかわらず、暗い怒りにみちています。民衆の旗、赤旗は戦士の屍をつつむ、屍かたくひえぬまに、血潮は旗をそめぬ、たかくたて、赤旗を、そのかげに死を誓う……

大島はそう云う歌のもつ明るいメロディを喪くしています。大島の屍がいつまでも路地の暗闇にほうっておかれることを知っています。（『全集 14』九九頁）

二十一歳の中上健次の意思は明らかである。赤旗はヒーローの旗、血の旗である。血の旗の「かげ」に、死が隠れているのである。つまり、赤旗は、黒旗である一面、死の旗の一面を隠れているのである。あえて「黒丸」と「黒旗」を持ち出す大島が、「孤独」であり、「暗い怒り」にみちていると中上が思う。それは、大島が活着ているにもかかわらず、「路地の暗闇」に死んだからである。その暗闇は、日本の「民主主義」の暗闇であり、中国のような「人血饅頭」の暗闇である。無論、中上健次は、大竹の春歌を理解し、金田の歌う朝鮮人の娼婦の歌を十分理解しているはずである。若い頃の中上はすでに社会の暗闇に注目しているからである。

中上健次の注目している暗闇について、映画の中の「紀元節」に関するものを通して、もう少し検討しよう。

眉子は、金田がしろいチョゴリ（この朝鮮服は屈辱の象徴）を着て立っているのを見ると、突然立ち上がり、集会の舞台の中央で、次のように演説した。

一九四九年、私は生まれました。

一九六〇年六月、私はもう一度生まれました。

女と血と……。

今、一九六七年、まだ私たちは神様の手のの中にいます。

一月一日の神様は、生きる理由のない少女にもいきていることを与えます。

（中略）黒い太陽がのぼって来る。³³

一九六〇年とは、六月十五日、改定安保条約批准阻止の全学連七千人が国会に突入し、東京大学の学生・樺美智子が死亡する年であり、六月十九日、新安保条約が自然成立する年である。この年にして、眉子は、「もう一度うまれました」。つまり、その前に一回死んだわけである。民主主義のために一回死んだのである。その悔しさのなかで、六年も経った一九六七年、政令で二月十一日を建国記念の日と定め、つまり紀元節を復活したのである。それは、「まだ私たちは神様の手の中」にいるのである。眉子が、どのような苦しい人生に遭遇していたのかは、映画の中では明示されていないが、「生きる理由のない」眉子は、同じ屈辱を感じ、屈辱な服を着替える金田に触発してから上述の演説をしたに間違いがない。

眉子の演説の途中、中村らは、空想で彼女を犯したことを告白する。その後に行われる映画の進行が意外である。眉子は自ら、中村らの犯す空想を実現させようとする。しかも、高子や金田の目の前である。中村の仲間上田らは、春歌を歌いながら、中村を犯す。高子は、天皇の起源を説く。高子の演説を纏めれば、つぎのようである。紀元節の二月十一日に、橿原の宮で即位した初の天皇、神武天皇が、ハツクニシラススメラミコトと呼ばれているが、十代の天皇、崇神天皇も、ハツクニシラススメラミコトと呼ばれている。しかも、崇神天皇は、もう一つの呼び方があり、ハツクニシラスミマキノスメラミコトである。ミマキとは、

ミマというところの皇居で、ミマは現在南朝鮮の任那であるという。また、スサノオノミコトは、新羅の国（現在の南朝鮮）に一度降りられ、そこから出雲のひの川の鳥上の峰に渡られたという。そして、大化改新とは、南朝鮮から来て、日本を征服した大和朝廷が、国内に残る出雲族の勢力を一掃し騎馬民族の永久支配のいしずえを築こうとした革命だという。

大竹は騎馬民族を研究している進歩な青年で、その恋人の高子も同じ知識を持つのであろうか。高子は、紀元節の復活の夜、生徒らの空想実現（眉子を犯す）の現場で、紀元節という詐術と陰謀を説くのである。いわば、日本の天皇の起源、いや、日本人の起源の一つは、朝鮮・騎馬民族だとの説である。この説は、現在もまだ定説ではなく、多少の異議が残されているが、事実として、日本人（また天皇）と朝鮮・大陸の関係を無視して論じることは、もはや不可能である。いずれにせよ、この映画は、犯す空想が実現されたときの背景、つまり、教室の正面に貼った日本と朝鮮半島と中国の等身大の地図が示しているように、日韓関係史が語られている映画である。

「大島は僕の心理を代弁する」³⁴と述べる中上健次は、この映画の場面に何を捉えたのであろう。かつて、塩見鮮一郎は「差別としての水俣病」³⁵で、在日朝鮮人の差別と、部落民の差別の関わりについて言及している。明治維新後の早い時期に、日本帝国主義の「膨張策」とともに、「朝鮮人差別」が作られている。そこで、歴史的な経過を無視して「朝鮮人差別のテキスト」の一環として、「部落民異人種」論は捏造され、被差別部落差別は「利用」された。つまり、文化レベルで、「明治政府の内憂を外患へ転じて逃げ切ろうとする方策」として、「内なる差別」（内部の対立）と「外なる対立」に民衆の視線を向けさせようとする。塩見のこの指摘を、政治危機の転移や、政治上の分断支配と理解してよい。菅孝行が会談「差別分断支配と階級形成」³⁶で指摘しているように、一九二〇年代、一九三〇年代、日本帝国の政権は、「海外侵略と国内治安維持の両面から、差別分断工作」に力を入れていた。そして、部落解放闘争の急速な展開を行われた一九七〇年代においては、もっと隠微な形で、「民主主義という名の建前」で、つまり「民主主義を名分」にして「差別分断」する。ゆえに、「差別することが楽しい」又は「差別することぐらいしか楽しみがない」のような差別者を、「権力や支配階級が大量に作る」のならば、差別構造は「拡大再生産」になるわけである。また、菅孝行が会談「差別分断支配と階級形成」³⁷で、「部落差別の問題」は、「差別一般とは質的に違った重大な問題」であり、「社会的制度」と深く結びつけられてあり、「日本的な観念体系のなか」に食い込んでいる。

いわば、政治上の分断支配の視点から見れば、在日朝鮮人に対する差別問題と、「部落民異人種」という被差別部落民問題とは、同じような「差別の構造」を持つ。ゆえに、差別の問題は、在日朝鮮人や部落民などの被差別者ばかりではなく日本人全体の課題とならなければならない。

映画をみた中上健次は、「天皇も朝鮮人である」と叫ぶ高子に同感し、大島に同感し、大島が「僕」の心理を代弁していると言う。大島にしっかりとつかまえられたと言う。エッセイ『日本春歌考と僕』の題が示したように、「僕」（中上）と映画のテーマは切っても切られ

ない関係があるのである。その意味で、大島の屍とは、眉子の言う「もう一度生まれました」前に死んだ屍であるとともに、中上自身の屍でもある。いわば、若い中上健次は、誰にも言えない部落民の出自を、在日朝鮮人の差別問題と繋げ、黒い太陽の代わりに、「路地の暗闇」を発見したのである。換言すれば、中上健次文学に初出の「路地」は、すでに、「暗闇」と接合する傾向があり、また、被差別部落民の悲惨の歴史や現実と結びつける傾向があったのではないであろうか。

エッセイ『日本春歌考と僕』の終りに、次ぎのように書かれてある。

ニザンの言葉どおりの年令なのです。あなたはもうつまらない作品を書くことだけは止して下さい。ほんとうの言葉が、声にならず、怒りが声にならないことを知って下さい。(『全集 14』一〇四頁。傍点は筆者)

「ほんとうの言葉」、つまり、大島が提示したような暗闇をこれから作品に書く、と中上は心を締めているのではないであろうか。この自分を対象にした宣言の意味は大きい。『日本春歌考と僕』を発表した直後、又は、翌年の現代詩において、「長山」や「春日」など、地元の人々の指す部落の代名詞が、堂々と作品の中に書かれたのである。この自らの、初めての出自暴露について、後節「路地」の誕生でまた詳しく検討する。まず、部落と「路地」を同一にする『蛇淫』までの初期作品を検証したいと思う。

三、『日本春歌考と僕』から『蛇淫』までの「路地」のイメージ

新宮の被差別部落を指示するものとして最初にテキストの中に登場したのが、一九七五年に書かれた短編『蛇淫』であることは、前の節ですでに触れている。それに、前節では、中上健次文学における「路地」の初出は、一九六七年発表されたエッセイ『日本の春歌考と僕』であり、『日本の春歌考と僕』においては、「路地」という言葉が、すでに「暗闇」と接合する傾向があり、また、被差別部落民の悲惨の歴史や現実と結びつける傾向があった、と結論をした。次の節では、『日本の春歌考と僕』に続いて、『蛇淫』までの文学における「路地」のイメージを考察する。

『蛇淫』までの作品に、「路地」という言葉は、それほど多くは使われていなかった。すでに考察を加えたエッセイ『日本春歌考と僕』にある一例のほか、小説『灰色のコカコーラ』³⁸ (一九七二年) に六例、小説『十九歳の地図』³⁹ (一九七三年) に二例、エッセイ『町よ』 (一九七四年～一九七五年) に三例、小説『蝸牛』⁴⁰ (一九七四年) に二例が見られる。そのすべての例を挙げて、別々に分析してみよう。

1. 『灰色のコカコーラ』、『十九歳の地図』について

『灰色のコカコーラ』とは、一九七二年十月一日、『早稲田文学』(第四巻第十号)に発表され、一九七五年、作品集『鳩どもの家』(集英社)に収録されていた作品である。

『灰色のコカコーラ』における六例は以下のものである。①「Rの横の路地のゴミがあふれそうになったポリ容器のそばで」(『全集1』、三〇二頁。「R」とは、モダンジャズ喫茶店の代名詞)。また、②、③「駅を横ぎり、路地と路地が交叉しあって」(『全集1』、三二九頁)、④「薬局の前をとおって曲った路地に入る」(『全集1』、三三七頁)、⑤「路地のつきあたりのデパート」(『全集1』、三三七頁)、⑥「空が濁り夕焼けが終る頃学校のそばの入りくんだ路地で運搬自転車にのった長靴の男をみつけて」(『全集1』三六一頁)である。以上のように、『灰色のコカコーラ』における「路地」の語は、喫茶店の横、駅の横、薬局の曲がった所、デパートのある所、学校の傍、或いはゴミがあふれる所として、使用されていた。

一見して、「路地」のイメージは、東京での鬱屈した青春を送る十八、九歳の主人公たちが、首都の風俗を彩る場所のイメージと考えられ、どこでも見られる風景で、部落の代名詞とは考えられないであろうが、実は違う。

この小説で、春日町のことや春日の「兄妹心中」の歌がすでに出現した。また、主人公十九歳の山田朋の出自について、次のように説明している。

まだぼくらの一家が朝鮮部落のとなりの古い崩れかかりそうな家ばかりだった町にいたころ、母がいまの父と三度目の結婚をせず、母の血だけでつながった子供がポリネシアの母系一族のように暮らしていたころのことだ。(『全集1』三四四頁)

中上が幼い頃、確かに朝鮮部落の子供と一緒に遊んでいる。上述のように、複雑の血縁関係も、言及されているのである。そればかりではなく、「山田朋、おまえは人間などではなく、蛆虫だ」(『全集1』三五〇頁)とか、「実のところぼくには梅毒の血が流れているのだ」(『全集1』三六七頁)とか、みずから、部落の血を引いている悩みがある。

まさに、高澤秀次がインタビュー「中上健次と「路地」の記憶を追って」⁴¹で指摘しているように、「路地的なものが最初に描写されている」作品は、『灰色のコカコーラ』であり、作品には、後の『岬』や『枯木灘』の素材が出揃っている。「東京を舞台にした小説」でも、そのフーテンの主人公は、「絶えず路地的なものとの対応関係」を持つのである。

換言すれば、上述の「路地」の風景は、東京における熊野新宮の部落の風景そのものであろう。『灰色のコカコーラ』で、中上の頭に浮かぶ東京の、駅を横切るところの「路地」は、新宮の春日地方の、駅の隣の「路地」と、姿が重なっているであろう。

次では、『十九歳の地図』について考察してみよう。

一九七三年六月一日、『文藝』に発表され、一九七三年度上半期の第六十九回芥川賞の候補作ともなっていた『十九歳の地図』の粗筋は以下の通りである。予備校に籍を置きながらも大学進学を擲っている「ぼく」は、新聞配達のバイトをやっている。同室者に紺野がいるため、一人きりの自由時間はない。しかも、寮の隣のアパートからは、亭主と喧嘩ばかりしている女の金きり声が間断なく聞こえてくる。そのような生活の中、「ぼく」は、世間や社会への憤懣を育み、配達地区の地図を描き、「刑の執行」をすべき家に×印を付け、脅迫電

話をかけてまわる。

『十九歳の地図』には、「路地」の語を使う場面が二例ある。「路地のつきあたりの鶴声荘」（『全集1』、三九三頁）と「通りを走って路地に入ると他の新聞社の配達に出あった」（『全集1』、四百頁）である。走っている「路地」は、つまり、「ぼく」が配達を受け持つ地区は、「繁華街のはずれの住宅地」である。そこには、「ばかでかい家」があり、「つぎはぎだらけ」の「バラック」があり、また、「印刷工場」もあれば、「バー」もある。「路地」の語は、やはり、原義である「人家の間の狭い道路」として、使用されている。

しかし、この作品の中には、地縁、血縁の複雑関係は一切に描かれていないとはいえ、青春の鬱々としたエネルギーが沸いている。主人公「ぼく」は、「大江健三郎の初期の作品に登場する〈僕〉との兄弟意識によって成立」⁴²し、小説『十九歳のジェイコブ』（一九七八年～一九八〇年、「野性時代」に連載）とあわせて、エッセイ「犯罪者永山則夫からの報告」（一九六九年八月「文藝首都」）などにも露わにされている永山則夫の連続ピストル射殺事件への呼応が見られる。松本健一が、『十九歳の地図』の解説「同時代の爆弾」⁴³で、次のように評している。「東アジア反日武装戦線」による「連続企業爆破事件」が、『十九歳の地図』の作者が起したものだ、と瞬間的におもった。つまり、それは「当時の中上健次の否定的情熱を反映している」のである。

未遂のテロルが孕まれ、同時代の政治的に過激な空気が読める『十九歳の地図』の主人公の「ぼく」は、「路地」を走って新聞を配達すると同時に、「路地」にある各家庭を覗き見、更に「公衆電話」から、各家庭に脅迫の電話をかけ続け、ついには、東京駅に列車爆破を予告するのである。つまり、「路地」には、すでに破壊の要素が入っていて、破壊したがる少年、憤懣の少年の走る「路地」のイメージがあるのではなかろうか。

2. 『町よ』、『蝸牛』について

一九七六年から一九七八年まで、『PLAYBOY』に連載する小説『町よ』の系列があれば、一九八六年から一九八八年まで『すばる』に連載する小説『町よ』の系列もある。しかし、もっと早い時期の一九七四年から一九七五年まで「日本語書新聞」に発表したエッセイ『町よ』がある。エッセイのなかで、蒲田、善光寺、天王寺の三つの町に見たことと感じたことをそのまま記載した。

蒲田の一節で、「路地」の語が二つ見られる。「方向もわからないまま、路地から路地へと歩いた」である。この「路地」は、蒲田の「あやめ橋」の向こう側の「路地」である。中上は、かなり「あやめ橋」という言葉に拘っているらしい。中上は、柳田国男の「地蔵の新和讃」を全文引用し、その中の〈二本榎〉つまり、「船長をしてゐる主人の留守に、其家に来て妻子五人を惨殺した者があつた」という話に触発され、「あやめ橋」は〈二本榎〉と「類似する人々の心のうごめきが要る」と述べている。

そこで、「あやめ橋」の向こう側の「路地」を目的なしに歩く。この、「あやめ橋」は境界だと思ふ。中上は、ほぼ同じ時期に書き下ろした小説『黄金比の朝』（一九七四年）の主人

公は、エッセイ『町よ 蒲田』で、中上が見た風景にいる。たとえば、エッセイ『町よ 蒲田』に記載され、何気なく次のような風景は『黄金比の朝』にも見られる。「歩きつづけた。くたびれたので、喫茶店にはいった。不思議なところだと思った。紙袋を抱えた女の子と眼鏡をかけた学生風の男四人が、話しこんでいた」。ただ、『黄金比の朝』では、その不思議さは倍増され、女の子を娼婦とし、学生四人が「僕」と同棲者と来訪の兄となっている。『黄金比の朝』に関し、また、第四節「路地」の語を使わない部落・故郷のイメージ：自傷の心理である「薔薇」で、詳しく論じるが、ここで述べておきたいのは、エッセイ『町よ 蒲田』には使われている言葉「路地」が、『黄金比の朝』に使われていないが、代わりに「露地」の語を使い、「薔薇」の語を使う。

いずれにせよ、エッセイ『町よ 蒲田』で言及された「路地」は、`境界の「あやめ橋」の向こう側にあるのである。

エッセイ『町よ』にもうひとつの例がある。「路地に入ると、犬が吠えた。男が不審に思えたらしかった」という。『町よ 天王寺』にある一つのセンテンスである。前の段落では、次のようなものが書かれてある。

その兄に較べればこのおれは不純だ。子供の時もそうだったし、いまもいっそう不純だ。だから純粋・純血はきらいだ。そんなやつらを見ていると、むらむらと邪悪なもの、腹の赤いイモリのようなものが這い出てくる。ことごとく汚穢にまみれさせよ。血を吐くまで私刑しろ。頭を叩き潰せ。眼球をえぐり、舌を裂け。鼻をそげ。実際、おれは、この手で兄を殺したかった。りょうじょくし、手脚を切断し、ふぐりを抜きとり、肛門から口腔まで一気に槍でもってつき貫く。⁴⁴

兄への憎悪の感情は激しい。無論、作品により、兄への感情が微妙に変化するが、兄の自死について、「代々続いた差別される側の象徴的な死としてそこに位置づけられ、それを見とどけた弟は、そのことを表現する者として宿命を同時に位置づけたことになった」⁴⁵。そこで、「路地」にはいると、「犬が吠えた。男が不審に思えたらしかった」。男が不審に思うのは、「路地」そのものが境界であるから、よその人が「路地」に入ると、境界を侵入するわけであり、地元の人が、「不審」と思うわけである。「路地」と部落を、まだ結びさせていないこの頃、つまり、エッセイ『町よ』を書いている中上健次は、普通の意味としての「路地」にも境界性があるということを敏感に捉えているのではないだろうか。

それから、『蝸牛』にも、「飲食街になっているせまい路地を抜けた」⁴⁶と「路地を抜けるとすぐ防風林が見え」⁴⁷との二つの例がある。この二つの例に重点を置きたいと思う。一見して、ここに出現した「路地」の語は、普通な意味として使用されているようであるが、実に被差別部落と結びつける芽生えが見られる。なぜかという、『蝸牛』は、『灰色のコカコーラ』や『十九歳の地図』と違って、舞台は東京ではなく、東京から舞い戻る「S市」⁴⁸である。このS市とは、いうまでもなく、中上の出身の新宮市を指している。ちなみに、新宮

市の神社であり、熊野三山の一山である熊野速玉大社の摂社神倉神社をも、作品で、「巨岩を御神体に祭ったこの市の山の頂上に建てられた神社」⁴⁹とされている。中上は、故郷の固有名詞を、故意に避けているのであろう。しかも、『蝸牛』において、「牛のひづめの男」、「白痴の子」、「義足をつける男」など、そのうち中上健次が、被差別部落神話空間として、物語世界を作り上げる要素的なものは、ここにすでに登場している。それに、「路地を抜けるとすぐ防風林が見え」での「防風林」とは、特別な場所である。「防風林」のところの「浜の家」は、『蝸牛』においては、「ぼく」（ひろし）に、『岬』においては安雄に、『枯木灘』においては安男に、刺された光子の兄の住む所である。要するに、「浜の家」の持ち主は、「防風林」にあり、被差別部落民と婚姻関係をもつ一族、若しくは、被差別部落民そのものであるため、「路地を抜けるとすぐ防風林が見え」との一文にある「路地」の語は、不安定とはいえ、「被差別部落」と結びつく傾向はすでにあると考えられる。

以上、『蛇淫』以前のエクリチュールに関し、出現した「路地」の語のすべてを、例としてあげ、分析してきた。小説『灰色のコカコーラ』においては、毒品、暴力、汚さのイメージや部落出自告白の胚胎、小説『十九歳の地図』においては破壊の要素、エッセイ『町よ』においては境界性の意味が、「路地」にそれぞれ含まれている。そして『蝸牛』においては、舞台を熊野新宮の部落にし、「路地」と部落がはじめて共起する。

次の節では、『蛇淫』以前のエクリチュールにおける「被差別部落」の表現について分析する。

四、「路地」ではなかった部落・故郷のイメージ

中上健次が、自分が部落出身だと知ったのは、いつ、どこ、如何にしたのであろうか。一九八三年八月一日「解放教育」に掲載される「生のままの子ら」では、次のようなものがみられる。

子供は部落の中で大手振っている者が、外で目くばせ一つ、ひそひそ声一つでたちまち打ちくだかれているのを知っている。そして、突発的に、誰にも生涯忘れられないような事が起きる。それは私の事だ。兄の子分のようになって家に出入りしていた町の高校一年の男生徒が服毒自殺をした。知らせが入り、遺書の中味を知り、中学一年生になったばかりの末の姉は、狂気のように泣いた。姉がアレだから親に交際を反対され自殺したというのだ。私は小学一年だった。私はアレが何を指すのか、姉が何故狂気のように泣くのか、正確に分っていた。芸術的感性が、そのような目にあう子らに育てぬ道理がないのである。（『全集 15』三〇七頁）

いわば、小学生一年で、「アレが何を指すのか、姉が何故狂気のように泣くのか、正確に分っていた」。『中上健次事典』の年譜によると、「一九五三年四月、新宮市立千穂小学校に入学」⁵⁰、つまり、「小学生一年」は一九五三年の、七歳頃であった。それがために、少なく

とも一九五三年に、七歳の中上健次は、姉の被差別経験から、すでに自分が部落出身だと知ったわけである。

早い時期に、自分が被差別部落民出身であることを知った中上健次は、いつから、部落の「暗闇」を描こうとしていたのか。それは、すでに、前の節「日本春歌考と僕」論で分析してきたように、中上は一九六七年、二一歳の時、早くも、大島の映画「日本春歌考」で示したような真実、つまり「ほうとうの言葉」を描こうと決心したのである。

それでは、一九六七年のエッセイ「日本春歌考と僕」から、一九七五年『蛇淫』までの八年間、中上健次の書いたエッセイ、小説、又は現代詩において、如何にして、「路地」ではない部落、或いは故郷のことを表現しているのかを、考察してみたいと思う。

1. 郷愁の「梅の花」と家族団欒又は自傷の「薔薇」

『蛇淫』以前の中上健次は、現代詩を書いたり、エッセイを書いたり、小説を書いたりしている。しかも、中上が文学活動をはじめた当初、その主な表現形式は小説ではなく、詩とエッセイであった。それに、中上健次が一九六八年最初に商業文芸誌『文学界』にデビューしたとき、採用されたのは、短編小説ではなく、現代詩であった⁵¹。実際、「相当の分量が制作されていた」詩は、現在、「二十四編しか残されていない」にもかかわらず、「小説家としての中上健次の進化発展の過程であるかのように語られてきた」⁵²。まず、中上健次のこの二十四編の現代詩に隠された被差別部落のイメージを検証してみよう。

現実に対する不満、大学入試と理想の挫折（『硝子の城』一九六四年、『昇天』一九六四年）、父親の違う兄の自殺に持たされた衝撃（『讃歌』一九六六年）、被差別出身という〈秘密〉を背負い、強い憎悪の感情をもつ罵倒や性的攻撃（『故郷を葬る歌』）は、すでに、四方田を初めとする諸氏によって指摘してきた。

しかし、そのほか、淡々なる郷愁も、初期の現代詩に仄かに見られる。

中上健次の現代詩『讃歌』⁵³（一九六六年）に、「梅の花」に関し、次のような一節が書かれている。

若者よ おたけびをあげるのだ
死刑囚よ 騒げ
弱き者よ 密殺の企てをしろ
神倉山の神話の中に
失った梅の花びらを
みる時 潮騒の中に郷愁を
感じる時
幽玄なる詩人は哀れみをこうべきである（『全集 14』二十七頁）

ここで、死刑囚は大逆事件と関わるかどうかを別にして、「神倉山の神話の中に失った梅

の花びら」のところに注目しよう。神倉山の神倉神社は、高倉下命がゴトビキ岩で神剣を発見し、その剣で神武天皇を助けたという神話に由来するらしい⁵⁴。その神話の中に「失った梅の花びらをみる時」と次の文「潮騒の中に郷愁を感じる時」は平行の構造であるため、「梅の花」を、外来侵略系の神話の中において失った郷愁だと理解してもよい。

実に、梅の花に関し、一九九一年春、最晩年の中上が揮毫したもので、唐の詩人王維の、「雑詩三首」の一首が色紙に書かれている。その色紙の写真が『熊野誌』⁵⁵第三十九号の扉に掲載されている。内容は次のようである。

君自故郷来
応知故郷事
来日綺窗前
寒梅著花未

同じ扉にまた、次のような現代日本語が翻訳されている。

故郷からはるばるやって来られた君よ
きっと故郷のことをよく御存じであろう
あちらを出立される時 飾り窓のまへの
寒梅は花をつけていただろうか まだ蕾のままだったろうか

この詩を、中上健次が何時何処で読み、また興味を持つようになったのかは、もう知り得ない。が、この詩の背景を検証することが可能である。清の時代の趙殿成の『王右丞集箋注』⁵⁶によると、この詩は、陶淵明の「爾從山中來。早晚發天目。我居南窗下。今生幾叢菊」や、王安石の「道人北山來。問松我東岡。舉手指屋脊。云今如許長」と同じような構造を持ちながらも、〈菊の問い〉と〈松の問い〉より、余韻を長くひいている。そして、現代王維研究者の第一人者である陳鐵民の『王維集校注』⁵⁷によると、この詩は、遠い異郷にいる男子が、故郷から来る人に、故郷の消息を尋ね、故郷と家族のことを懐かしむものだと、解釈されている。また、矢嶋の「望郷詩のモチーフの展開―「客從遠方來」から「君自故郷來」へ」⁵⁸によると、中国古典誌に詠じられた望郷詩の中で、王維の上述の詩は「一種の癒しのモチーフ」として「完成された作品」であり、この詩では、「故郷の情報」が「寒梅に象徴されている」。

つまり、「寒梅」あるいは「梅の花」を問うのは、故郷を離れた人の、ノスタルジアの暗喩であると考えられる。王維は、故郷からの友人に、故郷のことを一刻もはやく知りたがるのだが、ふるさとを恋しく思うことを、「寒梅」との一つの言葉に凝集させる。この「寒梅」とは、当然、王維の心に刻む風景であり、郷愁の託すものである。晩年の中上は、この詩を色紙に書く理由がある。つまり、中上は故郷のことを訪ねようとしても、新宮、特に春日町

という語を口にせず、「寒梅」或いは「梅の花」の言葉を借りて言うのである。

初期の詩に戻れば、「梅の花」は、さらに中上健次の次の詩にもみられる。『俺のピアフよ』⁵⁹（一九六六）の一節である。

ピアフよ、白い梅の花びらの入場券をなくしてしまったかわいそうなピアフよ。オレは
アフリカのサバンナでおまえを想いつづけていた。おまえを想いながらスコールに濡
れていた。（『全集 14』三十二頁）

ピアフ（本名 E. Giovanna Gassion、一九一五～一九六三）は、自ら体験した悲惨な生活
を情感こめて歌い、「戦後最大の現実派シャンソン歌手」と言われ、「第二次大戦の前後の暗
く荒廃した人心に、彼女は力強く愛の灯火をともした」⁶⁰。この「男女間の狭い愛ではなく、
広く深い意味での人間愛」の「愛を歌い、愛を生き、愛に死んだ」フランスの女性歌手は、
パリの貧しい地区ベルヴィルに生まれ、「売春宿」⁶¹で育つ。ゆえに、「かわいそうなピアフ」
には、故郷がないといっても過言はないであろう。

「失った梅の花」、「白い梅の花」を「失くし」、というのは、故郷の喪失の隠喩と考えら
れる。というのは、故郷は、そこにあるにもかかわらず、被差別部落民という傷痕によって、
不在でもある。「梅の花」は、つまり、この「在る」と「不在」を、見事に捉えている、「路
地」前史の言葉の一つであるといえよう。

上で論じてきたように、「梅の花」は、中上健次の故郷、あるいは被差別部落に対する淡々
なる郷愁であった。しかし、その言葉を、晩年の中上が再び拾って使うまで、一九六六年以
降、使う情熱は冷めて行った。代わりに、「薔薇」という言葉を使うようになった。実在の
「梅の花」、「薔薇」は、中上健次後期小説に於いて、段々虚構な「夏芙蓉」に変わっていく
のであるが、「夏芙蓉」に関する考察は、第三章で『「路地」にある「夏芙蓉」について』と
題して論じていくつもりである。ここでは、まず「薔薇」という花が、初期テキストに於い
て、そのイメージを如何に変化し、被差別部落と結び付けていくのか、創作の時間軸を応じ
て究明していきたいと思う。

「薔薇」の初出は、一九六六年三月にガリ版刷りの同人誌『道』に発表された現代詩『履
歴書』⁶²に見られる。その一節を引用する。

四歳の時

髭の感覚をともなった男が

網走までの

片道切符をくれた。

隣家の庭には

固いつぼみのバラが

神話を語っていた。（『全集 14』二十八頁、傍点は筆者）

この一節は、中上健次が十一年ののちに発表した『枯木灘』で、主人公の秋幸がはじめて浜村龍造と出会う場面（『全集3』二六二～二六四頁）に対応していることは、すでに四方田犬彦によって指摘されている。四方田によれば、『『枯木灘』の秋幸にとって原体験とでもいふべきこの実父との邂逅は、のちに周囲からの伝聞によって構成された神話的映像に他ならず」、その神話は、「他者の言説によってあとから補填構成された」のである⁶³。つまり、その神話を語っている「薔薇」を「他者の言説」と理解してよい。「薔薇」は漢字ではなく、カタカナの「バラ」で表現されているが、そもそも、なぜ「薔薇」なのであろうか。次の現代詩をみよう。一九六六年十二月に発表された『J A Z Z』⁶⁴の一節である。

幼い頃、俺は神様だった。姉はフルートに伴奏してもらって踊る女神のように草原をかけめぐった。どぶ板のむこうの隣の庭には、えんじ色の薔薇のつぼみが、かたく風にふかれていた。

少年の日の柔らかい感傷は、ショールのように俺をくるむ。ここにいる俺はもう神様でもないし、少年でもない。（『全集1』三十六頁、傍点は筆者）

ここにも、「薔薇」の前に、「隣の庭」という修飾詞が置かれている。中上健次年譜によれば、一九五四年、中上健次が八歳の時、「母ちふさが中上七郎と同棲」のため、「春日地区に居住する兄姉と分れ同市野田に移り住む」⁶⁵。つまり、四歳の時の中上は、まだ春日地区という被差別部落に住んでいて、神話を語っている「薔薇」の有する「隣家の庭」も、「幼い頃」、家族団欒とぬくもりが感じられている「臙脂色」の「薔薇」を有する「隣の庭」も、同じ春日地区の共同体の他者と考えられる。

この「隣の庭」には、八年後の一九七二年に書かれた小説『灰色のコカコーラ』⁶⁶では、「やけに臭いたてる」のイメージが付いている。

薔薇は好きだ。子供のころやけに臭いたてる隣りの家の便所のくみとり口に木のような薔薇が植わっていた。固いかちかちの石のようなつぼみを、最近嫁ぎ先の兄弟喧嘩からの殺人事件で気がふれてしまった姉が盗んできて、台所の水がめのふたの上にコップを置き、水をいれて飾った。（『全集1』三百頁、傍点は筆者）

しかも、「薔薇」は姉が盗んできたもので、「殺人事件」とも繋がっている。「薔薇は好きだ」というのは、上述のように、姉からのぬくもりのようなものであったが、段々「便所」、「殺人」と繋がり、嫌みになるのである。実に、同じ小説で、故郷から上京した主人公の「僕」は、「薔薇」を嫌悪する場面もある。「僕」が、「ジャックナイフとおもちゃのピストル」をポケットに入れ、お金を奪い取る計画で、銀行に入る場面である。

ぼくは一瞬、自分の眼球や耳や脚が統覚を失ってばらばらに分解してしまったように感じた。蝶ネクタイをしめた男がぼくと、ぼくの後から入ってきたサラリーマン風の男にむかって頭をさげた。ぼくはその男のやさしいわらいを含んだ顔をみて、ふうてんの山田明が、ほんとうはこの街のどこかのブルジョアの家庭に生まれ、すくすくとなにひとつ屈折させられることなく育ってきて、いま銀行に小遣いをおろしにきたのだと思った。薔薇の定期預金。くだらない、この銀行は趣味が悪い。ぼくみたいな大金持にはこの銀行は不向きだ。

薔薇の定期預金のパンフレットをもって、ぼくは男の視線を体のどこかに感じとめながら外に出た。(『全集1』三三八～三三九頁、傍点は筆者)

つまり、想像上での「僕」のいい出身(ブルジョア)と、「趣味悪い」パンフレットの「薔薇」とは、鮮明な比較になっている。そもそも、「僕」は、「薔薇」の場所の出身なのであるが、故意にそれと線を引き、銀行強盗の計画をやめたのである。

ちなみに、『一番はじめの出来事』(一九六九年)で、兄が、包丁を持って「私」と「母」を殺しに来る時、その描写の中にも「薔薇」が見られる。

夜が次第に僕のまわりに、霧のようにたちこめはじめている。兄は闘鶏場の田中さんからの帰りなのだろうか？隣りの黄色い電燈のひかりは、ほとんど野茨のような粗末な花をつける薔薇のしげみの陰を地面に浮かびあがらせている。なにも動くものはない。(『全集1』二四二頁、傍線は筆者)

中上の兄は実際に自殺した。「私」と「母」が、兄姉を捨て、被差別部落ではない野田に移り住み、新たな家族を作ったのである。ここでの「隣り」とは、もはや兄姉の住む被差別部落ではないはずであるが、それは中上が創作上の借景であろう。いずれせよ、この場面は「薔薇」のある所に、新しい家族の団欒を破壊するときのシーンである。逆に言えば、「薔薇」とは、家族の団欒そのものを象徴しているのと考えられる。

以上の例から見れば、「薔薇」とは、家族の神話を語り、家族のぬくもりを目撃する象徴そのものであると言っても過言がないであろう。ゆえに、「薔薇」に対し、好きと嫌悪との矛盾した感情を、中上健次は持っているに違いがない。

引き続き現代詩に戻してみよう。上述の『履歴書』と『JAZZ』に続いて、一九六七年一月発表の現代詩『作品38』⁶⁷で、突然「薔薇」の死を宣言する。この詩は、短いので、全文を引用する。

薔薇の棘で傷つけた僕の小指から流れ出るキャリアチードの赫い血をみたことがあるか？

薔薇は死んでしまった。(『全集14』三十三頁、傍点は筆者)

この短い詩の中には、極めて重要なポイントが二つある。一つは、「薔薇の棘」で傷つけたこと、もう一つは、「薔薇」が死んだことである。

まず、棘で傷をつける感覚について考察して行きたいと思う。一九六四年十二月、十八歳の中上健次が新宮高校の機関誌『車輪』で発表した小説『赤い儀式』⁶⁸に、すでに、棘のようなものにより、傷をつけた感覚を描写している。「英雄的行為の可能の証明」を行うため、予備校の「屋上のネットに使っている金網」の「鋭い突起」を手に当てる場面である。それは次のように書かれている。

僕は左手で金網の鋭い突起を握りしめ、指に代わって、右の手の掌の真ん中を押しあてた。そして、左手に握った突起と、右手の掌を同時にいきおいよくおした。あまり硬くない手の掌は簡単に破れ、そして肉の間へ異物は侵入するのがあっきりとわかった。(『全集14』二十二頁)

こういう自傷的な行為を、主人公の「僕」は、「群衆からの超越」と、「世の中の人々を否定」するものと捉え、さらに「これから誕生する英雄におしみなく微笑をささげた」とする。金井美恵子が「一番はじめの出来事 中上健次の初期短編の成立をめぐって」⁶⁹で指摘していたように、このような自傷的な行為、つまり、「柔らかな皮膚に与えるひりひりするような甘美さと欲望の鋭さとけだるさの混じる」感覚は、「出発したばかりの若い書き手」として、「様々なスタイルの短編」で、「何度も何度も繰り返しあらわれる」。

たしかに、現代詩『歌声は血を吐いて』(一九六七年三月)において、「凍った茨の棘が、やさしげな傷口」⁷⁰を作り、小説『不満足』(一九六八年二月)において、「野茨の棘とげのように」⁷¹主人公の気性が形作られている。また、『日本語について』(一九六八年九月)では、「幼い茨の発育未熟な棘で鞭をつくり自分の固い尻を叩き奮起させよう」とし、「いらくさや地をはらう野茨の早熟な青い棘」は、「祖母の葬列かそれとも兄のいつまでも裂けた傷口を残したままの葬儀」とともに、ジャズによって「喚起させる」⁷²。『不満足』や『日本語について』は、中上健次の初期小説の中の「都市小説」に分類しうるもので、「主人公がジャズ喫茶でたむろして、友達と交友しながら、薬を試みる内容を持つもの」⁷³である。ゆえに、「棘」とは、大学入学の失敗、地方出身の予備校生の息苦しい日常世界からの逃走と反逆を胸に秘めた未成年者のカウンター・カルチャーそのものであり、また、自傷するものでもある。

そして、兄の自殺をはじめ語り、紀州熊野の自然と戯れる少年の瑞々しい感性を綴った『一番はじめの出来事』(一九六九年八月)においては、兄の死という「一番はじめの出来事」を、消せぬトラウマとして抱え込んだ中上健次は、「茨」を何度も何度も書き込んでいく。「茨が密生しているサイレンの森」のなかで、〈秘密〉基地を作り、夢の中、「僕は茨のしげみの中を、兄にでも父にでも具体的な助けをもとめて逃げはじめ」⁷⁴。兄が首をつつ

て自殺したことを知り、「僕」は〈秘密〉基地へ向かい、「上衣のそでにひっかかる」茨の棘を「乱暴にはずす」⁷⁵等々。兄の自死というトラウマは、すでに中上の心の中で茨の棘として消せないであろう。そのほか、『海へ』、『眠りの日々』の中にも、「兄の自殺にまつわる記憶」と「幼い茨の棘」のような主題として、何度も何度も繰り返されている⁷⁶。さらに、小説『黄金比の朝』（一九七四年八月）の冒頭で、「眼窩の奥、頭を中心部に茨の棘でさしたような甘やかな痛みがあった」の一行が示しているように、「茨の棘」の痛みは、トラウマとして常に付いているのである。

すでに上で引用したが、「薔薇」は「野茨のような粗末な花をつける」（『全集1』二四二頁）と、中上が書いている。『広辞苑』⁷⁷で「茨」の項目に、（「薔薇」とも書く）野生のバラ類の総称という解釈がある。中上にとって、「薔薇」は「茨」とある程度重なっているであろうか。いわば、「茨の棘」の感覚は、「薔薇」の感覚から派生したものであり、「薔薇」に付与する内包がどんどん発展しているものだと考えられよう。

以上で分析してきたように、「薔薇」の棘で傷をつけた感覚は、「都市小説」系列においては、地方と都市、いわゆる周縁と中心の関係の中に、未成年者の反抗と自傷行為そのものであり、「兄の自死」系列では、常に心に刺さっているあるトラウマそのものであると言っても過言でないであろう。

次では、「薔薇」の棘での傷に続き、「薔薇」の死について考察しよう。『作品38』の発表した半年後に、『五つの母音からなる季節』（一九六七年七月）が書かれている。この詩では、「薔薇」の死について、比較的詳しく書いている。その中の一節である。

はるに刺す
おれのこころ
このどうしようもないおれのこころ
ぬすんで
いけた
薔薇が、もう
し
ぬ（『全集14』三十五頁）

姉が被差別部落共同体の他者の庭から盗んで活けた薔薇、「甘やかな痛み」を思わせる棘のある薔薇は、死ぬ。『五つの母音からなる季節』の前節で、「こくり」とうなずいて首を前に傾ける薔薇を、「ドローランにねむる俺のうなじ」と同一視するため、薔薇の死は、イコール「俺」の死と理解してもよい。『四つの断章からなる季節への試み』（一九六八年二月）では、さらに次のように明言している。

崩れる薔薇、カウンターにおちる

とろけた怒り、ひきちぎれたチューブの青言葉は放たれる
ひかりの朝
俺、死ぬ（『全集 14』 三十六頁）

なぜ「薔薇」と「俺」が死ぬのか、同じ年代に書かれた小説『海へ』（一九六七）とエッセイ『短編小説批評』（一九六九）には、その手がかりがある。『海へ』において、「薔薇」の語も見られる。熊野川に溺れて死んだ友人を知る「腐り枯れはてたキャリアチードの薔薇」、「兄を殺し」、「姉を悲しませ」、「姉の悲しみ」を知っている「薔薇」⁷⁸、「毒香をはなつ薔薇」⁷⁹という。この『海へ』は、詩と散文とが自在に交錯する構成を持ち、「兄の自殺という問題が問題として認識されはじめる萌芽がみられる」⁸⁰作品である。そこで、「薔薇」とは、もはや、家族のぬくもりではなく、家族の悲劇を知るもので、「腐り」、「毒香」を放るものとなる。また、『短編小説批評』は、この時期の中上健次の心境を忠実に反映している。このエッセイでまず、「あいつが来るからおれが行くのか、おれが行くからあいつが来るのか」という、日本のプロレスラーであるジャイアント馬場の言葉を前置きにして、更に「このごろつくづく僕はもしかしたら詩や小説と云うものを書かなかつたら犯罪者かなんたになるタイプの人間じゃないだろうか」⁸¹と述べている。

つまり、ジャズとドラッグに象徴される、一九六〇年代後半から七〇年代前半の青年をとらえたカウンター・カルチャーの息吹と、息苦しい日常世界からの逃走と反逆を胸に秘めた未成年者の「慟哭」が、大学入学の失敗、兄の自殺に対するうしろめたさ、または部落出身の「秘密」と混じ合い、「薔薇」の「臙脂色」と「肉の間へ異物は侵入する」棘の感覚から、「毒香」を放ち、死ぬ「薔薇」へと変化し、初期のテキストに織り込まれている。

そこで、自傷を経て、「薔薇」と自分の死を宣揚する時、自らの出身を大胆露出する時期になる。

2. 部落出自の暴露：青年会館から春日町、長山・永山へ

「部落のことが最初にでてくるのは、緑丘中学校生徒会誌『みどりが丘』のなかにある『帽子』という作品」⁸²であると、水平社博物館館長の守安敏司は、二〇〇九年熊野大学夏期特別セミナーで述べていた。作品『帽子』には、「部落」という言葉は見当たらない。「会館」という言葉がある。「きのう会館へ行って、クリスマスの劇のけいこして」⁸³という表現が出ている。守安の言っている「部落のこと」は、この会館である。新宮市春日町の青年会館に関し、高澤秀次が『評伝 中上健次』で、次のように述べている。

新宮市春日町の青年会館に、子供会が誕生したのは、五二年、中上六歳の年のことである。青年会館はかつての若衆宿であり、後に授産会館、隣保館（現新宮市人権教育センター）となる部落内の教育施設だった。終戦の前年、先夫・木下勝太郎を肺病で亡くした母ちさとはその頃、行商によって一家を支えていた。中上の母親が例外では

ない。子供会とは、いわばそうした家庭環境にある部落の子供たちの保護施設であり、避難所（アジール）でもあった⁸⁴。

そして、守安敏司の論文「中上健次の「路地」理解とその作品」によれば、この青年会館は、「部落解放運動が盛んだった頃は、部落解放同盟の支部の事務所があったり、集会を開いたり、料理教室といった文化活動や子供会活動などをする運動の拠点」⁸⁵であった。ゆえに、中上は『帽子』で、部落内の施設であった青年会館を極自然に、「会館」と表現していたわけであろう。

しかし、厳密に言うと、一九五四年、中上健次が八歳の時、「母ちさとが中上七郎と同棲、このため春日地区に居住する姉と別れ同市野田に移り住」⁸⁶んでいる。それがために、十三歳の時書いた『帽子』における「会館」は、野田青年会館であるのか、それとも、中上が自身の部落認識と記憶により、はるかに遡って書いた春日の青年会館であるのか、不明瞭のまま、疑問が残っている。

筆者が調べたところによると、青年会館という言葉が、初めて直接作品に書かれたのは、『眠りの日々』⁸⁷（一九六九年）である。この作品では、「青年会館」が一回見られる。それ以降、『枯木灘』（一九七六～一九七七年）に二箇所、『臥龍山』（一九七七年）に五箇所が見られる。一九七八年後、徐々に多用され、『奇蹟』（一九八七～一九八八年）には四十二箇所も見られる。つまり、『蛇淫』以前の作品には、『帽子』を除き、『眠りの日々』の一箇所しか書かれていないのである。

『眠りの日々』の冒頭は、次のように書かれている。

どこかで材木のやにだらけの幹を断ち切る電気ノコギリの、単調なけだるい震動音が、ぼくの二つの耳の穴にこびりつき、占領していた。ぼくは部屋の中で自分の腕や両脚がどこにあるか知覚できなくなったまま、いま電気ノコギリで胴体を二つに断たれている樹木のようになにもしないただごろんとよこたわっていた。たぶんそれはぼくの肉体が、動くことが可能だということを忘れてしまっているためなのだろう、眠かった、体の内部に砂がつまってしまったように重かった、後頭部が鈍い痛みをはらんでいる。どこで材木を断ち切っているのだろうか、家の前の道をまっすぐゆき、大きな道につらなる角にある青年会館の横の広場でだろうか？ 音ははじめ弱い波からおこり、哀しげな表情になってたかまり、そして一段落ついたので男たちの声がきこえ再び弱くなってゆく。（『全集1』二六七頁、傍点は筆者）

右の引用は、東京でのアパートでの朝である。この日の夜、東京から汽車に乗り、郷里に戻る。つまり、東京で幻聴が起こし、郷里の青年会館の隣の電気ノコギリの音が聞こえる。作品の全編に、「耳のない側にだけおこる幻聴のようにきこえた、柔らかい眩暈みたいなおもわせるむずかゆさ」（『全集1』二七三頁）のようなものが描写されている。そういう「催

眠術にかかって、意志も思考もなくなって」(『全集1』二七六頁)の状態、「ぼく」は、兄を想起する。

兄の声の記憶、兄の顔の表情の記憶、それらは草の茎の中につづまった青い汁の流れでる器官のように曖昧としている。(『全集1』二八一頁、傍点は筆者)

ぼんやりしたなかで、自然を媒介して想起する。「いつまで考えても解けぬ数学の命題」のような兄の死について、さらに、

兄は昭和三十四年三月三日に自殺した。評論家ならそれをあのころの政治の昂揚と結びつけて、もっともらしく語るかもしれない。(中略)兄は、昭和三十年から四十年に至る社会の動きの中で、政治の昂揚の最中に死んだ女子学生や歌人などとは別に、まったく孤立して、まったく個人的に、東京から夜行列車で十二時間かかってやっとたどりつくこの土地で、みじめな格好をして自らを殺したのだ。そうなのだ、他人どもが欲情やうわさや眼球でつくりあげた幻想の社会というものや政治というものが殺したのではない、彼のもっとも近いものであるこのぼくとぼくの母親が殺したのだ。(『全集1』二八三頁、傍点は筆者)

中上は、作品上で、兄の死を、政治的なものであることを否定し、「ぼく」と「ぼくの母親」の仕業だと結論した。しかし、そもそも部落の悲劇とは、政治的なものではなく、それは何なのであろう。若い中上が、作品の終りに、その部落の悲劇に対する不快感を自然に託している。

世界は不快だ、海は不快だ、この街の自然は不快だ。(『全集1』二九三頁、傍点は筆者)

最晩年の中上は、この「自然」、つまり部落問題を「文化的な問題」⁸⁸と捉えているらしい。何れにせよ、『眠りの日々』では、東京で幻聴を起こし、青年会館(故郷)を想起し、兄の自死を想起し、ぼんやりと感じた「自然」への不快感を引き起すのである。言うまでもなく、ここでの青年会館は、高澤の言う「避難所」でも、守安の言う「運動の拠点」でもなく、故郷の自らの出自を思い出し、兄の死を思い出す不快の源泉そのものである。

青年会館だけではなく、春日町や永山・長山も新宮市部落を指す言葉らしい。中上健次の故郷新宮では、かつて部落を差別する者たちは、春日町のことを「永山」と呼び、あるいはあえて言葉でいおうとせず、特定の身振りでもって表現しようとしてきた⁸⁹。つまり、「ながやま(永山・長山)」は当時、公的には差別用語として使用が遠慮されていたが、地元新宮ではある含意のもとにしばしば用いられる言葉であった。

言葉「春日町」や「永山・長山」が、初めて中上文学に用いられたのは、一九六八年四月十四日「さんでージャーナル」に発表された二つの現代詩、「季節のための詩学」と「四十五回転盤季節と若干の問題」である。すでに、前節で論じてきたように、この時期は、自傷を経て、「薔薇」と自分の死を宣揚し、自らの出身を大胆露出し、全面攻撃になった時期である。

まず、「季節のための詩学」をすこし引用してみよう。

人びとのたつたままくさる悪感にみちた街にまで
春日町のふみ切りはかちかちなるよ
俺はアパートの水洗便所でおぼれ死ぬ

(中略)

飢え呪われたる俺たちの頭上をつつみ
兄は首をつつたまま俺と男色行為にふける話か

(中略)

永山アパート三階 36 号室の夫婦は正常位の性交をくりかえし
あきもせずくさったままで夜の解躰をまっている (『全集 14』四〇～四一頁、傍点は筆者)

そして、同じ日付、同じ雑誌に掲載された「四十五回転盤季節と若干の問題」では、

ああ季節

とそこが悲しい熊野川

とそこが勃起したまま腹上死した大逆の志士
とそこが黙りこみ耐えつづけるもの云えぬ永山

ああ季節

ああ季節

とそこが茨にひっかかりさけた母の膺

とそこが飢えたる俺の墓 (『全集 14』三九頁、傍点は筆者)

また、一九六八年六月九日「さんでージャーナル」に発表された「夜 (形而下学的考察による季節への試論)」では、

(前略) ケケケケと笑いだそうかキキキキと叫んでまわろうか新宮のクソツタレど
もの文明論、ああアサリサンなさけなくてもわかつてよ地球の円周率をはかり世界
永続革命のサッカーボール、網走まで走り春日町まで歩き俺の脚はこの練馬の喫茶
店で動きを忘れてる。(『全集 14』四五頁、傍点は筆者)

春日町や長山・永山に住む「俺たち」は「呪われて」いて、「黙りこみ耐えつづける」。街には、「悪感」が溢れ、それは「ククソツタレどもの文明論」である。そればかりであるのか、三ヵ月後の一九六八年九月一日「さんでージャーナル」で掲載された現代詩「故郷を葬る歌」では、母、父、姉を実名登場させている。しかも、強い憎悪の感情を持ち、故郷と親族を猛烈的に攻撃する。

熊野
くそもじ、みくそもじ
やあれあっぺの豚どもが文明論をほえたてるところ
海もなく山もなく川もないどろだらけの犯罪者が永山アパート下の拘置所で悔悛するところ
熊野よ
(中略)
母千里を殺せ
父、七郎を殺せ、留造を殺せ
姉、鈴枝を殺せ、静代を殺せ、君代を殺せ
熊野よ、わがみくそもじよ
わが町、春日を燃やせ、野田を燃やせ
この連濁にしろされたもろもろを
呪え
(中略)
犯罪者中上健次の足を断て
手を断て
舌を断て
眼を断て
男根を断て
皮膚を断て
熊野、くそもじ、わが故郷（『全集 14』四八～四九頁、傍点は筆者）

四方田犬彦が「中上健次の初期の詩について」⁹⁰で指摘したように、中上健次のポエジーの絶頂である『故郷を葬る歌』（一九六八年九月）において、作者の故郷、熊野に対するスカトロジカルな連禱と、「マスターベーション」や「梅毒」など、性的な言葉などを使う孤獨的な攻撃と、熊野の山から美しい川が太平洋の黒潮に流れているにもかかわらず、「海もなく川もないどろだらけ」と嘲罵する対象は、後に出てきた言葉「永山アパート」の暗喩、つまり、中上の生まれ育った被差別部落を指していると判明した。

作中に「永山」と「春日」という固有名が見られることから、中上のイメージの中にあつた「永山アパート」とは故郷新宮のそれに限りなく近いものであつたはずだ。この単語を最初から登場させたことの意味は大きい。中上が、これまで長く隠蔽されてきたことごとのすべてを露出させたいという、強い衝動に駆られていたことが、ここからもわかる。一見普通に見えるこの「永山」という二字が、語り言葉ではなくあえて活字として起されたことは、経験者ではない人の想像を超えるものがあつたと推測できるのであろう。

そういう背景で、一九七〇年一月一日付「さんでージャーナル」に掲載されたエッセイ「やぶれかぶれ四枚」では、春日町に関し、次のようなことを言っている。

東京にまた舞い戻ってきて、こんな奇妙な文章を書いているのだが、新宮の話はそれぐらいにして、これから書こうと思っている小説のことを話してみようと思う。春日町伝説と云う題名になるのだが、或る時、或る場所で二十三歳ほどの男が※※※※※と云う連続射殺犯に変身するのである。(『全集 14』一四二頁、傍点は筆者)

いわゆる「春日町伝説」とは、「路地」という固有名詞が出現する前の、抽象ではなく具体的な表現であらう。

4. 部落出自の暴露と回避：単行本の添削について

上節では、主に現代詩に関する部落出自の暴露について考察してきた。実に、現代詩だけではなく、当時に発表された小説にも暴露している。『一番はじめの出来事』(初出は一九六九年八月号「文藝」)には三例、『眠りの日々』(初出は一九七一年八月号「文藝」、原題『火祭りの日に』)には二例、また『灰色のコカコーラ』(初出は一九七三年十月号「早稲田文学」)には七例の「春日町」、「永山・長山」の言葉が見られる。やや長いが、すべての例を挙げてみよう。

『一番はじめの出来事』では、

「野田町はそんなに簡単に燃えんよ」

「かんたんにはもえん？あんなにかんたんにバタバタとたてて、かつてに嘘の父やんといっしょに康二らがうつりすんだ家がかんたんにもえん？あほらしい」

「兄やんとこの家がある春日町が燃えたらええのに、そんなに火事になってほしいんやったら」(『全集 1』二三八頁、傍点は筆者)

僕たちの〈秘密〉、一番高く堂々とした〈秘密〉はいつ完成するだろうか？いまこの春日町や野田町にふっている雨が、朝になっても夜になっても次の朝になってもふり止まず、竹中の川が氾濫して海と呼応して大洪水をおこそうとも、その中に避難すれば兄も姉も母も仔犬も救かることのできる新宮で一番高い〈秘密〉だ。(『全集 1』二四九～二五〇頁、傍点は筆者)

僕の家次ぎつぎと野田町や春日町の人がやってきて、泣いて帰る。兄はねずみ色に変色した顔を天井にむけ、組んだ手を胸の上において、菊の花のはいった柩の中で眠り呆けている。(『全集1』二五七頁、傍点は筆者)

そして、『眠りの日々』では、

それはかつて堤防町の夏夫や春日町の善弘たちとグループを組んで遊んでまわっていたころの充ではなかった。もっと彼は思いやり、シンセリテイがあったはずだ。(『全集1』二七八頁、傍点は筆者)

最初に母系一族から始まる、姉たちの語る混沌とした神話時代、(…中略…)母を頭としてくらし、ぼくたちは春日町のすすけた天井と、(…中略…)でこぼこの多い土間の家に住んでいた。(『全集1』二八三頁、傍点は筆者)

また、『灰色のコカコーラ』においては、

「よう色づいとるね、赤つかいトマトみたいな色しとる。婆と寝るか？」ぼくが老婆の前を通りすぎるのをまっていたように老婆はからかいの言葉をあびせ、ぼくがあわてて走りだすと、ひやっひやっひやっ声を出してわらった。「新宮の長山のものには教えんのじゃ」大きな杉の木の横を右にまがり、中学校の裏に出た。裏から地つづきの春日町がみえた。山の下に低い家が密集している。中学校の裏から春日町につらなる道をぼくは歩きながら、どこへ行ってしもたんやろか？(『全集1』三一七頁、傍点は筆者)

十何年前、自殺した兄がまだ生きていてアルコール中毒ではなかったころ、兄は母と姉とぼくたちのために駅前洋服屋で正月の服を盗んできたが、いまのぼくに具体的な目標はない。セーターもジャンパーもまにあっている。子供のころ、春日町の少年に率いられる集団の一員だったが、駅前通りから踏み切りをわたって春日町に入る道の角の榎本で仲間が店の横に積みあげていた竹かごの中から夏蜜柑を三個盗んだとき、その行為をみていたぼくの眼も正しくないことをやってしまったと思った。(『全集1』三四六頁、傍点は筆者)

兄は酔っぱらって、アルコールを皮膚の血管のすみずみまでふくませどろどろになった体で、昔ぼくたちが母を中心に生活していた春日町の家から鉄斧やナタや包丁をもってきて、みんなプチ殺してやる、と言って暴れる。(『全集1』三四九頁、

傍点は筆者)

《あにが二十で、いもとが十九》不意に春日町の盆踊りでうたわれる歌をおもいだし、顔にこびりついていた水滴をぼくはジャンパアのそで口でぬぐった。(『全集1』三五〇頁、傍点は筆者)

以上のように、『蛇淫』以前の小説において、「春日町」や「永山・長山」の語は、合計十二回(『全集』による)が書かれている。中上は、すでに小説で主人公「ぼく」を通し、自らの出身を語っていたのであろう。しかし、中上は一体、何時から、自らの出自を公言したのであろうか。

中上健次が被差別部落出身という出自を公式に明らかにしたのは、一九八一年一月六日付の『朝日新聞』の和歌山版朝刊のインタビューにおいてであった。そのインタビュー記事「ふるさと私考」で、中上はすでに、「僕が新宮の被差別部落の出身で」⁹¹と公表した。ただ、もう少し前の一九七七年、中上健次は、野間宏と安岡章太郎との鼎談「市民にひそむ差別心理」で、自分が部落の出身であることを、「僕の知っている若い小説家」⁹²に仮託するという形で、非常に間接的に表明している。

いってみれば、一九七七年は、初めて差別問題に公言する一つの転換期とも言える重要な年である。この年は、新宮市の同和对策事業として、生家のあった新宮市春日地区の改良事業の基礎調査始まる⁹³年でもある。それに、『朝日ジャーナル』で行われた安岡らと鼎談がきっかけで、その直後の三月から十二月にかけて、中上は、精力的にほぼ紀伊半島全域の被差別部落を回り、『朝日ジャーナル』でルポルタージュ「紀州 木の国・根の国物語」(一九七七年七月～一九八〇年一月)が連載していたのである。つまり、一九七七年とは、中上健次は、自分が部落出身のことを正視し、真正面から部落のことを調べた年であろう。一九七七年の重要性に関し、高澤秀次には、次のような発言がある。

『紀州——』という本が、できた時には、完全に彼の中である決着がついていたと思います。つまりそれは一番信頼できる読者に向けて決定的なメッセージを発したということですから、このあとかれは出自に関わるあらゆる憶測から自由に、読者との緊密な関係を取り結べるようになったと思いますね。⁹⁴

そして、一九七七年のその鼎談について、中上が亡くなる直前の一九九一年、柄谷との対談で次のように述べている。

今から言うと、ちょうど資料的なことになりますが、あそこで僕は直接実際に喋っているのだけれど、それを消してください、と言っているのです。他人の話として書いてください。僕は被差別部落民出身であっていいです。それは確かにそうだ、だ

けどこの話は、他人がこういうことが起きているという話を僕が聞いたことにしてください、と言って喋っているのです。だから本当は、そうじゃなくて自分の話なんです。⁹⁵（傍点は筆者）

つまり、一九七七年の中上健次は、野間らと鼎談する時、自分が部落民だのことを、「直接実際」に喋ったが、のちに、発表されたとき、「他人の話」として書き直されたのである。

鼎談が活字になるとき、発言が修正されただけではなく、そもそも活字になったものも、単行本に編纂される時、大幅に添削、修正が加えられたのである。一九七一年「文藝」八月号に発表された『火祭りの日に』は、後に作品集『十八歳、海へ』（集英社、一九七七年）に収録された際、『眠りの日々』と改題され、故郷に関する言葉が削除されたのである。そのほか、一九七二年十月一日『早稲田文学』に発表された『灰色のコカコーラ』（以下は『『灰色』七二版』とする）が、一九七五年、作品集『鳩どもの家』（集英社、以下は『『灰色』七五版』とする）に収録された時も、部落の特徴が入った部分が、ずいぶん削除されたのである。

まず、『灰色のコカコーラ』の前後のバージョンを比較してみよう。

風景は楽しい。（『灰色』七五版）

風景は楽しい。暗くなってから眼がさめた時、不意に自分が飢えに襲われているのだということに気づいてあの食料品店でぼくは大量に豚の臓物を買ひこみ、それを醤油と砂糖とニンニクととうがらしで味をつけて食った。まるで土方人夫といっしょだ。犬の肉を「ほう、魚（とと）やな」と食う為にハウトトと呼ぶあの春日町の土方人夫の血が、夜行の急行で十二時間もかかってたどりつくとの街にすみついたぼくの、脂でべたついた腸や肝臓や胃袋（それらはハツとかナンコツとかシロとセンマイとかミノとか呼ばれる）を喰っているこの体にも流れていることを感じた。（『灰色』七二版）（『全集1』校異、五六九～五七〇頁、傍点は筆者）

『灰色』七二版では、「ぼく」の体には、「豚の臓物」や「犬の肉」を食う「春日町」の血を流れている。しかし、『灰色』七五版では、その描写がすべて削除されたのである。一九七五年は、新宮在住の俳人松根久雄と知り合う⁹⁶年であることを、ここで書いて置く。

次は、一九七一年「文藝」八月号に発表された『火祭りの日に』と、一九七七年に作品集『十八歳、海へ』に収録された際、改題された『眠りの日々』と比較してみよう。

『眠りの日々』は、故郷の祭りである「御燈祭り」の前後、電車に乗ってふいに東京から帰省してきた「僕」が、故郷の人々と交流しながら自死した兄の記憶を思い出す短編である。『全集1』校異（五六九～五七〇頁）に依れば、『火祭りの日に』の中にある「野田町の家」は、『眠りの日々』では「家」あるいは「義父の家」となり、「野田町にあった小高い丘」は

「小高い丘」となる。また、前者での「春日町の男」、「新宮の春日町に」、「春日の家」は、後者においては、それぞれ「顔見知りの男」、「ここに」、「昔の家」と修正された。さらに、「米良病院」を「病院」に、「熊野川」を「川」に、「新宮弁」を「郷里弁」に、「勝浦へ」を「海へ」に、「仲之町の人」を「町の人」に書き直したのである。

いわば、故郷に関するほぼすべて（本節の冒頭に引用した二つの例外があり、それは修正し切れなかったのではないか）の固有名詞が削除され、代わりに、一般的、抽象的な名称が与えられている。『火祭りの日に』が『眠りの日々』になった時の、削除、隠蔽する意味は重要であると思う。

その仮託・添削と対照的に、「何も隠さない」時期がある。高澤秀次の思い出を引用してみよう。高澤秀次は、かつて、『すばる』に連載された「中上健次 評伝」が単行本になった時、インタビューを受け、次のようなことを述べている。

八七年に、中上健次のドキュメンタリー映画を撮れないかと相談して、やろうということになった。実際、フィルムも少し回っているんですが、その時彼はスタッフに、「俺は何も隠さない、すべて撮っていい」と言ってくれたんです。実父にも合わせてくれたんです。結局、映画は完成できなかった。しかし、このことが評伝を書く一つのきっかけになりました。⁹⁷（傍点は筆者）

カメラの前に、「何も隠さない」と喋る中上健次は、晩年の八七年には、部落の出身について、すでに一切の拘りが無いと思われる。

言ってみれば、中上は、一九八七年の時点で、完全に部落のことに直面し、解決しようとしているが、一九七五年～七七年前後においては、やはり何かはばかることがあったのではないであろうか。『火祭りの日に』が『眠りの日々』になったこと、また『灰色のコカコーラ』の削除と隠蔽は、どのような意味を持つのかということ、それは、部落出自告白への回避ではないかと思う。

実際に、七〇年代前半、中上はエッセイや小説の中で、「告白」の語を使っていた。

まず、同時代に書かれたエッセイ『告白』と『やさしい日本人』（一九七一年三月「映画芸術」）を考察してみよう。中上が銀座の試写会で見た「告白」は、コスタ・ガブラス監督の作品である。中上は、「監督は、いわゆる共産党イコール共産主義だというどこの国のスターリン主義者もつかう論法に予防線を張るように、反共主義からのスターリン主義批判ではなく、レーニン主義からのスターリン主義批判であることを示す」を述べた上、次のように言う。

「告白」がはじまった時、自分自身の悪い体の調子がまんざらすてたものではなく、むしろ主人公ジェラル（イブ・モンタン）の肉体的苦痛や疲労を知覚する如くに想像できるように思った。ある日、逮捕され、殴りつけられて、目かくしされて査問を

うける。地下道のようなところを連行されていかれる時、目かくしされている主人公が額と眼の部分、柱にぶっつけ、一瞬に感じた肉の衝撃と痛みを、わかったというような気がした。眠かったジェラルールを演じるイブ・モンタンがではなくこのぼくが、座席に体をもたせて眠りこみたいのだ。この映画はよくできていると思ったが、それ以上のものを感じなかった。チェコスロバキアの「レーニンよ、よみがえれ」と壁に殴り書きする若者ではなく、日本の若者であるぼくは、映画が終わった後、席をたって、階段をかけおり、外に出た。⁹⁸

つまり、「肉体的苦痛」を介在して、中上がジェラルール（イブ・モンタン）と同一化する。無論、中上の告白とジェラルールの告白は違う。ジェラルールは、「スターリン主義」に裏切られたことに対し、中上は「民主主義」に裏切られたのである。このことについて、中上は、かつて、次のように発言した。

僕らは敗戦後すぐに生れ、小学校中学校と、平和と民主主義のデマゴグたる教師たちから新生民主日本のイメージを吹きこまれた世代であり、やっと少年期から出るころにあたって少年期を支えていた民主主義が破産を宣告されている、どうもおかしいと感じきはじめてきた世代なのである。裏切られた少年期をもつ哀しき世代、としか表現できないように思う。⁹⁹（傍点は筆者）

少年の中上が、部落出身のコンプレックス、兄の自死、または大学入学試験の失敗という三重傷痕を負いながら、そのすべての不満を、「民主主義が破産」に纏めたのではなかろうか。兄の自殺をはじめ語り、紀州熊野の自然と戯れる少年の瑞々しい感性を綴ったこの『一番はじめの出来事』には、「路地」を舞台とする作品の生成前夜の若き中上健次の可能性の全てが示されているに対し、『火祭りの日に』（『眠りの日々』）と『灰色のコカコーラ』は、次第に自殺した兄だけではなく、被差別部落を直視しようとする小説である。しかし、『灰色のコカコーラ』に描写された「部落告白」は失敗している。

「ぼく」は、最初に森の告白しようとすることを嘲笑している。

「告白？」

森はうなずいた。ぼくは滑な気がした。告白したがっている蛆虫。告白したくて身悶えする埃と排気ガスのまじった風に素裸の梢を震わせているプラタナスの植木。
（『全集1』三六二頁）

ついに、「ぼく」も、「告白したい気持ちいっぱい」（『全集1』三六五頁）となり、告白したくなる。その告白しようとする場面は、次のように描写されている。

しかしぼくはなにひとつ自由ではない。しばられ、まるでその呪いにあてられたように性病にかかり、具体的に体が腐りはじめている。告白しようか？ とぼくは森の言葉を読み出して喉の奥のほうで言う。実のところぼくには梅毒の血が流れているのだ。そしてくすぐったくなりぼくはわらいの表情も声もこらえたままわらう。
(『全集1』三六七頁)

「ぼく」は、部落出自の告白を、蛆や「梅毒の血」に喩えているが、結局「わらい」で終る。この「わらい」で終わる告白は、いうまでもなく、回避された告白にはかならない。

五、結論

上述では、「路地」という言葉が中上健次の生まれ育った新宮の被差別部落を指示するものとして最初にテキストの中に登場する短編小説『蛇淫』までの、中上初期文学における数多くの現代詩、エッセイや短編小説を対象に考察してきた。特に、初期のエクリチュールにおいて、新宮の被差別部落をまだ指示していない「路地」のすべて例を挙げ、その具体的なイメージを分析し、「路地」の語が部落を明確に指していなかった時代に、中上自身の出自や被差別部落についての文学表現を検討してきた。

言ってみれば、「路地」の語は、一九六七年『文藝首都』に発表したエッセイ『日本春歌考と僕』に遡ることができる。『日本春歌考と僕』における「路地」は、すでに、「暗闇」と接合する傾向があり、被差別部落民の悲惨の歴史や現実と結びつける傾向があった。そして、『灰色のコカコーラ』での「路地」の風景は、東京の風景でありながら、和歌山県新宮市の駅の隣の、春日地方の被差別部落の姿と重なっている。そして、未遂のテロルが生まれ、同時代の政治的に過激な空気が読める『十九歳の地図』では、主人公の「ぼく」は「路地」を走って新聞を配達すると同時に、「路地」にある各家庭を覗き見、各家庭に脅迫の電話をかけ続け、東京駅に列車爆破を予告する。この時の「路地」には、すでに破壊の要素が潜み、破壊したがる少年、憤懣の少年の走る「路地」のイメージがある。さらに、エッセイ『町よ』では、「路地」と部落をまだ結びつけていないが、普通の意味としての「路地」にも境界性があるということの中上健次が敏感に捉えている。なによりも、『蝸牛』においては、「路地」を抜けるとすぐ防風林が見え」との一文にあり、この「防風林」というのは、のちに『岬』や『枯木灘』にも登場している部落民光子の兄の住む所である。いわば、この時期の「路地」という語は、不安定とはいえ、「被差別部落」と結びつく傾向はすでにあると考えられる。要するに、小説『灰色のコカコーラ』においては、毒品、暴力、汚さのイメージや部落出自告白の胚胎、小説『十九歳の地図』においては破壊の要素、エッセイ『町よ』においては境界性の意味が、「路地」にそれぞれ含まれている。そして『蝸牛』においては、舞台を熊野新宮の部落にし、「路地」と部落がはじめて共に出現したのである。

一方、初期文学において、如何にして被差別部落のことあるいは中上健次自身の故郷を表現しているのか。それは、「梅の花」、「薔薇」、「春日町」や「永山・長山」などの言葉を用

いて表現されている。その中で、「梅の花」は中上健次の故郷、あるいは被差別部落に対する淡々なる郷愁であり、「薔薇」は家族団欒の証拠でありながら、「薔薇」の棘で「兄の自死」などによる傷をつけた感覚でもある。そして、言葉「春日町」や「永山・長山」が、初めて中上文学に用いられたのは、一九六八年四月十四日「さんでージャーナル」に発表された二つの現代詩、「季節のための詩学」と「四十五回転盤季節と若干の問題」である。この時期は、自傷を経て、「薔薇」と自分の死を宣揚し、自らの出身を大胆露出し、全面攻撃の様相を呈した時期で、完全に部落のことに直面し、すべて打ち明け、それを解決しようとしている時期であるが、一九七五年～七七年前後になると、単行本化で削除されたことでわかるように、中上はこの時期、再び部落問題を回避しようとした。

要するに、初期の中上健次文学において、「路地」という語は、原義の「人家の間の狭い道路」しかとして使われていないが、すでに、暗闇、破壊、暴力などの要素が含まれて、被差別部落を指す「春日町」や「永山・長山」と同時に出現したことさえもあったのである。中上は一旦部落の出自を暴露し、またそれを回避するが、客観的には「永山」の代わりに「路地」が登場することと繋がっていると思う。

注

¹ 「小説の想像力」を題にしての講演は、二つある。一九九〇年二月四日、新宮市職業訓練センターでの一つと、一九九一年十一月二十六日、京都国際日本文化研究センターでの一つである。前者の初出は、『熊野誌』第三十九号（一九九四年三月刊）に見られ、後者は『文学界』（一九九二年十月号）に見られる。そして、前者を「小説の想像力1」、後者を「小説の想像力2」として、『中上健次発言集成6』（一九九九年）に纏めている。

² 中上健次「小説の想像力1」（『中上健次発言集成6』第三文明社、一九九九年、三四九頁）

³ 中上健次「小説の想像力1」（『中上健次発言集成6』第三文明社、一九九九年、三五五頁）

⁴ 高澤秀次「中上健次と「路地」」（『部落解放』解放出版社、一九九九年十一月、八二～八九頁）

⁵ 高澤秀次「中上健次と「路地」の記憶を追って」（『すばる』集英社、一九九八年八月、二一〇～二一六頁）

⁶ 四方田犬彦「中上健次の初期の詩について」（『全集14』月報14、十五頁）

⁷ 富岡幸一郎の「中上健次の『小説』と物語の力」（『関東学院大学人文科学研究所報』二〇〇五年）（『すばる』集英社、一九九五年七月号。）

⁸ ニーナ・コーニエッチ著、竹森徹士訳「中上健次論——風景とジェンダー・ナラティブの政治」

⁹ 高艶『深沢七郎論：近代を見つめる土俗の目差し』東京外国大学博士論文、二〇一四年、五七～五八頁

¹⁰ 四方田犬彦「中上健次の初期の詩について」（『全集14』月報14、十五頁）

¹¹ 桜井満、宮腰賢編『旺文社全訳古語辞典』旺文社、一九九〇年、九二四頁。例文省略。

¹² 梅棹忠夫監修『日本語大辞典 講談社カラー版』講談社、一九八九年、二一二二頁

-
- 13 新村出編『広辞苑 第六版』岩波書店、二〇〇八年、三〇〇九頁
- 14 小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典 第3巻 (は～ん)』小学館、二〇〇六年、一三六〇頁。例文省略。
- 15 中上健次『日本春歌考と僕』(『全集 14』九八～一〇四頁。初出は、『文藝首都』一九六七年六月一日、第三十六卷第六号)
- 16 李英載『東アジアにおけるトランス/ナショナルアクション映画研究：冷戦期日本・韓国・香港映画の男性身体・暴力・マーケット』(東京大学博士論文、二〇一四年、七六頁)
- 17 大島渚『日本春歌考』(シナリオ) (『絞死刑：大島渚著作集』至誠堂、一九六八年、十四頁)
- 18 小川徹「『日本春歌考』裏目読み」(『現代日本映画論大系第五巻 幻想と政治の間』冬樹社、一九七一年、一九五～一九八頁。初出は、一九六七年三月一三日号「日本読書新聞」)
- 19 大島渚「『日本春歌考』へ」(『大島渚著作集第三巻 わが映画を解体する』現代思想新社、二〇〇九年、五八頁。初出は、一九七二年『わが日本精神改造計画』産報)
- 20 添田知道『日本春歌考 庶民のうたえる性の悦び』光文社、一九六六年、二八～四二頁。
- 21 大島渚「解説《春歌》そして《猥歌》」(『添田唾蟬坊・知道著作集 5 日本春歌考』刀水書房、一九八二年、二二五頁。)
- 22 大島渚「解説《春歌》そして《猥歌》」(『添田唾蟬坊・知道著作集 5 日本春歌考』刀水書房、一九八二年、二二六頁。)
- 23 大島渚「解説《春歌》そして《猥歌》」(『添田唾蟬坊・知道著作集 5 日本春歌考』刀水書房、一九八二年、二二七頁。)
- 24 佐藤忠男「日本映画批評 日本春歌考」(『キネマ旬報』キネマ旬報社、一九六七年四月、一〇三頁)
- 25 佐藤忠男「日本映画批評 日本春歌考」(『キネマ旬報』キネマ旬報社、一九六七年四月、一〇三頁)
- 26 笠原芳光『純粹とユーモア：評論集』教文館、一九六七年、二三八頁。
- 27 黒木和雄「日本春歌考：春歌による現実検証」(『映画評論』新映画出版、一九六七年四月、四九頁)
- 28 大島渚「『日本春歌考』へ」(『大島渚著作集第三巻 わが映画を解体する』現代思想新社、二〇〇九年、五九頁。初出は、一九七二年『わが日本精神改造計画』産報)
- 29 大島渚「解説《春歌》そして《猥歌》」(『添田唾蟬坊・知道著作集 5 日本春歌考』刀水書房、一九八二年、二二六頁。)
- 30 魯迅『薬』(『新青年』一九一九年五月、第六卷第五号)
- 31 『全集 14』一〇〇頁
- 32 大島渚「『日本春歌考』へ」(『大島渚著作集第三巻 わが映画を解体する』現代思想新社、二〇〇九年、六一～六二頁。初出は、一九七二年『わが日本精神改造計画』産報)
- 33 大島渚『日本春歌考』(シナリオ) (『絞死刑：大島渚著作集』至誠堂、一九六八年、四七頁。シナリオでは、「一九四七年、私は生まれました」と書かれてあるが、映画では、一九四九年である。また前後の文脈の成人の日で計算すれば、一九四九年は正しいので、映画の台詞を採用した。)
- 34 中上健次『日本春歌考と僕』(『全集 14』一〇二頁)
- 35 塩見鮮一郎「差別としての水俣病」(『作家と差別語』明石書店、一九九三年、一五五～一五六頁)
- 36 石井昭男、高史明、菅孝行「差別分断支配と階級形成」(『現代の眼』現代評論社、一九七五年七月号、一一二頁、又は一一八頁)
- 37 石井昭男、高史明、菅孝行「差別分断支配と階級形成」(『現代の眼』現代評論社、一

九七五年七月号、一〇二～一〇三頁)

- ³⁸ 中上健次『灰色のコカコーラ』(『早稲田文学』(一九七二年十月一日発行、第四卷第十号)に発表され、作品集『鳩どもの家』(集英社、一九七五年)にも収録されている)。
- ³⁹ 中上健次『十九歳の地図』(『文藝』(一九七三年六月一日発行、第十二卷第六号)に発表され、作品集『十九歳の地図』(河出書房新社、一九七四年)にも収録されている)。なお、この作品は、一九七三年度上半期の第六十九回芥川賞の候補作となった。
- ⁴⁰ 中上健次『蝸牛』(『文藝』(一九七四年三月一日発行、第十三卷第三号)に発表され、作品集『十九歳の地図』(河出書房新社、一九七四年)にも収録されている)。
- ⁴¹ 高澤秀次「中上健次と「路地」の記憶を追って」(『すばる』集英社、一九九八年八月、二一四頁)
- ⁴² 栗坪良樹「『十九歳の地図』：破壊の衝動」(『国文学：解釈と鑑賞』至文堂、一九九三年九月、一〇一頁)
- ⁴³ 松本健一「同時代の爆弾」(中上健次『十九歳の地図』河出書房新社、一九八一年、二二一頁)
- ⁴⁴ 中上健次「町よ」(初出：「日本語書新聞」昭和49年12月5日～50年4月3日)
- ⁴⁵ 栗坪良樹「『十九歳の地図』：破壊の衝動」(『国文学：解釈と鑑賞』至文堂、一九九三年九月、一〇三頁)
- ⁴⁶ 『全集1』、四三二頁。
- ⁴⁷ 『全集1』、四三二頁。
- ⁴⁸ 『全集1』、四一七頁。
- ⁴⁹ 『全集1』、四二一頁。
- ⁵⁰ 高澤秀次『中上健次事典 論考と取材日録』恒文社、二〇〇二年、三十三頁
- ⁵¹ 中上健次の商業誌デビュー作は、詩の『季節への短い一章』(『文学界』一九六八年九月号に掲載)である。
- ⁵² 四方田犬彦「中上健次の初期の詩について」(『全集14』月報14、六～七頁)
- ⁵³ 中上健次『讃歌』(初出：新宮市週刊日曜版新聞『さんでージャーナル』一九六六年四月二十四日、創刊号)
- ⁵⁴ 中上紀『花の祭り 火の祭り』(『別冊太陽 熊野 異界への旅』平凡社、二〇〇二年、四十二頁)
- ⁵⁵ 熊野大学・熊野地方史研究会『熊野誌』(第三十九号)、一九九四、扉頁
- ⁵⁶ 王維撰、趙殿成箋注『王右丞集箋注』上海古籍出版社、一九八六、二五五頁、日本語訳は筆者
- ⁵⁷ 王維撰、陳鐵民校注『王維集校注』中華書局、一九九七、六四一頁。日本語訳は筆者
- ⁵⁸ 矢嶋美都子「望郷詩のモチーフの展開—「客從遠方來」から「君自故郷來」へ」(『六朝學術學會報 第七集』二〇〇六年、九七頁。)
- ⁵⁹ 中上健次『俺のピアフよ』(初出：『さんでージャーナル』一九六六年十二月十八日)
- ⁶⁰ シモーヌ・ベルトー 著、三輪秀彦訳『愛の讃歌：エディット・ピアフの生涯』新潮社、一九七一年、四三三～四頁。
- ⁶¹ シモーヌ・ベルトー 著、三輪秀彦訳『愛の讃歌：エディット・ピアフの生涯』新潮社、一九七一年、一四頁。
- ⁶² 中上健次『履歴書』(初出は『道』第十号、紀南文芸の会、一九六六年八月)
- ⁶³ 四方田犬彦「中上健次の初期の詩について」(『全集14』月報14、八～九頁)
- ⁶⁴ 中上健次『J A Z Z』(『文藝首都』一九六六年十二月、第三十五卷第十二号に初出)
- ⁶⁵ 高澤秀次『中上健次事典 論考と取材日録』恒文社、二〇〇二年、三一三頁。
- ⁶⁶ 中上健次『灰色のコカコーラ』(『早稲田文学』(一九七二年十月一日発行、第四卷第十号)に発表され、作品集『鳩どもの家』(集英社、一九七五年)にも収録されている)。
- ⁶⁷ 中上健次『作品38』(初出は、『道』第十一号、紀南文芸の会、一九六七年一月)

-
- 68 中上健次『赤い儀式』（初出は、新宮高校文芸部誌『車輪』二十九号、一九六四年十二月。後に手を加えて『破壊せよ、とアイラーは言った』（集英社、一九七九年）に再録。）
- 69 金井美恵子「一番はじめの出来事 中上健次の初期短編の成立をめぐる」（『全集1』月報3、六頁）
- 70 『全集14』三十四頁
- 71 『全集1』八十三～八十四頁
- 72 『全集1』一八五～一六一頁
- 73 河中郁男『中上健次論第一巻』鳥影社、二〇一四年、三〇三頁
- 74 『全集1』二四七頁。
- 75 『全集1』二五九頁
- 76 高橋雄生「中上健次論序説—初期短編小説をめぐる—」（『日本文芸思潮史論叢』ペリカン社、二〇〇一年。四二三頁）
- 77 新村出編『広辞苑 第六版』岩波書店、二〇〇八年、一九四頁
- 78 『全集1』六三～六四頁
- 79 『全集1』七一頁
- 80 垣内健吾「初期中上健次論：悲劇の誕生過程について」（京都精華大学紀要、二〇一二、二六九頁）
- 81 『全集14』一二一頁
- 82 守安敏司「中上健次の「路地」理解とその作品」（『部落解放』解放出版社、二〇一〇年六月、六八頁）
- 83 『全集14』一一頁
- 84 高澤秀次『評伝 中上健次』集英社、一九九八年、八～九頁
- 85 守安敏司「中上健次の「路地」理解とその作品」（『部落解放』解放出版社、二〇一〇年六月、六九頁）
- 86 高澤秀次『中上健次事典 論考と取材日録』恒文社、二〇〇二年、三十三頁
- 87 中上健次『眠りの日々』（『文藝』一九六九年八月）
- 88 中上健次、柄谷行人「路地の消失と流亡」（『中上健次発言集成4 対談Ⅳ』第三文明社、一九九七年、三三〇頁）
- 89 四方田犬彦「中上健次 路地の映像」（『日本のマラーノ文学』人文書院、二〇〇七年。一四〇頁。）
- 90 四方田犬彦「中上健次の初期の詩について」（『全集14』月報14、九～十頁）
- 91 中上健次「ふるさと私考」（『中上健次発言集成5 談話／インタビュー』第三文明社、一九九六年、二四頁）
- 92 中上健次と野間宏、安岡章太郎との鼎談「市民にひそむ差別心理」（『中上健次発言集成6』第三文明社、一九九九年、五七頁。初出：『朝日ジャーナル』一九七七年三月十八、二十五日号）
- 93 高澤秀次『中上健次事典 論考と取材目録』恒文社、二〇〇二年、三二六頁。
- 94 高澤秀次「中上健次と「路地」の記憶を追って」（『すばる』集英社、一九九八年八月、二一三～二一四頁）
- 95 中上健次、柄谷行人「路地の消失と流亡」（『中上健次発言集成4 対談Ⅳ』第三文明社、一九九七年、三三一頁）
- 96 高澤秀次『中上健次事典 論考と取材目録』恒文社、二〇〇二年、三二二頁。
- 97 高澤秀次「中上健次と「路地」の記憶を追って」（『すばる』集英社、一九九八年八月、二一一頁）
- 98 中上健次『告白』と『やさしい日本人』（『映画芸術』映画芸術社、一九七一年三月）
- 99 中上健次「角材の世代の不幸」（『新潮』一九六八年十一月）

第二章 部落を指す用語「路地」の誕生：「蛇淫」論

はじめに

中上健次の短編小説「蛇淫」は一九七五年九月、『文芸』に発表されたもので、その粗筋は次のようである。

順というかつてグレていた二十七歳の若者は、成上り者の両親に金を出してもらい、国道沿いにスナックの店をひらいている。彼は一応堅気な生活に戻ったが、不良のまま生きているケイという幼なじみをウエイトレスとして雇い、同棲して四六時中性交する。ケイはアル中の母が男を連れこんだりして、惨めこの上もない少女時代を過ぎた女であった。中学を出てから大阪のパチンコ店に住み、たまたま順と出あってスナックの店へ連れてこられたのである。社会の階段をよじのぼっていかうとする順の両親は、同じ「路地」出身の片耳がつんぼの女を喜んでいない。順の母は特にケイを嫌って、「あの女は淫乱なんよ、蛇なんよ」とののしって、順とケイの関係を深めるのを阻もうとする。あるときケイの右耳が聞えないのは、少女時代にケイの母親の連れこんだ男に犯され、そのとき母に顔を殴られて失聴したという事実を、順の父親が聞きだしてしゃべった。度々両親に干渉され、怒りの順は激昂して、ついには単純に生きようとする男の直線的凶暴さを爆発させ、灰皿をふりまわして両親を殺してしまう。ケイと二人で死体の始末をし、家に火をつけ、二人は大阪の天王寺へでも逃げようかと思う。

この短編小説「蛇淫」は、翌年の一九七六年五月に河出書房新社より、単行本の作品集『蛇淫』に収録、刊行されていた。作品集『蛇淫』は、表題作「蛇淫」の他、「荒くれ」「水の女」「路地」「雲山」「荒神」の六編が収録されている。その序文と後記の類がなく、帯の表に次のように書かれている。

芥川賞作家 最新作品集／現実を突破しようとする男の暴力と清冽な「やさしさ」の歌——土地と血への愛憎によって生み出された独自の小説の世界！¹（傍点は筆者）

「土地と血への愛憎」とは、いうまでもなく、「蛇淫」の作者中上健次が自身の出身地について矛盾した気持ちを表していたものである。その愛情と憎悪を持っている地縁と血縁が被差別部落の地縁と血縁ではないかと、評論者に受け取られているらしい。開高健は小説「蛇淫」について次のように述べていた。

不幸な家庭に育った若い男女が独立して、紆余曲折のはてにスナックをもつのであるが、自分の家庭の父母とうまく行かなくなると、最後に主人公の青年が父母を殴り殺し、死体を風呂桶の中に置き、最後に家ごと燃やしてしまおうか、女が悪かったのか自分が悪かったと立ちすくむ。²（傍点は筆者）

開高健は地縁と血縁を「不幸な家庭」として捉えている。ただ、注意したいのは、この開高健の発言が、作品集『蛇淫』と同じ出版社の河出書房によって発表された「読書鼎談——中上健次「蛇淫」、古井由吉「聖」」（開高健、中里恒子と古山高麗雄の鼎談）に載ったものだという点である。中上健次の『蛇淫』と古井由吉の『聖』（一九七六年）を並列して評論させるのは非常に意味深いと思う。古井由吉の『聖』は、「墓掘り乞食」の「聖」を背景にしている作品である。「聖」と呼ばれている左衛門は言うまでもなく不可触賤民である。一方、作品集『蛇淫』に関しては、主人公の出自が部落民であるかどうかについて明らかにされていない。

しかし、考えてみれば、当時の編集者や評論者は、すでに、「土地と血への愛憎」との「土地」が普通ではない土地であると、その「血」が普通ではない血であると感じていたのであろう。開高健の言葉を借りれば、『蛇淫』の六篇は「それぞれ独立し合っている作品というよりは、作者のなにかオリジナルな、金米糖の核になるようなひとつのストーリーとイメージがあって、それが六つの変奏曲になって出てきている」³という。換言すれば、若い男女がそれぞれ自分の家と外にある塵労に迫られて、切羽詰まったあげく、人を殺すか、殺そうと決意するか、一家心中しようとするか、その一歩手前でとどまるか、というところで終わっている作品集『蛇淫』は、「作者のなにかオリジナル」な「金米糖の核になるような」ものがあるのである。その核になるものは、「土地と血への愛憎」であり、「路地」そのものであろうと思う。

「路地」という単語は、作品集『蛇淫』の表題作「蛇淫」において、始めて中上の出身地の新宮春日町を表現している。これは、すでに四方田犬彦が指摘しているように、短編「蛇淫」において、「路地」という単語が、中上健次の生まれ育った新宮の被差別部落を指示するものとして最初にテキストの中に登場したのである⁴。

本章では、語義上における「路地」の誕生、及び誕生した「路地」と部落の土俗の世界との関係について、分析していこうと思う。

一、語義上における「路地」の誕生：「駅裏」から「路地」へ

筆者の統計によれば、短編「蛇淫」に「路地」という語は十回ほど使われている。最初に登場したのは、幼なじみのウエイトレスの出自を紹介する場面である。

ウエイトレスに、彼は、幼なじみを、頼んだ。それが、この女だった。女とは、環境も境遇も、まるっきり違ってしまっていた。女は、まだ昔の、駅裏の、どぶがにおいたる路地に、住んでいた。靴職人の父親は、死んでいた。母親はアル中だった。これもアル中の男を、引っ張り込んでいた。女は、パチンコ屋に住み込んでいた。女をくどき落して、スナックのウエイトレスに呼び、女がアパートに移る時、彼は女について、その家まで行った。（全集2 一五一頁）

この「駅裏の、どぶがにおいたてる路地に、住んでいた」という文に注目しよう。「どぶがにおいたてる」というイメージは、すでに前章で論じてきたように、故郷のイメージを代表するものである。そこで、さらに、駅裏というもっと具体的な位置を示す。「駅裏の」の語の次に、句読点が入っている。それは、路地の場所が駅裏であることを強調しているのであろう。その路地に住んでいた「父親」の職業は「靴職人」である。「靴職人」は必ずしも被差別部落民であるとはいえないが、中上にとっては、「路地」のところでのごく普通の職業である。いわば、「路地」の衛生状況が悪く、その「路地」に住んでいる人は、辛抱な仕事で生計を立て早死にする。小説の中で、「路地」はさらに次のように描写されている。

いまから思えば、その駅裏の路地に、彼の父や母が住んでいたことが不思議だった。家々のほとんどは、バラック同然だった。傾きかかっていた。子供たちが、路地の入口に止めた彼の車を取り囲んでいた。車には、釘でやったものらしいひっかき傷がある。どういう訳か、その時、怒る気がしなかった。女を傍に乗せ、すぐ、その場を離れた。（「全集2」一五二頁）

成上り者の息子が、たまたまかつて住んだ路地に帰り、目に留まる風景である。いわば、「駅裏の路地」は、衛生状況がよくないのだけではなく、「バラック同然」のようで、「傾きかかっていた」危険な場所でもある。そして、その次に出てきた「路地」は、次の二例である。

女は出ていかなかった。実際、女が外に出ても、駅裏の路地にある家に帰れるはずはなかった。（「全集2」一六〇頁）

いまでも彼は、覚えている。いつごろのことか、まだ駅裏の路地にいたころであるのは確かだった。夜だった。（「全集2」一六一頁）

「駅裏」という語は、「路地」の前に枕詞のように添っているが、辞書に載っていない。普通であれば、「駅の裏」と書くはずであろう。中上は当たり前のように「駅裏」を使って、新宮駅の裏を指すのである。「駅裏」は、「路地」とくっつけるほか、次のようなところにも使われている。

それがわからんの。いくら考えても、おばさんは、ケイちゃん、昔から知っとるし、好きよ。あそこの駅裏の、こんなこと言うたら悪いけど破れ長屋で、うちの商売、材木かつぎからつめに火とぼしてよじのぼってきたことも事実や。（「全集2」一五九頁）

そして、

「まあな、駅裏の家へ帰れもせんけどなあ。ケイちゃんのお母ちゃんが男と一緒に住んどるから、若い娘がそこにもどったら変なごたごたにもなるし、そうかと言って、このあいだ借りとったアパートは引き払ってしもたやろし」母は、言ってハンカチで涙と鼻をぬぐう。（『全集2』一六〇頁）

または、

中学校から高校にかけて、グレていた。駅裏の昔の顔見知り、地回りの幹部にもいるということもあったし、もともと殺されても死なぬ材木かつぎの父の血を受けてか、体が大きかった。乱暴だった。（『全集2』一六〇頁）

さらに、

父が駅裏の連中から情報を仕入れてきたのだった。女の耳は、女が中学三年の時、母親がひっぱり込んだ男に手ごめにされ、その現場を母親にみつきり、それで母親からぶったたかれた。鼓膜が破れた。（『全集2』一六五～六頁）

「蛇淫」で「駅裏」の出現度数は八回である。しかも、すべては「駅裏の」という形で使われている。そのうち、四回は「駅裏の路地」（「駅裏のどぶがにおいたてる路地」を含む）の形で、その他は、「長屋」、「家」、「顔見知り」、「連中」と結び付けている。いわば、「駅裏」は修飾語であり、「駅裏の」という修飾構造で、和歌山県新宮市新宮駅の裏の地区を特に指しているのである。

一方、「蛇淫」で「路地」の出現度数は十回である。上記の「駅裏の路地」と結びつけた四回のほか、次のように使われている。

いや、昔の仲間を呼び出して、麻雀でもやろうかと思った。歩いて、駅前に出た。ふっと思いついて、線路道を歩いて、裏に出た。日が、暮れかかっていた。路地を歩いた。その路地の記憶は、ほとんどなかった。次にまがると古井戸があり、別の道に抜けられると思っても、古井戸はなかった。女の家が隣りが、元の彼の家だと思ったが、そこには彼がみおぼえのある家はない。年寄りたちが路地に縁台を出し、夕すずみをしていた。誰も知った顔はない。老婆たちは話しやめ、げんや顔で彼が通りすぎるのを見ている。中学に入るか入らないうちに、この路地から離れたのだった。どぶと、路地に鉢を置いて咲かせた花と、それからまだまきを使って風呂でもたく家でもあるのだろうか、煙のにおいがした。汽車が、合図のように一つ音を鳴らして、走ってくる。体いっぱい轟音がひびく。（『全集2』一六三頁）

「路地」の語は、「駅裏の」から独立し、一気に、連続的に使われている。しかし、描写された「路地」は、やはり「線路道を歩いて、裏に出た」ところである。つまり、「駅裏の」は前提である。いわば、「路地」の意味は、ただ原義の「人家の間の狭い道路」とは思わない。「路地」は、駅裏の部落の家と家との狭い道路であったり、駅裏の部落の具体的な家であったり、もしくは駅裏の部落のその全体の建築であったりする。

「路地」の起源を考察するには、「駅裏」の語源と用例の推移を考察しなければならない。中上はいつ頃から「駅裏」の語を使うようになったのであろうか。筆者の検証によれば、一九七四年九月『すばる』に発表された小説『鳩どもの家』はその嚆矢である。「蛇淫」のちょうど一年前に発表された『鳩どもの家』の粗筋は、つぎのようである。十八歳の「ぼく」は、実母の再婚によって義父と弟という新たな家族ができた。しかし、この家庭では親に可愛がられるのは弟だけで、「ぼく」は居場所がないと思い込み、墮落して非行化する。目の敵ともいべき弟は、近くの小屋で鳩を飼っている。「ぼく」にとって、鳩は親と同様最も憎むべき存在である。不満が段々「ぼく」の体の中に溜まっていく。爆発寸前の若き魂の叫びの小説『鳩どもの家』では、「駅裏」の語が九回使われていた。例を挙げてみよう。最初に、

ぼくが小学二年の時、姉が中学を卒業した。いまから約十年ほど前のことだった。母はその年、らんま職人の父と再婚し、たちまち悠樹を身ごもり、ぼくたち母と子は、駅裏からいまの市営住宅に移ったのだった。(『全集2』十九～二十頁)

中上健次年譜によれば、中上は一九五三年四月、小学校に入学、翌年の一九五四年、「母ちさとが中上七郎と同棲、このため春日地区の居住する兄姉と分れ同市野田に移り住む」⁵。つまり「小学二年の時」、「ぼく」の引越しは、中上自身の客観事実に基づいたものである。ゆえに、「駅裏」の語は、「新宮駅の裏の春日地区」の略語だと見ても間違いないであろう。

この「駅裏」の語は、「老婆たちは駅裏に昔から残っているあんまはりきゅうの前に、涼台を持ち出し」とか、「駅裏生粋だ」とかのように、使われているうちに、「新宮駅の裏の春日地区」のイメージが定着していた。次第に、「駅裏のぼくの家」、「駅裏の飲み屋」というような「駅裏の」の形となり、さらに、「駅裏の入口」や「駅裏の裏」のようなより抽象的な用語と結びつけるようになった。独立した言葉「駅裏」は、部落の春日の代名詞となり、「駅裏の」は枕詞のようなものになったのである。

言ってみれば、「蛇淫」において、「路地」の語義は「駅裏の」と結び付けることによって、拡大されている。「路地」の意味が拡大されると同時に、「駅裏」の意味が縮小され、原義に還元されつつある。中上の後期作品には、「路地」は遍在し、世界中のあらゆる差別された集落を指すようになってきているが、「駅裏」の語は、「駅裏も路地も」(『枯木灘』、「駅裏の新地」(『鳳仙花』)が示されているように、「路地」を含まないこともある。いずれにせよ、「蛇淫」の時点においては、「路地」は「駅裏」という修飾から独立したばかりで、新宮の部落、特

に部落の中において、家と家の間の通路、若しくは家そのものを指すようになった。この変化について、中上はエッセイ「異界にて」⁶で明言している。

ダイダロスの迷路のような路地、語の正確な意味での路地、つまり交通のネットワークの道路が直に居住空間になったところは、鈍い者には感知できぬような微細な排除のシステムがあり、通り一遍の御題目^{スローガン}では片づかぬような階層が出来ている。(『全集 14』七二五頁、傍点は筆者)

要するに、和歌山県新宮市新宮駅の裏の部落について、最初は「駅裏」という方位名詞を借用して表現する。借用語の「駅裏」は、抽象的な汎称であるため、具体的な家や路面状況のイメージが喚起され難い。そこで、「路地」という語は自然に導入され、「駅裏」と繰り返す共用することにより、「駅裏」の意味がだんだん「路地」に移されるのである。つまり、「路地」は「駅裏の路地」の省略語であり、「路地」は「和歌山県新宮市新宮駅の裏の部落、春日地区」の代名詞になっている。要するに、「路地」の形成変化過程は、「駅裏」→「駅裏の何々」→「駅裏の何々の路地」→「駅裏の路地」→「路地」である。「路地」は「駅裏の」から独立した際、「路地」は誕生したのである。

二、被差別の歴史性を背負う「路地」の誕生：「蛇」と「路地」について

高澤秀次によれば、「路地」は、「被差別の歴史性を背負った場所」であり、『千年の愉楽』（一九八二）に至り、それが「明らかになる」⁷のである。では、被差別の歴史性を背負う「路地」は、いつ頃から成立したのであろうか。初めて被差別部落を意味する言葉の「路地」を使う「蛇淫」と上田秋成の「蛇性の姪」と比較してみよう。

1. 「蛇淫」、「蛇性の姪」そして「浮島」

「蛇淫」は、先行物語の上田秋成『雨月物語』の一篇「蛇性の姪」を下敷きにしているものである。このことについて、中上健次は、作品集『蛇淫』を刊行する同時に執筆していたエッセイ「夢の力」⁸の中で、次のように述べている。

歌手が愛人を殺害して車のトランクに積んでいた、という事件が、最近あった。上田秋成の怪異譚、例えば「蛇性の姪」の現代版のような気が、私にはした。そしてこれは他人事とは思えない、と思った。(中略)「蛇淫」という小説を書いたのも、新聞の記事にその夢の力を感じたからだった。(『全集 14』三八四～三八五頁、傍点は筆者)

それに、講談社文芸文庫『蛇淫』（一九九六年）の解説「事実には復讐すること」で井口時男は次のように言っている。

『蛇淫』というタイトルは上田秋成の「蛇性の姪」から借用されている。「蛇性の姪」は「紀の国三輪崎」今の新宮市を舞台にしている、主人公豊雄は「生長優しく、常に都風たることをのみ好みて過活心なかりけり」、すなわち親がかりの文学青年である。(略)だが、「蛇淫」の男女の設定もそこに進行するドラマも、「蛇性の姪」の豊雄と真女子にはほとんど似ていない。似ているのはただ、心の構造という位相で見られるときの男女の関係だけである。⁹

江戸時代後期に著わされた読本作品『雨月物語』の中の唯一の中篇小説の体をとっている「蛇性の姪」は、著名な話で知っている人も多いと思うが、「蛇淫」と比較するために、その粗筋を書いておこうと思う。

紀伊国に大宅竹助という漁師がいた。その三男の豊雄は、「心優しくみやびた若者」であった。ある日、豊雄は漁師小屋で雨宿りしていると、「新宮の辺りにいる県の真女兒」と名乗る美しく雅やかな二十歳くらいの女と出会い、その女に魅かれた。豊雄は自分の傘を女に貸し、後日引き取りに真女兒の家を訪れた。真女兒は豊雄に宝物の太刀を贈与し、求婚した。しかし、その太刀は権現に奉獻した宝物の中から紛失したもので、豊雄が取り調べられ、百日程牢獄に繋がれた。その後、真女兒は、宝物を盗んだのは前の夫であると弁解し、豊雄も心が解け、ついに真女兒と結婚した。その後、吉野の老人が、真女兒と侍女の正体をみやぶり、真女兒の本性は邪神であると豊雄に注意した。豊雄は紀伊国に帰り、富子を嫁に迎えました。しかし、富子が真女兒に憑りつかれてしまう。豊雄は鞍馬寺の僧に助けを求めたが、僧は真女兒に敵わず死んでしまった。そこで、道成寺の法海和尚に助けを求め、袈裟で真女兒を押さえていると、気を失った富子と三尺ほどの白い蛇が現われた。法海和尚は蛇を袈裟で封じ、寺の堂の前に深く埋めた。富子はまもなく死んだが、豊雄はつつがなく暮らしたという。

「蛇性の姪」に関する先行研究を纏めている人には、吉村博任と磯合真弓がいる。吉村の論文「蛇性の姪」¹⁰で、一九八〇年代までの「蛇性の姪」の主題解釈を次のように五分類している。即ち、豊雄の人間的な成長を中心に見る中村説、封建社会機構の中で精神を圧殺された人間の悲劇を見る森山説、真女子を中心とする素朴・純粋な人間性情への憧憬を読み取る鶴月説、真女子の心の内部に伏在する獣心・執着真の哀れさ・是非なさを見つめる勝倉説、または、死とエロスの類まれなる蛇神と豊雄の成人に関する通過儀礼を融合させたものと見る吉村説である。また、磯合真弓は論文「『雨月物語』「蛇性の姪」論 タイトル「蛇性の姪」の意味するもの」¹¹で、「蛇性の姪」の主題を次のように二つの対立する説に纏めている。即ち、蛇性の魅入りから脱する豊雄の人間的成長を描いたものとする見方と、真女子像を通して人間の個の尊重とその挫折の問題が取り扱われるものとする見方である。そのほか、「蛇性の姪」は近世の人々が抱いていた熊野への信仰心を利用した新たな熊野神話¹²であるとの説があり、『雨月物語』には、「個的存在としての人間を抑圧する秩序の問題が描か

れ、「蛇性の姪」は、「共同体の秩序に組み込まれた豊雄」と「法海」によって、真女子は「抹殺される」¹³との説もある。

しかし、中上健次の「蛇性の姪」論は、上記の何れの分類に属せず、非常に独特である。中上健次は「物語の系譜 上田秋成」で、次のように述べている。

「蛇性の姪」の女性が、同一性＝地霊であり、蛇（水の神＝農耕）という構造を孕んでいるのが、秋成の差異性の自覚をあかしているとする。

秋成の晩年に至るまで、この差異性を自覚していたのである。秋成においては物語を描く事が、無意識無自覚に法や制度に身をゆだね法や制度の御手の命じのまま書く事ではなく、不可触であるはずの法や制度への抵触であった。

法や制度への抵触の意志が強くなればなるほど、物語は批評的であらざるをえなくなり、怪異を産み、無頼を産む。¹⁴

中上健次にとって、上田秋成は「好きな作家の一人」であり、出生の謎を持つ私生児であり、「身体障害者」であり、「被差別者」であり、「物語＝法・制度」の「重力をズラし、逆立ちさせた」人でもある¹⁵。中上の言う「法や制度への抵触」或いは、「物語＝法・制度」の「重力をズラし、逆立ちさせた」とは、一体何を意味するのであろうか。また、「蛇淫」と「蛇性の姪」の粗筋を読んでも、両者の関連をよくわからない人は多いかもしれない。「蛇淫」は本当にタイトルが「蛇性の姪」から借用され、内容も後者を踏んで書かれたかを、疑う人は多いかもしれない。しかし、両者の関連関係について、一部では早くから四方田犬彦により指摘されている。

四方田は『貴種と転生・中上健次』で中上の独自の秋成観を引用しながら、次のように指摘している。

中上健次は生涯を通して秋成に関心を抱き、なかんずく新宮三輪崎を舞台とした「蛇性の姪」が重要であると看做していた。(中略)「蛇性の姪」が物語によって抑圧された者たちが物語の機能を見定め、その転覆を意図した企てであり、「蛇淫」がその今日的な換骨奪胎の作品である。(中略)「蛇淫」に戻ると、この初期の短編があきらかにこうした秋成観、さらにいえば物語観を前提としたうえで執筆されていることは瞭然としている。男の母親から「蛇や蛇、あの女は蛇。淫乱」と罵倒される女主人公はあきらかに真女子の転生した姿であり、彼女に取り憑かれて身を滅ぼす男は豊雄のそれである。作者は抑圧された路地の地母神的なるものが携えている「邪悪な意志」の現われとして、この主人公を造型としている。¹⁶

確かに、中上健次は「物語の系譜 上田秋成」で、真女子について次のように言っている。

では真女子とは何だろう？蛇の化身、水神、農耕、と民俗学的符牒は自動記述のように出てくるが、この真女子の邸があった浮島がこの秋成の時代から後に被差別部落民と非被差別部落民の混住地域であり、遊廓が置かれた事を考えるなら、真女子という異類の本性を持つ女が露呈した性そのものの化身のように思う。口中に姪を受けし蛇ではないが、エロチシズムよりセクシャリズム、露呈した性の物語化（それも恋愛ではない）の姿である。¹⁷

上述の四方田犬彦の指摘からヒントを得て、上田秋成研究専門家の高田衛は著書『女と蛇 表徴の江戸文学誌』で、右の中上の発言を、「蛇の化身—被差別部落民（遊郭）—異類の本性—露呈化した性」という連鎖の論理として捉えた上、次のように鋭く指摘している。

「蛇性の姪」では、真女子は蛇の化身としての美女である。異類婚姻譚の話型に枠取られているがゆえに、真女子は異類にして同時に美女であるという幻想のなかの女として考えられがちであった。中上の理解は、真女子の異類の本性のうえに、実際の法・制度の中の被差別民の姿をダブらせていることになるのである。これは鋭く強烈な「蛇性の姪」の新しい読解であった。異類婚姻譚を民話的な幻想の域にとどめるのではなく、現世の法や制度下の現実へ反転させるからである。人間でありながら異類にかぞえられる者たちが、〈身分差別〉という物語を織りあげているからである。¹⁸
(傍点は筆者)

高田衛の言葉を借りれば、中上の真女子の「読み」において、「蛇淫」という小説で描写された「二六時中の性交」が「不可欠なくだり」であったのである。しかし、「蛇性の姪」において、異類の本性をあらわにした真女子を、豊雄がきわどい仕掛け（法海から芥子の香りしみた袈裟）で押し被り、真女子を殺したとまでいえることになった。それに対し、「蛇淫」においては、豊雄に相当する順が、殺したのは真女子に相当するケイではなく、ケイの排除をはかる順の親達なのである。つまり、「蛇淫」は「蛇性の姪」という近世の物語を「完全にひっくりかえしている」ものであり、「蛇淫」が「蛇性の姪」に対するパロディ的關係は、「すなわち中上の「蛇性の姪」に対する、つよい批評に根ざしている」¹⁹のである。

換言すれば、中上は真女子のできなかつたことを、順やケイにはさせているのである。ゆえに、「蛇性の姪」においては、「蛇」が死んでいるに対し、「蛇淫」においては「蛇」は生きていて、その代わりに「蛇」を抑圧する父母が死ぬ。

以上の分析で分かるように、「蛇淫」は、「蛇性の姪」の書き直しである。中上健次は、実に、「蛇淫」とほぼ時を同じくして、もう一つの「蛇」に関する短編小説を書き下ろした。「蛇淫」発表の一カ月前の一九七五年八月、『青春と読書』（三七〇号）に発表した「浮島」である。

新宮の浮島に直接舞台を取る「浮島」のあらすじを簡単に述べよう。木馬引きの男が妻子

を持ちながら、浮島の近くにある遊郭に住む女に魅かれて入れあげる。遊郭の女は伝説の歌「おいのみたけりや、藺之戸においで」をわが身のこととして歌う。その歌には、浮島の森の大蛇に魅入られた女性のおいの伝説がある。男は山の中で事故を起こした後に、遊郭に戻り、錯乱じみた性の恍惚の果てに遊郭の女を絞め殺してしまうという話である。

高澤秀次著書『中上健次事典 論考と取材日録』の浮島の条に、次のように書かれている。

新宮市の中央部にある、長さは八五メートル、幅六〇メートルの小島。天然記念仏に指定された、森の植物群落は有名。縄文期の終わりに海が引き、沼沢地に植物の「遺体」が集まってできた文字通りの浮島。上田秋成の「蛇性の姪」（『雨月物語』）は、この浮島の「おいの伝説」を下敷きにしている。大蛇に魅入られたおいのが、浮島の沼底に引きずりこまれたという伝説。近くに浮島遊郭跡がある。中上の短編「浮島」は、『化粧』所収。²⁰

中上は「浮島」の冒頭において、次のように書いている。

浮島の森と呼ばれる沼は、その新宮の四つの神社の真中にある。浮島の森から、目と鼻の先に、いつのころからか、遊廓がある。浮島の森には、大蛇に魅入られたおいのが、浮島の森の沼の底にひきずり込まれる伝説があるが、それに材を取った秋成の「雨月物語」蛇性の姪にあらわれたのは、蛇が女である。しかし元々は蛇は男である。ひき入られるのは、おいのだった。「おいのみたけりや、藺之戸においで」と、伝説に歌がついているが、「恋しくばたずね来てみよ和泉なる——」とよく似た文句で、哀れである。その歌を、浮島の遊廓の女郎が、我が身のこととしてうたった……。『全集 3』四九～五十頁、傍点は筆者)

「蛇性の姪」においての「蛇＝女」説は、実に本来浮島に伝わってきた古い伝承の「蛇＝男」へ反転であると中上は読解しているのであろう。蛇の性別に関し、次の節で詳しく分析するが、まず、中上の異類婚論について分析しておきたいと思う。中上は「浮島」の結びのところで、さらに次のように述べている。

女が、蛇の化身だというのは、蛇性の姪、の話であるが、なにやらあの話は、田辺の人、熊楠がいうように、遠くインドに出典を持ち、法華験記等説話にある道成寺伝説に似ていて、浮島の伝説とは、根元でちがう。恋しくばたずね来てみよ和泉なる信田の森のうらみ葛の葉、とこの浮島の森の、おいのみたけりや、藺之戸においで、おいの井之戸の淵にある、と似ていると思うのは、哀しい口調とその裏にある、ここまでこれるか？という自嘲とも他嘲ともつかぬひびきもさることながら、野干と人間（男）人間（女）と蛇の異類婚ともいふべき型である。沼、蛇、葦、カヤという型は、どこ

のものでちょっと年代が古いものなら、あるから、ことさら、ここではとらない。つまり法華験記などをみていると、道成寺伝説は、沼の神、池の神たる蛇の土俗信仰が、体系化された外来種の仏教に追われ、訓順される過程にもみえるのである。では、男は、尊い仏の加護にあずかかった汚れを知らない聖か、いや、善か？そんな馬鹿なことではない。よしんば女が、蛇の化身で、淫乱で、さかしらで、悪であっても、女とともに果の果まで行ってこそ、わざわざこの世にふぐりを股の間にぶら下げて出て来た、男というものである。道成寺の安珍も、蛇性の姪の豊雄もふがいない。逃げ出すことは要らない。(『全集3』六十～六一頁、傍点は筆者)

葛の葉(或いは信田妻・信田狐)伝説の背景に信田の森の被差別部落が存在することについて賛否の両論があるが(例えば、三谷秀治は被差別部落出身の娘と一般民との結婚悲劇を狐に仮託したものだ²¹と解釈しているに対して、赤松啓介は「南王子村の成立は説教ぶしの「信田妻」よりも新しい」ので、被差別部落と葛の葉との「直接の関係がない」²²と否定している)、その賛否の両論を別として、重要で注目すべきところは、中上健次が「野干と人間(男)」または「人間(女)と蛇」の「異類婚」を同じパターンとし、さらに中上が「異類」と「被差別部落」のイメージをダブらせているという点である。そういう視点を持つ故に、中上は蛇と交際する人間の「安珍」や「豊雄」は、「逃げ出すことは要らない」と述べたのである。一方、小説「浮島」における「異類」と交際する人間は逃げ出したのであろうか。

浮島は、「昔は、坂の上にあった遊廓から、この間までは市民病院から、汚物が流れ込み、雨が降ればきまって水が溢れ近辺の家は浸水」する「被差別者と非被差別者の混住地」²³であるため、浮島の長屋に住む男は言うまでもなく非被差別者である可能性が高い。そして作品「浮島」には「女が蛇であるなどとは、到底思い難い。蛇性の姪は、むしろ彼だった」(『全集3』六一頁)とはっきり書かれている故に、浮島の長屋に住む男は「蛇」である。つまり、中上健次の論理「蛇＝異類＝被差別部落民」で、浮島の長屋に住む男は「蛇」であるため、被差別部落民でもある。一方、遊廓の女は常に「おいのみたけりや、藪之戸においで」の歌を歌い、「蛇」に魅入られた「おいの」を「わが身」にするものである。つまり、遊廓の女は「おいの」で人間である。

換言すれば、中上の作品「浮島」は、「異類」である浮島の長屋に住む男が人間である女を殺した話である。これは、起源の物語を素朴に復帰させることでありながら、上田秋成の「蛇性の姪」への再転覆でもある。人間を殺した「浮島」は、「蛇」と交際する人間の「安珍」や「豊雄」への「蛇」側の報復であるとも言えよう。

上述では、中上健次の「浮島」や「蛇淫」と、上田秋成の「蛇性の姪」を比較してきた。纏めて言うと、三つの作品はいずれも熊野、または「熊野の中心の心臓部」、「熊野の芯」²⁴である浮島を舞台にしている。「蛇性の姪」においては、「蛇」は女で、犠牲したのは「女＝異類」である。「浮島」においては、「蛇」は男で、犠牲したのは「女＝人間」であり、「蛇

淫」においては、「蛇」は女で、犠牲したのは「人間の父母＝抑圧者」である。つまり、上田秋成の「蛇性の姪」を「蛇＝異類＝被差別部落民」の視点で捉える中上健次は、「蛇性の姪」を二度も書き直したのである。一度目の「浮島」は、上田秋成に転覆された以前の物語を素朴的に再現したもので、「蛇性の姪」で妻を殺し、愛情を裏切ってもまた生きつつある「豊雄＝人間」を、敢えて殺した。二度目の「蛇淫」は、「蛇」を抑圧する「法＝制度」の擁護者を殺したのである。「浮島」では、ただ「蛇」側の報復であれば、「路地」をはじめ「被差別部落」の意味を賦与する「蛇淫」では、「路地」を舞台に、現世の法や制度下の現実を反転させるのである。そこで、「蛇＝異類＝被差別部落＝路地」が成立し、「路地」がはじめて被差別の歴史性を背負って誕生したのである。

しかし、「蛇」を抑圧する「法＝制度」は、歴史上において、繰り返し反転されている。次の節では、「蛇」のイメージを解析し、「蛇」の抑圧構造を考察してみよう。

2. 無時間的「路地」の発見：「蛇性の姪」の系譜と「蛇」の抑圧構造

前節では、「浮島」、「蛇淫」と「蛇性の姪」の関係について考察し、「蛇＝異類＝路地」の中上の論理を分析してきた。しかし、上田秋成が「法や制度への抵触」又は「物語＝法・制度」への「重力をズラし、逆立ちさせた」と中上は言っていたことの意味について、まだ解明されていない。中上は次のように述べている。

さて、物語＝法・制度に中国人として絶えず抵触し、しかもことごとくにアジア的(交通の途絶、母権、無時間)な刻印が鮮明に在る秋成とは何者だったのだろうか、と思う。この私の思いを今一度開いて説明すれば、日本での物語の十全な展開であり顕在化であった源氏物語があるが、それら先行する様々な物語への反抗のようにアジア的刻印のある雨月や春雨を書く秋成という作家の謎である。

秋成とは単なる人間の名ではない。なにもかも抑圧下に繰り込み、その抑圧に異和を唱える者や齟齬を起すものを排除し、さらに排除した者にも新たな抑圧を加える作用を持つ物語への、邪悪な意志そのものだと言った方がよい。秋成とは、物語の機能を見定め、物語を破壊し名づけようのない十全な作品(?)や存在たらんとする者の意志そのものである。現代作家の我われは秋成を読むことによって、秋成の邪悪な意志を自分の中に確認する事では、迷妄の破壊、通俗の破壊、「文学」主義への破壊、人間中心主義の破壊は起り得ないのである。つまり中国人であり被差別者である秋成は、物語＝法・制度へアジア的物語＝法・制度を対置する事により物語の重力をズラし、逆立ちさせたのである。²⁵(傍点は筆者)

上田秋成を「中国人」と喩えしたのは、上田の出自が不明であることを言うのではなく、国文学の本質を「もののあはれ」として儒仏を排して古道に帰るべきことを説く本居宣長と対照的に言っているのであろう。中上は「蛇＝異類＝路地」という視点で、「蛇淫」を創作

して「蛇性の姪」を再構築したが、上述の上田論の真味を解明するためには、中上の「蛇」に対するイメージの還元と、「蛇性の姪」の起源の道成寺伝説（道成寺の一連の説話群）などを辿っておく必要がある。

蛇に関する歴史的、文化的なイメージについて、中上健次はかなりの知識を有しているらしい。中上はエッセイ「町よ シンガポール」で、次のように書かれている。

紀州熊野の新宮に浮島の森という沼がある。そこには沼の神たる大蛇に娘が魅入られ、沼に引き込まれる伝説がある。元々このあたり、記紀の時代から本に登場する場所であって、その沼の話は幾つにも描かれて人の本にあらわれる。谷崎潤一郎。上田秋成。さかのぼれば、『今昔物語』や『法華経験記』。だが、『法華経験記』等は、蛇が女性である。それが面白い。紀州田辺の人博覧強記南方熊楠によると、女が蛇で男を追う験記や道成寺伝説の原型とは、インド・タイ・シンガポール等東南アジアのものであった。また、安永壽延氏によると、むこ追い婚という結婚の形態のひとつでもあるらしい。しかし興味を引くのは蛇である。男の本性でもあり、女の本性でもあるその蛇。²⁶

中上の言っているのは、浮島の森に関する蛇の伝説と、道成寺伝説の比較のであり、「蛇」の本性と性別である。まず、道成寺伝説の系譜を遡ってみよう。

道成寺伝説の原型と変遷について、早くも江戸時代の屋代弘賢が「道成寺考」²⁷で考証されていた。戦後では安永壽延著書『伝承の論理』の第二部「母権制的説話の発見」²⁸により道成寺説話の系譜（『法華経』、『今昔物語』から、絵巻、能、浄瑠璃、歌舞伎まで）が年代順に整理され、母権制的要素の残留を顕現されている。また、藤沢衛彦著書『日本伝説研究第四巻』²⁹では、道成寺清姫譚から「蛇性の姪」まで、インド、中国、ギリシア、ローマから日本までの蛇に関するイメージを詳しく羅列した。

右の三氏の先行研究を踏まえ、史料を辿って検証し、『道成寺縁起』までの脈絡が次のように纏められる。「蛇性の姪」の原型になる道成寺伝説の始まりは、平安朝中期（一〇四三年頃）漢文で書いた『大日本法華験記』³⁰巻下、第二百二十九の条「紀伊国牟婁郡悪女」に出ている。熊野詣での若僧に寡婦が恋慕、帰途の約束を裏切られたことから五尋大毒蛇となって後を追ひ、道成寺の釣鐘に隠れていた若僧を鐘もろとも焼き殺したという。題目の通り、愛欲の心を起す牟婁郡の寡婦を悪女としている。それから三四十年後の文献である『今昔物語』³¹（十二世紀前半）には、この伝説を「紀伊国道成寺僧写法華救蛇語」と題にして、和文で書き和らげていた。さらに、後醍醐天皇の元亨二年（一三二二年）、虎関禅師撰する『元亨釈書』³²（仏教渡来以後元亨二年までの四百余人の僧伝・仏教史を漢文体で記したもの）に至っては、女主人公の名はなくなが、はじめて僧の名を安珍にしている。そして、それよりさらに百四五十年後、ようやく『道成寺縁起』（約一四七〇年頃）が僧正徹、土佐光重らによって作られた³³。上述の説話を受けて制作された『道成寺縁起』では、追う「蛇」と追わ

れる僧の躍動する身体のダイナミズムははじめて顕著に現れている。

上述のように、道成寺伝説の系譜では、何れも人が蛇に変わる（人変蛇）の物語である。しかし、仏典には、人変蛇（龍）もあれば、蛇（龍）変人（蛇が人に変わる）もある。例えば、後秦時代（三八四～四一七）に翻訳された『十誦律』卷第四十第六誦之五には、人変龍（蛇）の話がある。婆羅門の娘、美人である妙光が沙門を淫し、その後、病死して淫龍となるという³⁴。そして、推測東晋時代（三一七～四二〇）の翻訳とされた『仏説因縁僧護経』には、龍（蛇）変人出家の話がある。ただ、龍（蛇）が、生時、死時、淫時、嗔時、睡時の五個の状態に本形を隠すことができないという³⁵。

『道成寺縁起』は、『十誦律』のような思想などの影響で、「龍性の淫行と、煩惱と因果応報と、並に仏戒とその功德を概念」³⁶として、人変蛇の物語である道成寺伝説が創作されたのであろう。女が執心から蛇と化す話は、内田賢徳によれば、『道成寺縁起』の他に、『沙石集』卷七「妄執ニヨリテ女蛇ト成ル事」、『古今著聞集』卷二十「或僧の妻嫉妬して蛇と化し夫の件物に喰付く事」、または「今昔物語集」卷十四「女法花の力に依りて、蛇身を転じて天に生まるる語、第四」などがある³⁷。また、『発心集』第五卷第三「母、女を妬み、手の指蛇になること」もその類例として挙げられよう³⁸。一方、「蛇性の姪」は明らかに蛇変人の物語である。比丘を淫する時に死して、或いは妄執、嫉妬のため、蛇（龍）となる女を現れているに対し、「蛇性の姪」における「姪女」は、本来の蛇が、隠身の姿において人間の異性と出会い、怒りのために隠身の術を破って本来の姿を現す。しかし、龍（蛇）変人の話では、上述の『仏説因縁僧護経』における出家の話のように、または『海龍経』、『菩薩胎経』などが提唱するように、仏陀守護の功德によって龍蛇が人間以上の存在である、というような場合が多いのである。

が、「蛇性の姪」における蛇変人の「蛇」は人間以上の存在であるどころか、「姪女」として蔑まれ殺されていた。それに、「蛇性の姪」の男主人公豊雄は、道成寺伝説の系譜の道心堅固の僧侶ではなく、風流の士である。さらに、「蛇性の姪」というタイトルを考察すれば、それも再構築であると看做してもよい。

「蛇性の姪」というタイトルと『五雑俎』の関係をすこし述べてみよう。

「蛇性の姪」は、安珍清姫の道成寺説話が巧く利用されたほか、すでに多くの人に指摘されたように、中国明代の馮夢龍が編纂した白話小説集『警世通言』第二十八「白娘子永鎮雷峰塔」、清の古吳墨浪子篇する白話小説集『西湖佳話』卷之十五「雷峰怪蹟」、『五雑俎』や『剪灯新話』の「牡丹灯記」、「翠翠伝」、「渭塘奇遇記」等の影響を受けている³⁹。

その中の『五雑俎』は、明の謝肇淪が撰した著作である。『五雑俎』卷之九物部一では、次のように書かれている。

龍性最淫，故與牛交，則生麟；與豕交，則生象，與馬交，則生龍馬；即婦人遇之，亦
有為其所汚者。嶺南人有善致雨者，募少女於空中，驅龍使起，龍見女即回翔欲合，其
人復以法禁，使不得近，少焉，雨已沾足矣。⁴⁰（傍点が筆者）

「蛇性の姪」の本文には、豊雄が吉野のある老人に言われた場面がある。「此の邪神は年経たる大蛇なり。かれが性は姪なる物にて、牛と犖みては麟を生み、馬とあひては竜馬を生といへり」⁴¹というくだりである。それは勿論『五雑俎』から引用したものである。つまり、「蛇性の姪」のタイトルは『五雑俎』の「龍性最淫」から採ったのであろう。しかし、「蛇性の姪」における「蛇」は女であることに対して、『五雑俎』では「即婦人遇之、亦有為其所汚者」（婦人が龍と出会ったら、龍に姦淫されることがある）が示されたように、龍（蛇）は男性である。

人変蛇から蛇変人へ、道心堅固の僧侶から風流の士へ、男性の「蛇」から女性へ、このような構造の変化は大きい。上田秋成はなぜ構造を変えたのであろう。典拠作品と「翻案」作品を比較すると、翻案する作者個人の資質やその生きた時代の特性が見えてくるが、果たして、上田の翻案とは、中上健次の言う「物語の重力のズレ」であり、「物語＝法・制度」への「逆立ち」であろうか。

中上健次は上田秋成については機会あるごとに語っている。その上田論（「物語＝法・制度」への「逆立ち」）とは、所詮中上健次自身の強烈な主張ではないかと思う。つまり、上田秋成には「アジア的（交通の途絶、母権、無時間）な刻印が鮮明に在る」と主張する中上健次自身にこそ交通の途絶、母権、無時間な刻印が鮮明にあるであろう。交通の途絶とは「路地」における結婚の制限や現代経済の滞ることを指すが、母権と無時間とは、歴史的な「交通の途絶」と思う。

中上は「興味を引くのは蛇である。男の本性でもあり、女の本性でもあるその蛇」と述べていたが、日本において、「蛇」に関するイメージを考察しておこうと思う。

日本の神話、信仰、民俗において、蛇は根深く、且つ広汎に活躍している。蛇を信仰の対象とした古代日本人は、蛇の脱皮こそ蛇に永生と新生をもたらすものとして多大の関心をよせたと思われる。「蛇」の生態や語源または神話などの検証に基づいて『蛇：日本の蛇信仰』を著書された吉野裕子は次のように述べている。

古代日本人における性にまつわる蛇の把握は、男の「性」ばかりではなく、女の「性」もまた蛇に関連して捉えられている。それは蛇の外観が男の性への連想をさそったのに対し、女の性はあるいは蛇のトグロの渦の外観によることもあるにはあろうが、より深くその脱皮する生態に関連させられていると私は考える。⁴²

古代日本人においては、「蛇」を両義の性と把握されているが、原始には「蛇」を男の性と捉えられているらしい。吉野裕子は同著書の序文で次のように言っている。

日本原始の祭は、神蛇と、これを斎き祀る女性蛇巫を中心に展開する。
その祭の第一義は、「女性蛇巫が神蛇と交わること」。第二義は「神蛇を生むこと」。

第三義は「現実に蛇を捕えてきて、飼養し、祀ること」に分解される。

… (中略) …

しかし時代が降れば、巫女は神蛇と交わる擬きをし、巫女自身が神の種を宿し妊り、最終段階では自ら神蛇、現人神（あらひとがみ）として部落の人々の前に顕現し、村人と交歓し、一人三役をこなす。つまり祭は巫女の「擬き」に終始することになり、この形は現在まである程度、沖縄及び南の島々に残る祭祀形態である。

本土においては祭祀権は男性に奪取され、必然的に祭の第一義だった神蛇と巫女との交わりは失われる。⁴³

しかし、藤沢によれば、「蛇性の姪」の先行物語の道成寺の縁起に現われた蛇女の思想系統は、「仏典胚胎の縁起によることは勿論であるが、本来をたづぬれば、ナーガの思想に遡らねばならぬ」という。藤沢の言うナーガとは、「河海の神」であり、「水の神」であり、「人類に宇宙の乳である水を与える女神」⁴⁴である。つまり、「蛇」は女性である。吉野、藤沢両氏の論説が正しいとすれば、次の推論も間違いがないと思う。

要するに、原始日本人においては「蛇」が男性であるが、「蛇」が女性であるという外来思想の影響で、時代が降れば降るほど、「蛇」が女性となったのである。熊野の新宮にある浮島の森に関する蛇の伝説では、すでに前節で分析してきたように、「蛇」は男性である。つまり、その伝説は、一種の「交通の途絶」であって、「無時間」の証拠であろう。引いて言えば、「浮島」や「蛇淫」を書き、上田秋成論を書く中上健次は、「路地」における「交通の途絶」と「無時間」を発見したのである。後に書かれた『岬』をはじめとする「路地」の物語群は、ここからスタートしているのではなかろうか。

「交通の途絶」と「無時間」のもう一つの表現は母権制である。

「蛇＝女＝淫蕩」を生み出し、支え続ける世界とは何であろうか。勿論、母権制を抑圧した父権制である。「道成寺縁起」の物語の享受者は、内田賢徳の指摘しているように「熊野詣でで道中の人々」⁴⁵である。が、藤原宗忠が寛治元年（一〇八七年）から保延四年（一一三八年）まで書いた日記である『中右記』は、熊野詣での記事の中に次のような挿話を記している。

（一一〇九年十一月五日）天晴、少将談云、去夜夢想、少将・予相共行野径間、有大蛇當道、而先達聖人抜劍斬蛇、行過其路者、倩思此夢、誠除魔障遂參詣歟、中心所欣悦也。⁴⁶

少将とは、藤原宗忠の息子宗能である。宗能の夢の話を利用して、「先達聖人」が「蛇」という「魔障」を祓ってくれるということである。同じ文脈と思うが、宗忠は同年十月二十四日に中辺路を歩く途中、柚多和大坂を過ぎる暁に、「過柚多和・大坂、此暁坂中有大樹蛇形懸、傳昔女人化成云々」⁴⁷と記してある。つまり、女が「蛇」と化して「魔障」となる。女が「蛇」

と化して「魔障」となるというのは、「蛇」が「人類に宇宙の乳である水を与える女神」である思想と雲泥の差がある。「女神」から「魔障」への変化は、勿論仏教の影響も大きい。例えば、たとえば、「根本説一切有部毘奈耶雜事」卷三十には、「如世尊説。大黒毒蛇有五過失云何為五。一者多瞋。二者結恨。三者怨讎。四者無恩。五者惡毒。女人亦爾。瞋恨多讎。無恩惡毒。女人毒者。謂有一類多欲染心」⁴⁸のようなくだりがある。しかも、『今昔物語』、『法華驗記』、仏典等で現在の「淫」（みだら、の意）を「姪」と書いた。しかし、「日本の蛇の原像は仏教で説かれる如き「姪」と直結するものではない。考えてみれば、その根本的原因は、母権から父権への変化ではなかろうか。

それに、道成寺創建に関わる物語に、父権による権力支配、改竄の痕跡が残されている。

道成寺は、和歌山県日高郡にある天台宗の寺院である。『日本歴史地名大系』によれば、「大宝元年（七〇一）文武天皇の勅願によって、開山を法相宗の義淵とし、紀道成を建立奉行として創建されたという（傍点は筆者）」⁴⁹。一方、広辞苑では、「道成寺は和歌山県日高郡川辺町にある天台宗の寺で、七〇一年（大宝一）紀道成より創建され、もと法相宗と伝えられているという（後略）」⁵⁰。『広辞苑』には、「文武天皇の勅願」というようなくだりが見当たられない。

かつて、江戸時代後期の江戸幕府御家人、国学者である屋代弘賢（一七五八年～一八四一年）は「道成寺考」で、次のように述べている。

道成寺を文武天皇の勅願と言へるは、何か寺伝に據し成べし、然れども、勅願ならば、正史にしるさるべきを、続日本紀に所見なく、伊呂波字類抄にも記さざれば、扶桑略記にも所見なきなるべし、されば勅願といふは信じかたし、殊に紀大臣道成といふ人も不審なり、文武天皇の朝の大臣は、左は多治比真嶋、右は阿倍朝臣石上朝臣麿すべて三人にて、道成といふ大臣あるとなし、（中略）道成の二字は人名にあらで、仏典より採しにもあるべきにや。⁵¹（傍点は筆者）

屋代は、道成寺の文武天皇勅願説を一つの物語としている。勅願説のいわゆる物語は、道成寺の創建伝承の「かみなが姫」で、道成寺のホームページには詳しいが、その粗筋は次のようである。文武天皇夫人で聖武天皇の実母でもある藤原宮子が、もとは紀伊国日高郡の海人の娘であり、海中より得た観音像のご利益による美しい髪が縁となって宮中に迎えられ、道成寺を創立したという。

が、道成寺ができてから縁起のできたまでのおよそ七七〇年間は、なによりも長いである。道成寺と安珍清姫の説話を結びつけるのは、奇妙であろう。雑賀貞次郎（一八八四～一九六四）が「道成寺物語の推移」で、次のようにのべている。

何しろ道成寺は平安初期の建築たる事が明らかであり、その本尊並びに脇立は国宝中でも屈指の傑作とされているが、創建は勅願によるといい紀の大臣道成の造営だ

というが、それらには疑いがあるとされている位、それほど寺伝は失われていながらも当時屈指の大伽藍として建築されたことは明らかだ。この名刹と安珍清姫の説話がどうして結ばれたかは研究すべき好題目だ（後略）。⁵²

たしかに、一九七八年度から数次にわたって行われた発掘調査では、道成寺は「当時屈指の大伽藍」であることを証明していた。考古的調査によって、道成寺の境内は勿論、付近の山林中から、複弁八葉の蓮華文を持つ白鳳時代の軒先丸瓦などが多数出土している。また、有力な国分寺しか持たない複廊（複廊とは柱三列が並び、中央に連子窓や壁のある回廊である）の遺構などが発見された⁵³。いわば、「この道成寺は八世紀（白鳳時代）初頭の創建であること」⁵⁴が確認されたのである。しかし、『道成寺縁起』で一体なぜ「蛇」の説話を語っているのであろう。

梅原猛は「考古学の逆襲・「道成寺=勅願寺」説は実証できる」という論文で、道成寺には、「安珍・清姫」の傳説の奥に、この寺の創建について、もうひとつ別な伝承が隠れていたと述べた上、次のように言っている。

従来、藤原不比等の娘であり、藤原氏の娘として初めて天皇の夫人となり、やがて天皇の母、即ち国母となったとされていた藤原宮子が、実は和歌山県日高郡の「九海士の里」の海人の娘であり、その美貌を不比等に認められ、入内して文武天皇夫人となったというのである。それ故、道成寺は文武天皇勅願の寺であり、道成寺という名の起こりをなる紀道成（橘道成、藤原道成、平道成とも伝えられる）の創建になり、義淵僧正によって開基されたと伝えられるのである。⁵⁵

梅原の言いたいのは、「権力者は自らが犯した悪業や、また自らの名誉を失墜させるような事実を、自らが作った正史に書き止めるはずがない」ということであろう。つまり、「宮子が海人の娘であるとすれば、それは天皇家と藤原氏の名誉に関係する」⁵⁶のであるため、道成寺の勅願寺説を隠蔽し、「安珍・清姫」説を付与させるのである。

道成寺ができてから縁起のできたまでのおよそ七七〇年間は確かに長すぎる。道成寺の勅願寺説が隠蔽されていることが十分可能である。もし梅原の説が正しいとすれば、安珍・清姫に関する蛇の伝説は、所詮父権の「権力者」の「悪業」を隠蔽する道具にすぎないのであろう。

「蛇」は、権力者の悪業を隠蔽する絶好の材料である。すでに上述で述べたように、『大日本法華験記』から『道成寺縁起』までの道成寺の「蛇」の系譜は、すべて人変蛇の物語であって、「蛇」は法華経の力により、最後には救護され、蛇身を棄て帝釈天の止住する切利天に上生した。藤原宮子はもともと和歌山県日高郡の「九海士の里」の海人の娘であれば、天皇家と藤原氏の名誉を傷つけるゆえ、海人は皇族に対し、所詮異類である。中上の論理を逆用して言うと、「海人=異類=蛇」が成立する。つまり、道成寺の「蛇」伝説は、「海人=

蛇」が天皇を誘惑し（藤原不比等の政治手段とは言え）、最後に国母（天上に再生され）となった物語だと言えよう。これは、中上の論理で垣間見えてきた道成寺縁起絵巻の深層構造と思う。

三、結論

国広哲弥は論文『差別語』を考えるために⁵⁷で、「言い換え」を「ある語または句をほぼ同じ意味を表す別の語または句に変えることをいう」と定義し、そして、言い換えの理由を四つに分け、そのうち「タブー・忌詞・差別語」を最も大きなものとしている。さらに、差別語について、「差別語の代わりに婉曲語法を使う人は心の内では差別語の差別性を意識しているからこそその使用を避けている」という。この点について、中野収も論文「人はなぜ言葉を言い換えるか」⁵⁸で指摘しているように、「拙劣な言い換え」や「意識して差別語を使わない」ことは、「逆に差別を助長し」、「潜在的な差別意識が補強される」のである。しかし、言葉の暴力に打たれつづけている人たちの苦痛を抜きにして、差別語を使いつづけるわけでもいかない。こういうジレンマを解決するには、中上が「路地」という言葉を持ち出し、「路地」に新たな意味を少しずつ入れていくと思われる。

短編小説「蛇淫」は、「路地」にはじめて「被差別部落」の意味を入れた小説である。しかも、最初から中上健次は部落の異類性や無時間性を「路地」に入れているようである。

すでに論述してきたように、上田秋成と中上健次の関係について、四方田犬彦が簡明、かつ重要な指摘を行っており、さらにそれをふまえて高田衛によってよりまとまった論考がなされている。これらの先行研究を依拠しつつ筆者の考えを述べてきたが、もう少し整理してみよう。

中上健次は、上田秋成論の冒頭で、

秋成も論じ難い。たとえ論じたとしてもその論は、この国の近代にはびこる人間中心主義、「文学」主義に毒され、秋成という物語や秋成が残した作品がさし示す物語を提示する事なく、重箱の隅をほじくる論に終始する。⁵⁹

中上は、「国文学」そのものへの不信感や国文学者にたいする弾劾のような体勢を取るのは、「国文学者」とは「次元を異にしている」ことで、中上はいわば国文学的な秋成研究史のすべてを拒否し、告発するという挑発を方法として、あるいは破壊を方法として、上田秋成論を書いたのである。「物語の系譜 上田秋成」を書いた一九七九年で、故郷の新宮で部落青年文化会を組織して、月一回の公開講座を開いていた中上の上田秋成論は所詮、「〈紀州〉や〈熊野〉へのこだわり」であり、『雨月物語』の「蛇性の姪」のことを書きたかった⁶⁰なのである。

高校時代以来『雨月物語』を愛読していた中上健次は、上田秋成の「身元隠し」や「同一

性からの離脱」に注目し、上田秋成の「身元隠し」と「離脱」の動機を、秋成の「被差別された状態にあった」からこそだと結論している。つまり、中上の上田秋成論は、本質的には、中上健次自身の論であり、「蛇＝異類＝被差別部落民」の論である。それは、中上の言う「物語とは不可触」や「秋成にぬぐい難く顕れているアジア的法・制度＝物語」なのである。

上田秋成の「蛇性の姪」を「蛇＝異類＝被差別部落民」の視点で捉える中上健次は、「蛇性の姪」を二度も書き直した。「浮島」では、「蛇性の姪」での、愛情を裏切ってもまた生きつつある「豊雄＝人間」を、敢えて殺した。「蛇淫」では、「蛇」を抑圧する「法＝制度」の代行者を殺したのである。勿論、共通的などころもある。タイトルの「蛇淫」とタイトルの「蛇性の姪」は、ケイが順に、また真女子が豊雄に対する愛に対し、秩序の側の人々が貼ったレッテルである。それは、順または豊雄が秩序の枠組みに組み込まれたかどうかと関係なく、ケイや真女子に対して押した烙印である。ゆえに、「蛇淫」も「蛇性の姪」も、秩序から疎外され続けるものの生き方を意味する。同じ論理で言うと、新宮を舞台とする奇談の「蛇性の姪」からタイトルをつけた中上の初期短編「蛇淫」は、蛇の「姪」という現代の同一性から離脱した作品といえるのだろう。つまり、「被差別された状態にあった」中上健次は、蛇に関する社会の「同一性」から離脱し、新宮被差別地区における蛇の伝説の「無時間性」を示したのである。換言すれば、千葉県市原市の青年が両親を殺害した事件を素材した「蛇淫」は、被差別部落における「交通断絶」、「母系制」、つまり「無時間性」を初めて表現するようになったのである。

換言すれば、「浮島」や「蛇淫」を書き、上田秋成論を書く中上健次は、「路地」における「交通の途絶」と「無時間」を発見した。「無時間」の一つの表現は「母権制」である。妻訪いや同母兄妹間の近親相姦タブーは、家父長制的な婚姻形態たる一夫多妻制度からも派生しうるものだが、一般的には原始母権制の証跡とみなされている。後に書かれた『岬』をはじめとする「路地」の物語群は、ここからスタートしているのではないかと思う。

また、「蛇淫」を収録した作品集『蛇淫』の六編はすべて「路地」を背景にし、「水の女」を除いてすべて三人称「彼」で語られている。初期の中上健次は「ぼく」または「僕」という一人称の語りに拘りつづけたが、『蛇淫』になると、「彼」という三人称になる。このとき、事件の主役は他人であるとともに自分であり、自分であると共に他人である。それは、作品集『蛇淫』を書く時期の中上健次が、自分の書くべきテーマとその書き方についての明瞭な自覚に到達していたことを示していると思われる。

何よりも、短編小説「蛇淫」において、はじめて和歌山県新宮市新宮駅の裏の部落、春日地区を、「駅裏」→「駅裏の何々」→「駅裏の何々の路地」→「駅裏の路地」→「路地」として成立させたのである。「路地」という言葉は「駅裏の」から独立した際、「路地」は誕生したのである。

そこで、「蛇＝異類＝被差別部落＝路地」が成立し、「路地」がはじめて被差別の歴史性を背負って誕生したのである。つまり、一九七五年に執筆された「蛇淫」は、初期の短編の中において、もっとも完成度をもった作品であり、後に大規模に展開されることになる「路地」

のサガと直接の関係を結んでいると見なしてもよい。

注

- 1 中上健次『蛇淫』河出書房、一九七六年。帯の表。
- 2 開高健、中里恒子、古山高麗雄「読書鼎談——中上健次「蛇淫」、古井由吉「聖」」(『文芸』河出書房、一九七六年八月。二二〇頁)
- 3 開高健、中里恒子、古山高麗雄「読書鼎談——中上健次「蛇淫」、古井由吉「聖」」(『文芸』河出書房、一九七六年八月。二二一頁)
- 4 四方田犬彦「中上健次の初期の詩について」(『全集 14』月報 14、十五頁)
- 5 高澤秀次『中上健次事典 論考と取材日録』恒文社、二〇〇二年、三一三頁。
- 6 中上健次「異界にて」(初出：一九八四年六月『GS』創刊号、特集「反ユートピア」の中の一編)
- 7 高澤秀次「中上健次キーワード事典」(『別冊太陽 中上健次』平凡社、二〇一二年、一八五頁)
- 8 中上健次「夢の力」(初出：一九七六年七月「文學界」)
- 9 井口時男「事実に復讐するということ」(中上健次『蛇淫』講談社文芸文庫、一九九六年。二四四～二四六頁)
- 10 吉村博任は「蛇性の姪」(『国文学解釈と鑑賞』至文堂、一九八一年七月。一六二～一六五頁)
- 11 磯合真弓「『雨月物語』「蛇性の姪」論——タイトル「蛇性の姪」の意味するもの——」(『広島女学院大学大学院言語文化論叢』広島女学院大学、二〇〇〇年三月。一一三～一一四頁)
- 12 安原真琴「近世文学と熊野——新たな熊野神話としての『蛇性の姪』」(『国文学解釈と鑑賞』至文堂、二〇〇三年十月。五三頁)
- 13 植田一夫「『雨月物語』における疎外の構造——『蛇性の姪』論」(『学術研究年報Ⅲ』同志社女子大学、一九八五年。六四～八二頁)
- 14 中上健次「物語の系譜 上田秋成」(『中上健次エッセイ撰集 文学・芸能篇』恒文社、二〇〇二年、四五～六二頁。初出：一九七九年四月・五月号『国文学』)
- 15 中上健次「物語の系譜 上田秋成」(『中上健次エッセイ撰集 文学・芸能篇』恒文社、二〇〇二年、五二頁。初出：一九七九年四月・五月号『国文学』)
- 16 四方田犬彦『貴種と転生・中上健次』筑摩書房、二〇〇一年。三六二～三六三頁
- 17 中上健次は「物語の系譜 上田秋成」(『中上健次エッセイ撰集[文学・芸能篇]』恒文社、二〇〇二年、六一頁。初出は一九七九年四月号と五月号『国文学』)
- 18 高田衛『女と蛇 表徴の江戸文学誌』筑摩書房、一九九九年。二一頁。
- 19 高田衛『女と蛇 表徴の江戸文学誌』筑摩書房、一九九九年。二一～二三頁。
- 20 高澤秀次『中上健次事典 論考と取材日録』恒文社、二〇〇二年。十頁。
- 21 三谷秀治『火の鎖 和島為太郎伝』草土文化、一九八五年。九〇～九一頁。
- 22 赤松啓介『非常民の民俗文化——生活民俗と差別昔話』明石書店、一九八六年。三四頁。
- 23 中上健次「小説 非情なもの——森崎和江著『遙かなる祭』を読む」(一九七八年五月一日『日本読書新聞』)
- 24 吉増剛造「中上さんの《方》へ、(路地)へ、……」(『ユリイカ 詩と批評』青土社、二〇〇一年二月。一三〇頁)
- 25 中上健次「物語の系譜 上田秋成」(『中上健次エッセイ撰集 文学・芸能篇』恒文社、二〇〇二年、六二頁。初出：一九七九年四月・五月号『国文学』)
- 26 中上健次「町よ シンガポール」(一九七六年十一月「PLAYBOY」)

-
- 27 屋代弘賢「道成寺考」(『近古文芸温知叢書 第七編』博文館、一九一一年、一～二六頁)
- 28 安永壽延「母権制的説話の発見」(『増補 伝承の論理』未来社、一九七一年、二〇一～二七二頁)
- 29 藤沢衛彦『日本伝説研究 第四巻』すばる書房、一九七八年、一～三四頁。
- 30 塙保己一編『続群書類従.第八輯.上』続群書類従完成会、一九三三年、一九九～二百頁。
- 31 『今昔物語集：校註抄本』昭和四年、竜谷大学国文学会。十八～二三頁。
- 32 『国史大系 第十四巻』経済雑誌社、一九〇一年、九六四～九六六頁。
- 33 作者の名と成立年代に異説ある。安永壽延は一四二七年にしている。安永壽延「母権制的説話の発見」(『増補 伝承の論理』未来社、一九七一年、二一一頁)
- 34 (後秦)弗若多羅共羅什訳『十誦律』(『大正新脩大蔵経 第二十三巻(律部2)』大正新脩大蔵経刊行会、一九七二年、二八七～二八八頁)
- 35 失訳『仏説因縁僧護経』(高楠順次郎編『大正新脩大蔵経 第十七』大正一切経刊行会、一九二五年、五六五頁)
- 36 藤沢衛彦『日本伝説研究 第四巻』すばる書房、一九七八年、六頁。
- 37 内田賢徳「道成寺縁起」絵詞の成立」(小松茂美編『続日本絵巻大成 13』中央公論社、一九八二年、一七二頁)
- 38 鴨長明著、三木紀人校注『方丈記・発心集』(新潮日本古典集成)新潮社、一九七六年、二〇八～二一一頁
- 39 中田妙葉「『蛇性の姪』における人物形象の創作と中国白話小説の影響について」(『東洋法学』二〇〇八年三月、八九頁)
- 40 謝肇淛『五雜俎』中華書局、一九五九年、二三八頁
- 41 上田秋成「蛇性の姪」(『上田秋成集』有朋堂書店、一九三一年、三〇〇頁)
- 42 吉野裕子『蛇：日本の蛇信仰』法政大学出版局、一九九九年、二八六頁。
- 43 吉野裕子『蛇：日本の蛇信仰』法政大学出版局、一九七九年、一三～一四頁
- 44 藤沢衛彦『日本伝説研究 第四巻』すばる書房、一九七八年、一～四頁。
- 45 内田賢徳「道成寺縁起」絵詞の成立」(小松茂美編『続日本絵巻大成 13』中央公論社、一九八二年、一六八頁)
- 46 藤原宗忠『中右記』(『神道大系 文学篇五 参詣記』精興社、一九八四年、三五頁)
- 47 藤原宗忠『中右記』(『神道大系 文学篇五 参詣記』精興社、一九八四年、三〇頁)
- 48 (唐)義浄訳「根本説一切有部毘奈耶雜事」卷三十(高楠順次郎編『大正新脩大蔵経 第二四巻』大正一切経刊行会、一九二六年、三五七頁)
- 49 下中邦人『日本歴史地名大系三十一巻 和歌山県の地名(オンデマンド版)』平凡社、二〇〇一年、五四五頁。
- 50 新村出編『広辞苑 第六版』岩波書店、二〇〇八年、一九七六頁。
- 51 屋代弘賢「道成寺考」(『近古文芸温知叢書 第七編』博文館、一九一一年、一八頁)
- 52 雑賀貞次郎「道成寺物語の推移」(『南紀熊野の説話』紀南の温泉社、一九三四年、一一三頁)
- 53 網伸也「道成寺伽藍と古代観音信仰 発掘調査成果と出土瓦からの再検討」(安藤孝一編『経塚考古学論攷』岩田書院、二〇一一年、二六一～二八四頁)
- 54 小松茂美編『続日本の絵巻 24 桑実寺縁起 道成寺縁起』中央公論社、一九九二年、一二九頁
- 55 梅原猛「藤原宮子④=考古学の逆襲・「道成寺=勅願寺」説は実証できる」(『朝日ジャーナル』朝日新聞社、一九八九年九月、四六頁。)
- 56 梅原猛「藤原宮子④=考古学の逆襲・「道成寺=勅願寺」説は実証できる」(『朝日ジャーナル』朝日新聞社、一九八九年九月、四六頁。)

-
- ⁵⁷ 国広哲弥「『差別語』を考えるために」(『言語(特集 ことばの言い換え)』大修館、二〇〇〇年十月号、六五頁。)
- ⁵⁸ 中野収「人はなぜ言葉を言い換えるか」(『言語(特集 ことばの言い換え)』大修館、二〇〇〇年十月号、二〇～二五頁。)
- ⁵⁹ 中上健次「物語の系譜 上田秋成」(『中上健次エッセイ撰集 文学・芸能篇』恒文社、二〇〇二年、四五頁。初出：一九七九年四月・五月号『国文学』)
- ⁶⁰ 高田衛『女と蛇 表徴の江戸文学誌』筑摩書房、一九九九年、九頁。

第三章 中上健次『不死』論——〈被慈利〉・〈観音〉・〈性〉

はじめに

『不死』（一九八〇）は、中上健次の連作集『熊野集』の第一篇である。『熊野集』は、十四の作品よりなり、一九八〇年六月から一九八二年三月まで、『群像』に掲載され、「〈路地〉のモデルである和歌山県新宮市にある〈被差別部落〉が、同和対策事業により大きく様変わりする時期に発表された」¹もので、「中世とも近世とも知れぬ時代の熊野山中を舞台にした夢幻的な物語と、現代を舞台にした私小説的作品とを混在させた」²連作短編集だと考えられている。その中で、『不死』は、〈物語系列〉に属しながらも、「ポストモダンあるいはポストヒストリカルな物語の永劫回帰」³と評されている。中上健次は、『不死』の冒頭を次のように始めている。

その被慈利にしてみれば熊野の山の中を茂みをかきわけ、日に当って透き通り燃え上がる炎のように輝く葉を持った灌木の梢を払いながら先へ行くのはことさら大仰な事ではなかった。（『不死』一九五頁）

〈その被慈利〉というのは、何だろう。いきなり「その」と書き出しているが、どのことを指しているのか。〈被慈利〉に仮名も振られておらず、「ひじり」とよむのであろうか。この普通ではない名前には、どのような意味が含まれているのか。

〈被慈利〉という名前の初出が、『不死』の前編『穢土』（一九七五）にある。『穢土』の主人公を最初に「彼」と言う。「彼」は、山の中を歩き、雨に出会い、熱で倒れ込み、道の脇に身をまるめて寝ていて、「生命がはてても悔い」はないと思っているところに、ある男に見つけられ、おにぎりとお酒を飲ませてもらった。その場面は次のように書かれている。

彼を、沙弥、被慈利だと知ってか、それとも図体は大きいが齡端もいかぬ小僧っ子だとあなどってか、伊勢の色町のこと、旅の商に行った先で知り合った女のことを話した。（『穢土』六六頁）

つまり、死に掛かった彼は、偶然通りすぎるある男の目には、沙弥、〈被慈利〉、あるいは小僧っ子のような存在であった。沙弥とは、出家して十戒を受けた少年僧というが、日本では、少年に限らず、一般に、出家して未だ正式の僧になっていない男子、あるいは剃髪しても妻子があり、在家の生活をする者とされている。小僧っ子にしても、沙弥にしても、未熟な僧であることは変わらない。そこに、〈被慈利〉を並べている。つまり、中上は最初から、〈被慈利〉という名称に、未熟な、聖と俗の間という意味を付与したのであろう。

一、〈被慈利〉に関する歴史上の実像

〈被慈利〉の発音は〈ひじり〉であるが、〈ひじり〉で『広辞苑』を調べると、次のように解釈されている。「ひじり【聖】、「日知り」の意。①日のように天下の物事を知る人。一説に、日を知る人、天文暦数に長ずる人の意とする。聖人；②天皇；③物事にすぐれた人；④神仙。仙人；⑤清酒の異称；⑥高德の僧；⑦官僧以外、一般の僧の称。また、寺院に所属せず、ひとり修行している隠遁僧の称。上人；⑧高野聖の略；⑨（その姿が高野聖に似ているから）呉服などを背負った行商人」⁴。『広辞苑』には、〈ひじり〉の項目で〈被慈利〉が見当たらないのである。『日本国語大辞典』や『新明解国語辞典』も大体同じ解釈で、〈被慈利〉が見当たらない。〈被慈利〉は、中上健次が作った当て字であろうか。いや、柳田国男は、『毛坊主考』で〈被慈利〉に関し、既に次のように述べている。

被慈利という名であるが、佛道の慈恵利益を被る者という意味で、附会ながら趣意のある宛字である。しこうして通例ヒジリの語に宛てているところの聖の字を、特に避けて用いなかっただ点は、さらにいっそう深い意味があることと思う。記録の証拠はないが、聖の字を避けしめたのは外部からの圧迫かと思う。同じヒジリ坊主の中にも遠慮なくこれを用いている者もある。紀州の高野で有名な高野聖などは、かの山にあっては夙に非事吏と書いていた。⁵

さらに〈ヒジリ〉と〈日知り〉の関係について、柳田は、「日知は日之食国を知看す日神に比した美称なり」とする小山田與清の説を否定して、「日知り」を日を司る巫術祈祷などの職能者から出た者とし、その他にも「優れた人格」に付した名称としつつも、ヒジリノミカドとの関連性をきっぱりと否定した⁶。柳田によれば、古のヒジリ（聖帝や仙衆ではなく、日知り、日を知る人）が、空也や一遍らの念仏を主体とする仏教の一派の影響から念仏をするようになり（阿弥陀聖）、その後念仏の需要の低下から一部のものは零落して漂泊することになり鉢屋やササラ、茶筌などの漂泊民や特殊部落に見られるような階層が生じた。一方、需要を勝ち得た者達は定着して今日見られるような毛坊主になり、さらにその一部が各宗派に取り込まれて正式な寺院となった⁷。以上のような状況の下から名僧としての「聖」が台頭、また各地に散在する身分の低いヒジリ部落が出現、というヒジリの二極化が見えてくる。

柳田の説を検証し、大量の史料を解読した五来重には『増補 高野聖』がある。この著作で、「高野聖もその発祥においては、道心ある隠遁者が多かった」⁸と五来重は認めているながらも、常識的な高野聖のイメージを無残に破壊していた。次のように書かれている。

実際の高野聖は、近世には^{ひじり}非事吏などと書いていやしめられるものであったし、室町時代にも^{やどかりひじり}宿借聖、あるいは夜道怪などとよばれてきられた。『新增犬筑波集』は、

室町小歌に「人のおかた（妻女）とる高野聖」をうたった流行歌があつて、（中略）明治時代まで「高野聖に宿かすな、娘とられて恥かくな」という地口があつたというから、とても道心堅固などといえる代物ではなかつたのである。⁹

その道心ある聖が「俗悪な聖に転じてゆく」契機は、「寺院経済をささえる」ために、「〈勸進〉という職能」が与えられた時である¹⁰。古代寺院は律令国家の保護のもとに、広大な寺領と荘園によって維持されたが、平安中期以後も寺院は、律令体制の崩壊と荘園の変質に直面して、維持が困難になったため、平安中期以後の寺院の伽藍や法会を、勸進によって維持している。五来重によれば、勸進の聖は、「仏教教団の上部構造である学問僧に奉仕する働き蜂のような役割を、日本仏教の歴史のなかではたした」¹¹のである。さらに、寛永五年（一四六四）の高野山の大火のような、教団の上部の争いに伴い、「全国的な勸進に素質のわるい高野聖の流入があつた」¹²という。

〈ヒジリ〉には、高德の僧の聖ほか、納骨の聖・あきない聖・鉾山をほる聖・薬を売る聖・信長に集団殺戮された聖など、様々な様子を呈している。「外部からの圧迫」で、〈ヒジリ〉を「聖」ではなく、〈被慈利〉と当て字されている理由は浮かび上がってきた。〈被慈利〉の「被」と被差別の「被」との意味が共通で、相関関係も暗示しているように、〈被慈利〉は、寺院経済を支え、民衆に根ざした生きた仏教の担い手として、「文学や芸術、芸能の創造と伝承と普及の役割を果たしていた」¹³にもかかわらず、半僧半俗の鉢叩・茶筌という存在として、近世中・後期、「穢多・非人同然の者」という賤視を受け、様々な差別に直面していた。

中上は敢えて〈被慈利〉という忘却された言葉を使い、仏教史の中に隠された一面を広げてみせてくれたのであろう。次の章では、上層の圧搾と紛争に定められている宿命を背負う〈被慈利〉に関しての、中上の再構築したテキストを分析したいと思う。

二、救済する〈観音〉、殺されるべき〈観音〉

本論の「はじめに」に引用した『不死』冒頭の部分に続き、次のように書かれている。

（その被慈利は）そうやってこれまでも先へ先へと歩いて来たのだった。山の上から弥陀がのぞいていれば結局はむしろ草の下の土の中に虫がうごめいているように同じところをぐるぐると八の字になったり六の字になったり廻っているだけの事かも知れぬが、それでもいっこうに構わない。歩く事が俺に似合っている。被慈利はそううそぶきながら、先へ先へと歩いて来たのだった。（『不死』一九五頁、傍線は筆者）

〈被慈利〉は常に超自然・神仏からの視線を感じている。弥陀、つまり、仏様の目には、

〈被慈利〉は虫と同じような存在で、生きる意味の分らない人である。しかし、それだけで解釈してもよいだろうか。その仏は、『穢土』に二回も出ている。一回目は、死にかかった〈被慈利〉が、偶然通り過ぎた男に救われ、男の妻の「その主を恋い狂う気持ちがほしい」という理由で、命の恩人の男を殺し、死体を峠から下に放り投げる場面だ。中上は次のように書いている。

慈悲深い仏も神もこの世にいるなら、むごく殺された男を哀れんで、雨を降らせ、雪を降らせ、その上に木の葉をつもらせ、跡かたなく消してくれる。確かに跡かたなく消えたはずだった。(『穢土』六八～六九頁)

中上は仏も神も、犯罪者を幫助することを示唆しているようだ。国家に組み込まれた宗教としての仏と神は共犯者であると中上は言っているのであろうか。

そして、二回目は、〈被慈利〉が里に降り、その男の女房であった女に嘘をつき、うまく取り繕い、里の女と夫婦の交わりを繰り返し、交わるたびに、里の女に「たいし様あ、しょうにん様あ、教えて下さいませ。ああ、助けて下さいませ」と、「浄土への道」を求められ、最後に里の女を殺してしまった直後の場面である。中上は『穢土』をこう終わらせている。

(前略) ふと顔をあげた。そして、見た。明るい雨でけむったむこうに、山を越えて、弥陀が、いた。彼をみていた。彼はすぐ、眼をそらした。(『穢土』七五頁)

つまり、弥陀が常にいて、弥陀の弘法を布教する〈被慈利〉の犯罪をみているのだ。そこに、阿弥陀如来の脇侍であり、衆生の求めに応じて種々に姿を変える観世音も『穢土』にも、『不死』にも登場している。

『穢土』において、「卑しい」、または「物乞い同然の、村人から疎まれる」〈被慈利〉は、性交毎に、里の女に、弥陀の弘法を布教する〈聖人・上人〉とされていて、「浄土への道」を求められている。最後に、〈被慈利〉は女が「観音菩薩の化身だ」と考え、女の声が、〈被慈利〉自身の声だと想い、女を殺してしまった。そして、『不死』において、山の女と出逢った場面で、次のように書かれている。

一時、物に呆けたように被慈利は立っていたが、女の姿が茂みの中にかくれてから急に女がこの世の者ではなかったと思い、もしそれが生身の女人なら抱きもできよう、観音の化身なら柔らかい赤子の手に触れでもすれば、里にもおれずそうかと言って学問にも向かない被慈利の身の自分が救われもしようと気づき、女の後を追って山の茂みに入った。(『不死』一九八頁)

〈被慈利〉は、この〈観音〉と思われる山の女と性交し、「助けられましょう」と思いながらも、「その女を殺そうと思ったのは確かにそうだった」と述懐する。

上述のように、仏の弘法布教である〈被慈利〉、仏の脇侍である〈観音菩薩〉が、救済だけではなく、〈性的なもの〉や殺人と共に出現したのは何故であろう。

ここでは、まず〈観音〉のテーマから少し離れて、『不死』と泉鏡花の『高野聖』と比較し、水、及び補陀落渡海に隠されたものを引き出し、〈観音〉のメタファーに集約したい。

作品『不死』は要約すると、〈その被慈利〉(『穢土』で里の女を殺した人)が、現実の存在から脱け出す道を求め、熊野山中を放浪し、蛇や蛭といった非日常的な自然の試練に出会ってから、山の中で異界の女と出会い、性交を繰り返す、山の女を殺そうともするという話である。非日常〈異界〉、蛇や蛭などから構成した奇遇説話の典型的パターンを踏襲している『不死』は、容易に泉鏡花の『高野聖』を想起させる。

『高野聖』には多重多層の語り(登場人物が物語を語る)があるが、主なものは、宗朝という修行僧が、飛驒で難儀な蛇と山蛭の山路を抜け、妖艶な美女に滝のある川で傷ついて汚れた体を洗い流して癒してもらった物語と、その妖力ある女が肉体関係を持った男たちを、息を吹きかけ獣の姿に変えるという物語である。『高野聖』の旅僧は、高野山に籍を置き、「後で聞くと宗門名誉の説教師で六明寺の大和尚であったそう」とされる厳格な修行僧というふうに描かれていて、女主人の妖艶さに魅かれているが、命からがら脱け出たわけである。いわば、高野聖の道心堅固なイメージが浮び上がっている。それに対して、中上の〈被慈利〉は、泉鏡花の高野聖と正反対に、「たとえ本山の高い位を約束された学問僧でも山中で女に会うなら戒を破ってしまうはずだ」とつぶやき、「自分が欲しくない獣そのものだ」と自認したように、何度も山の中の女と契りを結んだ。いわば、絶望的な心情と欲望だけで動く俗物のように描かれている。

フェイ・ユアン・クリーマン(Faye Yuan Kleeman)は、「中上健次——『不死』の葛藤」¹⁴という論文において、『不死』における「ジャアラジャアラ」という音、または「血」のメタファーを詳しく検証して、『高野聖』と『不死』を比較しながら論じている。クリーマンによれば、「中世説話集および説経節から示唆」を受けているにもかかわらず、「先行するテクストに対する顛覆を図ろう」として、「超自然の世界を扱うにはさまざまな規約がある」伝統的物語を、「すべての規約を無視せんとして挑戦している」という。つまり、泉鏡花の入れ子型の構造の物語(客観的目撃者)と違って、中上の「被慈利は〈異界〉に溶け込み、同一化するという、奇遇説のもっとも基本的な約束を犯す」¹⁵のである。クリーマンのこの指摘は、鋭いものである。ここでは、〈水〉に関するメタファーを考察したいと思う。

中上はかつて『泉鏡花・人と作品』¹⁶における解説で、次のように評論している。

「高野聖」で旅僧が今、目にしているのは、(中略)乳と血の女性ではなく、水としての女性、泉としての女性である。つまり旅僧は、何の見返りも期待せず子を一方

的に受容し、子に一方的に供与する女性ではなく、与える事の反対に奪う事もあり、蘇生させる事と死滅させる事が並列する水である女性に向かいあっているのである。その水の力とは、霊異、怪異の事以外にありえない。

確かに水には、蘇生と死滅との両義性がある。小説『高野聖』では、「洪水で生残ったのは、不思議にも娘と小児とそれにその時村から供をしたこの親仁ばかり。おなじ水で医者の内も死絶えた」というように、水には、世界を滅ぼす力があると規定されている。また、同じ水には、次のように書かれて、不死の霊力もあるとされている。

天狗道にも三熱の苦惱、髪が乱れ、色が蒼ざめ、胸が痩せて手足が細れば、谷川を浴びると旧の通り、それこそ水が垂るばかり、招けば活きた魚も来る、睨めば美しい木の実も落つる、袖を翳せば雨も降るなり、眉を開けば風も吹くぞよ。¹⁷

いわば、水は幻の女の一家を死滅させたにもかかわらず、「殊にその洪水以来、山を穿ったこの流は天道様がお授けの」水に変わり、それを浴びると、女は若返るのである¹⁸。ようするに、『高野聖』における水とは、女によって旅人を蘇生又は死滅させる装置でありながらも、旅人を誘惑し旅人の運命を握る女そのものを、蘇生又は死滅させるものでもある。いわば、水は超越的、両義的な存在だとしている。

水としての滝にも、両義性がある。『高野聖』で旅僧が女に、「滝のところに人がいる」と教えられる場面がある。そういうところからみると、『高野聖』は、滝を聖だけではなく、俗の世界とも規定している。一方『不死』で、滝の近くに殿様の邸（異形の者の集まり）がある。つまり、中上は滝を異界の世界と規定しているのだ。

『不死』の舞台の熊野には、思わぬ山道に一筋の白布を垂らしたような美しい小滝も多くあれば、那智の滝のような雄大な滝もある。中上はその滝が那智の滝だと明らかに書いてはいないものの、容易に那智の滝を想起させる。

那智の滝は、補陀落浄土（入水、または補陀落渡海）という歴大な歴史的背景に繋がっている。補陀落、及び補陀落渡海については、根井浄の『補陀落渡海史』に詳しく書いてある。根井浄によれば、「常緑の木々や光明と芳香を放つ花々に包まれた世界であり、そこはまた金剛石を敷き詰めた中に観音菩薩がいます浄土」である補陀落が、「海の南の向こうにある」と信じきった人々は、「小舟をしたてて大海に身をあずけ」、「補陀落浄土を目指」して往生する¹⁹。その自殺行為は、補陀落渡海という。この宗教現象の背景や実像を引用しておこう。

補陀落渡海は日本特有の宗教現象であり、日本人の「この国」からの脱出であり、「この国」からの亡命であった。どう考えても一種の宗教的自殺に等しく、自死であった。その意味においても補陀落渡海は、日本社会にみられた常識を超えた狂躁的な宗教現象であったといわざるを得ない。（中略）帆を揚げた小さい屋形舟の部屋は、

周囲を釘で打ち付けた脱出不可能な空間であり、日輪・月輪の微小の光さえ遮断された暗闇の箱であった。(中略) このようにして、現身を船形の棺に納め、大海原に飛び出す補陀落渡海は、観音にたいする実践的な信仰表出であった。²⁰

『不死』の主人公〈被慈利〉は、小説の冒頭で書いているように、一筋「先へ先へと歩いてきた」。それは、「おそらく無意識のうちに、そうした現実の存在から脱け出す道を求めて、熊野山中を放浪する」²¹であるとクリーマンⁿは指摘している。しかし、補陀落渡海のような脱出は、自殺そのものである。そのどころか、三橋健の論文「イエズス会宣教師のみた補陀落渡海」によれば、宣教師の目で見られた中世の「補陀落渡海」は、悪魔へ生贅を捧げる儀式であり、「観音」という悪魔の蠱惑で、「むりやり人を自殺させた行為であるほかはならない」²²。

『不死』における〈観音〉は、救済を仰ぐ対象でありながら、殺される対象でもある。それは、宣教師の視点による〈観音〉のイメージであろうか。根井は補陀落渡海が「九世紀から出現し始め、その精神は十八世紀までも、いや明治の近代社会までも継承され、その記録は、文献に、遺物に、あるいは伝承として語り継がれている」²³と論じる。筆者は、この補陀落渡海の影響は明治の近代社会までではなく、第二次世界大戦の時まで続いていたと考えている。戦時中の日本では、直ぐ成仏し、軍神になれるというのが作り出され、神風特別攻撃隊の隊員をはじめとする普通の日本人を、無理やりに自殺させているのである。「天皇」は、中世の「補陀落渡海」時代の〈観音〉であるに他ならない。つまり、補陀落渡海は、「神風特別攻撃隊」に変身したのではないだろうか。

〈観音〉、あるいは、「天皇」により、補陀落渡海にせよ、神風特別攻撃隊にせよ、多くの人は「悪魔の蠱惑」で、死んでもよいと思いついでいるはずである。ここで、主人公〈被慈利〉が思っている〈死んでもよい〉と、保田与重郎の評している〈死んでもよい〉とを比較してみたいと思う。

『穢土』では、ひとすじ山を歩き、雨に出会い、熱が出てしまい、道の脇に寝ていた〈被慈利〉が次のように書かれている。

人生はわずか五十年、花ももみじもひとさかり、と念仏の言葉にある人の生命の半分を、すこし超えたばかりだが、草と石を枕に、このまま、雨あがりの明るい空にみとられながら、生命が果ても悔いはなかった。いや、それこそ、彼にはふさわしく思えた。(『穢土』六六頁、傍線は筆者)

〈被慈利〉の思っている「このまま」、つまり、ただの熱で死んでも悔いがないとは、自暴自棄そのものにほかならない。自暴自棄の裏には絶望が隠れている。〈被慈利〉は何故絶望なのか、何故山の中を放浪するのか、クリーマンの言葉を借りれば、「人間社会、里の被差別民である〈被慈利〉は、おそらく無意識のうちに、そうした現実の存在から脱け出す道

を求めて、熊野山中を放浪する」²⁴。放浪しても、脱け出す道がなく、ゆえに絶望するのであらう。一方、保田与重郎は、岡倉天心作、日本美術院歌²⁵の結句のくりかえしの部分、「死んでもよい」を、次のように解説している。

〈死んでもよい〉というのは、まことの〈歌〉からうける究極の感動である。(中略)〈死んでもよい〉は春光の四辺、さながら天地の始めに居ると思わせ、わが魂が天地に充満したような、生そのものの状態である。生の原始状態の自覚である。²⁶

その上、保田はさらに次のように評している。

私の往年の文章は多くの若者を死なしたのであろうか。それは私が死なせたのではなく、本当の〈日本文学〉が死んでもよいという永遠の、生命の、天地開闢に、彼らの心を開いたのである。それは大東亜の開闢のころである。²⁷

公職追放されて復権したばかりの保田のこの評論は、依然として大東亜戦争を正当化する。〈大東亜の開闢〉の心の〈死んでもよい〉は、〈永遠の生〉だと賞賛している。

しかし、中上は、〈被慈利〉の〈死んでもよい〉を、絶望と規定している。〈被慈利〉は圧搾と紛争に定められている宿命を背負う存在であるということ、また、〈観音〉は人を自殺させる一面を持つということ、中上は小説のなかに織り込んでいるのである。

〈観音〉の蠱惑は強いものである。たとえ、〈観音〉は自分自身が「悪魔」であると宣言しても、依然して〈観音〉は〈観音〉であると人々は信じ込む。事実として、天皇の人間宣言を聞いた直後、「てんのうさま」と叫びながら切腹した人がいる。

『穢土』で、〈被慈利〉が宣言、告白する場面がある。「しょうにん様あ」と繰り返して呼ぶ里の女に、〈被慈利〉は急に、「疎しくも感じ」、里の女の夫であった男を殺した経緯を「洗いざらいぶちまけてやりたく」なり、里の女に罪を告白した。にもかかわらず、性交しながら、聖人様と呼ばれ、「浄土への道を教えてください」と言い付けられる。その場面は次のように書かれてある。

「首を締めたよ、この手で」

「しょうにん様あ」女は、言った。

「聖人じゃない、人殺しの被慈利じゃ。愛しい主を、何の関わりもないのに殺したおれが憎くないのか？」

「しょうにん様あ」女はつぶやいた。

「憎くはないかのか？おまえと一緒に交わりを繰り返しているのは、おまえの愛しい主を殺した畜生のようなこの被慈利じゃぞ」

「しょうにん様あ、たいし様あ」と女はただつぶやいた。

(『穢土』七三頁)

犯罪の告白は、繰り返されてきた女の台詞によって意味を失い、宙吊りにされてしまう。里の女にとって、〈被慈利〉は聖人である。里の女にとって、〈被慈利〉の蠱惑はつよい、それは〈性的なもの〉の蠱惑でもある。

『不死』において、中上は、〈被慈利〉と〈観音〉を脱構築しているだけではなく、〈性的なもの〉に関しても、権力の構造を暴露している。次の章では、〈性的なもの〉について考察し、〈被慈利〉と女に関する〈性〉的な隠喩を論じる。

三、〈性的なもの〉について

大江健三郎は、「現代文学と性」というエッセイで、〈性〉を扱う文学を、「暗喩的に性を表現する」類と、「直接的な言葉で性を描いていく」類と分けている。前者は擬古典的な「エロティシズムの文学」であり、後者は「過去よりも未来からの呼び声に、範をとらざるを得ない」²⁸という。つまり、大江は、未来からの批判的な視線を据え、現実の変革に対して積極的な態度を取っている。「現代日本は、性的人間の国家と化し、強大な牡アメリカの従属者として屈服し安逸を享楽している」²⁹のように、大江が描く〈性的なもの〉は、社会的状況の隠喩でしかない。

中上は、大江の〈性〉描写と同様に、〈性〉を率直に描き、『不死』において、次のように直接的な言葉で表現している。

女は被慈利が唇で触れるのを拒みもせず、ひざまずいた被慈利に脚を広げ、その赤子のままの手で被慈利の背中を撫ぜた。被慈利はその赤子のままの手の指の一本一本を口に含み吸った。女は腰を上げて被慈利の猛ったものを迎えようとし、唇に唇を重ね、被慈利はそうやる事が羽衣の天女をここにつなぎとめる事だと言うように、火陰にずぶずぶと入った。(『不死』二〇三頁)

率直な〈性〉描写は、『穢土』にも繰り返されている。

火をつけた。女は這いつくばり、彼の足指を口にふくんでいた。(中略)女を持上げるようにして、寝返り、女の上になった。乳房を、両手で、ぎゅっつつかんだ。女は呻いた。(『穢土』七〇～七一頁)

既に前章で分析してきたように、『穢土』での女は、里の女であり、〈被慈利〉を〈聖人〉と呼ぶ。一方、『不死』での女は、山の女であり、他界・異界の女で、正体不明だが、〈被慈利〉にとって、〈観音〉である。〈被慈利〉は俗と聖との両面性を持つ。右の引用が示したよ

うに、聖としての〈被慈利〉は俗の里の女と性交し、里の女に足指を吸われる。そして、俗の〈被慈利〉は、聖の山の女と性交し、山の女の手指を吸う。つまり、聖は、享樂の主導権を握り、常に俗にサービスを要求するのである。

それは、〈性〉を描くことではなく、〈性〉を隠喩として政治状況を描いているに間違いが無い。ここでの政治状況とは二つの意味が含まれていると思う。一つは、権力構造の暴露であり、もう一つは権力構造の再構築である。前者では、権力(特に蠱惑より得た権力)で、手指や足指まで吸わせるような異様なことを、〈性現象〉を通じて見せる。後者では、里の女、つまり、生産的なものとされ、〈性〉的欲望を抑圧された者が「呻いた」のである。いわば、〈性〉的な享樂より、国家に編成された経済的な〈性〉から脱構築する。

小森陽一が、かつてこう鋭く指摘している。「〈政治〉が〈性治〉であるところの天皇制の〈正史〉が、隠し続けている領域を暴露しようとして、小説を書いていた、と痛切に感じていたのが中上健次だった」³⁰。確かに、中上文学における〈性〉を、権力を生む〈性〉として、「政治=性治」として把握する論が多い。それは、中上文学の〈性〉を理解する非常に重要な鍵であると思う。『日輪の翼』のように、被差別民が日本中の聖地を巡り、神々(巫女など)とセックスし、権力者が権力を獲得した原点、またはその権力の再生産を、〈性〉と欲望の操作と管理によって諸国を支配した「政治=性治」を暴露しているのもそのような構造である。ただ、中上文学における、すべての〈性現象〉を、そういうパターンに分類できるとは思わない。精神的あるいは肉体的近親相姦(『枯木灘』)から、淫行・姦通(『千年の愉樂』など)、男色・ソドミー(『賛歌』など)、未成年者誘拐(『異族』)まで、さまざまに異質な快樂を求めるようなセックスが描写されている。それは、近代国家における権力構造の天皇制を覆す〈性現象〉ではないかと思う。フーコーの言葉を借りれば、「抑圧が権力と知と〈性現象〉との間の結びつきの根底的なあり方」³¹で、「ただ性について語ること、性の抑圧について語ることで、それがラディカルな侵犯行為の様相を帯びることに」なり、「法を揺がし、多少とも未来の自由の先取りをする」のである³²。フーコーの文脈では、〈性現象〉は、政治・経済的の制度の中で編成されている。国家・家庭という系列の中にまで、〈性〉は生産的なものとし、〈性〉的欲望を抑圧を強いるものなのである。フーコーの指摘は鋭いと思う。近代国家のそういう抑圧のなかで、〈性現象〉を恋愛というものに昇華させる近代小説とは違い、中上における「路地」の〈性現象〉は、地域共同体に共有され、普通の倫理に拘らず簡単に実行できる天然的なものである。つまり、「路地」の〈性〉は、近代国家や経済システムに編成される以前の〈性〉であり、子供生産事業ではなく、享樂の〈性〉であると言えよう。

「路地」の解体と再開発により、近代国家と経済的な諸関係に再編成されつつも、被差別境遇は簡単に改善したわけでもない。個人は伝統的身分と近代経済と両方の圧力によって自分を抑圧し「部分」として機能せざるをえない。「先へ先へと」歩く〈被慈利〉は、「無意識のうちに、そうした現実の存在から脱け出す道を求めて、熊野山中を放浪する」のである。この場合、中上の強調した官能的、享樂の〈性〉とは、個人が崩壊するところに「本然」を

保全し自己回復できる場所である。

いわば、「性に関わる禁止命令は、根本的に法律的性質のものだった。その禁止の支えとされることもあった〈自然〉とは、なお一種の法律」³³なので、経済的に有用であり、政治的に保守的な〈性〉行動を整備する遍在する権力、或いは「自然」に対し、〈観音〉と幻想された相手との異様な〈性〉を語ることによって、中上は、未来の自由を先取り、「抑圧を許す自然」を破ろうとしているのではないかと思う。

結論

以上、『不死』を〈被慈利〉、〈観音〉、〈性的なもの〉という三つのキーワードに焦点を当てて分析してきた。〈被慈利〉は、歴史喚起の発動装置として、高德の僧の聖ではなく、賤視を受け、様々な差別に直面していた下層の〈ひじり〉を語り、その人たちの現実の抑圧により、救済への渴望と加害の行為を繰り返す。さらに、〈被慈利〉は聖と俗の中間項として、〈性的なもの〉を通じて権力を脱構築する。

そして、〈観音〉という言葉は、補陀落渡海という隠蔽された部分を喚起し、裏に生への渴望を引き出しながらも、無意味な死を再確認し、廃仏毀釈から神風特別攻撃隊まで、〈死んでもよい〉という観念を作り出した天皇制の〈正史〉に疑問を出す。

さらに、〈性的なもの〉というのは、現代社会の政治や経済に再編成され、封建制と現代性の二重重荷を背負った「路地」の人の、反抗する捌け口となる。それは、理論として、〈性的なもの〉を未来的な視点から見据えている。

ようするに、中上は、『不死』において、歴史、現在、未来の三つの視点から、隠蔽したことを暴露させ、不合理な根深い文化としての天皇制を破壊しようと考えているのであろう。歴史を忘れず、歴史を正視する。その上で差別なしに公平、理想の未来を目指して現在を批評する。そういう意味で、主人公〈被慈利〉は中上健次と共に「不死」になる。

注

- 1 浅野麗『喪の領域：中上健次・作品研究』翰林書房、二〇一四年、一四八頁。
- 2 井口時男『危機と闘争 大江健三郎と中上健次』作品社、二〇〇四年、八九頁。
- 3 浅田彰「中上健次を再導入」(『群像 日本の作家 中上健次』、小学館、一九九六年、二八頁)
- 4 新村出編『広辞苑 第五版』岩波書店、一九九八年、二二四〇頁。
- 5 柳田国男「毛坊主考」(『定本柳田国男集 第九巻』、筑摩書房、一九六二年、三六二～三六三頁)。
- 6 注5と同じ。三六六頁。
- 7 注5と同じ。三六五～三六六頁。
- 8 五来重『増補 高野聖』角川書店、一九七五年、二五頁。
- 9 注8と同じ。二四～二五頁。
- 10 注8と同じ。二五頁。

-
- 11 注8と同じ。二五頁。
- 12 注8と同じ。二五六頁。
- 13 注8と同じ。二八六頁。
- 14 Faye Yuan Kleeman 著、垂水千恵訳「中上健次——『不死』の葛藤」(『新潮』新潮社、一九九〇年一月、二五八頁)。
- 15 注14と同じ。二五九頁。
- 16 中上健次「泉鏡花・人と作品」(『中上健次エッセイ撰集(文学・芸能篇)』恒文社、二〇〇二年、一〇〇頁)。
- 17 泉鏡花『高野聖』角川書店、一九七一年、一七八頁。
- 18 根井浄『改訂 補陀落渡海史』法蔵館、二〇〇八年、三頁。
- 19 注18と同じ。
- 20 注18と同じ。三～四頁。
- 21 注16と同じ。二六〇頁。
- 22 三橋健「イエズス会宣教師のみた補陀落渡海」(『季刊 日本思想史』ベリかん社、一九七七年十月、七〇～九一頁)。
- 23 注19と同じ。三～四頁。
- 24 注16と同じ。二六〇頁。
- 25 院歌は「谷中うぐいす初音の血に染む紅梅花 堂々男子は死んでもよい。奇骨侠骨開落榮枯は何のその 堂々男子は死んでもよい」である。
- 26 保田与重郎「日本の歌」(『現代日本思想大系 10 反近代の思想』月報 21、筑摩書房、一九六五年、二頁)。
- 27 注26と同じ。三頁。
- 28 大江健三郎「現代文学と性」(『大江健三郎 同時代論集 1』岩波書店、一九八〇年、一五九～一六〇頁)。
- 29 大江健三郎『われわれの性の世界』(『大江健三郎 同時代論集 1』岩波書店、一九八〇年、一四七～一四八頁)。
- 30 小森陽一「「国体」論と「歴史小説」」(『岩波講座 文学 9』岩波書店、二〇〇二年、二二七頁)。
- 31 ミシェル・フーコー著、渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』新潮社、一九八六年、一二頁。
- 32 注31と同じ。一四～一五頁。
- 33 注31と同じ。四九頁。

第四章 「火まつり」論：差別の起源

はじめに

東日本大震災に伴い発生した福島第一原子力発電所事故により、多くの人々が避難生活を強いられ、福島県民への差別や排除も跡を絶たない。谷川雅彦は評論「福島第一原発事故から六年—福島差別は許されない」で、次のように述べている。

原発事故直後から放射能に対する恐怖と無知からくる「不安」が、差別や排除となってあらわれはじめた。福島県から千葉県に転入した児童の左右が空席にされたり、群馬県へ避難した児童が、「福島県から来た」と避けられ不登校になったり、避難先の公園で地元の子どもから「放射能がうつる」といじめられるといった問題があいついだ。¹

実際のところ、差別や排除は子どもだけではなく大人に対しても表れ、福島の「トラックでの運送を断られ」たり、「結婚相談所では福島出身であることを理由に見合いを断られ」たりする。つまり、福島差別は、新たに「作り出された」のである。谷川の指摘している差別は、現在もなお存在している。しかし、それは所詮表面的な差別であり、「作り出された」福島差別は、もっと深刻な問題に直面しているようである。東大震災後、放射能汚染と向き合う被害者の取材を続け、『ルポ 母子避難——消され行く原発事故被害者』の作者である吉田千亜は、エッセー『『消される』という差別』²で、次のように言っている。「差別は、あるレッテルを貼って、その人たちを自分たちから区別するのが一般的」であるが、「原発事故の被害者」はむしろ「消されていく」現状がある。吉田によれば、放射性物質は見えないので、「被害は消しやすく、政策も「責任を持」たない。つまり、被害が隠蔽され、「消される」という差別である。

原子力発電所を建設するという話は、中上健次の小説『火まつり』の中にも登場している。小説『火まつり』は、映画『火まつり』³が公開された直後に、それを小説化したものである。映画『火まつり』も、小説『火まつり』も、その主な舞台は熊野二木島（現在三重県）という閉鎖的な村とされているが、「火まつり」の原型は、和歌山県新宮市の西方に聳える山の百メートル近い断崖にある神倉神社で行う「御燈祭り」である。

この「御燈祭り」について、アメリカの文化人類学者ヴィクター・ターナー（一九二〇年～一九八三）は、かつて論文「新宮・神倉神社における御燈祭り」で、松明を持つ「若者たちの炸裂するような門の突破は、火之迦具土神の誕生を表象している」⁴と鋭く指摘している。新宮の「御燈祭り」は「火之迦具土神の誕生を表象している」ものであれば、「火之迦具土神を生んだために、女陰を焼いて死亡した」⁵とされている伊邪那美命は、この「御燈祭り」の鎮魂の対象だと思う。考えて見れば、同様に火を人間に与えたにもかかわらず、日

本の神話における伊邪那美命とギリシア神話におけるプロメテウスとは、いかにも結果が違ふ。プロメテウスの場合、「天上の火を人間に与えてゼウスの怒りを買ひ、コーカサス山に鎖でつながれ、大驚にその肝臓を食われた」とは言え、最後にやはり「ヘラクレスに助けられた」⁶のである。プロメテウスは救済されたのに対し、伊邪那美命は永遠に根の国に落ちている。如何にも伊邪那美命が悪い扱いを受けているようにしか考えられないであろう。

火は、光であると同時に、熱でありエネルギーでもある。エネルギーを生産し、また差別をも新たに創出した「原発」と、「火まつり」は繋がっているのではないかと思う。

今までの『火まつり』に関する評論と研究は、主に女主人公キミコや男主人公達男の造型に重点を置いていた。「中上が愛読した上田秋成『雨月物語』（「蛇性の姪」）の真女子にその祖型がある」⁷とか「基視子は卑弥呼に近い」⁸などと指摘され、「暴力的に突き抜けた男を中心とした物語」⁹だと解説されている。そうした先行研究に対し、本論では主人公の行動を分析すると共に「火」そのものについての考察に重点を置きたい。

一、『火まつり』の粗筋

小説『火まつり』は、一九八五年七月、十月、十一月、そして一九八六年一月、二月の『文学界』に断続的に連載され、単行本『火まつり』（文藝春秋、一九八七年）として刊行されたものである。萩野アンナの指摘のように、この小説は「以前の熊野物と比べ、自然描写の密度が濃くなったのに比例して筋立てや作中の人間関係は簡略化」¹⁰されている。『火まつり』の粗筋は、次のようである。

達男はかつて栄華を誇った池田家の跡取り息子だが、若い頃から村一番のワルとして知られていた。良太は二十歳も年上の達男に対する畏怖と反発を抱きながらもあとに従って、達男らの山仕事の仲間に加わった。これは、「毒を毒でおさえる」と二木島の港の女たちはそう噂しあつた。達男は自分の地所に原子力発電所の建設を狙っているという噂もある。そんなある日、醜聞で二木島を去ったキミコがひょっこり舞い戻ってきた。以前、達男の女であつたキミコは、姉夫婦の経営するスナックで働きはじめる。達男は交尾中の猿を殺し、その肉を神饌の奪い合いのように食ひ、キミコを歓迎する。キミコが来てからしばらくして、大事件が突発した。湾に作られたイケスに重油がまかれ、養殖していたハマチが全滅したのである。口さがない連中は達男とキミコの二人が犯人だと言ひ出した。そんな噂にも達男は超然と構えていたが、実は良太の犯行であることを知っていた。良太は「猿のように達男を狩ってやる」ため行動したいが、ことごとく達男に看破され、相手にされなかつた。池田家は二木島の裏山を所有しており、それを管理しているのが達男であつた。達男は山を売ることが渋っていたが、六人の姉や姉婿らの要求で、いよいよ材木商の番頭を呼ぶ。山で木を切り出したあと、番頭から誘われ達男と良太は新宮のスナック街に繰り出した。良太は新宮で偶然、放火の現場と出くわし、二木島に戻って青年会館に火をつける。二木島の者は皆、放火犯が達男であるに違ひないと噂したが、達男は一言も弁解せず、甘んじて噂をうけるよう

に山仕事をする。達男の家は、海の禁区内に船を浮かせて鳥居を仰いでみると、鳥居に守られた神殿のように見える。池田の家は二木島の神社の神主のような役目であるが、達男は、或る日、漁師の若衆を引き込んで禁区内で魚を突く。魚を突いて血が流れ、二木島の祭りを形無しにすることで、達男の漁業権は剥奪された。漁協に海に一切入らないと誓った達男はその後、海でキミコと性交する。良太はキミコを脅し、二木島を出させ、達男は良太を使ってイケスに重油を撒いた。二木島の者らは、二度目の重油事件の犯人と目された達男を、新宮の火まつりにおいて祭りの昂ぶりに乗じて袋叩きにしようとするが、達男は「火を突き出された凶暴な獣」になり、二木島に戻り猟銃で一家心中する。

二、達男は「王＝神」である

脚本「火まつり」が角川書店から刊行されたとき、新宮市でのお燈まつりに取材した座談会とともに、『火の文学』の巻末に収録されたものに中上の自作解説の「ノート」がある。この示唆に富む「ノート」に、次のようなことが書かれている。

達男は、山で何を感じとめているのだろう。サル↔人、という関係で言うなら、人↔神か？そうであるが、違う。というのも、サルと人に介在した物、道具のような差異が、人↔神の間に存在しない。

おそらくフィルム版「火まつり」を観た百人中百人まで、サル↔人、人↔神という図式を観て、神秘的な神を達男が感じている、と名差すだろう。しかしシナリオ「火まつり」では、決して抽象的で実体のないものを神と名差していない。サル↔人、人↔x。その空白のxに入るものは、具体的でなおかつ抽象的なもの、実体があつてなおかつ実体のないもの、という媒介物を通したものでなければならない。¹¹

いささか難解であるが、林淑美は論文「『火まつり』：映画とシナリオと小説と」で、上述の中上の言葉を、「キリスト教にみられるような超越を属性とする絶対神をフィルムにみて異議を立てている」¹²として捉えている。言い換えれば、映画ではクレーンを使っての撮影で暗示するように、超越的神によって達男が見られ語れている。サルと人間の介在した「道具のような差異が、人間↔神の間に存在しない」と中上が言っているが、これは、林淑美の言葉を借りれば、「人と神との間に差異がないとは言っていないが、あるともいえないと言っているのである」¹³。

しかし、中上の言う「空白のxに入るもの」、「具体的でなおかつ抽象的なもの、実体があつてなおかつ実体のないもの」、「媒介物を通したもの」とは一体どのようなものであろう。この問題を解決するには、達男が如何にして描写されているのかということに関わっているので、まず、主人公達男について考察する。

達男は交尾中のサルを含め、雄雌五匹のサルを射ち殺し、そして、サルの肉を食う場面は

次のように書かれている。

達男が言い、しょうゆも砂糖も使わず、さらに火さえ通さず生肉のままでも食べてみたと言い出して、達男ら集会場に集まった者らはイノシシやカモシカの肉の替りに食ったのではなく、人間とよく似て知恵のある猿だから食ったと知れたのだった。薄く切った生肉はそのままでは渋みが口の中に広がった。その渋みは猿がいつの間にか身につけていた知恵のような味だと、達男は二木島の者なら誰もが目撃している賢い猿の知恵を食ったように言った。(『全集 8』二五四頁)

「生肉のまま」でサルを食べた達男たちの行為に対し、「二木島の村の男らも女らも、漁をする者らも、山仕事や石切り人夫に出かける者らも一様に驚き、身震いした」。達男は、二木島で、「神でもないのに禁区内で釣あげたカケノイオを食」い、「青年会に君臨し続け」、さらに、「二木島の女という女、残らず布団の中にもぐり込んで組みしき、男という男、すべて自分の手下のように振る舞」う。このような達男は、「二木島の王国の主のように娘であろうと人の女房であろうと一度は必ず手をつけ若衆の上に君臨する」(『全集 8』二七二頁)。このように、達男は大きな男、そして女にもてる「王」、しかも悪をする「王」として描き出されている。

実際に、単行本『火まつり』(文藝春秋、一九八七年)のカバーの帯に、次のような言葉が正面と裏面に書かれている。

(正面) 靈氣に包まれた土地で神仏と生死をともにする人々／そこに君臨した王國が滅びてゆく——／運命を甘受し奈落を下るとき／王者は「悪」の化身となった／現代日本文学の若きリーダーが新境地を拓く長編小説

(裏面) 「悪」が聖化されるとき／待望の長編小説¹⁴ (傍点は筆者)

このカバーの帯に記載された短いコメントは、達男のプロパティを見事に纏めていると思う。「神仏と生死をともにする人々」とは、勿論、上野千鶴子の指摘のように、「近代化」の波の中の現象として、近代化の潮流に乗り遅れた人々の迷信(水の信心、あるいはゲルマニウム鉱石の粉末をとかした水を飲む信心など)とも解釈できるが¹⁵、達男が「神仏に祈って授けられた男の子」(『全集 8』二八七頁)であると規定されているように、初めから達男は「靈氣に包まれ」、達男こそが「神仏と生死をともにする」一人だと思う。

「神仏に祈って授けられた男の子」と規定されている達男は、テキストで偶々、神のように描写されている。次はキミコの台詞であり、達男と情交した直後の話である。

達ちゃん、いまでも綺麗やからね。光り輝いとるから。達ちゃん、うちの神様やから。その子もキラキラしとるけど、達ちゃんにかなわん。神様なんよ。穢れがないんよ。

女は穢ないから。月のものあって穢れるし、男の人にいじくり廻されて穢れるし。男の人、きたなかったらすぐ具合悪なって病気になるし。さっき何遍もイたの知ってる？ 汚ないうちの体の中で穢れ一つ知らん神さんが見つめてあえいで身すり寄せとるとして優しいにしとって、イてしもた。何回イたか分かる。さっきだけで十回ぐらいイッとする。ワーと分からんようになる。穢れとるから。(『全集 8』)

キミコの口を借りて、達男は「神」であることを言い出している。しかも、この神は「穢れとる」のである。達男の住む家も、神域に建てられているようにみえる。

達男の家から海が見え、その海に突き出すように岩場があり、朱のはげ落ちかかった鳥居が見える。達男の家から見える鳥居の丁度真中が二木島の祭りの時に神に奉納するカケノイオを獲る禁区だった。その禁区に舟を浮かせ鳥居をあおぎみると、達男の家が鳥居に守られた神殿のように見える。(『全集 8』 二九七頁)

「穢れ」をとる達男は破壊の力も持つ。達男は良太を喰して達男の用意した重油を、二木島の湾の半分を使って作られたイクスにまき、中で養殖していたハマチのほとんどが白い腹を見せ、油の黒い膜に浮いて死んでしまう。何よりも、達男が新宮の「火まつり」を参加して「火を突き出された凶暴な獣」(『全集 8』 三三四頁)になり、猟銃で一家心中したということが象徴したように、破壊力は死を招く。

このように、穢れていると同時に破壊力をもつ神は「火の神」ほかないであろう。

すでに上記で論じてきたように、達男は、サルを食べたり、女を犯したり、禁忌を破ったりするように、二木島に君臨する「王国の主」であり、悪の「王」である。そして、破壊力を持ち、穢れをも取る「火の神」でもある。

言ってみれば、中上の言う「具体的でなおかつ抽象的なもの」、そして、「実体があつてなおかつ実体のないもの」である「人↔x」の空白のxとは、「王=神」ではないであろうか。

「王」は、人間であり、具体的な「悪」であり、実体でもあるものに対し、「神」は抽象的である。「王=神」という「媒介物」を通して、「キリスト教にみられるような超越を属性とする絶対神」ではなく、日本固有の「火の神」の軻遇突智神によって「人↔神」の通路を通じて、小説『火まつり』の構造が明らかにされる。以下、「王=神」という「媒介物」、あるいは通路を通じて、日本における「王殺し」の不可能性や、新宮の「お燈祭り」の鎮魂性について考察する。

三、日本における「王殺し」の不可能性について

作品の中の、「達男が、二十歳の時、良太の母親と姦って孕めば、良太が生れる」(『全集 8』 二四九頁)との一文が、達男と良太は父と子の関係であることを暗示している。達男と

自分の母親と肉体関係があったと信じている良太は、自分より悪い達男をサルのように狩りたがる。そのような心理的な活動が、何度も書かれているが、ひとつの例を挙げよう。

良太が達男に従って山仕事に入ってから、昼も夜も可能な限り注視しつづけて来た大きな体をした荒くれの生身の本当を知りたい。海中深く潜り突く伊勢海老のようにヤスで達男を仕止めてみたかったし、猿を狩ったように達男を仕止めてみたかった。夜の闇に乗じて良太は何度も達男がキミコを呼び出して鬨るのを目撃したが、闇に浮き出た白い裸体が達男とキミコの生身ではなく狩って思いのまま操れる猿の雄雌か、子供の頃、夏休みあけに学校に提出したホルマリン注射を射ってピンで留めた標本の昆虫であって欲しかった。達男の腰が動き、手が動く度にキミコは声をあげ、良太は固唾を飲みながら、二人が裸の人間ではなく、重油一缶であっけなく息をつまらせ水面に白い腹を見せて浮きあがったイケスのハマチのような気がした。(『全集 8』二八九頁)

少年の良太は、立木の弾力を利用して多くのワナを作り、達男を狩ろうとする。このことについて、中上健次は、次のように「ノート」で自作解釈している。

ワナは次々と仕掛けられる。ワナはサルに向けられ、されに人に向けられる。人に向って仕掛けたワナは、山本の兄さん、さらに基視子へと移り、達男に向けられる。ワナ、聖供を獲る場所。良太は、聖供として達男を追い込む。¹⁶ (傍点は筆者)

自分である良太は、聖供として親分である達男を狩る。井口時男の指摘したように、「<父>なる達男に対しては、新世代のワルである良太が<子>の役割を果たす」¹⁷。これはいうまでもないが、「父殺し」である。達男は二木島の「王」であるため、「王殺し」の話になる。達男たちがサルを食べた直後の二木島には、昔の祭りで「神さんの替わりになる稚児」を「切り刻みその肉を奪い合いして」食うとの話が流され、「神さんを殺して食う」(『全集 8』二五六頁)との話もされている。人類学でいう「神殺し」や「王殺し」の慣行、つまり、気力、体力の衰えた「王」を排除して新しい王を誕生させようという論理が想起させる。英国の民俗学者のJ・G・フレーザーは、その主著『金枝篇』¹⁸でのなかで、このことについて詳しく論じている。フレーザーによれば、「王殺し」や「神殺し」の理由は、「魂を守るため」である。つまり、肉体が衰えると王も衰え、王(神)の魂も衰える。王が衰え、王(神)の魂が衰え、世界が衰える前に、前の王を殺し若く健康な肉体を持つ新しい王に魂を移す。神性を備えた人間が殺されれば、その魂は後継者に移るということである。

翻って、中上健次はかつてフレーザーの『金枝篇』を引用し、そのまま『地の果て 至上の時』(一九八三年)に書き込んでいる。

紙袋を破って書いたメモにくるまれて拳銃があった。周りを見廻して拳銃をズボンのポケットに入れ、メモを読んだ。秋幸はそれが何を意味するのか分らなかった。森の中には一本の樹が茂って、その周りをもの凄い人影が昼間はもとより、多分は夜もおそくまで徘徊するのが見えた。手には抜身の剣をたずさえ、いつなんどき襲撃を受けるかもしれないという様子で、油断なくあたりをにらんでいる。その紙の裏に太いマジックインキで書かれた殺れという字がイラストレイションのように見えた。

(『全集6』二七二頁、傍点は筆者)

傍点は、フレーザーの非常に有名な文句で、『金枝篇』第一章「森の王」に冒頭に置かれている。19「王殺し」があり、王が「油断なく」警戒していることである。「王殺し」を「書いたメモにくるまれて拳銃」は、すなわち、理論的には、「王殺し」の機は熟し、秋幸が拳銃を持って浜村龍造を撃つてもよいことになる。しかし、秋幸は撃たないのである。その理由について、中上健次はかつて上野千鶴子と対談するとき、次のように言っている。

単純に言うと、ぼく、それをこういうふうに解釈しているんです。王殺しをしていない、じゃ、何なのかというと、バリ島の魔女ランダと、それからバロンの戦いだと思っただけです。つまり浜村龍造が魔女ランダを真似したんだと。だから、魔女ランダの変形として在る。つまり浜村龍造は母のふりをしているわけ。秋幸の前に現れてきた時ね、父のように言っているけど、父じゃないわけよ。母のふりをして、秋幸に物語を付与しつづけようとする。仮構した父権の物語をデッチ上げて、秋幸にそれを反復させようとする。しかし母のふりをしているから秋幸は殺す方法がわからない。20
(傍点は筆者)

「母のふり」をすることに関し、ジェンダー（性差）とディヴィニティ（神性）という分光装置を用いることによって、天皇たちの謎に取り組むベン＝アミー・シロニ（Ben-Ami Shillony）の著書『母なる天皇：女性的君主制の過去・現在・未来』を想起させるのであろう。シロニは、次のように述べている。

天皇の王朝の長命さは、天皇たちが父性的人間像であるよりは、きわめて弾力性に富む「ソフトな」象徴的権力をふるう、母性的人間像であった事実に由来する。21

つまり、秋幸は「母のふりをしている」浜村龍造を殺すことができない。「王殺し」にもならない。中上健次の言葉を借りれば、これは「フレーザー批判」22である。結局、浜村龍造は秋幸の目の前で自殺したのであろう。

『火まつり』において、一種エディプスの愛憎複合に衝き動かされて「猿のように達男を狩ってやる」と決心する良太は、「父殺し・王殺し」を決めたが、結局達男の自殺により、やはり「王殺し」はできなかつた。構造的に言えば、『火まつり』は『地の果て 至上の時』

の反復に見え、同じく「フレーザー批判」に属する。浜村龍造は「母のふりをしている」から殺すことができない。一方、達男は、没落する旧家の家長、つまり「父」なるものの役割を引き受けなければならないと規定されているにもかかわらず、「子」なる「ワル」の要素を生涯に亘って担い、始終「子」としての行動が多く、成熟した「父＝王」になっていないため、浜村龍造と同じように殺すことができない。

要するに、「王」は「父」なるものであるが、「母のふりをしている」場合、あるいは、「父」なるものの役割を引き受けながらも、「子」として行動する場合、「王殺し」は成立しない。上述の「王」を、日本の場合、「天皇」と言い換えれば、中上健次は小説『地の果て 至上の時』で母性原理の「天皇制」を言い、小説『火まつり』で今の天皇の生前退位の「天皇制」を予言しているのではないであろうか。

四、「火」、「血」そして「毒」

『火まつり』の背景である新宮の「お燈祭り」を考察してみよう。梅原猛は著書『日本の原郷 熊野』で「お燈祭り」を次のように概説している。

熊野速玉神の摂社神倉神社の、二月六日（旧暦一月六日）夜におこなわれる例大祭である巨大なゴトビキ岩を御神体とする神倉神社は権現山の南端にあるが、この神社から、自然石を組みあわせた数百の石段を麓まで、松明を手に競って駆け下る神事である。この祭の参加者は男子に限り、その名を「上り子」という。その数は例年千数百名におよぶ。²³

そして、「熊野神倉山の御燈祭り」で山本殖生は次のようにその場面を詳しく記載している。

祠（本堂）の中に上り子がみな入ると、聖が戸を閉じた。中は甚だ苦しく、わずかに数十人が座れるほどで、和尚のほかはみな松明を持って立つ。火は天井をつき、その音は大浪のようで、燃えかすは散乱して、煙を呑み死にそうになる。焦熱地獄そのものだ。しばらくして戸が開くと、上り子は先を争い走り下る。早い流星のようだ。²⁴

新宮市の「お燈祭り」の上述のような「焦熱地獄」を経験した梅原猛は、「お燈祭り」を「縄文の祭」として捉え、自分が参加した感想として「天狗になったような錯覚を覚える」と述べ、「火を発見した人類の喜びをそのまま伝え」ていて、それは「プロメテウスの祭」²⁵だと規定している。梅原が「お燈祭り」に参加して「天狗」になる「錯覚」と、『火まつり』の主人公達男が参加して「火を突き出された凶暴な獣」になることとは、共通しているであろう。そこで、この「お燈祭り」における「火」は、一体どのような「火」であろうか。

「お燈祭り」の上述のような「焦熱地獄」を経験したアメリカ人もいる。象徴・宗教儀式・

通過儀礼等の研究で知られるアメリカの文化人類学者、ヴィクター・ターナー (Victor Witter Turner、一九二〇～一九八三) である。ターナーは、松明を持つ「若者たちの炸裂するような門の突破は、火之迦具土神の誕生を表象している」²⁶のだと鋭く指摘している。

火之迦具土神に関し、『古事記』や『日本書紀』において、伊邪那岐命とともに国うみを行なった女神で、神代七代の最後の神である伊邪那美命は、火之迦具土神を産んだとき火傷して死に、夫神の伊邪那岐命と別れて黄泉国の神となった話がある²⁷。この神話に由来していると思うが、日本には「別火」の習慣があった。岩崎真幸は次のように言っている。

わが国では出産に死は、産穢、死穢として大きな穢れとされてきたが、穢の薄まらないうちに喪家の火を使って調理した茶や食物を訪問客が口にしない慣わしや、産後の一定期間、産婦は別な火で調理した食事を摂る風も、二、三世代ほど前まではふだんにみられた。これは穢れや不浄などが火を通して感染すると考えていたからであった。²⁸ (傍点は筆者)

「穢れや不浄などが火を通して感染する」という考え方、言い換えれば、「血＝火＝穢れ」という回路は、血や穢れに対する差別に他ならない²⁹と思う。宗教学者山折哲雄が明治大学・和歌山県新宮市連携講座「熊野学フォーラム」第九回での基調講演「現代一揆ののろし」³⁰において既に指摘しているように、伊邪那岐命の神話における「死の穢れと血の穢れ」の差別は、「差別の起源」であり、新宮の「お燈祭り」は伊邪那岐命に対する「鎮魂」であると考えられる。

翻って、ヨーロッパでは、「火」を如何にして捉えているのであろう。フレーザーは『金枝編』で、ヨーロッパの全地域の火祭りを考察し、「太古から」現在までの火祭りを「四旬節の火」、「復活祭の祝火」、「ベルテーン祭の祝火」、「夏至の火祭り」、「ハロウィーン祭の火祭り」、「冬至の火祭り」、「浄火」と分類している³¹。その中で、「浄火」は、「四旬節の火」等と違い、一年のある定められた時期にあたって、周期的に執り行われるものではなく、「遙遠の昔から、困苦と破局」の場合、「不規則的に火と典礼を執り行う慣わし」であり、「他のすべての火祭りの型であり起源だ」³²と考えている。火祭りは、「どんな季節」にも、「どんな地域」にも執り行われ、「火と煙の使用」により、「多くの利益を獲得しかくも多くの災厄を除くことができる」³³と信じられているが、その理由には、「本元的」な「太陽説」(ヴィルヘルム・マンハルトの見解で、模倣呪術の原理に立って天空に輝く光と熱の偉大な源を地上において模倣するために火を焚き、人間、動物、植物に必要な太陽の光と熱の供給を確保することを指す)があり、「派生的」な「祓浄説」(エドワード・ウエスターマーの見解で、悪魔、妖怪、汚染など一切人格的、非人格的なもの、有害なものを焼き尽くして破壊することを指す)がある³⁴。フレーザーによれば、火祭りの儀式における「太陽の模倣が第一次的であり本元的であったのに対して、火に帰せられた浄めの力は二次的であり派生的であった」³⁵。つまり、フレーザーは、「火」を光、熱、消毒と規定しているのである。

新宮の「お燈祭り」に戻って、「火祭り」としての意義は、北野博美の指摘したように「長い年代の間に幾度変遷して行って、遂には競争的な行事となってしまった」のであり、「火祭には古い年を焼き棄てるとの考えが持たれるようになったが、もっと古くは、冬至には太陽の勢力が極度に弱まるので、それを復活させるための *sympathetic magic* 意味があった」³⁶と交感呪術の意味として論じた。考えてみれば、北野博美の「火祭り」説はフレーザーの「太陽説」に属している。

ここで、注目しておきたいのは、新宮市の「お燈祭り」における「火」は、「火を発見した人類の喜びをそのまま伝え」と同時に、人を「天狗」や「凶暴な獣」にすることである。言ってみれば、「火」は、破壊的なものである。ここでいう破壊は、フレーザーの場合の、有害なものを焼き尽くしての破壊ではなく、それは「悪」とされる破壊そのものである。つまり、「火」は、フレーザーの言うような、光、熱、消毒でもあれば、「悪」としての毒そのものでもある。換言すれば、「火＝毒」である。中上健次と梅原猛のこの論説は非常に重要である³⁷。

そして、熊野速玉大社の御由緒に「古書にも、神倉山は、熊野の根本だとしるされており、熊野三山の神が天下り給う霊所である」³⁸と書かれている神倉神社について、前川真澄は『神倉山と高倉下命』（一九三四年）で、次のように書いている。

（位置）新宮町の西隅権現山の南端なる神倉神社の山腹懸崖の上により日本書紀神武天皇紀に「遂越狭野到熊野神邑且登天磐盾」とあるは即ち此なり。

（中略）（祭神）天照大御神及大日本帝国の元勳 熊野高倉下命。³⁹（傍点は筆者）

日本軍国主義の勃起する一九三〇年代においては、神倉山の祭神である「高倉下命」は「大日本帝国の元勳」とされている。これは、『古事記』、『日本書紀』の中において、熊野の山中で毒気のために正気を失った神武一行が、その地の高倉下の捧げた剣によって救われる話⁴⁰に由来するのであろう。しかし、そもそも神武東征神話は、寺西貞弘の著書『古代熊野の史的研究』で指摘しているように、「大和王権による長年にわたる国土統一事業」を、「神武という初代天皇」の「一人の英雄」に仮託され、「大和王権成立の物語」として「再構築」されたものだと考えられる⁴¹。また、高倉下の剣を捧げる話は、ヴィクター・ターナーの言葉を借りれば、「青銅、あるいは鉄器時代の侵入者による、原アイヌの征服」⁴²である。確かに、梅原猛の指摘のように、「高倉下の本拠地」と伝っている新宮の近くにある「阿須賀神社」での発掘で、「弥生時代の遺跡」が出てきており、高倉下は「伝承通りの弥生の人」である⁴³。しかし、「高倉下が天下り」したところは、「高倉下の本拠地」の阿須賀神社ではなくて神倉山であるとも伝えられている⁴⁴。

このようにして、祭神を「弥生人」の高倉下とする神社が「縄文の祭」の「お燈祭り」を祭礼とするようになる。神倉神社の宮司はかつてヴィクター・ターナーに対し、「お燈祭りが、『古事記』や『日本書紀』の物語を再現」し、「上り子と呼ばれる、白装束をまとった少

年たちは、高倉下命から魔術的な力を授かった神武天皇の東征軍の兵士を表象」と言った⁴⁵。しかし、お燈祭りは「神武天皇の東征軍の兵士を表象」するよりも、むしろターナーの指摘したように、「火之迦具土神の誕生を表象している」ものだと思われる。

征服者と被征服者の関係から考えれば、「火之迦具土神の誕生を表象」することを隠蔽して、祭神を「縄文人」の「火の神」ではなく、「弥生人」の高倉下にするのは、十分あり得ることである。その場合、お燈祭りはそのまま継承されながらも、「火」の破壊性の一面、つまり神武天皇が最初に「毒」されたことは隠蔽され、「血＝火」の穢れという新たな意味が作られたのである。

寺西貞弘は伊邪那美命について次のような示唆的な発言をしている。

注意しなければならないことは、イザナミという女神の存在はあくまでも虚構であるということである。『日本書紀』本文がその死に言及せず、その多くの異伝や『古事記』がその死に言及したとしても、女神の存在自体が虚構である以上、その女神の死そのものも虚構である。⁴⁶

伊邪那美命の「存在自体が虚構」であり、その「死」も「虚構」であり、推論として、火の神を生んだために死ぬというのも虚構に違いない。すべては虚構であるとすれば、伝わってきたテキストの中の伊邪那美命と火の神は何だかということ、それは差別であるほかならないと思う。「火の神」は梅原の言うように、「縄文時代においてもっとも尊敬された神」で、「神と人間の媒介者、神と神の調停者」⁴⁷でもあるが、「別火」となったのである。

「火」は光、熱（エネルギー）という人類に対する有用な一面を持ちながら、巨大な破壊力をも持つ。利益と恐怖が共に存在するのが崇拝の心理であれば、「火」に対する崇拝はまさにそうである。「火」は従来、フレイザーの言うような、光、熱、消毒とされていたが、実に、「悪」としての「害」としての毒そのものという一面もある。中上健次と梅原猛が発見した「火＝毒」は、巨大なエネルギーとしての「火」の破壊力を語っている。古代において火は、整理された記紀神話に片鱗や残影として見られるように、伊邪那美命という国産み神を死なせる力を持つ。現代においては、福島原子力発電所事故もそうである。これまで「血の穢れ」、「死の穢れ」があまりにも強調され、「火＝毒」という側面が忘れ去られていたが、中上は「血＝火＝穢れ」であることを喚起させるとともに、「火＝毒」を主張しつつある。

記紀神話で、火の神迦具土神の激しい性格により、陰所（ホト）を焼かれた伊邪那美命の死を既に描いてしまったことを思い起こせば、もう一度同じ主題を反復する『火まつり』には、一種痛切な鎮魂の思いがこめられているに違いない。「霊を呼び出し、霊の生涯を語ることで反復してやり、反復することで慰撫してやるのが鎮魂の形式」⁴⁸であるが、『火まつり』は、「お燈まつり」にある差別の起源を蘇えらせ、それを鎮魂する。いわば、中上は、重点を「血＝火＝穢れ」ではなくて「火＝毒」に置き、「神道の正真のオムファロス（世界の臍）であり、天皇制の精神的支柱の源泉」である「紀伊半島の熊野東部」⁴⁹における差別

の起源を解消しようとしている。

五、「火」と「原子力発電所」

中上健次は『火まつり』のなかで、上述の差別の起源、つまり「血＝火＝穢れ」を如何にして脱構築するのであろうか。主人公の達男は「穢れ」を無化する場面が多く書かれているが、その中のひとつの例を次のように挙げる。

達男はしてはいけない事を平気でした。山仕事で山に入った限り、たとえ仕事の現場が山の頂上であろうと、山の靈気を穢すように頂上で小便はしないし、もし仕方なしにするなら木陰にむけてするものだが、達男は何のこだわりもなく、した。或る時は神木のサカキにかけた事もあったし、サカキでコブチを作った事もあった。(『全集 8』二八八頁。傍点は筆者)

達男は山の頂上で小便して「山の靈気を穢す」ことや鳥の血で「神木のサカキ」を穢すことを平気でやる。また、山仕事で声を掛けて訊ねれば達男は奇異にも思わず、「抱いてくれとせつつくんじゃよ」とか、「まきついて放れんのじゃ」と、「山仕事の人夫同士でなければ理解出来ないような事をあげすけな性の言葉」(『全集 8』二八九頁)で言う。そして、達男は禁区にもぐりヤスで魚を突き、一度海に近寄らないと誓ったにもかかわらず、また禁区にもぐりヤスで魚を突く。魚を突いて血流し、二木島の祭りを台無しにする。このようにして、達男は「血＝穢れ」を無化にすることより、「血＝火＝穢れ」の中から「火」を解放させ、「火＝破壊」の性質を浮かび上がらせる。

「火＝破壊」を表象させるもうひとつの方法は、二木島における「原子力発電所建設」の話テキストを持ち込むことである。現実では、「朝日新聞」に掲載されたように、中部電力が計画していた原子力発電所が、「芦浜」、「城ノ浜」、「大白池」の「いずれか一カ所にくる」とされていた。また、同新聞は次のように評論している。「陸の孤島」である「紀州地方」は、「中京、阪神地帯に電力を送る日本一のエネルギーセンターとなりつつ」あり、「原子の灯」は「紀州地方」をはじめ、「日本の未来を照らし出す灯になる」⁵⁰。しかし、元三紀地区労働議長の更谷令治の言うように「電力資本や原発推進派が、金をぶち込み、権力で圧力をかけ」たが、「熊野の原発反対運動は幸運」で、「分断し、踏み潰」されなかった⁵¹。熊野では原子力発電所建設の計画が白紙になったのである。小説『火まつり』では、「原子力発電所」について、最初は達男がそれをにらんでいるという噂が流されている。

波田須に中部電力の原子力発電所が来る、それで波田須や新鹿の者らは漁業補償や観光補償をあてにして、他所へ出た者の空屋や山の畑を買い込んでいると伝えた。ブローカーは札つきだったので、他所へ出た者の空屋や空地の登記証をチラつかせても誰も乗る者がなかったが、二木島の者らは達男が海中公園を一笑に付したのは、

いずれどこかにつくられると噂のある原子力発電所をにらんでの事だったのか、と噂した。女らは原子力と聴いただけで震え上がった。

「あの達男なら、おう、よっしゃ、そんなに厭がるもんじゃったら、俺の家の地所に建てたらええ、と言うかも分かん」(『全集8』二三九～二四〇頁)

その噂に対し、「女らは話しながらも半信半疑」であって、「誰も本心から海中公園や原子力発電所の話を信じている者はいなかった」。かつて、中上健次は「ノート」で、『火まつり』の話者は「<噂の辻>にたむろするコロス群たる人々」と「少年良太」である⁵²と自己解説している。上記の海中公園や原子力発電所の話の話者は<噂の辻>の女らに属するが、実際に、達男は海中公園も原子力発電所も拒否している。その様子は次のように書かれている。

舟を使って他所の町と行き来する時代は、何があってもまず池田の家に報告に来、池田の家が首を縦に振らなければ町の行事は進行しなかったが、尾鷲から木本まで汽車が通じ、二木島の先の須崎でどん詰まりになっているとは言え、自動車を通る道が一本開通するといままで何もかも池田の家の世話になっていた事を忘れ、勝手に漁協の建物を建て替え、養殖イケスをつくり、あまつさえ海中公園だ、原子力発電所の設置だと話を進める。(『全集8』二七四頁、傍点は筆者)

つまり、達男は、海中公園と原子力発電所建設の計画を一笑に付したにもかかわらず、二木島の人たちが、勝手に話を進めているのである。日本経済高度成長期における開発の観点で捉える山口昌男の言葉を借りれば、「土地開発、観光のために自然が失われていくこと」に対し、達男が「怒」る⁵³。また、上野千鶴子によれば、『火まつり』は「ニギタマ(和魂)になることを拒否したアラタマ(荒魂)の物語」で、主人公の達男は「スサノオ」⁵⁴である。中上健次は上野との対談で、上述の「達男＝スサノオ」説を認め、さらにそれは上田秋成の「樊噲」を意識にし、「禁止の矩を越えて接触しちゃう人間という形」⁵⁵と補足する。スサノオや樊噲は普通であれば滅ぼされるが、『火まつり』の場合、達男が自分で自分を滅ぼすという形で小説が終わる。いわば、海中公園と原子力発電所の開発によって、共同体全体がニギタマ化を強いられているというプロセスの中にあり、共同体全体がニギタマに合意しているが、達男は、そういった流れに同調することを拒否し、最後に一家心中して、生きることをも拒否する⁵⁶。

そもそも「原発は原爆の副産物として歴史に登場」し、「原子炉」は「広島、長崎に使用された」原爆の放射線元素(ウラン二三五とプルトニウム二三九)を「製造するためにつくられた」ものである。現在、『平和利用』に転用されようとも、その性格は変えようがない⁵⁷。いわば、近代化のベールに包まれた「原発」には原罪がある。「原発」の核廃棄物に関する処置は現在もまだ課題であるし、よく考えてみれば、「血の穢れ」と「原発」の放射線と

いう「穢れ」とは、比較できないほどの差がある。つまり、達男が禁区内で魚をつく「血の穢れ」より、共同体が進める「原発」の計画の方がよほど悪いのである。「血の穢れ」を差別し、達男を「村八分」にするなら、「電力資本や原発推進派」をもっと差別するべきではないだろうか。

中上健次が『火まつり』を書く理由について、上野との対談で次のように述べている。

中上：あの「火まつり」が何をめざして書かれているかと言えば、無意識というのがほとんど最大限のテーマだったと思うんです。女は海から上がっていく。海というのが達男にとって完全に無意識だと思う。その無意識というのは時間が止まってしまってるみたいな……。

上野：動かない、変わらない時間でしょう。

中上：線的に流れないわけじゃなくてたまってしまってる。その時間は絶えず更新されるんだけど、線的には流れない。⁵⁸

中上健次の言う「無意識」や「無時間」とは、共同体の「意識化」や「発展」の反対語であると思う。ゆえに、海中公園を開発や、原子能発電所の建設などという近代の発想、あるいは「意識化」に対し、また、近代の発想に共謀する共同体に対し、破壊行為をやり続ける達男が発見したのは、美しい海底であり、その海の「無意識」である。つまり、時間が「線的には流れない」海を発見した達男は、共同体とは違って、「原罪」のある原子力発電所のような近代化を拒否しようとする。

六、結論

ここまでは、日本における「王殺し」の不可能性、記紀神話における伊邪那美命に対する「血の穢れ」差別、原発の原罪と放射線の「穢れ」について考察を試みた。伊邪那美命神話における「火＝毒」という破壊性から焦点をずらして「火＝血の穢れ」にスポットライトを浴びせることにより、日本における差別の起源を考察することは可能であろう。

「火＝消毒」ではなく、「火＝毒」の側面を発見した中上健次の書いた小説『火まつり』は、「血の穢れ」を脱構築する作品だと推定した。「火＝毒」の側面に注目し、「火」の巨大なエネルギーの属性とその破壊性を理解すれば、「火＝原発の穢れ」も成立する。熊野では、「火＝原発の穢れ」を成功裡に拒否したが、「原発の穢れ」より比べ物にならない「血の穢れ」は拒否することができない。「血の穢れ」という差別はいかに根深いものなのかを物語っている。こういう「火＝血の穢れ」の状況では、「火＝毒」をもって「王殺し」はやはり不可能である。なぜかというと、「火＝血の穢れ」という差別を作り出した者は、父でありながらも「母のふり」をするからである。

中上健次は「フィンランドの火まつりーラハティ国際作家会議に出席して」で述べたよう

に「火は人を容易に時空間をこえさせる」⁵⁹。「火まつり」において中上健次は、「火＝毒」に自覚的な戦略をとるというモチーフをもち、新しい地平を切り裂くには至ったが、シロニの言う「母なる天皇」の制度を敢えて超えさせようとしているのではなからうか。

注

- 1 谷川雅彦「福島第一原発事故から六年—福島差別は許されない」(『ヒューマンライツ』部落研究・人権研究所、二〇一七年五月、一八頁)
- 2 吉田千亜「『消される』という差別」(『現在の<差別>のかたち』大月書店、二〇一七年、一四一頁)
- 3 映画『火まつり』は、西武セゾングループ第一回制作作品で、一九八五年五月、日比谷映画で公開された。監督は柳町光男で、脚本を書いたのは中上健次である。守安敏久「中上健次『火まつり』——映画から小説へ」(『宇都宮大学教育学部紀要』第六十一号第一部、二〇一一年三月、十八頁)によると、中上健次は「第四十回毎日映画コンクール(昭和六十年)脚本賞」を受賞した。
- 4 ヴィクター・ターナー「新宮・神倉神社における御燈祭り」(山口昌男編『火まつり』リポート、一九八五年、一二七頁。)
- 5 広辞苑
- 6 広辞苑
- 7 守安敏久「中上健次『火まつり』——映画から小説へ——」(『宇都宮大学教育学部紀要』第六十一号第一部、二〇一一年三月、二十頁。)
- 8 山口昌男、太地喜和子「山・大地・海」(山口昌男編『火まつり』リポート、一九八五年、十三頁。太地喜和子が『火まつり』監督の柳町光男の言葉を引用している)
- 9 山口昌男、太地喜和子「山・大地・海」(山口昌男編『火まつり』リポート、一九八五年、一一頁。)
- 10 萩野アンナ「ユートピアとしての熊野：中上健次『火まつり』」(『文学界』文藝春秋、一九八七年六月、三一七頁)
- 11 中上健次『火の文学』角川書店、一九八五年。
- 12 林淑美「『火まつり』：映画とシナリオと小説と」(『国文学：解釈と鑑賞 別冊』至文堂、一九九三年九月、二〇八頁)
- 13 林淑美「『火まつり』：映画とシナリオと小説と」(『国文学：解釈と鑑賞 別冊』至文堂、一九九三年九月、二〇九頁)
- 14 中上健次『火まつり』文藝春秋、一九八七年、カバーの帯。
- 15 小説の中で確かに、次のような場面が書かれている。「二木島と新宮は土地の広さも形も違うが何となしに似ていた。新宮も二木島も神武上陸の土地と言われ、秦の始皇帝に不老不死の薬を持ち帰るように遣わされた徐福の伝説があり、さらに祭りに早船がある。そこで体が若返るといふ水の信心にこりかたまつた者らが家の中に閉じこもり行を繰り返し、ついに老婆が死に、信者のきょうだいも怪我をした」。そして、二木島では、ゲルマニウム鉱石の粉末をとかした水を飲んだら、生理不順や冷え症が治るといふ信心がある。これについて、上野千鶴子が、中上と対談「暴力と性、死とユートピア」(山口昌男編『火まつり』リポート、一九八五年、三十三頁)の中で、すでに次のように指摘していた。つまり、「非常に閉鎖して孤立していた共同体に、非常に短いタイム・スパンで開発とか近代化という波が押し寄せた時に、「ニューギニアのカーゴカルトみたいな形の非常に破壊的な宗教」が起きてくる。上野は、猟銃での一家惨殺事件を、「非常に激しく起きた」いわゆる「近代化」の波の中の現象と捉えている。

- 16 中上健次『火の文学』角川書店、一九八五年。
- 17 井口時男「書評「ワル」の神学：中上健次『火まつり』（『群像』講談社、一九八七年七月、二五三頁）
- 18 フレーザー著、永橋卓介訳『金枝編』岩波書店、一九五一年、四七～六一頁
- 19 フレーザー著、永橋卓介訳『金枝編 第1』岩波書店、一九五一年、四二頁。
- 20 中上健次、上野千鶴子「暴力と性、死とユートピア」（山口昌男編『火まつり』リポート、一九八五年、三十八頁。）
- 21 ベン＝アミー・シロニ著、大谷聖志郎訳『母なる天皇：女性的君主制の過去・現在・未来』講談社、二〇〇三年、四頁。
- 22 中上健次、上野千鶴子「暴力と性、死とユートピア」（山口昌男編『火まつり』リポート、一九八五年、三十八頁。）
- 23 梅原猛『日本の原郷 熊野』新潮社、一九九〇年、一一〇頁。また、上り子の数について、一九三一年は千三百三十九人と記録されている（前川真澄『神倉山と高倉下命』新宮保勝会、一九三四年、二十六頁）。
- 24 山本殖生「熊野神倉山の御燈祭」（『紫明』紫明の会、二〇〇六年九月、三三頁）
- 25 梅原猛『日本の原郷 熊野』新潮社、一九九〇年、一一三～一一四頁。
- 26 ヴィクター・ターナー「新宮・神倉神社における御燈祭り」（山口昌男編『火まつり』リポート、一九八五年、一二七頁。）
- 27 『日本書紀』には、次のように記載されている。一書曰、伊弉諾尊與伊弉冉尊、共生大八洲國。然後、伊弉諾尊曰「我所生之國、唯有朝霧而薰滿之哉。」乃吹撥之氣、化爲神、號曰級長戸邊命、亦曰級長津彥命、是風神也。又飢時生兒、號倉稻魂命。又、生海神等號少童命、山神等號山祇、水門神等號速秋津日命、木神等號句句廼馳、土神號埴安神。然後、悉生萬物焉。至於火神軻遇突智之生也、其母伊弉冉尊、見焦而化去。于時、伊弉諾尊恨之曰「唯以一兒、替我愛之妹者乎。」則匍匐頭邊、匍匐脚邊而哭泣流涕焉、其淚墮而爲神、是即畝丘樹下所居之神、號啼澤女命矣。遂拔所帶十握劍、斬軻遇突智爲三段、此各化成神也。復劍刃垂血、是爲天安河邊所在五百箇磐石也、即此經津主神之祖矣。復劍鐔垂血、激越爲神、號曰甕速日神、次燖速日神、其甕速日神是武甕槌神之祖也、亦曰甕速日命、次燖速日命、次武甕槌神。復劍鋒垂血、激越爲神、號曰磐裂神、次根裂神、次磐筒男命、一云磐筒男命及磐筒女命。復劍頭垂血、激越爲神、號曰閻龍、次閻山祇、次閻罔象。
- 然後、伊弉諾尊、追伊弉冉尊、入於黃泉而及之共語時、伊弉冉尊曰「吾夫君尊、何來之晚也。吾已滄泉之竈矣。雖然、吾當寢息、請勿視之。」伊弉諾尊、不聽、陰取湯津爪櫛、牽折其雄柱、以爲秉炬而見之者、則膿沸蟲流。今世人、夜忌一片之火・又夜忌擲櫛、此其緣也。時、伊弉諾尊、大驚之曰「吾不意、到於不須也凶目汚穢之國矣。」乃急走廻歸。于時、伊弉冉尊恨曰「何不用要言、令吾恥辱。」乃遣泉津醜女八人、一云泉津日狹女、追留之。故伊弉諾尊、拔劍背揮以逃矣。因投黑鬘、此即化成蒲陶、醜女見而採噉之、噉了則更追。伊弉諾尊、又投湯津爪櫛、此即化成筍、醜女亦以採噉之、噉了則更追。後則伊弉冉尊、亦自來追。是時、伊弉諾尊、已到泉津平坂。一云「伊弉諾尊、乃向大樹放尿、此即化成巨川。泉津日狹女、將渡其水之間、伊弉諾尊、已至泉津平坂。」故便以千人所引磐石、塞其坂路、與伊弉冉尊相向而立、遂建絕妻之誓。
- 28 岩崎真幸「火のかたち」（『紫明』紫明の会、二〇〇六年九月、二頁）
- 29 「血＝火＝穢れ」の回路を通して、差別の副産品がある。熊野速玉神社の祭神に関し、『日本書紀』で次のように書いている。「一書曰、伊弉諾尊、追至伊弉冉尊所在處、便語之曰「悲汝故來。」答曰「族也、勿看吾矣。」伊弉諾尊、不從猶看之、故伊弉冉尊恥恨之曰「汝已見我情。我復見汝情。」時、伊弉諾尊亦慙焉、因將出返、于時、不直默歸而盟之曰「族離。」又曰「不負於族。」乃所唾之神、號曰速玉之男。（傍点は筆者）」つまり、新宮の速玉大神は、伊邪那岐命が死者の国を訪れたために穢れ、それを禊祓する時、口から吐いた唾から生じたものとされている。これも、いうまでもなく、一種の差別にほかならない。

- 30 山折哲雄「現代一揆ののろし」(明治大学・和歌山県新宮市連携講座「熊野学フォーラム」第九回、二〇一六年一月十六日)
- 31 フレーザー著、永橋卓介訳『金枝編』改版第四巻、岩波書店、一九六七年、二四七頁～二九九頁。
- 32 フレーザー著、永橋卓介訳『金枝編』改版第四巻、岩波書店、一九六七年、二九九頁。
- 33 フレーザー著、永橋卓介訳『金枝編』改版第五巻、岩波書店、一九六七年、六頁。
- 34 フレーザー著、永橋卓介訳『金枝編』改版第五巻、岩波書店、一九六七年、六～七頁。
- 35 フレーザー著、永橋卓介訳『金枝編』改版第五巻、岩波書店、一九六七年、七頁。
- 36 北野博美「祭礼の今と昔」(『民俗芸術』第三巻第七号、民俗芸術の会、一九三〇年七月、九頁)
- 37 普通であれば、「火」は「毒」ではない。例えば、『古事記』や『日本書紀』に、火中出産の話がある。木花咲耶姫は一夜で身籠るが、瓊瓊杵尊は国津神の子ではないかと疑ったことである。疑いを晴らすため、誓約をして産屋に入り、天津神であるニニギの本当の子なら何があっても無事に産めるはずと、産屋に火を放ってその中でホデリ・ホスセリ・ホオリの三柱の子を産んだ。つまり、瓊瓊杵尊が木花咲耶姫を疑われる時に、木花咲耶姫は火によって潔白を証明せられたことが見えている。上野元によれば、「仮に語り部によって伝承せられている間に本来の姿が失われて行って、次第に伝説化せられたと考えても、その根拠だけが明らかにわかる。即ち古代人の火に対する崇拜の念が根底となっていたのであった」(上野元『神倉神社——紀伊熊野新宮に於ける火祭の民俗学的一考察』集文社、一九三七年)
- 38 熊野速玉大社の御由緒
- 39 前川真澄『神倉山と高倉下命』新宮保勝会、一九三四年、三頁。
- 40 『日本書紀卷第三』は、次のように書いている。天皇獨與皇子手研耳命、帥軍而進、至熊野荒坂津亦名丹敷浦、因誅丹敷戸畔者。時、神吐毒氣、人物咸瘁、由是、皇軍不能復振。時彼處有人、號曰熊野高倉下、忽夜夢、天照大神謂武甕雷神曰「夫葦原中國猶聞喧擾之響焉。聞喧擾之響焉、此云左擲霓利奈離。宜汝更往而征之。」武甕雷神對曰「雖予不行、而下予平國之劍、則國將自平矣。」天照大神曰「諾。諾、此云宇每那利。」時武甕雷神、登謂高倉下曰「予劍號曰師靈。師靈、此云赴屠能瀨哆磨。今當置汝庫裏。宜取而獻之天孫。」高倉下曰「唯々」而寤之。明旦、依夢中教、開庫視之、果有落劍倒立於庫底板、即取以進之。于時、天皇適寐。忽然而寤之曰「予何長眠若此乎。」尋而中毒士卒、悉復醒起。
- 41 寺西貞弘『古代熊野の史的研究』塙書房、二〇〇四年、九一頁。
- 42 ヴィクター・ターナー「新宮・神倉神社におけるお燈祭り」(山口昌男編『火まつり』リポート、一九八五年、一一四頁。)
- 43 梅原猛『日本の原郷 熊野』新潮社、一九九〇年、一一三。
- 44 瀧川政次郎ら編著『熊野速玉大社古文書古記録』清文堂、一九七一年、三九九頁。または、記紀に見られる。
- 45 ヴィクター・ターナー「新宮・神倉神社におけるお燈祭り」(山口昌男編『火まつり』リポート、一九八五年、一一七頁。)
- 46 寺西貞弘『古代熊野の史的研究』塙書房、二〇〇四年、五一頁。
- 47 梅原猛『日本の原郷 熊野』新潮社、一九九〇年、一一三頁。
- 48 井口時男「書評「ワル」の神学：中上健次『火まつり』」(『群像』講談社、一九八七年七月、二五二頁)
- 49 ヴィクター・ターナー「新宮・神倉神社におけるお燈祭り」(山口昌男編『火まつり』リポート、一九八五年、一一〇頁。)
- 50 「朝日新聞」一九六三年一月一日。

-
- 51 更谷令治「熊野の原発反対運動は幸運であった」(『井内浦 熊野原発反対史』熊野原発反対闘争史編集委員会、一九九九年.六頁)
- 52 中上健次『火の文学』角川書店、一九八五年。
- 53 山口昌男、太地喜和子「山・大地・海」(山口昌男編『火まつり』リポート、一九八五年. 十八頁。)
- 54 中上健次、上野千鶴子「暴力と性、死とユートピア」(山口昌男編『火まつり』リポート、一九八五年. 二十七頁。)
- 55 中上健次、上野千鶴子「暴力と性、死とユートピア」(山口昌男編『火まつり』リポート、一九八五年. 三十頁。)
- 56 一九八〇年一月三十一日、二木島という村の猟銃での一家惨殺事件に、中上健次は非常に引かかっていた。この事件は中上健次の小説『火まつり』のモデルとなり、小説の舞台も二木島であった。
- 57 熊野原発反対闘争史編集委員会「原発開発の系譜」(『井内浦 熊野原発反対史』一九九九年.一一六頁)
- 58 中上健次、上野千鶴子「暴力と性、死とユートピア」(山口昌男編『火まつり』リポート、一九八五年. 三十五頁。)
- 59 中上健次「フィンランドの火まつりーラハティ国際作家会議に出席して」朝日新聞(夕刊)一九八七年七月二日(『朝日新聞縮刷版 昭和六二年七月号』朝日新聞社、七五頁。)

第五章 『千年の愉楽』論：「大逆事件」の記憶及び「帝国」を脱構築する道程

はじめに

中上健次によって書かれた「路地」の「頂点」が『千年の愉楽』にあると、渡部直己はかつて著書『中上健次論：愛しさについて』で指摘している¹。「路地」のすべての様相が描写された短篇集『千年の愉楽』（河出書房新社、一九八二年八月）は六篇の作品から構成されている。その六の作品は全部、雑誌『文藝』（河出書房新社）に掲載されたもので、それぞれのタイトルと初出は下記の通りである。「半蔵の鳥」が一九八〇年七月、「六道の辻」が同九月、「天狗の松」が同十一月、「天人五衰」が一九八一年二月、「ラプラタ綺譚」が一九八二年一月、「カンナカムイの翼」が同四月である。

『千年の愉楽』は「いずれも淫蕩・美形・妙技を極め、若死にする＜中本の一統＞の男らの行状を、生命の極点で＜路地＞そのものと化したオリユウノオバの遍在的記憶によって語る」ものだと、中村三春は「中上健次主要作品解題」で書いている²。「路地」で唯一の産婆であったオリユウノオバは、坊主であった夫の礼如とともに、「路地」の人々の生死を見届けるが、そのオリユウノオバという産婆は実に、『野生の火炎樹』（一九八四～一九八五）、『奇蹟』（一九八七～一九八八）にも登場し、中上健次文学における極めて重要な人物である。

浅野麗の指摘したように、オリユウノオバが「初めて視点人物として配置された」のは、『千年の愉楽』である³。渡部直己も早い時期に、オリユウノオバの創出と、「被差別部落」の歴史の開示と関連から、『千年の愉楽』の特異性に注目している。渡部によれば、オリユウノオバを「導入してはじめて」、「差別の問題」や、「大逆事件につながるような政治と歴史」などが浮上する⁴。

ここで、問わなければならないのは、『千年の愉楽』において、「大逆事件」がどのように喚起されたのか、そして、「大逆事件」を喚起する中上の意図は何であろうか、ということである。本章は、この二つの点の検討を中心に展開する。特に、後者について重点を置く。

まず、『千年の愉楽』の粗筋を纏めてみよう。

一、『千年の愉楽』の粗筋

『千年の愉楽』各篇の粗筋は次のようである。

まず、『千年の愉楽』の冒頭に置かれた「半蔵の鳥」は、両親から置き去りにされて「路地」の大人らが誰彼なしに親がわりになって育った半蔵を主人公にした物語である。中本の一統の中でも群を抜いて男振りの良い半蔵は、十の歳に女を知り、色欲に動かされるままに生き、男の性そのものになる。早い歳から性の味を知った半蔵は、女をもてあそび女にもてあそばれて、若後家を買われている。ある日、半蔵が山仕事で怪我をした仲間の医者代を借

りに後家の元へ行ったら、すでに別の若い男が後家の家に引き入れていた。この男は後家が半蔵に渡した「天鼓」という鶯をもともと育てた者であり、半蔵の敵意が抜け落ち、その男の尻穴に突き立て、三人共に情交する。半蔵が「路地」から来ているということを知ると、男は尻の穴が突っ込まれたにも関わらず、急に優位にでも立ったかのように振り舞う。半蔵は男に体を売った陰間のように思えて心の傷がついた。最後に、自分で頬を傷つけた半蔵は、女に手を出してそれを怨んだ者に背後から刺され、炎のように血を噴出しながら走って「路地」のとば口まで来て息絶える。

第二篇の「六道の辻」は、中本の血を引く三好を主人公にしている。三好は半蔵の叔父に当たるが、年齢は半蔵よりも十も若い。十五の歳で一人前の男以上に金を取り、闇市の中で商売をし、不良少年団の親分で「路地」や近辺の子を引き連れて盗人として活動する。しかし、終戦後兵隊へ召集になった者は次々復員して帰り、闇市の商売や品物を盗み集めて売る仕事が復員した男らに取って代わられた。三好は、朝鮮や満州を転々して終戦になって戻ってきた桑原の子分になり、ヒロポンを射ったり盗人をしたりする。三好は一緒に組んで盗人をしたが、桑原の目当てが山持ちの証書なので、分け前の金品を受け取れなかった。その後、三好は一年ほど飯場暮らしをした。一年間山奥の飯場で稼いだ金を一晩で出かけた博打であらかたなくし、残った金を女に使い切り、花火のように瞬間に燃え上がる。夜盲症にかかった三好が盆の十五日の夜半に、殺人を犯して女を連れてオリュウノオバの家へやってくる。この後、三好は山奥の飯場に身を隠し、怪我をしてまた「路地」にもどってくる。昔、権利証や借用証をごっそり手にいれた桑原がすでに成金になったが、三好は夜盲症がひどくなり、ついには、昼もぼんやりとしか眼が見えなくなってしまい、「体から炎を吹き上げ、燃え上がるようにして生きていけないのなら、首をくくって死んだほうがましだ」と縊死した。

第三篇の「天狗の松」は、鴉天狗を見たり神隠しに会ったりすることがあるという文彦に関する物語である。文彦は生まれた時から妙に変わったところのある子で、体中くまなく産毛と言えぬような毛で覆われていた。一月経て全身の毛が消えたものの、腹を中心に茶色のあざが幾つかできた。文彦にどんな異類の徴候も見られなくなるのは六つの時で、この年には、「路地」に溺死、毒飲み、縊死、火事など次々と災いが起こる。そして文彦は神隠しに会って一週間ほど天狗に連れられたという。「路地」の若衆たちが天狗をつかまえるのだと山の松の下で夜中に集まり、声を荒げて騒いだが、天狗が出てこないため、町の家到天狗だと脅しに行く。ある日、中学を卒業して飯場を転々と移り渡る生活をする文彦は、人里離れた山の中で巫女の修行をしていたという女を連れて、オリュウノオバの家を訪ねてくる。たまたま飯場の人夫相手に女郎をし、山中で頻りに三本の足のヤタガラスを見た巫女は、「路地」で祝事をするでもなく文彦と所帯を持つ。文彦はしばらく「路地」で女との生活を続けるが、ある晩、女を情交中に殺してしまい、鴉天狗を見たところの松の下に穴を掘り緋の肌の女を埋めた。文彦は女を殺して飯場に身を隠し、しばらくして路地に戻り、大金をオリュウノオバに預ける。飯場から金を盗んで逃げる中本の一統のヒサシが天狗に裂かれ、天狗はその金

を文彦に投げてよこしたとオリウノオバは想像する。文彦はまもなく、「路地」の松に首をくくって死ぬ。

そして、第四篇「天人五衰」は、若くして大陸を放浪し、現地で召集されて軍隊に入り、敗戦になって引き上げてきたオリエントの康に関する物語である。ある日、オリエントの康は、「路地」の中に見たことのなく、絹を裂くような音の出る蓄音機を持って戻り、新天地を作りたいと奇異な情熱をもって若衆に説いて廻っている。オリエントの康は、復員船と一緒にあった斎藤を誘ったが、斎藤は南京の大騒動があった時、自動車部隊で大活躍し、「反乱」する大陸人の首を刎ねてやったが、現在炭焼きで虫も殺さぬほど善良な気の弱い常民となったため、新天地作りを断った。そして、オリエントの康は「路地」の人を説得し、譲治らと共に、南米に新天地を作るための鉄心会を結成する。鉄心会は、用心棒代を徴収し、南米へ出発の金を作るが、ある日、縄張りを広げるためにイザコザを起こした他の地回りにピストルで撃たれた。至近距離で二発命中されたものの、オリエントの康は奇跡的に命を取り留めた。オリエントの康は、移住するための軍資金の調達が必要だと思い込み、さらに縄張りを広げようとする。しかし、鉄心会はどんどん膨れ上がり、集まった人は年寄り、子供、女ばかりなので、オリエントの康は集団で南米の新天地に行くことを断念し、女を集めて遊郭に売り、その金を皆に分ける。血判をつけてまで新天地へ行こうと思った譲治は突然ピストルで、親分のオリエントの康を撃つ。二度も撃たれたオリエントの康は、その後、単身ブラジルに渡って革命運動に巻き込まれて行方不明になり、たぶん死んだと伝わっていた。

さらに、第五篇「ラプラタ綺譚」は、人付き合いもせず義賊のように盗人をしていた新一郎の物語である。美男に生まれついたことに無頓着の新一郎は、腰から下の話を心底から軽蔑しているだけではなく、共同体の御燈祭り、節句、御船漕ぎの酒の宴にも出てこない。盗人にはよい盗人と悪い盗人があると信じている新一郎は、盗人をやめよと説いた礼如の意見に反対を通したが、南米から戻ってきた女に影響され、盗人をやめた。その女は、南米へ子供の頃に行った男の娘であり、新一郎と夫婦になってから二年後、路地の若衆と仲良くなって新一郎と別れる。盗人をやめた新一郎は、ずいぶん以前から起こっていた盗人の犯人だったことが露見し、他所へ逃げ出す。三年後、二十九歳となった新一郎はまた「路地」に戻り、何羽もの鶯を飼い、名鳥を仕込む。ある日、新一郎の家に鶯のフンをもらいに町の男がやってくる。天女の生まれ変わりのような声をする名鳥の鶯のフンで顔を洗うと、芸妓が玉肌を保つことができるという。新一郎は男の後をつけ、芸妓が住むという家をさぐり、後に芸妓の家へ忍び込んで芸妓を強姦する。その後も続けて関係を持つが、しばらくして、花町に新一郎と芸妓の噂が流れ、新一郎は今度、山仕事の人夫として働く。しかし、好景気の波が引き、賃金値下げが相次ぎ、新一郎は南米へ行くことと決意する。ラプラタでは、銀の河が流れるが、「路地」と同じような人間がすむ。新一郎は女郎や通訳の女と一緒に暮らし、丸二年間南米で過ごしてまた「路地」に戻って来る。他所で真珠や宝石類を盗み、ごみのように「路地」の辻に捨て、四日後水銀を飲み自殺する。

『千年の愉楽』の最後に置かれた第六篇「カンナカムイの翼」は、オリウノオバと情交

したとされる達男に関する物語である。達男は、生まれる前から異様な予感のあった子であった。父親の富繁が臨月間近の嫁を放って浮島のはずれの御堂の脇の小屋に籠り、後に行方不明となる。生まれる時は暴風雨を伴い雷鳴がとどろき、生まれた直後は風雨がおさまり、裏山にふくろうが鳴く。十五歳の達男は赤ん坊の自分を取り上げたオリウノオバと情交し、十六歳になると鉱山で働くために北海道に渡り、四年ほど経て北海道の一人の若衆を連れて「路地」に戻る。オリウノオバは一時二人から北海道での暮らしを耳にし、達男の誕生はアイヌのユーカラにおいて語られるポンヤウンペと類似していることや、路地と同じような条件で生きている未知の人間(アイヌ)を知った。達男と若衆は北海道に戻り、鉱夫らが騒ぎを起こして待遇を変えさせようとしていることに賛成するが、いざやってみると、同調する人がなく、達男と若衆二人だけが暴れた結果、その場で逮捕された。出所した二人は、路地(コタン)に戻り、路地(コタン)のウップノオバが役人に殴られ、改善住宅に移れと命令されていた。そして、二人は鉱山の町に戻り、大規模な暴動を計画するが、やはり道庁や鉱山から金をもらった人たちに裏切られる。金の力で、達男は殺され、路地(コタン)に火がつけられてしまう。

以上のように、「半蔵の鳥」では、半蔵が、恨みを買って男に刺され、血をふきだして死ぬ。「六道の辻」では、三好が、燃え上がるように生きられぬ世を憐んで自殺する。「天狗の松」では、文彦が、同じ中本の一統の朋輩が死に、生気が抜けたかのように首を吊る。「天人五衰」では、オリエントの康が、渡航先のブラジルで革命運動に巻き込まれて死ぬ。「ラプラタ綺譚」では、新一郎が、女と家に引きこもり水銀を飲んで怪死する。最後に「カンナカムイの翼」では、達男が、北海道で朝鮮人工夫らの暴動をたすけようとするも、裏をかかれて殺される。佐藤康智が指摘したように、「高貴にして澱んだ血」を継ぐ中本の一統は、一様に歌舞音曲好きの色男で、何の因果か次々と若死にする⁵。

何れも若死にする若衆の住んだ「路地」は、如何にして「大逆事件」と繋がったのであろうか。

二、「大逆事件」の記憶

中上健次には「大逆事件」を真正面から書いた小説がないが、いくつかの小説の中で登場人物を説明するときのエピソードとして語られる「大逆」と、新宮出身の大石誠之助や佐藤春夫などに関する若干のエッセイがある。『千年の愉楽』以前或いは同時代の作品といえば、中上は「大逆事件」を、『岬』、『鳳仙花』、『地の果て 至上の時』の中にも、組み込んでいる。いわゆる、「紀州サーガ」における主人公「秋幸」にも組み込んでいる。「秋幸」という名の由来から、「紀州サーガ」における「大逆事件」の具体像を、柄谷が分析していた。まず、「大逆事件」そのもの、および柄谷の「秋幸」論について、少し考察を加えよう。

1. 「大逆事件」又は「秋幸」

糸屋寿雄の『大逆事件』（一九六〇、三一書房）や、大原慧の『幸徳秋水の思想と大逆事件』（一九七七、青木書店）、または田中信尚の『大逆事件 死と生の群像』などにに基づき、『明治時代史大辞典』にある「大逆事件」の項目は、次のように解説されている。やや長いですが、中上文学との関係を究明するための重要な主題なので、おもいきってスペースをさき、細かいところも省略せずに引用しておきたい。

（大逆事件は）明治天皇暗殺を計画したとして多数の社会主義者・無政府主義者が検挙・処刑された事件。その後、虎の門事件・朴烈事件・桜田事件とつづくが、一般的にはこの幸徳事件を大逆事件という。明治四十一年（一九〇八年）六月の赤旗事件により社会主義運動の逼塞化が強まると、内山愚童や管野スガ・宮下太吉らは天皇への対決姿勢を深めた。愚童は『（入獄記念）無政府共産』を秘密出版し、宮下は四十二年十一月長野県明科で爆裂弾の投擲実験を行い、四十三年一月管野・宮下・新村忠雄・古河力作は暗殺計画を練る。同年五月二十五日、警察の探索で宮下の爆裂弾意見が発覚したのを契機に、桂太郎内閣下の検察当局は刑法第七三条の大逆罪を適用して数百名に及ぶ社会主義者・無政府主義者の全国一斉検挙を行った。首謀者は幸徳秋水と予断され、幸徳が赤旗事件後、土佐から上京の途次に立寄り歓談した和歌山県新宮、大阪・神戸のグループ、さらに熊本の社会主義グループを中心に、拷問を伴う取調べにより、「十一月謀議」と「決死の士」が捏造された。同年八月末の韓国併合との直接的なつながりはないが、いずれも富国強兵の強権的国家体制の到達点の産物といえる、十一月九月、大審院特別刑事部での一審終審の開始が決定され、十二月十日には第一回の公判が非公開で開廷する。審理は約三週間のみで、平沼騏一郎大審院検事が「動機は信念」と断言するように思想が裁かれた。四十四年（一九一一年）一月十八日、鶴丈一郎裁判長は幸徳・管野ら二十四人を死刑、二人を爆発物取締罰則違反で懲役刑とする判決を下ろした。翌日、坂本清馬・高木顕明ら十二人が天皇の特赦で無期懲役に減刑された。死刑は二十四日と二十五日に執行された。この司法による強権的な弾圧に、欧米各国の社会主義者・無政府主義者は激しい抗議運動を展開した。無期懲役で服役中の自殺・病死もあった。遺族らは、逆徒の関係者として差別と迫害にさらされつづけた。社会主義運動は「冬の時代」を迎えた。昭和二十二年（一九四七）、生き残った四年が特赦となり、三十六年（一九六一）坂本清馬と森近運平の妹栄子が再審請求をおこすが、四十二年（一九六七）最高裁判所は特別抗告を棄却した。近年になり、愚童・高木顕明・峯尾節堂の各仏教宗門内での復権、高知県中村市議会による幸徳、和歌山県新宮市議会による大石誠之助らの復権決議がなされている。⁶（傍点は筆者）

大逆事件に先行する赤旗事件とは、「一九〇八年（明治四十一）六月二十二日東京神田の

錦輝館で行われた社会主義者山口義三出獄歓迎会の終了後、大杉栄らが「無政府共産」と記した赤旗を掲げ、屋外行進をしようとして、十数名が検挙された事件。錦輝館事件」である⁷。この事件から、「社会主義運動の逼塞化が強まる」ことになった。

森長英三郎は著書『禄亭大石誠之助』の冒頭で、「大逆事件」は、「明治の天皇制を中軸とする国家権力が、当時、擡頭しはじめるていた社会主義運動を根絶するために、宮下太吉ら数人による天皇暗殺の予備、陰謀が発覚した機会をとらえてフレーム・アップしたものである」と言っている⁸。再審請求の主任弁護人として、裁判事件としての「大逆事件」研究についての第一人者であるとも言われている森長は、さらにこう述べている。「大逆事件」によって、「天皇を現人神とする国家体制はさらに強化され、第二次世界大戦が終わるまでは、日本に民主的運動が起ることを抑圧するなど、いろいろの形で、はかり知れない暗い影響を与えつづけてきたものである」⁹。

「大逆事件」の社会背景には、日清戦争（中国名：甲午中日戦争、一八九四年～翌年）の戦勝国であった日本が清国から奪った賠償金で、日本が「軽工業から重工業へと日本工業が一つ次元を上げて」いき、社会が「不安になり始め」た頃で、「農村共同体の崩壊」や労働強化に対す「反発」があると、井上ひろしが指摘している¹⁰。そして、一九〇五年には、小森陽一の言うように、「日露戦争下の国内的不満と対外的なナショナリズムがねじれた形で原動力」になる日比谷焼打ち事件もある¹¹。一九〇八年十月、詔勅「戊申詔書」（日露戦争後、国民に上下一致、勤儉力行して国富増強にあたることを訴えた明治天皇によって発せられた詔書）が出された。それは、まさに現実に、国民に上下不一致という「現実」には詔書と「反対のことが起こっていた」のである。こういう国民の上下不一致の背景に、一九一〇年（明治四十三年）に起こった「大逆事件」においては、社会主義に代表される当時の進歩的な思想が押さえ込まれ、天皇制国家を再編成、強化するための反動的なイデオロギーが確立された「事件」もあるだろう。

「大逆事件」で、罪を被った二六名のうち、大石誠之助（医業）、成石平四郎（雑商）、成石平四郎（薬種売薬）、高木顕明（僧侶）、峰尾節堂（僧侶）、崎久保誓一（農業）の六名が熊野出身で、松本巖の言葉を借りれば、「徹底的にやられたのが熊野、特に新宮の者らであった」¹²。六名のうち、大石と成石平四郎が死刑にされた。新宮のもつ意味合いは突出して大きいのであろう。高澤秀次の指摘のように、新宮は「一つの町がこの事件によって、恐慌状態をきたした」のである¹³。

晩年の中上健次は、故郷新宮での文学講演で、「大逆事件を書いてみたい、正面に据えて書いてみたい」と述べている¹⁴。勝山輝彦によれば、中上健次は「大逆事件のことをよく口に」し、「大逆事件で小説を書く」とさえ断言していた¹⁵。調べてみれば、中上が早くも二十二歳の時、「大逆事件」に関心を示している。詩「四十五回転盤季節と若干の問題」（さんでジャーナル、一九六八年）で「そこが勃起したまま腹上死した大逆の志士、とそこが黙りたえつづけるもの云えぬ永山」と書いているように、被差別の代名詞「永山」と「大逆」と並列させていた¹⁶。そして、一九七八年、中上健次は新宮の春日地区に「部落青年文化会」を

組織し、月に一回のペースで佐木隆三、石原慎太郎、瀬戸内晴美（後は瀬戸内寂聴）らを、無報酬で呼び、被差別部落民の前に講演してもらった。高澤秀次の『中上健次事典 論考と取材日録』によれば、一九七八年五月二十七日、「部落青年文化会」の第四回講座のゲスト講師は、瀬戸内晴美である¹⁷。瀬戸内晴美（後の瀬戸内寂聴）自身の言葉によれば、中上の誘う以前に既に何度も新宮を訪れ、大逆事件のことを真正面から小説に書き込む第一人者である¹⁸。確かに、瀬戸内には、菅野スガという大学事件の中心になった女性の独白を書いた『遠い声』（新潮社、一九七〇年）があり、そして、第一回講座に招待された講師の佐木にも、後に「大逆」資料としてかなり有名な『小説大逆事件』（文藝春秋、二〇〇一年）がある。つまり、「大逆事件」は「部落青年文化会」のひとつの主題であると考えられる。勝山輝彦の指摘のように、中上は「かなり意識して講演会を人選」し、「春夫や啄木や沖野岩三郎らと同じように『大逆』を生涯引きずり続けた文学者の一人であったと間違いない」のである¹⁹。

中上健次には「大逆事件」を真正面から書く小説がないが、いくつかの小説の中で登場人物を説明するときのエピソードとして語られる「大逆」と、新宮出身の大石誠之助や佐藤春夫などに関する若干のエッセイがある。筆者の調べによれば、「大逆事件」と関係がある発言は、次のようなものである。エッセイ「大逆事件を求めて」（『朝日新聞』（大阪版）、一九七七年三月七日）、エッセイ「熱い血」（『銀座百点』、一九七七年四月）、評論「私の中の日本人——大石誠之助」（『波』、一九七七年四月）、ルポルタージュ「紀州 木の国・根の国物語（序章）」（『朝日ジャーナル』、一九七七年七月一日）、「紀州 木の国・根の国物語（新宮）」（『朝日ジャーナル』、一九七七年七月八日）、評論「物語の系譜 佐藤春夫」（『國文学』、一九七九年二月）である。上述の、大逆事件に関する中上の発言は、一九七七年（三十一歳）頃に集中している。

そして、『千年の愉楽』以前、あるいは同時代の作品といえ、中上は「大逆事件」を、『岬』（『文学界』、一九七五年十月）、『枯木灘』（『文藝』、一九七六年十月～一九七七年三月）、『鳳仙花』（『東京新聞』朝刊、一九七九年四月十五日～十月十六日）、『地の果て 至上の時』（新潮社、一九八三年四月）の中にも、組み込んでいる。いわば、「紀州サーガ」における主人公「秋幸」に組み込んでいる。

「秋幸」という名前由来は、「大逆事件」の中心人物幸徳秋水と関係がある、という観点をいち早く提示したのは、柄谷行人である²⁰。柄谷行人は自由民権運等を世界史の中に位置づけ、「秋幸＝幸徳秋水」という言葉を用いて、中上健次の闘争を世界中に拡散させていると論じている。柄谷によれば、「自由主義的」な階段と「帝国主義的」な階段とは、それぞれ「約六〇の周期」で、「交互に続く」という形を取る。一九九〇年以降に強まった新自由主義は、実際には「自由主義とは異質であり、帝国主義的だ」ということである。新自由主義の使う言葉は自己責任、勝ち組と負け組みなどであるように、そのイデオロギーは「帝国主義のイデオロギー」の「社会進化論」にすぎないという。つまり、「一八九〇年代と現在の類似性」が見えてくる。柄谷の、「一八九〇年代と現在の類似性」から、「秋幸＝幸徳秋水」

という点において類推的な関係にある、という指摘は正鵠を射ている。

「秋幸」という名の由来から、「紀州サーガ」における「大逆事件」の具体像を、柄谷が分析したが、『千年の愉楽』における「大逆事件」の具体像は、どのようになっているのであろう。以下考察しておく。

2. 『千年の愉楽』における「大逆事件」

『千年の愉楽』の中には、「大逆事件」関係の人が直接書かれたのが二箇所ある。第一篇におかれた「半蔵の鳥」での、半蔵が幽霊に出会ったとされるシーンがその一箇所である。半蔵は「浮島の遊廓の跡に住む後家に会いに外へ出て路地から近道をしようとして山の細い道を歩き出した」ところ、「ふと首筋に誰かが触れたような寒気」がし、「何の気なしに後を振り返ってみる」と、「坊主頭の男が一人、首をうなだれて立っている」。考えてみれば、半蔵の歩く「近道」とは、「路地」と町との境になった山にある「細い道」なので、「路地」から外へ出ようとする半蔵の振り返って見た「首をうなだれ」た「坊主頭」は、「路地」の者にほかならない。オリウノオバは幽霊に出会った半蔵の話聞き、半蔵を慰めている。

オリウノオバはその話を聞き、礼如さんが折に触れて言う浄泉寺の前の代の和尚だろうと思い、あの人なら何のくったくもない半蔵に姿を見せるだろうと一人うなずいたのだった。前の和尚は半蔵の親の彦之助やキクドウら路地の者を集めて、実のところ怖ろしい悪人だった者を他から呼び話をきかせ天子様に弓を引く計画をしたとして監獄に入れられ首をくぐられたと聴いたが、その和尚なら路地の者らがどうなったのか心配で路地の周りをさまよいかねない、とオリウノオバは考え、丁度、通りかかった半蔵を呼びとめ、「幽霊みた言うて、怖ろしことないど」と言った。(『全集5』一六頁、傍点は筆者)

オリウノオバは、その幽霊は「天子様に弓を引く計画をしたとして監獄に入れられ首をくぐられた」が、まだ「路地の者ら」のことを「心配」し、「路地の周りをさまよ」う「浄泉寺の前の代の和尚」だとみなしている。「浄泉寺の前の代の和尚」とは、大逆事件で逮捕され獄中で縊死した新宮の僧高木顕明をさしていることはいままでもない。「路地」を心配する幽霊だとすれば、怖いこともないと言うオリウノオバにとって、半蔵が「くったくもない」だから、幽霊の姿を見せられてしまう。

そして、もう一箇所は、最終篇「カンナカムイの翼」の中で、達男が再び北海道に行った直後のシーンである。達男から北海道にも「路地」があると知ったオリウノオバは、「自分が達男とそっくり入れ代る事」が出来るとすれば、北海道に点在する「路地」を「理由なく襲いかかってくる者ら」に対し、「弓矢を用意し、鉄砲を用意し、爆裂弾を用意して、戦争をするだろう」と考えつめている。「大逆事件」は「路地」を巻き込んだ戦争だと次のように書かれている。

戦争はオリュウノオバの過激な発想で、礼如さんは、「オリュウ、またそういう事を言う」となだめるに決っているが、礼如さんが突然、毛坊主になったのも元はと言えば路地を巻き込んだ戦争のせいだったと言え言える。というのも、礼如さんもオリュウノオバも路地の者らの寺の浄泉寺へ四国から来た者の説教を聞きに行ったが、その浄泉寺の和尚の高木顕明が大石毒取らの仲間として天子様暗殺謀議で逮捕され処刑された。寺は和尚が不在となり、仏の供養もないまま放り置かれた。礼如さんが処刑された和尚のかわりに路地をまわったが、それも戦争のせいだと言え言える。戦争などいまさら恐れる事などなかった。（『全集 5』一七三頁、傍点は筆者）

再確認となるが、『千年の愉楽』の第一篇「半蔵の鳥」は、一九八〇年『文藝』七月号に掲載された。第一篇から第四篇「天人五衰」までは、各々およそ二ヶ月の間を持って掲載されているが、第五篇「ラプラタ綺譚」は、ほぼ一年後、一九八二年「文藝」一号に、そして最終篇「カンナカムイの翼」は、その三ヶ月後、一九八二年『文藝』四月号に掲載される。このようにして、最終篇が初篇の約二年後に発表されたものであるが、初篇の「半蔵の鳥」と最終篇の「カンナカムイの翼」は、呼応しあうように、「大逆事件」を喚起させている。いわば、『千年の愉楽』という作品には「大逆事件」の影が深く落とされているのであろう。

「カンナカムイの翼」での「大石毒取」とは、大逆事件で新宮グループのリーダーとして処刑された大石誠之助（一八六七～一九一一）のことを指す。大石は、「一八九〇年は渡米し、オレゴン州立大学・モンリオール大学で医学を学び、九六年に帰国」して同年に、新宮町で医院を開業し、「貧民、とくに被差別民の面倒を見たので、毒取る（ドクトル）と慕われた」という。その後の一八九九年、「伝染病研究のためシンガポール及びインドのボンベイ大学に留学」し、特に、「ボンベイ滞在中に、カースト制の実態を知り、社会主義の思想に目覚めた」と言われている。

このようにして、『千年の愉楽』において、高木顕明と大石誠之助が再喚起され、「大逆事件」が「路地を巻き込んだ戦争」として描かれている。「大逆事件」が「路地」に対する「戦争」であるという中上の考えは、佐藤春夫論にもみられる。

3. 「大逆事件」又は「佐藤春夫」

「大逆事件」で処刑された故郷新宮の大石誠之助に関し、当時二十歳の佐藤春夫は「愚者の死」を題にして次のような詩を作った。

愚者の死

千九百十一年一月二十三日／大石誠之助は殺されたり／げに厳肅なる多数者の規約を／裏切る者は殺さるべきかな／死を賭して遊戯を思ひ／民俗の歴史を知らず／日

本人ならざる者／愚なる者は殺されたり／「偽より出でし真実なり」と／絞首台上の一語その愚を極む／われの郷里は紀州新宮／渠の郷里もわれの町／聞く、渠が郷里にして／わが郷里なる／紀州新宮の町は恐ろせりと／うべさかしかる商人の町は歎かん／——町民は慎めよ／教師らは国の歴史を更にまた説けよ。（『佐藤春夫全集』）

佐藤春夫研究専門家の山中千春は著書『佐藤春夫と大逆事件』で、佐藤春夫の「愚者の死」をめぐる興味深い論争を提示する。山中によれば、「日本人ならざる者／愚かなる者は殺されたり」と歌った佐藤の詩については、大岡信や中村光夫らによる「誠之助の死を悼み、国家権力に憤る反語」という解釈が定説となる一方で、森長英三郎、野口存弥、中上健次らの「字義通り解釈すべきであって反語ではない」という批判が対立している²¹。

山中自身はどのような観点を持つのかというと、山中は、佐藤春夫の小説「美しい町」²²を取りあげ、現実の空間から逃れ去るために抗争されたユートピアが、「大逆事件」の痕跡をありありととどめたものとなってしまおうというこのイロニーのうちに、「美しい町」が「大逆事件」小説であると規定している。山中は、「美しい町」を、『愚者の死』を書いた詩人が、明治四四年一月十八日、大逆事件の死刑判決の報道に戦慄した、人間性の奥深くに食い入る底知れない闇の中からはか生まれぬ、潔癖なまでの美意識の結晶であったようにさえ思える」と評している。

佐藤春夫の詩における「反語」であるかどうかの対立に露呈した断層の意味は、一体何を示唆しているのであろう。梅森直之は書評「山中千春著『佐藤春夫と大逆事件』」²³で、「大岡や中村らの文学者が、あくまでの「愚者の死」という作品の批評に向かうのに対し、森長や野口、中上らは、「愚者の死」を、佐藤春夫と「大逆事件」との生涯にわたる関係において批評の対象」としている。たしかに、梅森の指摘したように、「若き日に「大逆事件」に衝撃を受け大石の死を悼んだことも、文壇のエスタブリッシュメントとして戦後文化勲章を受け取ったことも、ともにこの作家の「真実」であった」とすれば、その批評は、対象そのものうちではなく、「作家と対話する批評家の位置」によって規定されると言わねばならない。

批評家としての中上健次は、佐藤春夫と如何にして対話しているのであろうか。いわば、中上は、佐藤の「愚者の死」をどのように捉え、中上自身の「位置」を示すのであろうか。彼は「物語の系譜 佐藤春夫」²⁴において、それを明らかにしている。中上は、「物語の系譜 佐藤春夫」の冒頭で、上記の佐藤の「愚者の死」という詩を全文引用して、大石の死が「新宮や新宮出身の者には、はかりしれないほど多くの影響を与え」、「大逆事件」は「アメリカの南の者における南北戦争の影響力と同じ」であると強調している。また、中上自身も「同様で」かなり影響を受けたと認めながら、「春夫が、二十歳の時、出郷した東京で知った同郷の愚者の死によって象徴される明治四十四年の大逆事件は、何度目かの、紀州という闇の国家の〈定められた規約（国家）〉との抵触、戦争であったと言える」と述べた上、「春夫を読んで、春夫が絶えずその最初の転向につまずいている事に気づく（傍点は筆者）」と

結論した。「転向」というのは、昭和時代に、共産主義を棄てた人々に冠せられていた専有名詞であるが、中上の言う佐藤春夫の「転向」とは、佐藤の転身に違いない。中上はさらに、「春夫は、紀州に関して、『破戒』の丑松の状態にいた」と論じている。「佐藤春夫＝丑松」という考え方は、中上健次の「位置」を規定しているのであろう。中上によれば、「〈多数者の規約〉」は「春夫の敗北の譜」である。最後に、中上は次のような結論を出している。

春夫はその都たる紀州新宮の医家の長男である。子供の頃から、診察に訪れるそのなに事にも過激な男らを見、話をきき育ったわけである。春夫の受けたどんな教育よりも、その医家の診察室や待ち合い室で眼にし耳にするものが、文学者としての春夫をはぐくんだが、春夫はそれ故に、男らの黙して語らぬ部分、つまり熊野という血糊と血泥と膿のブラックホールを見過したのである。私の、春夫への苛立ちはそこに尽きる。その苛立ちに比べれば春夫が他の作家らに立ち混じって戦争を賛え、大政翼賛会に参加したという事に対する苛立ちはまだ薄い。その軍国主義化した国家という物語、戦争というドラマは、春夫がかつて経験した物語の戦争より意味が浅いのである。戦後に紀州新宮に生まれた私に、第二次世界大戦、太平洋戦争は、存在しなかったとさえ思えるのである。というのは、熊野、紀州新宮が経験した戦争とはあの大逆事件でしかない。過ぐる大戦で、人は徴兵され、飢えたが、紀州新宮が壊滅状態になったのは大逆事件であり、終戦直後の南海大震災である。空爆ではやられなかったのに、震災で家という家は倒壊し燃え上った。²⁵（傍点は筆者）

いわば、「新宮の出身である春夫において、大逆事件の体験は根の深いものであり、大正の春夫の文学活動には事件の衝撃の反動と言えるような側面」²⁶があり、ほとんどの人が黙り込んでいる情勢に、反語であろうか、そうでもないであろうか、佐藤の詩には勇気があると思う。にもかかわらず、「熊野という血糊と血泥と膿のブラックホール」をあえて見ない佐藤を、中上は唾棄するのである。「新宮の内部」には、「大逆事件の爪痕がそのまま残った」のである。中でも、それは「路地」に濃厚に残った。中上健次が新宮高校時代に小説家を目指したとき、最も意識したのは、当然、旧制新宮中学出身の佐藤春夫だった。中上は佐藤春夫があえて見なかったものを見ようとした。

翻って、「新宮の内部」には「大逆事件の爪痕がそのまま残った」こと、「大逆事件」が「路地」に対する「戦争」であることと考へ、さらには、佐藤春夫を唾棄する以上、中上健次は如何にして、「大逆事件」の影響と拮抗するのであろうか。次では、『千年の愉楽』における、中上の脱構築の方法を論じる。

三、帝国を脱構築する

高澤秀次は、著書『文学者たちの大逆事件と韓国併合』で、日本近代史の「闇」の部分、

おぞましい暗部を象徴している「大逆事件」と「韓国併合」という二つの事件を、同時に日本近代史の本質的な認識にとって避けて通ることの出来ない大きな問題として捉えている。高澤によれば、「社会主義者・幸徳秋水を首謀者とする大逆の企てをフレームアップしたのは、近代国家の内部規律引き締めのためのいわば〈通過儀礼〉」であり、「大日本帝国」が一個の閉じた内部として確立されるために必要であった外部、すなわち内部から排除されるべき「日本人ならざる者」という「ネガティブな表象」を作り出すための企てだったとする²⁷。「大逆事件」の直後からは、「被差別部落に関する行政側の実態調査が本格化、上からの融和運動も急速に組織されるなど、「部落」が危険分子と結託する芽を、事前に摘み取っておこうという動きが活発化している」と、高澤は論じている²⁸。換言すれば、「大逆事件」と「韓国併合」は、大日本帝国という内部が外部を創出する過程において重なり合いながら、「ベクトルとしてはちょうど反対を向く形で相補関係」にある²⁹。

「大逆事件」と「韓国併合」は、「大日本帝国」の対内と対外の関係にあるという高澤論は、柄谷の「秋幸＝幸徳秋水」論を正当に発展させたものとして、まことに示唆に富むものである。高澤はいままでなかった斬新な切り口を通してアプローチすることにより、新宮の部落問題に対する文学者たちの認識を考察している。

高澤論を踏まえたうえで改めて考えてみたいのは、高澤の言葉を借りれば、「ベクトルとしてはちょうど反対を向く形で相補関係」、つまり、「大日本帝国」の対内と対外の関係について、中上健次は如何に対応しているのであろうか、ということである。換言すれば、『千年の愉楽』における「路地」の人たちは、「ベクトル」の対内の「大逆事件」、または「ベクトル」の対外の侵略戦争に対し、如何に拮抗しているのであろうか、ということである。言ってみれば、『千年の愉楽』において、「性」のメタファー、または語り部の重層化は、対内の拮抗で、北海道の暴動抗争やブラジルの革命運動を巻き込む暴力の輸出、革命の輸出は、対外の拮抗ではないであろうか。

「大日本帝国」は、「内部規律引き締め」、そして侵略戦争によって「外部を創出する」ものだとすれば、「路地」は、帝国「内部」の「物語＝法・制度」を問いつめ、帝国「外部」の革命運動を支援するものであろう。つまり、「路地」は「大日本帝国」を脱構築するものではないかと思う。まず、「性」についての言説から検討してみよう。

1. 「性」についての言説

「路地」の若者たちを束ねる「中本」という命名の絶妙さについて、渡部直己は著書『中上健次論：愛しさについて』でつぎのように述べている。

中上にならってもっと近々と目を凝らすが良い。「日本」という名の「日」の字を横転させ、その中央の一線をさらに上下に貫き延ばせば、果たして「中」の一文字となるではないか。³⁰（傍点は原文）

渡部はさらに、「中本」という命名が中上健次という「小説家の叛意」であると結論している³¹。上述の渡部の解説は、決して過剰な解説ではない。「中本」という命名の由来ではないが、中上自身は、一九七七年七月から翌年一月まで、「朝日ジャーナル」に掲載したルポルタージュ「紀州 木の国・根の国物語」の序章で、紀州、紀伊の「紀」の一文字を次のように分光させている。

この日本において、差別が日本的自然の生みだすものであるなら、日本における小説の構造、文化の構造は同時に差別の構造でもあろう。紀州、紀伊、たとえば何の変哲もないこの地名を指す言葉である。たとえば、これに、差別、被差別という回路をつないでみると、紀は、記であり、木、気、鬼と分光される。紀州とは鬼州、鬼らのバッコするところである。鬼とはまた闇のもの、陰、オンの変化したものであろうが、私は、むしろその闇から日なたに抜け出た取りすまし顔の者と取る。

こういう読み方はどうであろう？

陰→鬼→キ→気→木

もちろん半分遊びの類推であるが、その類推を不自然には感じさせないのが、紀州という土地であり、紀伊というところである。大逆事件に新宮の高木顕明の浄泉寺が登場する。そこで、檀家の被差別部落民に、幸徳秋水をむかえて紀州の新思想者やモダニストらが、クロポトキンやバクーニンの名前を出して演説をぶつ姿を今、私は想像する。（『全集 14』四八六～四八七頁）

「紀」の一文字から、「陰」や「鬼」など、さらには、大逆事件まで分光されるという中上健次の論理から類推すれば、「中本」という命名は、被差別部落民出身である中上自身の苗字の「中上」と、スメラミコトの国である「日本」という名詞とが混じり合っているものと考えすることは、十分可能であろう。渡部の指摘している「日」の字の「中央の一線」を「横転させ」、さらに「上下に貫き延ばせ」ることは、中上健次という「小説家の叛意」にほかならない。

翻って、『千年の愉楽』の第一篇である「半蔵の鳥」というタイトルの命名について、上述のように、中上健次という「小説家の叛意」が含まれていると思う。下記の引用は、半蔵がオリウノオバをからかうシーンである。

オリウノオバも目にした事がなかったので当てずっぽうに「こんな鳥やろ」と鶏の雛ほどの大きさをつくると、半蔵はまた笑ってから、「わがらもう使わんさかこんなに細うなってしもたやがい？もうあかん」と指の先を丸めて言う。（『全集 5』二二頁）

半蔵は、オリウノオバが手で作った鳥の形を、オリウノオバの夫である礼如の性器になぞらえさせている。いわば、「鳥＝性」が半蔵の口によって顕現化された。半蔵が「男の

性そのもの」(『全集 5』二三頁)だとすれば、半蔵の飼っている「鳥=性」も成立するの
であろう。事実として、半蔵の飼っている鳥は「性」と切っても切られない関係がある。半蔵
の飼っている鳥の鶯の由来について、中上は次のように書いている。

その半蔵に女が、「このあいだ、他からもろたものやけど、あんたによ鳴く鶯を
渡したなア」と言い、その鶯を女の家を持ってきてくれたのがその男だと言った。半
蔵が、「そうか」とうなずくと、男は今始めて耳にしたというように「あの鶯があ
んとどこで飼われとるんかい？」と訊いた。鶯に名前をつけたのは女だったが、雛の
時に竹藪の巣から取り出してだみ声の癖をつけぬよう箱の中に入れて、競鳴会で金
賞を取った鳥の持ち主に頼み込んでそばに置かせてもらい、芸者が師匠から三味を
習ったり唄を習ったりするように声の張り方を真似させたのは男だった。半蔵はそ
の男の顔をあらためて見つめた。(『全集 5』二六頁)

言ってみれば、町の男、浮島の後家、「路地」の半蔵という三角の情愛関係の中において、
天鼓という名鶯を「仕込んだ」のは町の男である。その男の「一所懸命つくった鶯」を浮島
の後家に差し出し、そして、その女は「半蔵に献上した」、ということである(『全集 5』二
六頁)。女を遊び、女に遊ばれた半蔵は普段、この浮島の後家と情交する時、浮島の後家に
「後手に縛」られ、そして半蔵みずから「女を真似て声をあげる」(『全集 5』二〇頁)。つ
まり、男としての半蔵は、いつも女としての浮島の後家にやられていたのである。しかし、
今回鶯の由来を聞かせた半蔵は、「女ではなくその男をいたぶってみたい」なり、町の男を
呼んで浮島の後家に「二人で天鼓のように仕込んでやろう」と持ちかける。三人の情交で、
最初は、浮島の後家を「女が半蔵を縛るやり方で後手に紐で」縛って、町の男が浮島の後家
をやるのであったが、最後は、浮島の後家が町の男を「半蔵にするように」縛り、半蔵はそ
の男の「尻穴」に「刃物」のように当てる。そして、「一時そうやっていたぶってそのまま
女の方へ鞍がえすると女はまるで天鼓のように声をあげる」(『全集 5』二七頁)。このよ
うにして、町の男が浮島の後家をやり、浮島の後家が「路地」の半蔵をやるという関係は、天
鼓という名の鳥、つまり鶯の献上関係によって倒置される。いわば、「路地」の半蔵は、町
の男をやり、浮島の後家をやるというようになったのである。ここまでは、「鳥=性」が間
違えなく成立し、タイトル「半蔵の鳥」を、「半蔵の性」、あるいは「半蔵という性」に置換
することも可能であろう。

三人の情交が終わり、半蔵と町の男が別れる場面は、次のように書かれている。

半蔵がそう言うと男は切端つまった顔で一緒に帰るから待ってくれと言うのだっ
た。方向が違う、浮島の遊廓の脇から山に上って路地へ降りると言うと、男は心底お
どろいた顔をして「長山から来とるのか」と路地の別名を言い、牛の皮はぎやら下駄
なおしやら籠編みらが入り混っている長山から兄さんは来ていたのかと感心するよ

うに繰り返し、急に自分が優位にでも立ったように「男前やのう」と言う。(『全集 5』二八頁、傍点は筆者)

半蔵に尻の穴を突かれた町の男は、いざ現実に戻ると、「路地」の半蔵より「優位にでも立ったように」なる。その逆説として、「路地」の半蔵が町の男をやることにより、つまり「性」を通して、その「優位」の関係を解消するのであろう。

主人公半蔵が飼っていた鳥は、天鼓という名の鶯であるが、谷崎潤一郎の名作『春琴抄』(一九三三年)にも出ている。盲目の三味線奏者・春琴に丁稚の佐助が献身的に仕えていく物語の中で、マゾヒズムを超越した本質的な耽美主義を描く『春琴抄』に、鶯は次のように登場している。

彼女はまた非常にお洒落であつた失明以来鏡を覗いたことはなくとも己れの容色については並々ならぬ自信があり衣類や髪飾りの配合等に苦勞することは眼明きと同じであつた思うに記憶力の強い彼女は九歳の時の己れの顔立ちを長く覚えていたのであろうしその上世間の評判や人々のお世辞が始終耳に這入るので自分の器量のすぐれていることはよく承知していたのであるされば化粧に浮身を襲ふことは大抵でなかつた。常に鶯を飼つていて糞を糠に交ぜて使ひまた糸瓜の水を珍重し顔や手足がつるつる滑るようであれば気持を悪がり地肌の荒れるのを最も忌んだ総べて絃楽器を弾く者は絃を押える必要上左手の指の爪の生え加減を気にするものだが(後略)。³² (傍点は筆者)

鶯のフンで、美人の顔を洗うというのは、スカトロジエ的面白さがある。『千年の愉楽』第五篇「ラプラタ綺譚」で、天女の生まれ変わりのような声をする名鳥の鶯のフンで顔を洗うと、玉肌を保つことができると信じ、新一郎の家に鶯のフンをもらう芸妓がいる。そして、『春琴抄』で、春琴の飼っている一番優秀な鶯も「天鼓」という名をつけられていたが、半蔵の鳥の名も「天鼓」である。さらに、『春琴抄』における句読点や改行を大胆に省略した特徴は、『千年の愉楽』も似ている。谷崎から中上が影響を受けているのは明らかである。つまり、鶯のフンという発想は、中上健次の発明した装置ではなく、谷崎から借りたものであろう。しかし、中上健次はエッセイ「物語の系譜 谷崎潤一郎」の冒頭で、「長い間畏敬し続け」てきた「物語の作家谷崎潤一郎」が「敵だ」とあらかじめ断り、終わりのところではさらに、「法・制度の作家谷崎潤一郎は近代文学唯一の差別主義者」だと断定し、その作品を「見るのもいやだという不快感を持つ」と強く否定している³³。中上健次は、なぜこれほど谷崎のことに拘っているのであろうか。同じエッセイで、中上は次のように述べている。

谷崎は鶯の糞→鶯→鶯の(人意的に仕込まれた)声→天鼓と鶯という鳥の使い方を軌道修整している。この軌道修整が谷崎という作家の法・制度への意志を浮きぼりにし

ていると私は取る。³⁴ (傍点は筆者)

谷崎の「軌道修整」とは、中上の論理によれば、「法・制度に拝跪する」ことである。つまり、『春琴抄』での最初の登場において、鶯のフンで美女が顔を洗うというイメージが「確かに耽美的で面白いが何やら実用的でありすぎるし糞にスカトロジエ的面白さはある」が、「軌道修整」により、鶯の声となると、鶯は結局「歌枕的なもの、修辭的なもの」として顕われ、鶯が「法華経と鳴く事」や「梅に配される」こと、いわゆる「絵画や和歌の定石」のようなものに回収される。ゆえに、中上は不満なのである。

中上健次は、谷崎に用いられた材料の「鶯の糞」や「鶯の声」、さらには鶯の名の「天鼓」を『千年の愉楽』に持ち込み、再構成させた。『千年の愉楽』の中に、鶯の登場は第一篇「半蔵の鳥」の冒頭の部分に置かれていて、次のように書かれている。

夏芙蓉は暮れ時に花をひらきはじめて日が昇る頃一夜だけの命を終えてしぼむので金色の小鳥が蜜を吸いに来た鳴き声を耳にするたびに、幻のようにかき消えた夜をおしむのか、明るい日の昼を喜ぶのか問うてもみたい気がした。オリウノオバの耳にその金色の小鳥の鳴き声は、半蔵が飼っていた天鼓という名の鶯の鳴き声のように響くのだった。(『全集 5』十一頁、傍点は筆者)

つまり、『千年の愉楽』においては、鶯はまず、鳴き声と共に描写されている。そして、「天鼓」という鶯の仕込みについて、「半蔵の鳥」の後半部にこう説明されている。「雛の時に竹藪の巣から取り出し、まだ「声の癖をつけ」ていないうちに、「箱の中に入れ」、「競鳴会で金賞を取った鳥の持ち主に頼み込んでそばに置かせ」て、「芸者が師匠から三味を習ったり唄を習ったりするように声の張り方を真似させた」(『全集 5』二六頁)。また、鶯のフンで芸妓の顔を洗うことは、第五篇「ラプラタ綺譚」に描写されている。

このようにして、鶯は、「天鼓と鶯という鳥→鶯の〈人意的に仕込まれた〉声→鶯→鶯の糞」という順番で書かれている。これは、谷崎の「軌道修整」の痕跡とも言える「鶯の糞→鶯→鶯の〈人意的に仕込まれた〉声→天鼓と鶯という鳥」とは、正反対の扱い方である。言ってみれば、中上健次という「小説家の叛意」とは、「鳥＝性」を通して、差別に関する「優位」関係を解消するだけでなく、「鳥＝性」を通して、「法・制度に拝跪する」谷崎を批判し、「物語＝法・制度」を批判するのである。中上健次は自身が明言したように、「あらゆるものに遍在」する「法、制度つまり物語」を、「性としてとらえる」³⁵。だが、「性」から、遍在する「物語＝法・制度」を論ずる中上の考え方はどこからきたのであろう。

中上はかつて、評論「都はるみに捧げる 芸能原論」で、ミシェル・フーコー (Michel Foucault、一九二六～一九八四) を論じたことがある。フーコーを「現代フランスの知性の代表」として捉えている中上健次によれば、「野蛮だと思われていた社会」も「ヨーロッパ社会と形は違うが同じ生産性のある手段」を持ち、「同じ文明構造」を持っているというの

を、「ホモ・セクシュアル」であるフーコーは発見した。中上健次は次のように述べている。

彼（フーコー）が見つけたのは、ヘテロ社会とホモ社会っていうことで言えば、ヘテロ社会もホモ社会も同じ構造を持っているということかもしれない。あるいは、そういうものに対する発見の眼みたいな、狂気なら狂気を見つけたってこと。

その狂気が何によって作られているかという点、やっぱり制度なんだ。たとえば、これをひとつ社会をずらすと、ある時、神の声が聞こえる、幻聴が聞こえて騒いでる、と言い出したとしても、精神病院に收容されずに巫女としての道を開くということも出来る。それを神の声と言わず、狂気と言う時、実のところ社会から異分子として排除するという事なんだ。文化として非常にうまく排除しているわけだ。制度として別な領域に住ませるといふ。単純に言うと、狂気とか病気とかみんな発見されて制度化していったものだ。ミシェル・フーコーはそういうことの考え方の契機を与えてくれた人なんだよ。³⁶（傍点は筆者）

フーコーが「狂気を見つけた」と中上は言っている。その「狂気」は、中上の言葉を借りれば、「制度」によって「作られている」。フーコーは「ヘテロ社会とホモ社会」つまり、「性」に関する「考え方の契機」を中上健次に与えたのである。

狂気と理性、知と権力などについて批判的歴史的研究を行なった哲学者フーコーは、著書『性の歴史 I 知への意志』で、次のように述べている。

性がこれほど厳格に抑圧されているのは、とりもなおさず性が、全般的でかつ強化された労働への組み込みという事態と相容れないからである。組織的に労働力を搾取している時代に、それが快楽の中で四散するなどということを人は許容でいたであろうか。³⁷

フーコーによると、「性的抑圧」は、「禁止と存在無視と沈黙とに定められたもの」である。ゆえに、ただ性について語る事、性の抑圧について語る事だけで、「ラディカルな侵犯行為」になり、「権力の外」に身を置き、「法」を揺がし、「未来の自由」を先取りする³⁸。つまり、「性についての言説」が、本質的に「権力のメカニズム」なのである³⁹。これに関連して、オルゴン（Orgone）理論の提唱者であるウィルヘルム・ライヒ（Wilhelm Reich、一八九七年～一九五七年）も、「ドイツ人がナチズムに引き寄せられた原因」を精神分析の方法で分析し、「権威主義的家族イデオロギー」と「性的抑圧」を見出した⁴⁰。

このようにして、中上健次の『千年の愉楽』における「性についての言説」も、ライヒの言う「性的抑圧」のメカニズムや、フーコーの言う「権力のメカニズム」にはかならない。中上は「鳥＝性」という構造を通して、差別に関する「優位」関係を解消したり、「法・制度に拝跪する」谷崎を批判したり、乃至は「物語＝法・制度」を批判したりする。つまり、

「性」を語ることにより、「権力の外」に身を置き、「法」を揺がす。それは、中上健次という「小説家の叛意」であろう。

帝国を「内部」から脱構築するもうひとつの方法は、「物語＝法・制度」そのものを問いつめることである。『千年の愉楽』に存在する複合的な語り手や、時間のワープは、中上の「物語」論であり、「差別」の問題を「差異」の問題に回収させる手段でもある。以下、それについて考察を述べる。

2. 複合的な語り手、複合的な時間

『千年の愉楽』の六編の物語はいずれも主に、中本の一統の男達のいきざまがオリュウノオバという老婆の回想の形で語られている。ただし、すでに高山京子に指摘されたように、各篇の主人公である「中本の一統」の男たちの「生から死までを見届ける役割」を担っているオリュウノオバは、『千年の愉楽』という「物語世界全体に遍在」するが、「物語の語り手に類するもの」とされながらも、「なかなかそうは一筋縄にいかない」⁴¹。

その痕跡は、中上健次のテキスト修正からも窺える。河出書房新社発行の雑誌『文藝』に初出した『千年の愉楽』の各篇は、単行本収録に当たって、中上健次によりの修正が行われていた。『全集5』解題で宗像和重は次のように述べている。

初出では読点で続いていた長いセンテンスを、句点で二つのセンテンスに区切っている例がめだつ。そのほか、大半の作品では、若干の字句の修正が行われている程度だが、最後の「カンナカムイの翼」では改稿の跡が著しい。とくに初出の改行を追い込みに変えて、一つのパラグラフを長めにする傾向があり、また「その光景を誰も見た者はなかった。……オリュウノオバを想像する。」のように、新たに書き加えられた箇所も数カ所ある。⁴²

最終篇「カンナカムイの翼」で中上により、新たに書き加えられた「オリュウノオバを想像する」と、前の五篇の「オリュウノオバは想像する」とは、本質的な違いがある。言ってみれば、前の五編はすべて床についたきりのオリュウノオバが昔の路地を回想する形で物語が始められるが、第六篇は床についたきりのオリュウノオバを「路地の者が想像」しているところから始まるのである。中村雅也の論文「『千年の愉楽』にみる物語の構造と生成」⁴³によれば、『千年の愉楽』という物語の中において、「現在」として「匿名の語り手」が伝えるのも中上健次ではなく、それは、前の五編の場合、「臨終の床で昔を回想するオリュウノオバ」であり、第六篇ではオリュウノオバの通夜に集まって「オリュウノオバの話をする路地の者たち」である。つまり、第六篇「カンナカムイの翼」で展開してゆく話は、路地の者たちが語るオリュウノオバの思い出であり、オリュウノオバが「折りにふれて話していた」ことを、こんな話も聞いたことがあると話し、こんなことも考えたと言ったと言い、オリュ

ウノオバならああもしこうも考えただろうと思ひ巡らして、意識の中まで見透すように頭につまった「摩天楼のように入り組んだ景色」を想像して話し合っているものと思われる。

上述のように、『千年の愉楽』に収められた六編の物語は極めて複雑な視点で書かれ、作者という第一の語り手とオリウノオバという第二の語り手を持つほか、場合によっては第三、第四の語り手（「路地」の人）も持つという特殊な構造になっていることであると言っても間違いがないであろう。

そして、『千年の愉楽』において、何重にも重なる「語り手」が存在しているだけではなく、テキストそのものも、高山京子がかつて指摘しているように、「全篇、句読点が少なく一文の長い、動作の主体も判別しにくい、きわめて難解な文章で埋め尽くされている」⁴⁴。筆者の統計した『千年の愉楽』各篇における文の数と文の文字数一覧表⁴⁵によれば、全篇において、一文の平均文字数は九十七字であり、一番長い文の文字数は、四百四十字となっている。その一番長い文は、「天人五衰」に描写されたもので、あえて引用して見よう。

離れにくたびれた顔の男と女二人の客がいて肥った姉は応対に疲れ切ったような顔をあげてオリエントの康を見て、「康ちゃんかア」と興味をひかぬという声を出してから「今日はアカンのや、神様の声が聞こえてきえへんのや」と客の女にけだるげに言い、女の一人が「そうですかア」と言うと筆を持ってみてから「アカン」とつぶやいてポトリと落とし「あんた何どにたたられとるのと違うか、戦死した者おらへんか？」と言うのに女が、「子供爆弾で死んだ」とこれもけだるげにつぶやくと、急に勢いついたように「そやろ、それでやね、あんたがこれからどんな事したらええやろと言うても神様も仏さんも答えんし、どこで生きていたらええやろうと言うてもわからんと言うだけで教えてくれへんのや」と言い、女が涙を浮かべるとカサにかかったように「ちゃんとお参りしてないやろ、石塔のひとつも切ったらんとただ寒いところに一人置いとるんやろ。ああ母さん、来てほしよ、ここに来てわけも知らんと死んだんやさかなぐさめて欲しよ」と歌うようにつぶやく。（『全集5』一三二～一三三頁、下線は筆者）

上記の引用した一文を分析して見ると、「姉」（二重下線の部分）は、一〇の動作（一重下線の部分）を行う主体である。なによりも、一文の中に、三つの別の主語の構文（波線の下線の部分）が組み込まれている。中上健次はなぜ、こういうような「動作の主体も判別しにくい、きわめて難解な文章」を書いたのであろうか。これは、高山京子の言う「そのまま、複雑な地縁と血縁で絡み合う路地そのものを象徴している」ものであり⁴⁶、永島貴吉の言う「語り手の覚醒」であり⁴⁷、井口時男の言う「視線」の「相対化」でもある⁴⁸。そして、『千年の愉楽』の文体に対し、江藤淳は次のように述べている。

この文体は、何であるとしても決して分析的な“真実”を求めようとする文体である

はずがない。いわば、中上健次氏は、『千年の愉楽』で、文字による文節化をしりぞけ、それに替うるに声による文節化をもってしようとした。⁴⁹（傍点は原文）

江藤の言っているのは、「文を限りなく音楽の旋律のようなものに近づけ、それを文字によって、記録しようとする」ことである。換言すれば、中上健次の試みは、「文字に記された法」によって「文節化」された「日常的秩序の拘束」から、「無限に解放しよう」とするのである。⁵⁰ただし、江藤は本居宣長の論説を引用し、中上健次の文体が、宣長の「上ツ代」筆者は「言伝へ」に「似ている」と主張している⁵¹。中上が宣長に「似ている」という点について、そうではないと思う。中上健次はなぜこの独特な文体を書くのかについては、すでに『千年の愉楽』を書き出す前の一九七七年七月から翌年一月まで、「朝日ジャーナル」に連載した「紀州 木の国・根の国物語」より、次のような認識に裏打ちされていた。

私が「天皇」の言葉による統治を拒むなら、この書き記された歴大なコトノハの国の言葉ではなく、別の、異貌の言葉を持ってこななければならない。あるいは書くこと、書かれる事を拒む語りの言葉か。書かれてある語りとはムジュンもはなはだしいが、賤民らの文化、芸能であった説経節や世阿弥の謡曲、能は、「天皇」の書き言葉による統括を離れた神話作用があると見てさしつかえない。説経節が、謡曲が、神と乞食、天皇と賤民の間を深く揺れるのは、語ることによってシンタクスから解かれてある自由さによる。（『全集 14』六〇九～六一〇頁、傍点は筆者）

中上健次は、明らかに「異貌の言葉を持って」、「『天皇』の言葉による統治を拒む」のである。その特殊な使い方に関し、小森陽一は論文『『千年の愉楽』論：差異の言説空間へ』の冒頭で次のように問題を提起している。

ナカガミ・ケンジの言説は、「物語」を語ろうとしているのだろうか。

オリュウノオバは、「物語」の「語り部」なのだろうか。

中本の一統の血をひく若衆たちは、「物語」の主人公としての貴種だったのだろうか。

「路地」とは「物語」を生み出す共同体的空間なのだろうか。⁵²

小森の回答としては、「そうではない」と同時に「そうである」。小森の言う「そうである」とは、『物語』の重力に抗うことが最終的には不可能である」ことで、「そうではない」とは、「物語」の「重力」を「熟知しながら」、なお抗いつづける「意志」である。つまり、『千年の愉楽』は「物語」を語ろうとする「物語の物語」であり、最終的には、「物語」に回収されるが、「あらゆる言葉の力の限りを尽くして」、それに抗い、「矢を放ち続ける」ものである。いわば、中上健次は、「<書くこと、書かれることを拒む語り>をあえて書くこと」

である。⁵³ ようするに、「書き言葉の毒」を告発する中上の書いた『千年の愉楽』は、「物語」をかたろうとする「物語の物語」で、「物語」論そのものである。中上健次はオリュウノオバを語ることによって、「物語の物語」（「物語」論）が成立させるのである。

以上、『千年の愉楽』という「物語」に関する文体的な構造や語り手の構造を明らかにしたが、『千年の愉楽』には語り手の重層のほか、時間のワープも著しい。

「路地」でただ一人の産婆であるオリュウノオバは、「路地」のことなら、過去も未来ですらも、すべてを頭の中に記録している。そして、路地の山の中腹で臨終の床にあるオリュウノオバの記憶をたどるように、中本の血を持つ若者たちの生死が語られてゆくが、その時間系は並一通ではない。松田修の「血の輪廻：『千年の愉楽』の世界」⁵⁴で次のように述べている。

一見物理的時間の流れに沿うが如き話線を、過去と未来が恣意的に断裁し、逆行する。卑小な日常的な時間、一瞬古層的時間にワープする。このゼラチン状の曖昧さの中で、トータルとして、路地的時間ともいうべき複合的な時間の性格と機能がしだいに明確する。⁵⁵

「稠密化」された「路地的時間」を「路地性」として捉え、「差別被差別の問題」と規定している松田によれば、「路地」の人々は「不当な差別的現実の中で生きている以上、何らかの合理化を、遙かな過去」に試み、「部落の発生」を「落武者譚」、「七代前の先祖の悪行」または「累代の芸能者生活の放肆安逸」のような「負の神話を虚構」する。松田の論理では、このような「負の神話を虚構」の描写は、「フェティシズム」であり、「差別をはねかえせない以上、差別されている現況を認めている上で、だから我々はすばらしいのだという逆説」である。ゆえに、『千年の愉楽』の中に、「中本の浄らかで澱んだ血」、「中本の高貴な穢れた血」などのように、「中本の血の両義性」を中上健次は「執拗」に繰り返すのである⁵⁶。

事実として「中本の血の両義性」に関し、上述の「中本の浄らかで澱んだ血」、「中本の高貴な穢れた血」のほか、「澱んだ、いやそれゆえに浄らかな血によって徐々に亡びていく」、「内裏雛に山仕事の装束させたり板前の衣裳を着せた」など、枚挙に暇がないまで中上健次は書いてある。こういうものは、「逆説」や「フェティシズム」だと松田修は規定しているが、小森陽一の論文「『千年の愉楽』論：差異の言説空間へ」によれば、それは「逆説でもなければパラドックスでもない」⁵⁷。小森は「差異」と「差別」の観点で、次のように述べている。

パラドックスが成立するのは、＜澱んでいること＞と＜浄らかである＞という言葉の間に、明確な境界線があり、その境界線が絶対的な基準となつて、こちら側とあちら側に決定的に差別化するという論理を前提にしているからにはほかならない。神話や「物語」を構造化している、上と下、聖と俗、貴と賤、浄と不浄、男と女といっ

たすべて二項対立的な布置は、この「差別」の論理によって形成されているのだ。

この「差別」の論理は、ただちに、自己にとって真正であると同時に本質的な同一性や核心が存在し、そのことを基準線にして、自己と他者を「差別」し分離しようという発想を生み出していく。それが、すべての権力と、支配的文化と、共同体と「物語」を生み出すような言語体系の背後にある論理である。しかし、「中本の血」に対するオリウノオバの認識は、そうした論理の対極にある。⁵⁸

つまり、オリウノオバの認識で、「血の流れの中において現象しているのは、『差別』ではなく、『差異』」である。そして、『『差異』の中には、無数の<ちがひ>があると同時に、無数の<類似>も存在」して、ひとつの血統自体が「無数の<ちがひ>と<類似>を一つの流れのなかにかみあわせ」ている。ゆえに、「一貫した連続性に支えられた純粋性など決して存在しない」。確かに、細川周平がかつて指摘しているように、『『四民平等』は法律によってではなく、世界の『クレオール化』によってしか実現されない』。⁵⁹だからこそ、オリウノオバの記憶の中に堆積している「中本の一統」の言葉は、「既存の言語体系としての日本が内在させている『差別』の価値体系を、ことごとく『差異』に転換させてしまう装置」である。このようにして、オリウノオバの記憶の中の「過去と未来」に関する「恣意的」な「断裁」と「逆行」も、「差別」から「差異」へと「転換」させる一つの「装置」といえよう。ようするに、「路地的時間」をゼラチン状の物として描写されたのは、皆「差別」と「差異」の問題に回収されている。

このようにして、「異貌の言葉を持って」、「『天皇』の言葉による統治を拒む」中上健次は、「<書くこと、書かれることを拒む語り>をあえて」書きながら、「書き言葉の毒」を告発する。『千年の愉楽』は、「物語」をかたろうとする「物語の物語」で、つまり「物語」論そのものであると同時に、「差別」の問題を「差異」に回収させ、「帝国」の「内部」の問題を問いつめる。次では、「外部」という視野で考察する。

3. 革命の輸出

『千年の愉楽』において、外地から復員した者の何人が書かれてある。復員した者には、常人もあれば、「路地」の人もある。「帝国」の「外部」へ革命を輸出したのは、復員してきた「路地」の人なので、復員してきた「路地」の人と、復員してきた常民との、かなり違い行動についてまず検討してみよう。

常人の場合、「天人五衰」で斎藤という人が書かれている。オリエントの康は、新天地を何処かに開こうと、斎藤に「昔はよかったのう」と声をかけたが、斎藤は「昔の事、言うてくれるな」と、大陸で経験したことを忘れようとする。斎藤の女房も、「もう内地にもどって来たら昔の事きっぱり忘れて生活せん生きていけん」と言う。オリエントの康がさらに斎藤を誘う。その様子は次のようである。

「何せから俺も話を聴いてびっくりしたんじゃよ、のう、内地に着いて俺が支那で帰りまぎわ手に入れてかくして持って来とった翡翠を闇の酒と取り替えて帰朝祝いに浜でいっぱいやってから、オイさんもオバさんも今は炭屋やとるが南京で女中や支那人の夫を何人も使て、南京の大騒動があった時は自動車部隊で活躍したんじゃもんの」

斎藤が酔いにまかせて浜で反乱する支那人の首を刀を使ってこうやっってはねてやったと今現に刀を持っているように教えてみせた時とは人が違うような善良で気の弱い年寄り夫婦にみえると思ひ、新時代が来ているのに人にそんな事を耳にされたらどうしようとおろおろする姿をわらった。オリエントの康はその夫婦を軽蔑しているわけではなかった。(『全集 5』一〇八～一〇九頁、傍点は筆者)

常民として、「日本人である」限り、「虫も殺さぬほど善良な気の弱い」斎藤のような人間が、「ひとたび上に立って何をやったとしてもとがめられる事はないとなると」、人の首を簡単に刎ね、荒魂となる。しかし、再び日本にもどり、「新たな満洲国にひつてきする新天地をどこかに開く事は出来ないか」と誘われたら、斎藤は「話に乗ってこなかった」し、オリエントの康が「夢物語を言っている」と笑った。言ってみれば、常民の斎藤は、外地で「若い者や元々気の荒い者らがとめに廻るほどの事をやる」とはいえ、日本に戻ると、炭屋として、「昼間から疲れ出て」いるにも関わらず、新天地の開くことを拒否し、一介の良民にしかないとなる。

外地から復員した「路地」の者の場合は如何であろうか。これも、二つのタイプに分かれて、書かれていた。一つは、盗人と闇市の商売に関わるタイプである。「六道の辻」では、次のように書いている。

終戦後一年も経てば南方の方へ召集になって行った者らが次々復員して来て路地の裏山の中ほどに男らの手によって小屋が建てられ、そのうち遊廓から足抜けさせて来たのだという女らが昼日中から派手な、買い出しに持って行っても米の一升にもかえてくれぬだろうというようなじゅばんを着て酒の相手をし、博奕をやっているのか男らの荒げた声が路地に届き、誰もが眉をしかめだす頃になると三好ら不良少年団らの闇市の商いも川向うの土地でかき集めた品物を勝浦や太地で売るといふ仕事も復員した男らに取って代られたのだった。(『全集 5』三七頁、傍点は筆者)

もともと、三好ら不良少年団らのやっている仕事、つまり、盗人に行き、盗物を汽車で勝浦まで運び、闇市で物を商っていた仕事は、復員してきたものに「取って代られた」のである。

そして、外地から復員した「路地」の者のもう一つのタイプは、「天人五衰」で斎藤を誘うオリエントの康というタイプである。「路地」に住んでいた「中本の康夫がオリエントの

康と名乗って満洲や支那をうろつき、「現地で召集されて軍隊」に入り、「敗戦になって」から、再び「路地」に引き揚げて来る。(『全集 5』一〇六頁) オリエントの康は、「路地」の者らが増え続け、それらが住む新天地を作りたいという奇異な情熱を持ち、「満洲で一旗上げよう」とする。しかし、オリエントの康の情熱は、「路地」の人達に、「復員ボケ」だと嘲けられている。

このようにして、外地から復員した「路地」の者の場合、盗人の仕事に従事するのか、もう一回「帝国」の拡張に伴う植民地の開発という「復員ボケ」に陥れるのか、ということである。復員してきた「路地」の人は、復員してきた常民と違い、引き続き、暴力を振るう。このような暴力は、すべて、ヴァルター・ビンヤミンの言う「手段の領域」⁶⁰に回収されるべきだと思うが、オリエントの康は、なぜこれほど「満洲で一旗上げよう」という情熱を持つのであろうか。

ここで、「路地」と植民地の関係に関し、少し検討を加えたい。部落差別を歴史的に捉えた最初の書である『穢多非人』において、柳瀬勁介は、新平民の救済策を、「道徳智識品格を高むる事」や「擯斥の習慣を去る事」と主張したうえ、「唯一無上の針路」は、「部落の移転」であると結論する。そこで、植民地などは、「新郷を造るに相当ならざるはなし」という⁶¹。アジア・太平洋戦争の敗戦により、植民地支配は不可能となり、柳瀬勁介の言う海外移民としての部落民救済策は、むしろ、不幸な歴史としか言えないであろう。

このようにして、「部落の移転」に失敗したオリエントの康は、「満洲で一旗上げよう」ではなく、「もう一つの満洲国」を思い描く。「満洲国のような新天地」がざらにあるものではなく、「世界のどこをさがしても南米しか適地はない」と思い込んだ。(『全集 5』一〇九頁)。しかし、オリエントの康は、その後、南米に渡り、地元の革命に巻き込まれて死ぬ。強調しておきたいのは、外地での革命に参加した「路地」の者は、オリエントの康だけではなく、「カンナカムイの翼」において、達男という人もいる。達男は、北海道で朝鮮人工夫らの暴動をたすけようとする。北海道という土地には、両面性があると思う。つまり、北海道は、伝統的な日本の外地であり、現在の日本の内地でもある。達男の暴動は、熊野新宮の「路地」以外の「路地」へと革命輸出とみなしてもよかろう。

要するに、「天人五衰」でオリエントの康が、渡航先のブラジルで革命運動に巻き込まれて死んだとはいえ、「カンナカムイの翼」で達男が、北海道で朝鮮人工夫らの暴動をたすけようとするも、裏をかかれて殺されてしまうとはいえ、これは、「帝国」の対外戦争を断念した「路地」の人の行動様式であり、革命の輸出であり、「帝国」を脱構築する試みにほかならない。革命の輸出が失敗したとされているにもかかわらず、革命の輸出という「帝国」の「外部」からの脱構築は、「内部」からの脱構築(「性」についての言説や「物語＝法・制度」論)とは違い、もうひとつの「ベクトル」の違う方向性を示してくれたのである。

四、結論

ここまで論じてきたように、『千年の愉楽』第一篇の「半蔵の鳥」と最終篇の「カンナカムイの翼」は、呼応しあうように、「大逆事件」を喚起させている。『千年の愉楽』という作品には「大逆事件」の影が深く落とされているに間違いがない。

「大逆事件」と「韓国併合」は「大日本帝国」の対内と対外の関係にあるという高澤の観点からみれば、『千年の愉楽』を「大逆事件」につながらせる中上の意図も明らかである。「ベクトル」の対内の「大逆事件」に対し、「<書くこと、書かれることを拒む語り>をあえて」書きながら、「書き言葉の毒」を告発する中上は、「異貌の言葉を持って」、「『天皇』の言葉による統治」を拒む同時に、「差別」の問題を「差異」に回収させる。また、中上健次の「性についての言説」も、フーコーの言う「権力のメカニズム」にほかならない。中上は「鳥＝性」という構造を通して、差別に関する「優位」関係を解消したり、「法・制度に拝跪する」谷崎を批判したり、乃至は「物語＝法・制度」を批判したりする。つまり、「性」を語ることにより、「権力の外」に身を置き、「法」を揺がす。このようにして、「性」のメタファーと語り部の重層化の手段を用いて、「帝国」の「内部」の問題を問いつめる。そして、北海道での暴動抗争を行う達男やブラジルの革命運動に巻き込むオリエントの康を描き出すことにより、「大逆事件」と「ベクトルとしてはちょうど反対を向く形で相補関係」がある対外侵略戦争の問題をも正視する。革命の輸出が失敗したとはいえ、「帝国」を「外部」から脱構築する道程は示してくれたのではなかろうか。

注

- 1 渡部直己『中上健次論：愛しさについて』河出書房、一九九六年、一三八頁。
- 2 中村三春「中上健次主要作品解題」（『国文学解釈と教材の研究 中上健次：風の王者』学灯社、一九九一年十二月、一二〇頁）
- 3 浅野麗「中上健次『千年の愉楽』における〈解放〉の論理」（『昭和文学研究』昭和文学会編集委員会、二〇〇五年九月、四一頁）。
- 4 いとうせいこう、ジャックレヴィ、高澤秀次、渡部直己、他「『千年の愉楽』から『奇蹟』へ（シンポジウム）」（『早稲田文学』早稲田文学編集室、二〇〇一年十一月、四四～六六頁）。
- 5 佐藤康智「『千年の愉楽』：オリュウノオバが見届けた六つの命の物語」（『別冊太陽 中上健次』平凡社、二〇一二年、九八頁）
- 6 宮地正人・佐藤能丸・桜井良樹編集『明治時代史大辞典 第二巻』吉川弘文館、二〇一二年、四九二～四九三頁
- 7 新村出編『広辞苑 第六版』岩波書店、二〇〇八年、二三頁。
- 8 森長英三郎『禄亭大石誠之助』岩波書店、一九七七年十月。
- 9 森長英三郎『禄亭大石誠之助』岩波書店、一九七七年十月。
- 10 井上ひさし、小森陽一『座談会 昭和文学史 第一巻』集英社、二〇〇三年、二五～二六頁
- 11 井上ひさし、小森陽一『座談会 昭和文学史 第一巻』集英社、二〇〇三年、二〇頁

-
- 12 松本巖「『大逆事件』概説～木戸藩、百年の節に想う～」(『牛王：熊野大学文集(特集 大逆事件から100年)』熊野JKプロジェクト、二〇一〇年、四頁)
 - 13 高澤秀次「百年の『大逆事件』と『路地』世界の変容」(『牛王：熊野大学文集(特集 大逆事件から100年)』熊野JKプロジェクト、二〇一〇年、四八頁)
 - 14 中上健次「小説家の想像力」(『熊野誌』第三十九号、一九九四年二月、三～四頁。初出：一九九〇年二月四日、新宮市職業訓練センターにおいての講演)
 - 15 勝山輝彦「中上健次が捉えた『大逆事件』」(『牛王：熊野大学文集(特集 大逆事件から100年)』熊野JKプロジェクト、二〇一〇年、九十六頁)
 - 16 中上健次「四十五回転盤季節と若干の問題」(『中上健次全集14』集英社、一九九六年、三十九頁。初出：『さんでジャーナル』一九六八年四月十四日号)
 - 17 高澤秀次『中上健次事典 論考と取材日録』恒文社、二〇〇二年、三百二十九頁。
 - 18 瀬戸内寂聴「強烈な存在感 中上健次の思い出」(『牛王：熊野大学文集(特集 大逆事件から100年 第2弾)』熊野JKプロジェクト、二〇一一年、七十頁)
 - 19 勝山輝彦「中上健次が捉えた『大逆事件』」(『牛王：熊野大学文集(特集 大逆事件から100年)』熊野JKプロジェクト、二〇一〇年、九十七頁)
 - 20 柄谷行人「秋幸または幸徳秋水」(『文学界』文芸春秋、二〇一二年十月、一六四～一六五頁)
 - 21 山中千春著『佐藤春夫と大逆事件』論創社、二〇一六年。
 - 22 日本橋中洲界限を作品舞台とし、パトロン、画家、建築家の三人の男たちが〈美しい町〉という理想的な町を建設しようと試みるものの、資金問題で計画が挫折する物語である。
 - 23 梅森直之書評「山中千春著『佐藤春夫と大逆事件』」(『社会文学』不二出版、二〇一七年二月、一六一頁)
 - 24 中上健次「物語の系譜 佐藤春夫」(『中上健次エッセイ撰集[文学・芸能編]』恒文社、二〇〇二年、十三～三十一頁。初出：『国文学』、一九七九年二月)
 - 25 中上健次「物語の系譜 佐藤春夫」(『中上健次エッセイ撰集[文学・芸能編]』恒文社、二〇〇二年、三十頁。初出：『国文学』、一九七九年二月)
 - 26 山中千春「〈日本人ならざる者〉という葛藤」——大逆事件前後の佐藤春夫」(『初期社会主義研究』ぱる出版、二〇一一年九月、十九頁)
 - 27 高澤秀次『文学者たちの大逆事件と韓国併合』平凡社新書、二〇一〇年、一頁。
 - 28 高澤秀次『文学者たちの大逆事件と韓国併合』平凡社新書、二〇一〇年、一一二頁。
 - 29 高澤秀次『文学者たちの大逆事件と韓国併合』平凡社新書、二〇一〇年、八～九頁。
 - 30 渡部直己『中上健次論：愛しさについて』河出書房、一九九六年、二一二頁。
 - 31 渡部直己『中上健次論：愛しさについて』河出書房、一九九六年、二一二頁。
 - 32 谷崎潤一郎『春琴抄』(「中央公論」中央公論社、一九三三年六月)
 - 33 中上健次「物語の系譜 谷崎潤一郎」(『中上健次エッセイ撰集[文学・芸能篇]』恒文社、二〇〇二年、三一頁又は四四頁。初出：一九七九年三月号『国文学』)
 - 34 中上健次「物語の系譜 谷崎潤一郎」(『中上健次エッセイ撰集[文学・芸能篇]』恒文社、二〇〇二年、四一頁。初出：一九七九年三月号『国文学』)
 - 35 中上健次「物語の系譜 谷崎潤一郎」(『中上健次エッセイ撰集[文学・芸能篇]』恒文社、二〇〇二年、三二頁。初出：一九七九年三月号『国文学』)
 - 36 中上健次「都はるみに捧げる 芸能原論」(『中上健次電子全集 14 ジャズと演歌と都はるみ』小学館、二〇一七年)
 - 37 ミシェル・フーコー著、渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』新潮社、一九八六年、一三頁。
 - 38 ミシェル・フーコー著、渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』新潮社、一九八六年、一四頁。

39 ミシェル・フーコー著、渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』新潮社、一九八六年、三三頁。

40 ウィルヘルム・ライヒ著、平田武靖訳『ファシズムの大衆心理』せりか書房、一九八六年。オルゴン (Orgone) とは、精神医学者ヴィルヘルム・ライヒが発見したとする自然界に遍在・充満するエネルギーのことで、オルガスムス (性的絶頂) からオルゴンと名づけられた。オルゴンは性エネルギー、生命エネルギーであるとされ、病気治療に有効であると考えられた。

41 高山京子「夢と現実との格闘：中上健次『千年の愉楽』」(『現代文学史研究』現代文学史研究所、二〇一〇年六月、十九頁)

42 宗像和重「解題・校異」(『中上健次全集 5』集英社、一九九五年、四四四頁)

43 中村雅也「『千年の愉楽』にみる物語の構造と生成」京都教育大学教育学部国語国文学科卒業論文、一九八八年、五七～五八頁

44 高山京子「夢と現実との格闘：中上健次『千年の愉楽』」(『現代文学史研究』現代文学史研究所、二〇一〇年六月、十九頁)

45 筆者は、『千年の愉楽』各篇における文の数や一文の文字数などを統計し、次の一覧表に纏めている。

	半蔵の鳥	六道の辻	天狗の松	天人五衰	ラブラタ綺譚	カンナカムイの翼
文字総数	17,241	27,575	30,005	34,616	17,262	24,008
文の数	183	239	284	268	250	340
一文の平均文字数	94.2	115.4	105.7	129.2	69	70.6
一番長い文の文字数	273	360	368	440	247	242
一番短い文の文字数	8	6	9	5	3	7

46 高山京子「夢と現実との格闘：中上健次『千年の愉楽』」(『現代文学史研究』現代文学史研究所、二〇一〇年六月、十九頁)

47 永島貴吉「『千年の愉楽』論：「語り」の覚醒」(『国文学解釈と鑑賞別冊中上健次』至文堂、一九八八年八月、八二～八四頁)

48 井口時男「物語の身体：中上健次論」(『群像』講談社、一九八三年六月、九九～一二三頁)

49 江藤淳「声と文字と文体」(『文芸』河出書房新社、一九八三年十二月、三三頁)

50 江藤淳「声と文字と文体」(『文芸』河出書房新社、一九八三年十二月、三三頁)

51 江藤淳「声と文字と文体」(『文芸』河出書房新社、一九八三年十二月、四二頁)

52 小森陽一「『千年の愉楽』論：差異の言説空間へ」(『国文学解釈と鑑賞別冊中上健次』至文堂、一九九三年九月、一五九頁)

53 小森陽一「『千年の愉楽』論：差異の言説空間へ」(『国文学解釈と鑑賞別冊中上健次』至文堂、一九九三年九月、一六五頁)

54 松田修「血の輪廻：『千年の愉楽』の世界」(『文芸』河出書房新社、一九八二年十一月、一七六～一八〇頁)

55 松田修「血の輪廻：『千年の愉楽』の世界」(『文芸』河出書房新社、一九八二年十一月、一七六頁)

56 松田修「血の輪廻：『千年の愉楽』の世界」(『文芸』河出書房新社、一九八二年十一月、一七六～一七七頁)

57 小森陽一「『千年の愉楽』論：差異の言説空間へ」(『国文学解釈と鑑賞別冊中上健次』至文堂、一九九三年九月、一五九～一六五頁)

58 小森陽一「『千年の愉楽』論：差異の言説空間へ」(『国文学解釈と鑑賞別冊中上健次』

至文堂、一九九三年九月、一六一頁)

59 細川周平『『路地』は南米へ続く：『千年の愉楽』試論』（『ユリイカ』青土社、一九九三年三月、一〇二～一〇三頁）

60 ヴァルター・ビンヤミン著、野村修編訳『暴力批判論』岩波文庫、一九九四年、二九頁。

61 柳瀬勁介『穢多非人』（初版は明治三十四年大学館出版。参考は、『明治文化全集』（第二十一巻・社会篇）日本評論社、一九三〇年、一五〇～一五二頁）

第六章 中上健次と俳句

はじめに

中上健次は俳句に多大な興味を示し、角川春樹をはじめとする現代俳句界のトップクラスの俳人たち、茨木和生、宇多喜代子、後藤綾子、夏石番矢らと親交し、俳句会で選句・評論していた。俳句に関する膨大な発言は、読売新聞をはじめ、朝日新聞、雑誌『俳句』、『大河』、または『俳句熊野大学』などに散在される。

小説家である中上健次がなぜ俳句なのであろうか、という疑問を一般には持たれていないのかもしれない。しかし彼は相当早い時期から俳句に興味を持っていたのである。山本健吉、森澄夫や角川春樹との交友が始まる一九八三年の数年前に、すでに次のようなものが書かれていた。「小説の新しさとは何か」と、「鳥獣に類ス」という初期の文芸エッセイである。

「小説の新しさとは何か」というエッセイは、一九七六年二月十六日発行の『日本読書新聞』に発表された。ここで中上は、短編と俳句の類似性について述べている。長くなるが重要な箇所を抜粋して引用したい。

(前略) 今、鮮明に、短篇小説が他の小説と違う貌を持って現出しはじめたと思う。能、謡曲が、室町期に、土俗芸能から一つの芸能、文学として自立したように、である。俳句が俳句として自立したように、である。(中略) 能、俳句、短篇、という血脈が、ぼくには見えるのである。短篇とは、西欧の、コントでもレシでも、ノベルでもない。

短篇とは、私小説である。私小説は、コードの破けたコードと思える。私小説は、コードを考え続けているぼくには、新しい小説のスタイルに見える。そして、私小説＝短篇は、死、死穢を一等低い音として、鳴らしているのに気づくのである。いや死穢の音が、中篇や長編よりも強く鳴る。

そして短篇とは、花鳥風月の側のものである。

現代の作家や批評家に、ことごとく無視され、愚弄されたものによって、新しく現われた貌の正体はある、と思える。何人の作家が、花鳥風月の、そのなまぐささを知っているだろうか？

(中略)

短篇が、死穢を踏まえてあると言うなら、俳句もそうである。季語、それがつまり花鳥風月であるなら、それも、死穢の形を代えたあらわれではないか？ 季語＝死語によって、死の音が鳴る。そして俳句を読むたびに、五七五の音が定形なのでなく、季語＝死語が、型を決定していると思えるのである。それは短篇もそうだ。死穢の姿によって型がきまる。(『全集 14』 三三八～三四一頁)

中上は、「小説という西欧から移入された形式」を、「中篇、長編に当」った。「中篇の短い小説と、短編の構造の違い」を峻別している。言ってみれば、「能、俳句、短編の血脈というもの」があり、短編は俳句に似て、ともに「花鳥風月」に属するもので「日本独自の文芸ジャンル」であり、「余白」または「書きかくすことによって、全体をあらわすもの」であるという。その花鳥風月とは「なまぐさく」、また「死の音」でもあるという。

そして、もうひとつのエッセイ「鳥獣に類ス」は、一九七七年十二月十二日の『太陽』に発表され、「特集・芭蕉おくのほそ道全紀行」中の一編として、芭蕉を批評している。このエッセイの冒頭に、松尾芭蕉『笈の小文』の一節「道の日記・鳴海・吉田・保美」の第一段落が引用されてある。中上は、芭蕉の「道の日記」が、「文人として漂泊する事の自信であり、漂泊することそのものへの肯定である」ものに対し、中上自身の旅は、気楽ではなく、「〈道の日記〉をもくろんだ旅ではなかった」のだと述べている（『全集 14』三八八頁）。というのは、このエッセイを書く前、すなわち一九七七年「三月から十二月にかけて、ドキュメント『紀州 木の国・根の国の物語』（朝日ジャーナル）のため、紀伊半島全域を旅行」¹したのである。その旅行は、多くの被差別部落に取材する旅行であり、「芭蕉の言う漂泊の否定でもあ」ったのである。無論、「否定するために旅をしたのではなく、旅をする事が漂泊の否定になった」（『全集 14』三八九頁）。

「鳥獣に類ス」という題名は芭蕉の『笈の小文』の中の「像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獣に類ス」によっている。その序文の一節を引用してみよう。

しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る処花にあらざるといふ事なし。おもふ所月にあらざるといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獣に類ス。夷狄を出、鳥獣を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。²

『広辞苑』によると、「造化」は、①. 天地の万物を創造し、化育すること。また、造物主。古事記上「參神一のはじめとなり」②. 造り出された天地。宇宙。自然。また、自然の順行。笈の小文「一に従ひて四時を友とす」。「一の妙」③. ものをつくり出すこと。造作。（字類抄）と、三つの意味がある。即ち、造化には、老荘思想による万物を創造するものの意で神や自然のような絶対的な存在をいう①の意味と、作り出された自然をいう②な意味が有する。その②の意味に関し、中上は「鳥獣に類ス」で芭蕉の自然観を次のように論じている。

『笈の小文』にある造化の奥、花鳥風月のその花、その月の因ってきたる大もとをさぐる旅だったと言葉を換え得る。

つまり花を花、月を月と詠ずるに文人で十分であるが、花とは何なのか月とは何なのか問う者は、文人ではない。

その者に風雅はなく、あるのは、壊れた造化としての自然、壊れ破砕された私である。

(『全集 14』 三八九頁、傍点は原文)

すなわち、中上は、「壊れた造化としての自然」を文化ととらえ、そういう文化の中において、「私」が「壊れ破碎された」と感じている。「像(かたち)」や「心」、すなわち森羅万象に「花」という美を見出さないのであればそれは「夷狄」であり、「鳥獣」であると、芭蕉は言う。この「夷狄・鳥獣」という言葉に、中上健次は鋭く反応し、「芭蕉の言うとおりの身すべてが、夷狄であり、鳥獣におちる」と考えた。中上は、「事実、事物に囚われ」、本質を探究する人間なのである。

それがために、中上は、上述のように芭蕉に対し厳しく反論をし、さらに「鳥獣に類ス」を発表した約十年後、朝日カルチャーセンターで、「トポスの文学——俳句と角川春樹について」と題しての講演で、芭蕉を「非常に嫌いな人間」だと述べている。

俳句は非常に独特なものだと思うのですが、俳句というジャンルが成立したのは江戸期の芭蕉に負うところが非常に大きいと思います。ぼくは芭蕉を嫌いですけどね。非常に嫌いな人間なんです。嫌いだけでも、すごく大きな存在として認めざるを得ない。たぶん将来、芭蕉とぶつかって、芭蕉を読み解くようなことがぼくにも起こると思うのですが、俳句の特性というものを考えますと、それは芭蕉以降の俳句、あるいは現代俳句も含めてのことですけれども、俳句が反物語という系譜を持っている。³

言ってみれば、中上健次は芭蕉を大きな存在として認めながらも、自分自身は「夷狄・鳥獣」だという前提があるため、一貫して、芭蕉の心底を覗き込もうと思ひ、芭蕉を再構築しようと思っている。

再び「鳥獣に類ス」に戻ろう。

中上は、エッセイの最後に、露沾公から芭蕉への餞別句「時は冬よし野をこめん旅のつと」を取り上げている。〈今は冬だが、吉野につく頃にはすっかり花の季節だろう。吉野ですばらしい句を詠んで、ぜひおみやげに持って帰ってください〉という意味の句である。中上は次のように反応している。

吉野には、私もまた行った。

私が眼にしたのは花の吉野ではなく、セイタカアワダチソウが群生した秋の吉野である。その根に毒を持ち他の植物を枯らして群生する草は、夜にあわあわと、昼に粘る黄色のハナをつけ、気味が悪い。〈造化にしたがひ、造化にかへれ〉という芭蕉は、この吉野のセイタカアワダチソウを何と言うだろうか、風雅に反し、花鳥風月に入らぬものと、見て見ぬふりをするのだろうか？と今思う。(『全集 14』 三九〇頁)

いわば、中上の眼にしたのは、「花の吉野ではなく、セイタカアワダチソウが群生した秋

の吉野」でもあるのである。一九七八年七月、朝日新聞社刊行の単行本『紀州 木の国・根の国の物語』の帯（正面）に「中上健次のニュー・ドキュメント／鬼州、木の国。そこは、根に差別の毒をもち、夜にあわあわと影を作ってゆれ、昼に黄色に光る花をもつ、輝くほど明るい闇の国家である」⁴とある。というのは、紀伊半島を巡り、「記紀の方法」で書いた『紀州 木の国・根の国の物語』は、「神武以来の敗れ続けてきた闇に沈んだ」熊野・隠国の町々の「門先で、人の話にあいづちを打ち、一緒にわらい、一緒に泣くこと」であった。確かに中上の紀州遊行は、芭蕉の言う旅とは違い、芭蕉への否定そのものである。

中上は、熊野をセイタカアワダチソウと喩える。セイタカアワダチソウは漢字で背高泡立草と書く。この北アメリカ原産の背高泡立草は、第二次世界大戦後で、アメリカ軍の輸入物資に付いていた種子によって日本に侵入し、大繁殖するようになる。さらに、初秋の季語となり、「秋の麒麟草」⁵となる。アレロパシーを有してあり、根から周囲の植物の成長を抑制する化学物質を出すセイタカアワダチソウ。中上は、それを「根に差別の毒」を持つ「輝くほど明るい闇の国家」としている。

なまぐさくある花鳥風月、死の音を発する花鳥風月、毒のある花鳥風月、そして無名の「私」というもの。中上は、花鳥風月をそこまで深く読み込んでいるのである。

「小説の新しさとは何か」にしても、「鳥獣に類ス」にしても、花鳥風月とは何かという強い問いが提起された。この根本的な問いは、その後の中上文学の底にあり続けたのであろう。七十年代後半から、俳人・俳句との出会い、そして晩年の熊野大学なども、この問いと深く関わりがあると思う。中上思想を理解するには、中上が遺した俳句関係の言葉にあらためて耳を傾けてみる必要があるのではなかろうか。

一、中上健次と新宮在住の俳人松根久雄

遡ってみれば、「小説の新しさとは何か」が発表される約半年前、一九七五年八月頃、中上健次は既に、「新宮在住の俳人松根久雄と知り合い、以降、交際頻繁」⁶になったという。まず、松根久雄の略歴を見てみよう。

一九二七年一月十三日生まれ、一九五二年俳句結社「鶴」に入会、一九五九年右城暮石主宰の「運河」に入会、のち「運河」同人。一九八〇年俳人協会会員。一九八四年角川春樹副主宰の「河」に入会、「河」同人。一九九八年十二月七日没す。⁷松根久雄の句集には、『クローバの天』（一九八三）と、『天地の辻』（一九九三）の他、没後刊行された『路地霊歌』（一九九九）がある。

中上と松根との文学的な関わりは、既に一九六六年に始まった。紀南文芸の会発行の同人雑誌「道」一〇号（一九六六年八月刊行）に、中上の詩「履歴書」「幻覚」「四行詩」と、松根の俳句「青葉木菟」二十編が、共に掲載されているのである⁸。

が、二人は実際に出会ったのは、一九七五年の秋の御船祭りの直後になる。初めての出会いにもかかわらず、中上と二十歳の違いがあるにも関わらず、年上の松根がお酒を飲みかか

った途端に、「涙がものすごく溢れてくる」。松根氏はかつて部落出身を理由に、「満身創痕の差別を受けた」ため、「路地出身の健次」が出世してくれたと言う事の「嬉しさが、一遍に爆発」⁹して、涙が出てきたのである。つまり、松根氏が中上のことを相当信じていたのであろう。松根氏はその頃既に俳人の石塚友二（石田波郷の「鶴」二代目主宰）や細川加賀らと交際しているため、自然に俳句の話も出ていた。詩から出発した中上も、松根の誘いに応じ、初会合の翌日妻子をつれ、熊野川の川原で、人生初めての句会に参加したのである。

俳句との出会いについて、中上健次は次のような言葉が残っている。

俳句に関心を持ちはじめきっかけになったのは、郷里で、齢の離れた飲み友だちである松根久雄とのつきあいのせいだった。

彼が俳人で、小説とは俳句にも通じている、という彼の独特な思い入れで、よく「俳句とはなんない？」と大命題をぶつけるのだった。¹⁰

「小説とは俳句にも通じている」という松根氏の独特な発想は、中上健次に様々なことを考えさせたのであろう。松根氏も、次のように述べていた。

芥川賞取ったころ（一九七六年一月、筆者注）から、僕は俳句の話ずっとしていた。というのは、俳句の歳時記、季語というのは、というようなことを、いつも問題にしていた。芥川賞取った時に、健次は俳句的な短編書きたいんやよと言って、俳句的な短編を書くのが僕の理想やと言ったね。¹¹

おそらくは、本章の「はじめに」に触れた中上のエッセイ「小説の新しさとは何か」と「鳥獣に類ス」は、松根氏からかなり影響を受けていると思う。さらに、「小説の新しさとは何か」の続編として、一九七八年十月七日、部落青年文化会第八回講座で、「能と俳句と短編小説」をテーマに、中上は講演を行っている。おなじ血筋のジャンルである「能と俳句と短編小説」三者の共通点、いわゆる「抑圧の装置」¹²というものを論じている。

松根氏は、中上にとって、非常に重要な存在であった。松根氏は短編小説「桜川」やエッセイ「もう一つの国」などの作品に実名で登場し、そして『奇蹟』のトモノオジのモデルとも言われている。さらに、「紀州 木の国・根の国物語」の取材、部落青年文化会の創立、オリュウノオバの発見、大斎原での「かなかぬち」の公演、さらに隈ノ会や熊野大学の創立など中上健次の熊野でのあらゆる活動に、深く関わっている。高澤秀次の言葉を借りれば、

松根は中上が新宮で起した文化組織を二人三脚で支えた年長の朋輩だった。「部落青年文化会」、「隈ノ会」、そして多数の新宮市民が参加した月例俳句会から始まった「熊野大学」は、松根久雄という後ろ盾なくしては不可能だった。¹³

確かに、松根氏は「中上健次に影のように寄り添う後見人というより、中上と一体となって作品行為に参加していた、一人の創作者であった」¹⁴。

中上と松根は、文学（小説・俳句）や文化組織（部落青年文化会・隈ノ会・熊野大学）での盟友というだけではなく、従兄弟同士でもあるらしい。「十津川の玉置山のふもとの竹筒出の片脚の男」が中上の実の祖父で、「松根さんの母親はその片脚の男の姪に当り、従って松根さんは私の実父から言えばイトコの子にあたる」（『全集5』二一五頁）と、短編の私小説「桜川」に、書かれている。その関係は、中上の作り話ではなく、「路地」に生きた人々の祥月命日を総て諳んじている田畑リュウ（中上文学に重要な働きをするオリュウノオバのモデル）から直接聞き、小説に書き込んだらしい。中上が松根氏に連れられ、初めて田畑リュウを訪ねたとき、「アゼら、従兄弟同士やだ」¹⁵と言われたのである。ただ、二人とも、言われていた時までその関係を知らなかった。上述の両氏の信頼関係は、紀和鏡氏の次の発言から窺える。

健次が東京で鬱々としている時をみはからったように、「わし、マツネ」というぶっきらぼうな電話がかかってくる。傍で聞いていても、二人はたいした話はしない。しかし電話を切った後の健次の鬱々は消えている。だから私は「熊野の地霊からの電話みたい」と言ったことがある。そのことを当の松根さんに話すと、怒るところか妙に気に入ってしまい、次からは「わしは熊野の地霊じゃ」とかけてくるようになった。

16

言ってみれば、後見人であり、従兄弟同士でもある新宮在住路地出身の俳人松根氏は、「熊野の地霊」という言葉に象徴されるように、中上の根拠地にもなっているのである。二人は頻繁に喧嘩をしたが、お互い非常に尊敬し合っていた。中上の自身の年譜の第一行は、「母の私生児として生まれる」という箇所、自身の文学の要であるように語っている。熊野の方から、「母系の世界では、周辺の男性が父のない子のために父役の代理をつとめる。そもそもオジとは、その人の呼び名のこと」。いわば、松根は中上の父役であるといえよう。¹⁷

小説家である中上健次がなぜ俳句なのであるかという疑問は、前にも出したが、ここで改めて回答する。中上が松根との出会いにより、松根に啓発され、俳句に興味を持つようになり、「路地そのものにこだわり続けて俳句も能も小説も一切合財そこから生まれ、再生される」¹⁸と発見したのである。換言すると、中上文学の目的も熊野・路地の意味の再解釈であるため、小説（短編小説）と同じような血筋を持つ俳句に、目が向いたのである。歳を重ねるごとに、中上の俳句に対する認識は、変わっていく。が、その出発点は松根氏にある。

補陀落の地に力得て枯蝸螂
補陀落の波音かすか蟻地獄
無名こそ貫きとほす霜柱

松根久雄の『路地霊歌』¹⁹より

俳句界で松根氏はそれほど有名ではなかった。しかし、現在俳句界で高名を持つ宇多喜代子の言葉を借りれば、松根氏は実に相当な俳句の「才と力」を持っている。ただ、「作品を世に問うとか人と競うとか、そんな意志ふるまいが皆無であった」²⁰だけである。

松根氏と熊野大学俳句部との関係についてはまた後に詳しく論述するが、次では、まず時系列で、中上健次と角川春樹について、論じていきたいと思う。中上の俳句へのさらなる関心は、山本健吉や角川春樹との出会いにより、持たれたからである。

二、中上健次と角川春樹

上述で論じてきたように、中上は松根氏に影響され、俳句に興味を持つようになり、さらに「花鳥風月」には「毒」があると主張していた。そして、角川春樹と出会うことにより、俳句に関する認識はさらに発展していく。

1. 元素的な要素である「花鳥風月」

中上健次は、一九八五年十月五日、東京新宿の「朝日カルチャーセンター」における、「トポスの文学——俳句と角川春樹について」と題しての講演で、次のように発言していた。

(前略) 制度から抜け出たようなものがないんだ、だから花鳥風月より例えばコンクリートの壁がいいんだ、建物がいいんだ、という言い方をして、花鳥風月を敵としてみなす、と言う人たちもいる。あるいは、いや、そうじゃないんだ、花鳥風月こそ日本の伝統なんだ、何をするにしろ我々の中に入っているものは花鳥風月という言葉で言い表せるような、そういう豊かさを持っているんだ。それが美の粹であり生活の仕方の粹であるという、そういうことをいったりするんですね。それはたぶん対になっていると思うのです。制度を維持しようとする人間と、それは違う、破壊しちまえという側の人間という形ですね。²¹ (傍点は筆者)

言うまでもなく、この講演は「花鳥風月を敵としてみなす」初期エッセイ「小説の新しさとは何か」と「鳥獣に類ス」への補足と再解釈である。が、中上は、制度を維持する側の「美の粹」と、制度を破壊しようとする側の「セイタカアワダチソウ」の「根の毒」という対になっているもののレベルを、すでに越えた。中上は次のように述べている。

ところが実のところ、花鳥風月と言うんですけれども、もうひとつ超えますと——それを角川春樹における〈直覚〉のような形として考えて生きますと、花鳥風月というのは我々の中に立ち表れた元素的な要素という、つまりそういうもののことだとはすぐ分ります。²²

「角川春樹における〈直覚〉」とは、すこし分りにくいことであるが、それは「要素的な要素」的な考え方だと中上は理解していた。中上は、この「要素的な要素」を解釈するために、〈水〉をテーマとして二つの長い例を挙げた。一つは、角川の俳句「春火鉢西行水のごとく栖む」とその解釈であり、もう一つは、中上自身の闘病から得られた水に関する体験である。中上の考えでは、現代の普通の俳人は水を詠む時、直接ではなく、水に映っている「女の顔」、「蝶々」、「萩の花」の類を巧みに詠む。しかし、角川の場合、〈直覚〉から「物の中身を直に取り出す」のである。いわば、「言葉の強い抑圧」や「言葉の贅沢な味わい」から、「物の中身を直に認識」して使い、「既成のものじゃなくて、物が自分の中に突出してくる」のである。そして、中上が肝炎を患った話では、「絶対に入院しろ」と言われているにもかかわらず、泳ぎと潜りを繰り返すことにより、水の中の「母の闇」を感じ、治癒した経験から、「水というのはおおきな無意識を表している」²³と思うようになったことが語られる。

「つまり、今までの花鳥風月、あるいは敵対する花鳥風月というものでなしに、もっと要素的な水みtainな、そういう状態」²⁴で、「花鳥風月」と「アンチ花鳥風月」を超えたのは、いわゆる角川の「直覚」であり、中上の「要素的な要素」である。

次では、中上と角川の出会いから、順に両氏の影響関係を検討していきたいと思う。

2. 中上健次と角川春樹との出会い

一九八三年四月、三十七歳の中上健次は、尾崎一雄の葬儀で山本健吉と出会い、同月、山本一家、角川春樹らの吉野竹林院への桜見物に同行した²⁵という。

その出会いのきっかけには、角川春樹の父角川源義という先行存在があると思う。中上の言葉を借りれば、源義氏の書いた本は、「自己発見の書」であり、「熊野を読むガイドブック」であり、「短編小説を書くタネ本」であり、「現代作家としての私の宿命をも説いている」²⁶ものである。中上は、「折口信夫も柳田国男もやっていない熊野学」に関するものを書いた源義氏に相当な「衝撃」²⁷を受けたのである。それがために、尾崎一雄の葬儀で角川源義の親友の山本健吉に、「角川源義はどんな人だったのか？」と、聞き出したのである。生身の俳人・国文学者・出版人であった角川源義の話話を話す以上、自然に角川春樹氏の話にもなり、紹介することになったわけである。角川春樹との出会いの状況について、中上は『角川源義全集第一巻』の月報で、詳しく述べてある。

角川春樹氏とは吉野へ向う新幹線の車中で初めて会った。一目見て、才能が渦巻き、言葉の 아우ラ が取り囲み、何やら私は語り物文芸の一場面に入り込んだように、これこそ角川源義の血よ、と思い、角川春樹氏や辺見じゅん氏がいる限り、しばらくは俳句や短歌の実作には手を触れまいと決心したのだった。語り物文芸で多出する運命的な出会いとはこの事である。「流され王」というタイトルの句集を上梓するつもりだと角川春樹から聞かされ、そのタイトルをくれと私が迫ったのもこの時だった。

花あれば西行の日とおもふべし

私はまだ角川源義を勉強しているのである。²⁸

初対面以前に、角川春樹に関する印象は、「ロクなイメージを持っていなかった」²⁹と中上健次は言っている。しかし、右記のエッセイのように、一九八三年四月に実際に会うと、「吉野の花見に行く新幹線であった角川春樹さんは噂やイメージと大違いの人物」であり、「山本先生が一貫して角川春樹を俳人として高く評価している理由も分った。角川春樹さんの中に、芭蕉から西行に遡り貫くいのちの塊りのようなものを見ていたのだった」³⁰と中上は高く評価し、認識も一転したのである。上記の評価は、口さきばかりで実意のないお世辞を言うことではなく、中上健次は言葉を惜しまず、次のように角川春樹を賞賛している。

俳句の角川春樹は、日本の言語状況の一等鋭い端（はな）であろう。³¹

（一九八四年六月六日『読売新聞』夕刊）

角川春樹第三句集『流され王』は、現代の最先鋭の文芸ジャンルとしての俳句の可能性を示した作物として、私のような物語のジャンルにいる文芸者に衝撃だった。³²

（一九八四年六月二七日『読売新聞』夕刊）

PUNCH の読者で角川春樹が希有の才能を持った俳人である、という事実を知る者は、おそらくそう多くはない。角川春樹と名前を見れば、角川書店の若い社長、角川映画のプロデューサーであり、映画監督、と思うだろうが、私の眼には角川春樹は才能のありすぎる俳人以外他ではない。

（中略）

何度も言うが、「因果な事に」出版社の社長だが、角川春樹は文学、文芸の最前線で戦っている戦士なのだ。³³ （一九八四年十二月十七日『HEIBON PUNCH』）

角川春樹の俳句を読んでいるとふと幻視、幻覚のように現在名詞と思い込んだものが、動く動詞であったという思いがわき出し、衝撃を受ける。³⁴

（一九八五年四月一日『アサヒグラフ』）

ぼくに俳句というものが非常に面白い現代思想の一つのジャンルであると考えさせたのは、角川春樹の俳句です。³⁵ （一九八六年二月号『俳句』）

一方、角川春樹も中上健次にこだわっているようである。次の節で角川のほうから論じる。

4. 中上健次にこだわる角川春樹

角川春樹という俳人の作品や俳論を通して現われているひとつのコンセプトがある。いわば、「魂の一行詩」という概念である。「魂の一行詩」とは、角川が、近代俳句の有季定型や写生を中心としたシステムに対して異なる意識を持ち、長い俳句経歴を通して取り出したものと思われる。「魂の一行詩」という概念を詳しく解説したエッセイがある。二〇一一年九月角川春樹事務所に収録され、後にユリイカに発表された『「魂の一行詩」の揮う力』³⁶である。この十一枚のエッセイにおいて、角川は、四回も中上健次のことを言及していた。見てみよう。

一回目、中上健次が自分からかなり影響を受けていると角川春樹はアピールしている。

山本健吉さんが「(自分は)俳句というのは方法論、あるいは存在論として考えていたけれども、しかし最近(晩年)になってそれを生命論として捉えるようになった」とおっしゃっている。方法論というのは技術論のことですよ。存在論というのも定型としての存在論でしかない。生命論というとまったく違って来るわけです。中上健次も「人間の命と魂を詠わない限り、それは詩歌ではない」と——私の影響がかなりあるんだけど——断言している。生命論というのは、すなわち現代詩として命と魂を歌うこと。³⁷ (傍点は筆者)

また、俳句におけるイデオロギーと思想との違いについて、次のように言う。

磯田光一さんや中上健次は、角川春樹の俳句は思想だと言うんですよ。イデオロギーと思想は違いますよ。ましてや「魂の一行詩」というのはイデオロギーのプロパガンダとして存在してるわけじゃない。³⁸ (傍点は筆者)

そして、角川の結社における楽しみと苦しみについてこう述べる。

これも中上が書いたことですが、うちの結社の句会は感性の斬り合い、殺し合いなんです。わたしも非常にピリピリしています。わたしは別に楽しいことは否定しないけれど、居心地がよくて楽しいだけでは詩は生まれてこない。句会というのはもともと感性の斬り合いの場だったんだから。³⁹ (傍点は筆者)

さらには、中上の言葉を引用して、詩(うた)という原型をつぎのように言う。

五七五、あるいは五七五七七になぜ相手に訴える力があるのかというと、歌というのはもともと「訴える」から来ているんです。これは折口信夫の説ですが、私は正しいと思う。それをもっと原型まで遡ると、(中略)岩を叩くとか神降ろしの方法論としての

物を打つという行為から始まっているんじゃないか、これは中上が言い出したことだけれど、大変な慧眼だと思った。「打つ」ということが「訴える」になり、ひとの心を打つ「詩（うた）」になっていったと。⁴⁰（傍点は筆者）

右記のように、俳句の本質に関する発言において、角川は、四回も中上健次を言及していた。中上が角川から影響を受けていると同時に、角川も中上から影響を受けていると言ってもよいだろう。

5. 山本健吉という存在

何故、中上健次はたびたび角川春樹を高く評価し、角川春樹も中上健次にこだわるのであろうか。

中上と角川と二人は、かつて遠野・熊野・吉野という三つの〈聖地〉を巡りながら語り合ったことがある。その対談は雑誌『俳句』に掲載され、後に『俳句の時代 遠野・熊野・吉野 聖地巡礼』と名づけて文庫化された。その本の裏表紙に、「それぞれの立場から、現代文学史に衝突的な登場を果たし、常に時代の最も尖鋭な位置で活動を続け…（中略）…おのおの土地の神話、伝承、祭りにじかに触れつつ土俗の闇に挑み、闇を照らす炎として俳句を選んで交された白熱の対話は、〈言葉〉の力を再構築して、いま文学の行方を示す！」⁴¹と書かれてある。中上と角川と両氏が、「言葉であってしまふ宿命をもって生まれた八犬伝の兄弟」⁴²なのである。二人とも「同じような世界」⁴³を表現している磯田光一によれば、角川春樹が「俳句界の中上健次」⁴⁴である。同じ論理で、中上健次が小説家の角川春樹であると言ってもよいであろう。

「同じような世界」とは何であろう。中上健次と角川春樹の類似点を論じるには、山本健吉という存在を省くことができない。角川春樹は山本健吉を父親のように慕っていた。中上健次も、自分が山本健吉の最晩年の弟子だと思っている⁴⁵。

春樹の父源義の盟友である山本健吉は如何に春樹を見守ったのかまず見てみよう。

角川春樹は第二句集『信長の首』で一九八二年度の芸術選奨文部大臣新人賞と俳人協会新人賞を受賞した。それは、「俳句を本格的に再開してわずか三年目の句集」⁴⁶である。そういうかけ出しの俳句作家の登場は、俳壇的には事件として捉えられた⁴⁷。俳句経歴を重視し、年功がものを言う世界には、その出現は、確かに「一見唐突の感じがあった」⁴⁸。しかし、山本健吉（一九八二）は、次のように述べている。「批判するなら、その句歴の長短をあげつらうより、その句作動機の深淺を、その作品が腸の厚いところから出ているかどうかを論ずるがよい」⁴⁹。

そのような山本健吉に対し、角川春樹は「二人の父」で、「私にとって角川源義という存在は、み魂の父であり、肉体の父は山本健吉先生となったのである」⁵⁰と尊敬している。山本氏は、角川の才能を認め、見守っていて、「詩歌の世界の〈いのち〉と〈たましひ〉」を角川氏に「託そう」⁵¹としている。

翻って、中上健次は如何に山本氏を見ているのか、みてみよう。

中上は、角川源義の盟友としての山本健吉を尊敬し、山本の晩年の弟子として自認している。四十も歳の離れた中上と山本の交流は、山本の晩年わずか五年ばかりのものに過ぎなかった。が、中上には山本健吉をめぐる、『新吉野伝授』（一九八四）、『山本先生と花』（一九八五）、『花あれば——山本健吉追悼』（一九八八）、『「軽み」のその重さ 山本健吉「奥の細道」』（一九八九）の四篇もの評論がある。その五年は、「文士の付き合い以上の特別に濃密な時間」であり、その評論は高澤秀次の言うように、「二人が共有した時間への愛着が滲み出ている」⁵²。

「吉野、熊野、そして長崎への旅をともにしながら、中上の山本に対する敬愛の念はますますつよくなるのであるが、訃報に接し深い悲しみに包まれてから一年足らず後の」⁵³一九八九年一月六日から、中上は速玉大社双鶴殿で「熊野大学開設準備講座」を開始し、この「連続講座で山本健吉『いのちとかたち——日本の美の源流を探る』をほぼ毎月一章ずつ、九一年十二月まで講読」⁵⁴する。昭和最後の日の前日から、中上自身の発病までの三年間、山本健吉を講読・評論していた。

しかし、その評論を検証してみると、第十九章「歌枕の誕生」に、「山本さんは、正直あまりいい評論家じゃないかもしれない。折口さんなんかにくらべるとですね」や、「山本さんの日本論というのは、もしかしたら三級品ぐらいに下がってしまうのではないか」⁵⁵などのような場面当り的な発言もある。

いってみれば、そもそも、山本氏との交際は、角川源義に対する尊敬心からである。その源義氏が二十五歳で書いた『物語文学の発生』という本は、熊野学ともいえる本で、中上を震撼させたのである。角川は無条件に山本健吉を父親のように慕っていたが、中上は熊野学を介在していたのであろう。

これまで論じてきたように、中上健次は熊野を論じるために、山本健吉のテキストを好材料として選択したのである。高澤秀次はつぎのように述べている。

（前略）折口信夫の直系にして、名高い『現代俳句』の著者でもある山本健吉の胸を借りて、そこから「熊野」の可能性を最大限に引き出してみせること、それはオルガナイザー中上の大いなる目論見だったのだ。俳句を当面の文化活動の中心に据えたこの運動体にとって、山本健吉はどうってつけの先達もなかったであろうし、また「熊野」を読み解き、読み抜こうとする彼（ら）にとって、「那智滝私考」を序章とする『いのちとかたち』ほど、格好のテキストもなかったのである。⁵⁶

そして、『中上健次事典』の「角川春樹」という項目に、次のようなものが書かれている。

角川春樹、俳人、角川春樹事務所代表。中上とは一九八三年、文芸評論家・山本健吉と仲立ちで出会う。二人の対談集『俳句の時代』は、遠野、熊野、吉野の聖地を巡礼

しながらの「俳句」をキーワードとする現代文学論であり、民俗情勢論。中上は『カエサル之地』、『信長の首』、『流される王』、『補陀落の径』といった春樹の句集のタイトルそのものに強く惹きつけられ、また激しく嫉妬した。その第四の句集に寄せた「角川春樹は文学、文芸の最前線で戦っている戦士なのだ」とは、二人の蜜月時代を象徴する一九八四年の中上の言葉。⁵⁷

中上はどういう原因で、春樹の句集のタイトルそのものに「激しく嫉妬した」か。日本武尊である「流される王」も、補陀落も、そのすべての舞台は熊野であり、日本の闇としての熊野を、中上健次は不断に問い続けていたからであろう。

結論とし纏めて言えば、角川は中上の代わりに、中上の作れなかった俳句をつくっている。中上と角川は、直接であれ、間接であれ、共に山本に師事し、影響を受けている。山本氏の言う「いのち」を、角川は宗教の神まで引きよせたが、それに対し、中上は、熊野学として受け止めているのである。角川源義の本と出会い、源義の盟友山本健吉や、その子、春樹と交際するのは、すべて、熊野という結論に帰することができる。

三、熊野大学俳句部の講師たち：茨木和生・宇多喜代子・後藤綾子・夏石番矢

この節において、中上の熊野に関する思想は、如何に他の俳人たちに影響したのかを検討したいと思う。一九八九年一月から、一九九一年十二月までの晩年の三年間、中上健次はほぼ毎月熊野に戻り、松根久雄、茨木和生、宇多喜代子、後藤綾子、夏石番矢らとともに吟行俳句会を開き、自ら選者をつとめる。

熊野大学俳句部について、宇多氏の書いた文章を長くなるが引用したい。

熊野大学俳句部の句会の贅沢は、春秋の筵を延べた句座をとりまく海山の景と、その筵にいつも中上健次さんが座っていることであった。中上さんはどんなに忙しくても毎月熊野へやって来て、この句会の俳句を丹念に読み、言葉や文芸についていろんな話をした。中上さんが郷里の新宮で熊野大学を開設した際に、最初にとりかかったのが俳句で、スタートさせたのは、松根久雄さんという熊野の兄貴的相棒が俳句をやっていたことと、俳句が普通の人たちの集う平俗の場で即座にいきいきする文芸だということを知り尽くしていたからである。(中略) 昼間は吟行句会、夜は俳句部外の人たちを交えて中上さんの講義を芯に話し合い、仕上げは飲み屋。中上さん自身は俳句はつくらななかったが、句会のタブに実に念入りな選と選評をした。(中略) 苦心してできた句に、どこがええンナ、と辛辣な新宮言葉が飛んでくる。現代詩が百年前にやった搾り滓よ、才能で書くなよ、散文家を唸らせるよ、などと呟くのを幾度聞いたことか。⁵⁸

熊野大学俳句部の一部の俳句を熊野大学出版が「牟婁叢書」で刊行している。「牟婁叢書」の第一弾は、一九九二年、熊野大学俳句部講師の宇多喜代子句集「夏月集」であった。その後、一九九三年八月「茨木和生句集 三輪崎」（宇多喜代子編集）を刊行、翌年八月には「俳句熊野大学」（松根久雄編集）を刊行している。

まず、茨木和生氏を検討しよう。

1. 茨木和生

茨木は、昭和十四年奈良県大和郡山市生まれ。昭和二十九年右城暮石選の「朝日大和俳壇」に投句、作句を開始する。昭和三十一年右城暮石主宰「運河」、続いて山口誓子主宰「天狼」に入会。「運河」編集長を経て、平成三年、「運河」主宰を右城暮石から継承。平成九年『西の季語物語』で第十一回俳人協会評論賞受賞。平成十四年第七句集『往馬』で第四十一回俳人協会賞受賞。平成二十六年第十一句集『薬喰』で第十三回俳句四季大賞受賞。現在、「運河」主宰。「晨」「紫薇」同人。⁵⁹

茨木は、「大学生になったとき、（右城）暮石先生とはじめて旅をしたのが紀の国の新宮であり、ここで、〈ありがたや〉としかいいようのない海に出逢い、翼を広げ、力をこめて新宮の砂利浜にぶつかる波のような松根久雄さんに出逢った」⁶⁰。つまり、茨木と松根氏との交際は一九六〇年代の初めに遡れる。松根氏は、常に茨木を前にして、中上健次のことを賞賛していたのである。松根氏の提議で、「運河」が企画し、中上健次と歌人の前登志夫は吉野で対談を行った。それは、茨木が中上健次に始めて出合った昭和五十三年のことである⁶¹。

中上健次の長編エッセイ「もうひとつの国・光と翳」から、次のような段落を、茨木和生は抄出して、『西の季語物語』という本の「IV中上健次・右城暮石」で、中上健次を追懐している。

このところ俳人の吟行につきあい、俳句は作らぬが、彼らの見る目、聞く耳と自分を競いあわせてみようと、連衆の中に紛れ込ませてもらう事が度たびあるが、車で歌枕の場所に行き、句をひねり出すのを見て、何故俳人は、車でピュッと来てしまった非礼を土地の霊や草木の霊にわびないのだろう、言の葉で取りあえず地の主に挨拶しないのだろうと、不思議にかんじていた。⁶²

中上は、俳人たちの「見る目、聞く耳と自分を競いあわせてみよう」としていた。茨木は、その言葉を重くうけとめた上で、現代俳句において、自然や風土の中にわけ入って、対象を深く見つめ、じっと聞き入った、正面きった自然詠は少ないと断じる。さらに、季題や季語はずいぶん美しく、スマートに使われるようになって久しいが、その美しさに生命の輝きを感じられないのは、風土から強いエネルギーを受ける俳句の伝統を忘れたからだ、中上の発言の真意を汲み取っている。⁶³

中上の発言の真意を受けとった茨木の俳句をみてみよう。

命またけむと囀る鳥あれや 茨木和生『三輪崎』

掲句の「命またけむ」は、「倭建命の歌を念頭において歌われた」ものであり、悲劇の皇子の鎮魂を天に囀り小鳥に委ねている趣がある。それと同時に、『三輪崎』のあとがきにある通り思いもかけない畏友の中上健次氏の死を慟哭する茨木は、「倭建命と中上健次に共通する英雄の上に免れ難い悲劇性を、掲句を仲立ちとしてながら考えこんでいる」⁶⁴のであろう。

まぐはひしあとは蛇の香ぞ朴の花 茨木和生『三輪崎』

「まぐはひ」は上代語で、男と女が互いに目と目を見合わせて、愛情を通わせることであり、男女の関係を結ぶことでもある。正木ゆう子が指摘するように、「性が聖と俗の表裏の面だけを持ち、中間の猥雑さは人間社会特有のものだ。自然のふところで、あらゆるものは浄化させてゆく」⁶⁵。茨木の『三輪崎』が中上健次に縁の深い句集であるせいか、掲句は中上の言う「花鳥風月」と「アンチ花鳥風月」を超えた「元素的な要素」を思い出させる。

一九九〇年六月三日、熊野大学開講式特別講演として、茨木は、「熊野の語り部をつくれ」⁶⁶をテーマに講演した。語り部＝権力と示唆する講演は、後に、熊野大学機関誌「熊野回廊」創刊号と第二号に載せられている。別の発言では、「熊野には、ふつうの歳時記ではまかなえないものがある」、「今の歳時記には熊野が入ってない。熊野だけは、別の歳時記をつくる必要がある」⁶⁷と、茨木和生は言う。茨木の「語り部＝権力」の思想や熊野のために新たに歳時記を作る考えは実に共通している。つまり、新たな歳時記を作ることによって、新たな語り部を作るのであろう。

2. 宇多喜代子

宇多喜代子、一九三五年十月十五日生まれ、一九七八年、「草苑」の編集を担当。「獅林」退会。新宮市大浜での地元句会に参加。句友松根久雄を通して中上健次を知る。一九八一年、澤好摩、仁平勝、夏石番矢ら「未定」のメンバーと夏の飛驒を旅する。一九八四年、急性肝炎治療のため那智勝浦に静養中の中上健次を見舞う。一九八九年、中上健次を軸にした「隈の会」を新宮市で発足。一九八九年、「隈の会」を熊野大学として発足させる。かねてより熊野通いをしていた茨木和生とこれに合流。以来、毎月定期的に中上健次の講義、句会など多くを開催。後藤綾子、夏石番矢も参加。一九九一年、NHK文化センター俳句講師。後藤綾子の呼びかけて「あ句会」発足。一九九二年、一月七日を発行日として、熊野大学出版局より書き下ろし第四句集『夏月集』刊。⁶⁸二〇〇一年、句集『象』にて第三十五回「蛇笏賞」受賞。二〇〇二年、紫綬褒章を受章。二〇〇四年、桂が没し「草苑」終刊、あらたに「草樹」を創刊し会員代表となる。二〇〇六年、現代俳句協会会長に就任（二〇一一年退任）。二〇一二年、『記憶』で第二十七回詩歌文学館賞俳句部門を受賞。二〇一四年、第十四回現代俳句大賞受賞。二〇一六年、日本芸術院賞受賞。

宇多氏の俳句の特徴をみてみよう。

天皇の白髪にこそ夏の月 （宇多喜代子『夏月集』より）

この句の初出は『夏月集』(一九九二)であるが、宇多喜代子自選百句の中の一句として、俳句研究「夏の号」特集宇多喜代子の世界(二〇〇九)にも発表されている。「夏の号」特集で上記の句について、宇多氏自身は次のように解釈している。

作家中上健次が新宮の松根久雄や友人たちが作っていた「隈の会」を母体に、市民講座・熊野大学を創設。茨木和生とこれに参加。のちに夏石番矢、後藤綾子に加わり、毎月一回新宮に集まる。昼間は川原で鮎を食べる句会、山藤の下での句会、むかしの女郎屋での句会などを楽しみ、夜は中上健次を軸に諸々語る。平成三年の秋、中上が、熊野大学で句集を出すから至急三百句書き下ろしの句を揃えろと言う。なぜか急がねばならぬという気がしてその夜から書きはじめ、最初の一句はこの句を置く。今上天皇の白髪を遡っていたら、熊野御幸の上皇たちがなべて白髪であったように思われてきた。この句集に限り旧仮名遣を使用することを試みる。翌年五月、出来上がった句集を入院中の慶応病院に持参する。八月十二日、中上健次永眠。四十五歳。⁶⁹

この句について、筑紫磐井は「現天皇は、皇太子の時代を長く過ごすこと、または平成の長い休戦状態が続いている」⁷⁰とも解釈しているが、季語〈夏の月〉を十分に理解していない解釈だと思う。山本健吉は『日本大歳時記』季語〈夏の月〉の項目に、次のように解説している。

夏の月：月涼し、夏の霜

月涼しと言っても夏である。『枕草子』に「夏は、夜、月のころは、さらなり。闇もなお」とあり、(中略)また夏の夜の月が地面を照らして白々と霜を置いたように見えるのを、夏の霜と言う。⁷¹(傍点は筆者)

また、同項目で、加藤楸邨は、芭蕉の句「蛸壺やはかなき夢を夏の月」を鑑賞し、「夏の月には他の季節には感じられない人の世に近い感触とともに、〈短夜〉とか、〈明易し〉とかいう感触は、言外にけはいのようにまつわっていることも確かである」⁷²と言う。

また、〈夏の月〉には、〈月涼し〉と〈夏の霜〉の二つの副題がある。副題とは傍題、別名、別称などと言われるもので、同じ季節の同じ事柄を意味する季語という意味であるが、〈月涼し〉は夏の夜の涼しさを象徴し、〈夏の霜〉は地上を白く照らしている様子を表している。しかし、夏は夜が明けやすく、月の明るく照ってられる時間は短い。ゆえに〈夏の月〉からは、「儚さ(はかなさ)」を感じる。また、夏の夜の涼しさがゆえに、昼と夕べはよけい暑いと示唆している。つまり、〈夏の月〉は、かえって暑さを増幅するような月にも見える(例えば：市中は物のにほひや夏の月 野沢凡兆)。さらに、白く照らしている様子を表すと同時に、闇はなお一層濃く見えることをも言っている。

角川書店の『新版季寄せ』の〈夏の月〉項目には、「夏の月赤き目をして犬が病む 山本

令夏」⁷³が例として挙げられている。ほかに、〈夏の月〉に関する名句には、

蛸壺やはかなき夢を夏の月 松尾芭蕉
生き疲れただ寝る犬や夏の月 飯田蛇笏
夏の月皿の林檎の紅を失す 高浜虚子
河童の恋する宿や夏の月 与謝蕪村

などがある。

いわば、宇多氏の上掲の句「天皇の白髪にこそ夏の月」とは、「犬の病」や「生き疲れ」などとは違うが、「言の葉」としての天皇の輝いている白髪にこそ、闇はなお見えてくる。「熊野御幸の上皇たちがなべて白髪」であり、すべて白く照らして輝いてあることは、日本語の象徴、大和文化の統率としての天皇の、熊野の「土蜘蛛」や「尾のある人」という闇への、ひけらかしや征服者の権力誇示であり、原住民を震え上がらせることでもあると思う。もう一つ、宇多氏はかつて次のように述べている。「俳句は決して華々しいものではない。敗北の詩、隠遁の文芸である。俳句に関わる者にはそういった覚悟が必要だ」と、中上が「俳人に対して敢えて言わなかったこと、それが喜代子の口を借りて語られた」のであろう。⁷⁴

さらに、〈夏の月〉を季題にした宇多氏の句には、次のようなものがある。

折鶴の多面多角に夏の月
惨敗の八州に高く夏の月
困憊の机の広さ夏の月
夏の月壁の帽子が出でゆけり

宇多氏は、「多面多角」から、〈夏の月〉を詠んでいるが、なぜ「天皇の白髪にこそ」であろうか。それも、中上健次の「短歌一俳句論」に影響されているのことと思う。

「三十一文字を統轄する、その頂点には天皇がいるのだ」と中上は看破していた。⁷⁵中上の言う天皇とは、現実の天皇や立憲君主制の次元の天皇ではなく、日本人の無意識的なイデオロギー的に絡め取られてしまう装置であり、日本文化と言の葉としての日本語を統轄する地点にあるものである。その意味で、短歌の五七五七七が天皇制と繋がっているのである。ところが、短歌と違い、俳句というのは天皇の周辺世界で育まれてきたものではなく、世俗のところで簡略化されたものである。

〈夏の月〉というのは、古来和歌にしばしば詠まれていた。例えば、「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらん」（『古今集』巻三、文屋深養父）や、「夏の夜の月待つほどの手すさみに岩もる清水いくむすびしつ」（『金葉集』藤原基俊）などがある。

そういう短歌と、深く関わる〈夏の月〉なので、それこそ、ある意味での天皇に繋がるのであろう。文屋深養父の歌で、まだ宵の内だと思っとう明けてしまう。月は雲のどこに宿りを求めているのだらう。というように短夜と月の関係を面白可笑しく詠んでいるが、そのような夏の月は「天皇の白髪にこそ」なのである。

中上健次の活字になった最後の文章は『夏月集』の葉で書いた推薦文である。中上は病魔と闘いながら書いた推薦文で、宇多氏の作品群を「日本の、詩歌文芸の世界にたいする、不

意の一撃（クー・デ・タ）」と高く評価している。

『夏月集』の集名にも因む〈天皇の白髪〉の句を巻頭に置き、全体を夏ではじめ、隠国熱唱、秋、冬、春という異例の構成をとる。〈天皇の白髪にこそ夏の月〉にはじまり、〈掛け藤年寄かくもうつくしや〉に終り、間狂言として「隠国熱唱」が入り、前ジテの天皇が後ジテの年寄りなるという構成である⁷⁶。

中上文学においては、夏を背景とするのはほとんどであるという事実からみれば、霊地熊野と作家中上健次との出会いによって、宇多氏の作品世界は大きく影響されたことに間違いが無い。

宇多氏の俳句をもう少し引用してみたいと思う。

晩禱の退屈に蟹が出てきたよ
春の風苦しむ鶏を抱きに行く
遠き日の男根なぶる葉月潮

普通の人には、「宇多喜代子の俳句」を「よく分っていない」くて、「変な句だ」と思っているが、戦後の社会性俳句運動、前衛俳句運動において理論・実作両面で中心的な役割を果たす金子兜太は、宇多喜代子の俳句の変な点が「じつにユニーク」で、宇多氏の「勝ち気、あるいはもっと自然な、肉体感覚の持つ特異性」であり、その感情が「エロでもなんでも無い、当たり前存在感知だ」と評価している⁷⁷。

金子によれば、宇多氏は、二十代のとき、「顔面神経麻痺になって、婚約も破棄し、何年かかっても直らなかつたらしい」。よって、「趣味」ではなく、俳句は「何か救いを求めた」のであった。その後、偶然の救われた強運があり、「愛嬌」が「湧いてくるわけ」。いわば、二十代の厳しい体験を経た人物ですから、「弱者とか立場のつらい人とか、境遇の恵まれていない人とか」に対して、「非常に好意的」で、「予想以上にヒューマンな人」である。俳句史や俳句評論もする宇多氏が、新興俳句運動の藤木清子や娼婦になって行方不明の俳人鈴木しづ子らを紹介・評論しているのは、「普通のヒューマニティ」ではない。⁷⁸

このようにして、宇多氏は、尋常ではなかつた二十年代の経験を経て、中上健次や熊野という霊地により、俳句の作風がヒューマン的になり、俳句本来の力強さを感じさせたのである。

3. 後藤綾子

後藤綾子がかつて、次のように中上健次を評論している。「はじめて逢った頃は、並はずれた俳句の鑑賞眼に驚きつつも、やっぱり散文作家の見方だなあと考えたことがあった。それは何時どこかでどういう勉強をされたのか、二年ほどの間に俳句作家が、グウの音も出ない批評のしかた、俳句の本質をがちり掴みとっている」⁷⁹。後藤はなぜ散文家の中上を好評しているのだろうか。まず、後藤綾子の略歴を見てみよう。

大正二年大阪生まれ。東洋女子歯科医学専門学校卒。医学博士。十八歳で父を失い、家業の歯科医業を継ぐ。昭和三十五年「雨月」入門。昭和四十一年「菜殻火」をへて、昭和四十

八年「鷹」に入会し、翌四十九年「鷹」同人となる。第二十二回鷹俳句賞。第二十六回角川俳句賞受賞。⁸⁰

一九八〇年角川俳句賞受賞作品の冒頭何句から、後藤氏の俳句の特徴が窺える。

比良八荒鯛焼すこし萎れをり
東風に鳴る帆網そろばん合はぬなり
間をおいて瞼びくびく伊勢参
アネモネや女子大生の額の皺⁸¹

俳句評論家四ツ谷龍の言葉を借りれば、「鯛焼や帆網や伊勢参の句では、〈比良八荒〉、〈東風〉、〈伊勢参〉といった格調高い、もしくは由緒ある季語に、萎れた鯛焼だの、合わない算盤だの、びくびく動く瞼だのといったどうにもしょうがないような俗な材料を重ね合わせることによって、これらの季語を日常生活の次元に引きつけることに成功している。季語を、それ自身の持っている美意識の内側で使うのではなく、それらの美意識をいったんそぎ落として季語を俗にまみれさせることによって、季語に新しい生命を吹きこもうとする。ここにも、物事をきれいごとに終わらせずに、自分なりの目ですべてを見直そうとする綾子の辛辣な眼が感じられる」⁸²。

換言すれば、聖と俗が、コインの両面のようなものであることを、後藤氏は見事に描いているのである。さらに、女子大生の句では、アネモネという愛らしい花、少女的な花と比較されて、女子大生の皺はいつそう残酷にさらされる。四ツ谷龍によれば、「この句は女を見る女の目のいやらしさを描いて、余すところはない」。「女心にひそむ残酷さから目をそむけなかった後藤綾子の批評精神は見事である」⁸³。確かに、中上の言う花鳥風月に毒があるという説の実践版といえるのであろう。この句を作ったときの後藤氏と中上と、何も関係がないが、二人とも、聖と俗の関係を看破している以上、後に、前者が熊野大学の講師として、招かれたのはただ偶然とは思えない。

4. 夏石番矢

夏石番矢の略歴は次のようなものである。

一九五五年七月、兵庫県相生市菅原町に生まれる。一九七〇年夏、学習雑誌「中三コース」金子兜太俳句欄に〈足とめて見るは梅雨のうなる川〉が初入選する。一九七四年東京大学文科Ⅲ類入学。クラブは東大学生俳句会と能狂言研究会観世会。一九七九年東京大学教養学部フランス科卒業。一九八一年「短詩型の比較文学論——日本の俳句と西洋の短詩」でTOUKYOU大学文学修士号取得、同年十一月、第九回「俳句研究」五十句競作入選（第一位）。一九八四年同大学院比較文学比較文化博士課程修了。一九八四年埼玉大学教養学部専任講師となり、一九八七年助教授、一九八七年明治大学法学部のフランス語講座助教授。一九九〇年一月、新宮市で中上健次と会う。これ以降約一年半、「熊野大学」の講師として熊野に通う。一九九一年、明治大学教授となる。十月、第三十八回現代俳句協会賞受賞。一九九六年五月から一九九八年三月まで、パリ第七大学客員研究員。一九九九年七月、東京、第一回国際現

代俳句シンポジウム実行委員会事務局長として、企画・運営にあたる。⁸⁴

夏石番矢が熊野大学に参加するきっかけについて、宇多氏はつぎのように詳しく述べている。

熊野大学の丹鶴町の事務所で中上さんと松根久雄さんと三人で若手俳人の話をしていたとき、中上さんが夏石番矢はどうなんだと言い出した。意外な人の名が出た、というのがその時の正直な感想だったが、いつも眉根を寄せているイライラ男というのがその頃の夏石さんの印象だったから、イライラの素などを吸い取ってくれるような熊野の陽光を浴び、中上さんの力にまみえるのも悪くないだろうと思い、熊野へ来てみないかと誘ったのが夏石さんの熊野大学参加のきっかけであった。中上さんが、夏石さんだけでなく私どもの俳句や雑誌の雑文などを読んでいたことがわかって身を縮めたが、夏石さんは実にすんなりと熊野にやってきたという感じがする。夏石さんが熊野の地や熊野の人と最初からうまく折り合ったのは、この地が日本の臍であるという夏石さんの理解がごく自然だったからだろうと思う。熊野大学では、いままで幾人かの人々を迎えたが、滔々と熊野の魅力と熊野の何たるかを言う人で再びやって来た人はない。幾度も来る人はなぜか黙っている。実際、言葉にすればするほど嘘が濃くなるのが熊野の海山であり、熊野気質なのだ。⁸⁵（傍点は筆者）

熊野が日本の臍だと思う夏石番矢は、「一九九〇年お正月」、中上健次と出会ってから以来、三年間、「計十四回」⁸⁶も熊野へ通っていた。その回数だけみても、熊野の魅力に惹かれていることを示しているのであろう。

中上は、夏石氏の俳句と雑誌の雑文を読んでいて、それが、夏石氏を熊野大学に招いた理由でもある。中上は夏石の発言を認めたのであろう。ひとまず、一九九〇年以前の夏石氏の俳句に関する雑文を見てみよう。

「定型」という表現は、人間が作り出した文化の根源的な虚偽性や退屈さをなかばめぐり出し、もう一方では巧みに隠蔽することを目指しているように思われてならない。⁸⁷（傍点は筆者）

現在の俳句状況が曖昧なのは、俳句人口の急激な増加に加えて、俳句近代から持ち越した問題が放置されているからでもある。（中略）現代俳句の多様性と俳句近代の複雑なねじれは、本来、同根のことがらだったのではないか。（中略）現代俳句の多様性は、括弧付きの多様性にとどまる。括弧付きの多様性には、隠蔽な抑圧が潜む。⁸⁸（傍点は筆者）

俳句の五七五という定型、すなわち表現面、及び俳句の近代から持ち越した問題、すなわ

ち内容面について、夏石番矢は発言していた。両方とも「隠蔽」という言葉を使っている。表現面において、五七五というのは、観念的な共同幻想、つまり歴史的なフィクションであるかどうか、或いは必然性の真実であるかどうかに関わらず、曖昧な定型そのものをまず考察する必要があると指摘している。そして、内容面について、桑原武夫の「第二芸術」論に代表される近代主義の効力が落ちているにも関わらず、「ほとんどの俳人や俳句雑誌は、近代俳句、近代俳人を取り上げて、俳句の近代そのものについて問いかけを発しようとしなさい」。俳句の真実を思索する中上健次は、きっと、その言葉に共感したのであろう。

さらに、中上健次の言う「路地」も、夏石氏のエッセイ『ひらがなの束』に見られる。

三年前から私は、漢字とカタカナだけを使った作品をおもに書いてきた。そこから新作品集『新空律』（思潮社）が誕生した。なまぬるいひらがなの束（ファッション）は、日本という路地の行き止まりではないか。日本の平準度の低い漢字とカタカナから妖怪を生み出したかった。⁸⁹（傍点は筆者）

夏石氏によれば、「ひらがなは、他者や異物や異人の異貌をやわらげ、多様なものを一様化する性質も持つ」。いわば、「漢字が日本に入り、漢字を部分かしてカタカナが生まれ、漢字をときほぐしてひらがなが生まれらるのであれば、ひらがなは、雑多な渡来物を日本的に平準化する日本文化のシンボル」だという。それがために、夏石氏は、あえて自分の句集にひらがなを使わず、妖怪を生み出したがるのである。中上健次の作品において、カタカナも格別の意味を持つ。それは、路地という文字のない世界の口承文化を記録するためである。その意味で、中上も、カタカナから「妖怪」を生み出したのではなかろうか。

ようするに、中上は夏石氏の雑文に共鳴してから、後者を熊野に招いたのであると言っても間違いが無いであろう。

夏石番矢の作品を検討しよう。

夏石番矢の作品に『楽浪』という句集がある。この一冊の書物は、「中上が死んだあとに中上に寄せられるという形で出た最初の本である」⁹⁰。『楽浪』の巻頭に「故 中上健次氏へ」と献辞がしたためられている。そして、そのあとがきは次のように書かれている。

これは、第五集『人体オペラ』につづく、二百二十一句よりなる私の第六句集である。二十代まで旅行嫌いだった人間が、熊野詣でを機に、旅の面白さに魅せられ、さまざまな地霊に触発されて、三十代後半に一冊にまとめた本である。

本書を急逝された中上健次氏に捧げたい。氏との熊野における出会いなしには、この句集は生まれなかったろう。

一九九二年八月二二日⁹¹

『楽浪』は、地霊に触発された句集であった。例を挙げてみよう。

スサノオは滝を振子として使う
うみやまのとわの大学あらばとけ

〈滝〉の句では、熊野の神、熊野に樹種をもたらした神とされているスサノオをカタカナで持ち出し、遙かの昔の物語を追体験しながら、日本という国の生成の深部を引き出している。そして、那智の滝を振子として使うという、スケールの大きな視野になる。時間と空間を越え、地霊と直に交感する一句である。

〈大学〉の句は、書き換えれば〈海山の永久の大学新仏〉である。〈うみやま〉は海と山に囲まれている熊野の、開放性と閉鎖性、北方性と南方性、両方の性質を指している。そして〈とわ〉は熊野大学への讃歌で、校舎もなければ卒業は死ぬまでの熊野大学の精神が、千年も続けるということを言う。宇多氏の言葉を借りれば、「この句、漢字で書いてしまえば時間はポツンと跡切れる。〈とわ〉という終りのない時間を表すのに、平仮名の連綿とした表記がいい効果をあげている句」である⁹²。確かに、これは、中上が晩年のエネルギーを費やして実現させた熊野大学のことを詠い、急逝の中上への鎮魂歌ともいえよう。

四、熊野大学俳句部のその後

中上健次が逝去してすでに二十五年も経た。中上健次の俳句論に直接間接触発され、茨木和生の主宰語「運河」の紀南支部会員だけではなく、熊野大学俳句部の精神は、今も若者に引き継がれている。

1. 杉浦圭祐

一九六八年、和歌山県生れ。和歌山大学経済学部卒業。中上健次主宰の熊野大学俳句部で俳句に出会う。一九九四年「草苑」に入会。一九九七年「草苑」同人。一九九八年雑誌「quatre」創刊に参加。二〇〇一年第十九回現代俳句新人賞受賞。

杉浦氏は、俳句に関するエッセイ『『熊野』を消せないための行動——中上健次／俳句／私』で、中上健次の次の発言を引用している。

俳句っていうのは五七五しか無い。その短い五七五、字数にして十七字。お前の死刑執行は十七日後だ。あと十七日したら殺されるんだと。俳句は死刑の宣告を受けているみたいなそういう人間達を作ったものだし、そのぐらいでやれ!⁹³

杉浦圭祐自身の言葉をかりれば、杉浦は、中上に触発された事柄が「俳句と熊野、どちらも〈死〉というものに関係している」ということで、ゆえに、「熊野の地を現代日本に毒されずに守る」作業をし、引き続き「熊野を問う」。⁹⁴

2. 堀本裕樹

一九七四年和歌山県生まれ。一九九三年「国大俳句」に入会。二〇〇五年「河」に入会。第二十六回角川春樹賞を受賞。二〇〇六年、河新人賞受賞。二〇〇七年河賞受賞。「河」編集長就任。二〇一〇年「河」退会。二〇一一年「梓」入会、同人となる。第二回北斗賞受賞。現在「いるか句会」「たんぼぼ句会」主宰。⁹⁵

堀本裕樹の句集『熊野曼荼羅』は、文學の森主催の新人賞である第二回北斗賞の副賞として、出版された句集である。堀本裕樹は「高校時代の頃から」、中上健次に「私淑している」⁹⁶という。

3. 谷口智行

一九五八年、京都生まれ、和歌山県新宮市育ち。一九九三年、「熊野大学俳句部」入会。一九九五年、運河入会、茨木和生に師事。一九九九年、運河賞受賞、運河同人。二〇〇〇年、俳人協会会員。第八回「深吉野賞選者特別賞」。二〇〇四年、第七回「朝日俳句新人賞準賞」。三重県文化賞文化奨励賞。現在「運河」編集長。⁹⁷

「新宮での少年時代、健次さんの言葉を借りるなら、海・山・川のいわゆる〈三面鏡〉に照射された独特の自然風土の中、私は精一杯悪ガキぶりを発揮して育った。その後多くの土地に暮らしたが、その間俳句との縁はなく、結局ふるさとと新宮の地で出遭うべくして俳句と出遭った」⁹⁸という。

五、結論

茨木和生によれば、中上健次の唯一「まじめ」に書いた俳句は、

あきゆきが聴く幻の声夏ふよう

という句である。⁹⁹あきゆきは「秋幸」で、『岬』、『枯木灘』、『地の果て 至上の時』などの作品の主人公である。高澤氏によると、夏ふようは「夏芙蓉」で、「路地」世界を彩る花の名前で、正式な植物名ではない。白い花を咲かせ、甘い匂いに引き寄せられて、金色の小鳥たちが群れ集う。俳句で「芙蓉」は秋の季語だが、中上の夏芙蓉は盛夏を象徴する植物である。また芙蓉は蓮の花の漢名でもあることから、蓮池を埋め立ててできた「路地」に咲く花が夏芙蓉というのは意味深長という。¹⁰⁰

中上健次は、上記を含む極少数の挨拶句を除き、結局俳句を作らなかった。その理由をこう言っている。

毎回僕はものを作らずに言っているんですけど、つくのは小説だけで勘弁して欲しいというんじゃないです。自分は小説の専門家だという意識があるから五七五にあまりなれなれしく接近しないでおこうという意識でね、やりたくないんです。¹⁰¹

中上は、おそらく散文作家としての矜持により、また智勇の士松根久雄への畏敬と、角川春樹への畏敬により、結局俳句を作らなかったのである。

句は作らないのに、中上健次が何故、「きのうまでは韓国、ここが終わったらまた行く」¹⁰²というように多忙なるスケジュールを縫って熊野に帰省し、毎月出席して選句と句評をしたのか。一九九二年一月二十四日、腎臓癌の肺への転移が告知された中上健次は、前登志夫の言葉をかりれば、「どうしてあんな躰になって、〈俳句〉の鼎談などをやりたがったのだらう」¹⁰³。最晩年の中上は雑誌「俳句」連載『時代の中の定型を読む』の前登志夫、岡井隆と鼎談し、同誌掲載の句の月評を行うのであった。それはなぜであろう。

いってみれば、中上健次にとって、俳句は熊野そのものなのである。熊野新宮の「市井の逸材俳人、直覚力の鋭い」¹⁰⁴松根久雄氏に、俳句への関心と思索を呼び起こされ、吉本健吉や角川春樹らとの共行動によりさらに強化されたのである。加えて、俳句を成すことにより恰も小説の方法を鈍らせるのではなく、句座にあって、自身の文学的基盤に火を放ち、そこに自らを追い込む姿勢を貫き通したのである。さらに言えば、熊野は日本の路地である。路地というものには、抑圧がある。俳句にも、抑圧がある。ゆえに、熊野の歴史や文化に興味を示す中上は、短編小説を、俳句のように書く。物語、短編小説、俳句のいずれも、中上にとっては、熊野あるいは路地を理解、解剖、または描写する手段に過ぎない。

芭蕉に関しても、「熊野に来たことがないから大嫌い」という。中上は、熊野に拘り、「鳥獣」としての立場を取るわけである。『鳥のように獣のように』という単行本は、芭蕉への反抗そのものとみなしてもよからう。

ようするに、中上健次は俳句に強い関心と理解を示し、俳句の力を畏怖し、熊野の事歴と豊饒を抱え込む俳句を愛したのである。中上健次が晩年まで保ち続けた、俳句への関心をもつ。長編小説と俳句との間の、極小と極大の関係がある。その極小関係は、定型と散文の関係で、極大の関係は、「路地」という求心力だと思う。

注

¹ 高澤秀次『中上健次事典：論考と取材日録』恒文社、二〇〇二年、三二六頁。

² 松尾芭蕉著、中村俊定校注『芭蕉紀行文集』岩波書店、一九九一年、七〇頁。

³ 中上健次「トポスの文学」（『中上健次エッセイ撰集 文学・芸能篇』恒文社、二〇〇二年、二二八頁。初出：一九八五年十月五日、東京新宿の「朝日カルチャーセンター」にて、「トポスの文学——俳句と角川春樹について」と題しての講演。後に、「俳句」一九八六年二月号に発表。）

⁴ 中上健次『紀州 木の国・根の国の物語』朝日新聞社、一九七八年、帯正面。

⁵ 水原秋櫻子、加藤楸邨、山本健吉『カラー図説日本大歳時記座右版』講談社、一九八三年、一一五二頁。

-
- 6 高澤秀次『中上健次事典：論考と取材日録』恒文社、二〇〇二年、三二二頁
- 7 松根久雄著、茨木和生、宇多喜代子編集『句集路地靈歌』禽獸社、一九九九年、一三八頁
- 8 辻本雄一「聞き書き松根久雄 中上健次との体験」（日比紀一郎、草加浅一編集『熊野誌第三十九号・特集中上健次』熊野大学・熊野地方史研究会・新宮市立図書館発行、一九九四年、二〇頁）
- 9 同注8、二一頁
- 10 中上健次「山本先生と花」（『中上健次エッセイ撰集 文学・芸能篇』恒文社、二〇〇二年、一六〇頁、初出：『俳句』一九八五年一月号）
- 11 同注8、二九頁
- 12 中上健次「能と俳句と短編小説」（柄谷行人、渡部直己編『中上健次と熊野』太田出版、二〇〇〇年、一一四頁）
- 13 高澤秀次「連載松根久雄」（『草樹』62号、草樹編集部、二〇一六年、六頁）
- 14 高澤秀次「熊野原人の流儀」（運河同人編『運河（松根久雄追悼特集）』運河俳句会、一九九九年三月、三十五頁）
- 15 辻本雄一「聞き書き松根久雄 中上健次との体験」（日比紀一郎、草加浅一編集、熊野誌第三十九号・特集中上健次、熊野大学・熊野地方史研究会・新宮市立図書館発行、一九九四、二四頁）
- 16 紀和鏡「うつほからの声」（運河同人編『運河（松根久雄追悼特集）』運河俳句会、一九九九年三月号、三十三頁）
- 17 宇多喜代子「うみやまのとわの大学——夏石番矢句集『楽浪』の熊野」（宇多喜代子『つばくろの日々・現代俳句の現場』深夜叢書社、一九九四年、二二三頁）
- 18 中上健次「桜川」（『全集5』二一四頁）
- 19 松根久雄著、茨木和生、宇多喜代子編集『句集路地靈歌』禽獸社、一九九九年
- 20 宇多喜代子「松根久雄さんの路地靈歌」（運河同人編『運河（松根久雄追悼特集）』運河俳句会、一九九九年三月、三十一頁）
- 21 中上健次「トポスの文学」（『中上健次エッセイ撰集 文学・芸能篇』恒文社、二〇〇二年、二二五頁、初出：一九八五年十月五日、東京新宿の「朝日カルチャーセンター」にて、「トポスの文学——俳句と角川春樹について」と題しての講演。後に、「俳句」一九八六年二月号に発表。）
- 22 同注21
- 23 同注21、二二五～二二九頁
- 24 同注21、二二六頁
- 25 高澤秀次『中上健次事典：論考と取材日録』恒文社、二〇〇二年、三四〇頁
- 26 中上健次「花の吉野詣」（角川源義『角川源義全集第一巻（古典研究I）』月報2、角川書店、一九八八年、五～六頁）
- 27 同注26、六頁
- 28 同注26、六頁
- 29 中上健次「花あれば——山本健吉追悼」（『時代が終わり、時代が始まる』福武書店、一九八八年、三九一頁、初出：新潮、一九八八年七月）
- 30 同注29、三九一～三九二頁
- 31 中上健次「俳句と言の葉 鋭い切っ先」（『中上健次エッセイ撰集 文学・芸能篇』恒文社、二〇〇二年、二四七～二四八頁、初出：一九八四年六月六日『読売新聞』夕刊）
- 32 同注31、二四九頁。
- 33 中上健次「終の地の雲輝けば秋燕——角川春樹「補陀落の径」（『中上健次エッセイ撰集 文学・芸能篇』恒文社、二〇〇二年、二四一～二四三頁、初出：平凡パンチ編集部、HEIBON PUNCH、マガジンハウス、一九八四年十二月十七日号）
- 34 中上健次「動詞としての花、増殖としての石」（『中上健次エッセイ撰集 文学・芸能篇』恒文社、二〇〇二年、二九一頁、初出：一九八五年六月一日『アサヒグラフ』）

- 35 中上健次「トポスの文学」(『中上健次エッセイ撰集 文学・芸能篇』恒文社、二〇〇二年、二二二頁、初出：一九八五年十月五日、東京新宿の「朝日カルチャーセンター」にて、「トポスの文学——俳句と角川春樹について」と題しての講演。後に、「俳句」一九八六年二月号に発表。)
- 36 角川春樹「「魂の一行詩」の揮う力」(『ユリイカ』青土社、二〇一一年十月、一三〇～一四一頁)
- 37 同注 36. 一三二～一三三頁
- 38 同注 36. 一三八頁
- 39 同注 36. 一三八頁
- 40 同注 36. 一四〇頁
- 41 中上健次、角川春樹『俳句の時代——遠野・熊野・吉野聖地巡礼』角川文庫、一九九二年。(一九八四年十二月に遠野、一九八五年二月に熊野、一九八五年四月に吉野)
- 42 中上健次、角川春樹『俳句の時代——遠野・熊野・吉野聖地巡礼』角川文庫、一九九二年、十二頁
- 43 磯田光一は角川春樹の第四句集『補陀落の径』をこう評価している。「これは“漢(をとこ)”の句集だと思いました。折口信夫から中上健次にいたる世界を十七文字で形象化すればこうなるのかと思う」。磯田光一氏から角川春樹氏への葉書より。『俳句の時代』八～九頁。
- 44 磯田光一「角川春樹の位置——ある文学史的考察」(『俳句 34(2)』角川学芸出版、一九八五年二月、一四二～五頁。)
- 45 中上健次「花あれば——山本健吉追悼」(『時代が終わり、時代が始まる』福武書店、一九八八年、三九〇頁、初出：新潮、一九八八年七月)
- 46 角川春樹『<いのち>の思想』富士見書房、一九八六年、七頁(初出：「櫻の魔性——野生とロマン」一九八三年十一月『河』)
- 47 坪内稔典「角川春樹」(『現代俳句ハンドブック』雄山閣、一九九五年、三十頁)
- 48 山本健吉。「『信長の首』跋」(角川春樹『句集：信長の首』牧羊社、一九八二年、二一五頁)
- 49 前掲書、二一七頁
- 50 角川春樹『<いのち>の思想』富士見書房、一九八六年、七四頁(初出は一九八四年三月『山本健吉全集』十三巻)
- 51 佐川広治「現代の俳人 角川春樹——『カエサルの地』を視座として」(『国文学 解釈と教材の研究 俳句一句集を考える』学灯社、一九八九年二月、一〇七頁)
- 52 高澤秀次「前編解題——「昭和の終焉を越えて」」(中上健次著、高澤秀次編『中上健次と読む『いのちとかたち』』河出書房、二〇〇四年、一五六頁)
- 53 同注 52
- 54 高澤秀次『中上健次事典：論考と取材日録』恒文社、二〇〇二年、三六一頁(原文は九二年十二月と書いてあるが、それは九一年の間違いである。)
- 55 中上健次著、高澤秀次編『中上健次と読む『いのちとかたち』』河出書房、二〇〇四年、二七七頁。
- 56 高澤秀次。「前編解題——「昭和の終焉を越えて」」(中上健次著、高澤秀次編『中上健次と読む『いのちとかたち』』河出書房、二〇〇四年、一五六頁)
- 57 高澤秀次『中上健次事典：論考と取材日録』恒文社、二〇〇二年、一五頁
- 58 宇多喜代子「中上健次と熊野と俳句」(一九九二年八月二十九日付「毎日新聞夕刊」)
- 59 茨木和生『季語を生きる』邑書林、二〇一六年、二二〇頁。
- 60 茨木和生『茨木和生句集 木の国』邑書社、一九九八年、九八頁(初版は一九七九年飛鳥書房)
- 61 茨木和生『季語を生きる』邑書林、二〇一六年、二〇六頁

-
- 62 茨木和生『西の季語物語』角川書店、一九九六年、二〇四頁
- 63 同注 62、二一四～二一〇頁
- 64 大石悦子「『三輪崎』の一句」(『俳句』第四十三卷第一号、角川学芸出版社、一九九四年一月、二六七頁)
- 65 正木ゆう子「『三輪崎』の一句」(『俳句』第四十三卷第一号、角川学芸出版社、一九九四年一月、二七三頁)
- 66 『熊野回廊創刊号(瓦版)』熊野大学機関誌、一九九〇年七月、七～十二頁、また二号(八月)の四～八頁
- 67 宇多喜代子が茨木氏の発言を引用している(『熊野回廊第四号(瓦版)』熊野大学機関誌、一九九〇年十月、四頁又は七頁)
- 68 宇多喜代子『宇多喜代子俳句集成』角川学芸出版、二〇一四年、二八三頁
- 69 宇多喜代子「宇多喜代子自選百句」(『俳句研究[夏の号]』(特集宇多喜代子の世界)角川 SSC、二〇〇九年六月、八〇～八一頁)
- 70 筑紫磐井「汎時代的——時代論」(『俳句研究[夏の号]』(特集宇多喜代子の世界)角川 SSC、二〇〇九年六月、九四頁)
- 71 水原秋櫻子、加藤楸邨、山本健吉『カラー図説日本大歳時記座右版』講談社、一九八三年、四三七頁
- 72 同注 71、四三八頁
- 73 角川書店編『新版季寄せ』角川書店、一九八五年、一〇八頁。
- 74 谷口智行「中上健次と熊野大学俳句部——健次が言わなかったこと」(『熊野誌第五十九号』熊野地方史研究会・新宮市立図書館、二〇一二年十二月、一二四頁)
- 75 中上健次「山本先生と花」(『中上健次エッセイ撰集 文学・芸能篇』恒文社、二〇〇二年、一六〇頁、初出：『俳句』一九八五年一月号)
- 76 後藤綾子、「宇多喜代子句集『夏月集』一句鑑賞」(『俳句』第四一巻第十号、角川文化振興財団、一九九二年十月、二四五頁)
- 77 金子兜太「肉厚と愛嬌」(『俳句研究[夏の号]』(特集宇多喜代子の世界)角川 SSC、二〇〇九年六月、八六～八八頁)
- 78 同注 77、八九～九〇頁)
- 79 後藤綾子「忘れ得ぬことば」(『熊野誌 第三十九号』(特集中上健次)熊野大学・熊野地方史研究会・新宮市立図書館、一九九四年、九十三頁)
- 80 後藤綾子の句集『綾』(菜穀火社、一九七一年)と『萱枕』(富士見書房、一九八八年)より。
- 81 後藤綾子「第二十六回角川俳句賞受賞作品 片々」(『俳句』第二九巻第十一号、角川文化振興財団、一九八〇年十月、七〇～七一)
- 82 四ツ谷龍「後藤綾子論——告白から批評へ」(『俳句』第三〇巻第五号、角川文化振興財団、一九八一年五月、一四一頁)
- 83 同注 82
- 84 夏石番矢『越境紀行——夏石番矢全句集』沖積舎、二〇〇一年、四八二～四八五頁
- 85 宇多喜代子「うみやまのとわの大学——夏石番矢句集『楽浪』の熊野」(『つばくろの日々・現代俳句の現場』深夜叢書社、一九九四年、二一九～二二〇頁)
- 86 夏石番矢、四方田犬彦「中上健次の古層」(『ユリイカ』第二十五巻第三号、青土社、一九九三年三月、一六一頁)
- 87 夏石番矢「俳句の現在 幻獣としての「定型」」(『海燕』第五巻第八号、ベネッセコーポレーション、一九八六年八月、二四三頁)
- 88 夏石番矢「俳句の現在 近代のねじれ」(『海燕』第五巻第十一号、ベネッセコーポレーション、一九八六年十一月、二〇九頁)
- 89 夏石番矢「俳句の現在 ひらがなの束」(『海燕』第五巻第十号、ベネッセコーポレー

ション、一九八六年十月、七七頁)

- 90 夏石番矢、四方田犬彦「中上健次の古層」(『ユリイカ』第二十五卷第三号、青土社、一九九三年三月、一五九頁)
- 91 夏石番矢『楽浪』鈴木一民発行所書肆、一九九二年、一三〇頁
- 92 宇多喜代子「うみやまのとわの大学——夏石番矢句集『楽浪』の熊野」(『つばくろの日々・現代俳句の現場』深夜叢書社、一九九四年、二一八～二二六頁)
- 93 杉浦圭祐、「熊野」を消せないための行動——中上健次／俳句／私」(縦覧編集委員会『縦覧』広岡プリント出版、八一頁)
- 94 同注 93、九一頁。
- 95 堀本裕樹『句集 熊野曼荼羅』文学の森、二〇一二年、扉頁。
- 96 同注 95、一八〇頁。
- 97 谷口智行『熊野、魂の系譜——歌びとたちに描かれた熊野』書肆アルス、二〇一四年
- 98 谷口智行『句集 藁嬢』邑書社、二〇〇四年、二一〇頁。
- 99 茨木和生「プロ」(『熊野誌第三十九号』(特集中上健次)熊野大学、熊野地方史研究会発行、八九頁)
- 100 高澤秀次「中上健次キーワード事典」(高澤秀次監修『別冊太陽 中上健次没後二十年』平凡社、二〇一二年、一八四頁)
- 101 熊野大学俳句部編集『俳句熊野大学(非売品)』一九九四年八月、五二頁
- 102 宇多喜代子「いまもにぎやか」(高澤秀次監修『別冊太陽 中上健次没後二十年』平凡社、二〇一二年、一五〇～一五一頁)
- 103 前登志夫「夕かなかな 中上健次氏を悼む」(『新潮』第八十九卷第十号、新潮社、一九九二年十月、二一八頁)
- 104 宇多喜代子「いまもにぎやか」(高澤秀次監修『別冊太陽 中上健次没後二十年』平凡社、二〇一二年、一五〇～一五一頁)

終章

終章では、まとめと今後の課題について述べる。まず、各章の要旨を纏めて見よう。

一、各章のまとめと結論

以上、本研究は、六章にわたって、中上健次文学における「路地」について、語誌的研究から抑圧の構造論へ追ってきた。第六章では、「路地」と直接的な関係がないが、中上が主導した文化会議や熊野大学といった運動の一環として、中上健次の俳句観や俳人交友関係についての考察を元に、「路地」との相応関係についても論じた。

まず、第一章「中上健次初期文学における『路地』前史」では、「路地」という単語は、中上健次の生まれ育った新宮の被差別部落を指示するものとして最初にテキストの中に登場した『蛇淫』（一九七五年）より以前の、数多くの現代詩、エッセイや短編小説を検討対象として、その初期のエクリチュールにおいて、すでに使われている「路地」という言葉の内包と、中上自身の出自に関し、或る程度言及されている被差別部落についての具体的なイメージ、さらには「路地」という言葉の原義を検討したものである。

初期の中上健次文学において、「路地」という語は、原義の「人家の間の狭い道路」しかとして使われていないが、すでに、暗闇、破壊などの「内向する暴力」の要素が含まれている。そして、被差別部落を指す「春日町」や「永山・長山」を用いて中上は一旦部落の出自を暴露したが、一九七五年～七七年前後、初期小説の単行本を契機にそれを削除し、出自を回避する。「春日」、「永山」、「長山」は「路地」の前史と言える。

第二章「部落を指す用語『路地』の誕生：「蛇淫」論」においては、中上の「蛇淫」と上田秋成の「蛇性の姪」を分析の視座に据え、被差別の歴史性を背負う「路地」を発見し、さらには、「路地」を発明していく中上文学の過程を詳しく追究した。

「蛇性の姪」からタイトルをつけた中上の初期短編「蛇淫」は、「路地」にはじめて「被差別部落」の意味を入れた小説である。中上の「蛇＝異類＝被差別部落民」論を発見したことにより、「蛇」の「淫」に顕れている「アジア的法・制度＝物語」の不可触性、「蛇」の「姪」という現代の同一性、つまり天皇を頂点とする階層秩序から離脱することに成功した。『蛇淫』を書く時期の中上健次が、自分の書くべきテーマとその書き方についての明瞭な自覚に到達していたことを示していると思われる。

さらには、和歌山県新宮市新宮駅の裏の部落、春日地区を、「駅裏」→「駅裏の何々」→「駅裏の何々の路地」→「駅裏の路地」→「路地」、という「路地」を創造していくプロセスを導き出した。

第三章「中上健次『不死』論——〈被慈利〉・〈観音〉・〈性〉」においては、『不死』を〈被慈利〉、〈観音〉、〈性的なもの〉という三つのキーワードに焦点を当てて分析してきた。〈被慈利〉は、歴史喚起の発動装置として、高德の僧の聖ではなく、賤視を受け、様々な差別に

直面していた下層の〈ひじり〉を語り、その人たちの現実の抑圧により、救済への渴望と加害の行為を繰り返す。さらに、〈被慈利〉は聖と俗の中間項として、〈性的なもの〉を通じて権力を脱構築する。そして、〈観音〉という言葉は、補陀落渡海という隠蔽された部分を喚起し、裏に生への渴望を引き出しながらも、無意味な死を再確認し、廃仏毀釈から神風特別攻撃隊まで、〈死んでもよい〉という観念を作り出した天皇制の〈正史〉に疑問を出す。さらに、〈性的なもの〉というのは、現代社会の政治や経済に再編成され、封建制と現代性の二重重荷を背負った「路地」の人の、反抗する捌け口となる。それは、理論として、〈性的なもの〉を未来的な視点から見据えている。

中上は、『不死』において、歴史、現在、未来の三つの視点から、隠蔽したことを暴露させ、不合理な根深い文化としての天皇制を破壊しようと考えている。これは、「路地」に生まれ育った人の、古代以来の長い天皇のことの葉の記憶との総体に対する「物語の物語」的な挑戦でもある。

そして、第四章では、東日本大震災に伴い発生した福島第一原子力発電所事故により、多くの人々が避難生活を強いられ、福島県民への差別や排除も跡を絶たない背景に、『火祭り』における「路地」差別の現代性を考察する。原子力発電所を建設するという話は、中上健次の小説『火まつり』の中にも登場している。火は、光であると同時に、熱でありエネルギーでもある。エネルギーを生産し、また差別をも新たに創出した「原発」と、「火まつり」は繋がっている。記紀神話で、火の神迦具土神の激しい性格により、陰所（ホト）を焼かれた伊邪那美命の死を既に描いてしまったことを思い起こせば、もう一度同じ主題を反復する『火まつり』は、伊邪那美命に対する一種痛切な鎮魂である。火之迦具土神に由来している「別火」の習慣、「穢れや不浄などが火を通して感染する」という考え方、つまり「血＝火＝穢れ」という回路は、血や穢れに対する差別に他ならない。伊邪那岐命の神話における「死の穢れと血の穢れ」の差別は、「差別の起源」である。「火＝毒」、つまり巨大なエネルギーとしての「火」の破壊力そのものを語っている中上健次は、「血＝火＝穢れ」を脱構築する。

第五章では、『千年の愉楽』においての「大逆事件」の記憶を考察し、「路地」が定着してから、「帝国」を脱構築する道程を検討する。『千年の愉楽』は「いずれも淫蕩・美形・妙技を極め、若死にする〈中本の一統〉の男らの行状を、生命の極点で〈路地〉そのものと化したオリュウノオバの遍在的記憶によって語る」ものである。オリュウノオバを「導入してはじめて」、「差別の問題」や、「大逆事件につながるような政治と歴史」などが浮上する。「新宮の内部」とくに「路地」には、「大逆事件の爪痕がそのまま残った」。「大逆事件」で、罪を被った二六名のうち、大石誠之助（医業）、成石平四郎（雑商）、成石平四郎（薬種売薬）、高木顕明（僧侶）、峰尾節堂（僧侶）、崎久保誓一（農業）の六名が熊野出身で、松本巖の言葉を借りれば、「徹底的にやられたのが熊野、特に新宮の者らであった」。六名のうち、大石と成石平四郎が死刑された。新宮のもつ意味合いは突出して大きい。社会主義者・幸徳秋水を首謀者とする大逆の企てをフレームアップしたのは、近代国家の内部規律引き締めのためのいわば「通過儀礼」であり、「大日本帝国」が一個の閉じた内部として確立されるた

めに必要であった外部、すなわち内部から排除されるべき「日本人ならざる者」という「ネガティブな表象」を作り出すための企てであった。そのような帝国を脱構築するには、「帝国」の内部で、フーコーの言う「権力のメカニズム」の「性」を語ることにより、差別に関する「優位」関係を解消したり、「物語＝法・制度」を批判したりする。また、語りの重層化により、「物語」を物語る。そして、「革命」を輸出することにより、外部で「帝国」を脱構築する。

最後に、第六章「中上健次と俳句」は、「路地」の思想について、中上の俳句観および俳人との影響関係という独自の視点から考察することを意図して書かれた論考である。中上健次の俳句観からも「路地」の抑圧構造が窺える。

中上健次は俳句に多大な興味を示し、角川春樹をはじめとする現代俳句界のトップクラスの俳人たち、茨木和生、宇多喜代子、後藤綾子、夏石番矢らと親交し、俳句会で選句・評論していた。俳句に関する膨大な発言は、読売新聞をはじめ、朝日新聞、雑誌『俳句』、『大河』、または『俳句熊野大学』などに散在される。本章は、そういう史料を整理したものである。中上健次にとって、俳句は熊野そのものなのである。俳句への関心と思索は松根久雄氏に、呼び起こされ、吉本健吉や角川春樹らとの共行動によりさらに強化された。それに、俳句というものを成すことにより恰も小説の方法を鈍らせようとしたのではなく、句座にあって、中上自身の文学的基盤に火を放ち、そこに自らを追い込む姿勢を貫き通した。路地というものには抑圧がある。俳句にも抑圧がある。ゆえに、熊野の歴史や文化に興味を示す中上は、短編小説を、俳句のように書く。物語であれ、能であれ、俳句であれ、中上にとっては、熊野あるいは「路地」を理解、解剖、または描写する手段に過ぎない。俳句に強い関心と理解を示し、俳句の力を畏怖し、熊野の事歴と豊饒を抱え込む俳句を愛した中上健次は、晩年まで俳句への関心を保ち続ける。長編小説と俳句との間の、極小と極大の関係がある。その極小関係は、定型と散文の関係で、極大の関係は、「路地」という求心力である。

以上のように、中上健次という小説家の出発点において、すでに「路地」の問題が、抑圧的性質を持つものとして認識されていたことが分かる。中上は「差別・被差別」問題を、歴史の回顧、現状の分析、未来の脱構築という三つの方向で問い詰めていた。「路地」の成立と変遷に伴う中上健次の思想変化について考察を進めた結果、中上健次には二つの視点があったことが理解できる。それは、古代以来の長い天皇のことの葉の記憶との総体に対する「物語の物語」的な挑戦の視点と、いわゆる近代化そして、高度経済成長期以降も、爪痕がそのまま残る「大逆事件」から浮かび上がる帝国主義を脱構築するという視点である。

二、今後の課題

本研究では、「路地」を扱う際、その誕生、内包の変化の軌跡として確認し、「路地」の歴史性、現代性、未来性を有する作品をそれぞれ分析したが、中上健次文学全体を対象として、「路地」を詳しく分析したものではない。中上健次の作品群を「路地」の抑圧問題という視

点から切り取ったために、取りこぼしてしまったものも多くあり、また考察が不十分な部分もある。具体的には以下の点が今後の課題として挙げられる。

1. 第二章や第三章で、「路地」の背負った歴史性について、「蛇」や「被慈利」などの具体像を通して考察したが、日本古代国家の被差別賤民から現在の部落民までの身分制度については触れられなかった。とりわけ、被差別部落民の歴史について、『熊野集』などの物語を引き続き論じていきたい。

2. 同時代の思潮との関連性について、いまだ整理が不十分である。「路地」と「原発」差別問題には触れたが、「路地」と「奇形」などの連関・相違などについて展開することができなかったため、課題としたい。

3. 他作家の文学作品との関連性において、考察が不十分である。たとえば中上健次に特別講師として新宮に招かれた瀬戸内寂聴の書いた、中篇『火の蛇』、短編「虵（くちなわ）」、「髪」に関する蛇の話は、中上健次に影響を与えたのではないかと思われるが、今回は考察が及ばなかった。蛇の視点から、今後もうすこし深く考察していきたい。

4. 「帝国」を脱構築するという未来性が、『千年の愉楽』の考察で見えてきたが、未完長編『異族』などの後期テキストは手つかずのままである。引き続き論じていきたい。

以上のように、今後の課題とすることは山積しているが、それはまた中上の作品における魅力や影響の大きさを語るものでもある。「路地」が遍在するということを考え続けることが、中上健次の作品を読み続けることの意義かもしれない。この点を含めて引き続き研究していきたい。

謝辞

本博士論文は、筆者が城西国際大学大学院人文科学研究科比較文化専攻に在学中に行った研究をまとめたものである。ご指導ご鞭撻頂いた本学三木紀人教授、杜鳳剛教授に深謝いたします。本論を進めるにあたり本学准教授の芳賀浩一博士に終始あたたかいご指導と激励いただき、心より感謝申し上げます。また、倉林眞砂斗先生、岡田美也子先生には研究あるいは授業科目に関して多大なるご指導をいただきました。深く感謝いたします。

文芸評論家佐藤康智氏には、研究に向かう姿勢や研究に関する困難克服のための具体的な方策までいねいに教えていただきました。心からお礼申し上げます。熊野大学俳句部を調べたところ、大きな力を貸してくれました熊野大学事務局の杉浦圭祐氏に、深く感謝をいたします。

俳句結社『天為』の主宰である有馬朗人先生、俳句チャップリンの会の西脇はま子氏、齊藤昭信、興志子ご夫婦からは、絶えず鼓舞激励を受けました。深く感謝をいたします。西脇氏や齊藤ご夫婦からの、生活までの温かいご援助がなかったら、このような仕事を続けられなかったでしょう。格別の謝意を呈しておきたいと思います。

最後に、これまで私をあたたかく応援してくれた両親と、私を明るく励まし続けてくれた妻劉艶絨、娘可欣に心から感謝します。

2017年12月

主要参考文献一覧

凡例：

研究書籍などは、参照した文献の中で特に本稿の本文や脚注で言及したもののみを記した。

- ヴァルター・ビンヤミン著、野村修編訳『暴力批判論』岩波文庫、一九九四年、二九頁。
- ウィルヘルム・ライヒ著、平田武靖訳『ファシズムの大衆心理』せりか書房、一九八六年
- シモーヌ・ベルトー 著、三輪秀彦訳『愛の讃歌：エディット・ピアフの生涯』新潮社、一九七一年
- フレーザー著、永橋卓介訳『金枝編』改版第一～五巻、岩波書店、一九六七年
- ベン＝アミー・シロニ著、大谷堅志郎訳『母なる天皇：女性的君主制の過去・現在・未来』講談社、二〇〇三年
- ミシェル・フーコー著、田村俣訳『性の歴史Ⅱ 快楽の活用』新潮社、一九八六年
- ミシェル・フーコー著、田村俣訳『性の歴史Ⅲ 自己への配慮』新潮社、一九八七年
- ミシェル・フーコー著、渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』新潮社、一九八六年
- 安永壽延『増補 伝承の論理』未来社、一九七一年
- 安藤孝一編『経塚考古学論攷』岩田書院、二〇一一年
- 井口時男『危機と闘争 大江健三郎と中上健次』作品社、二〇〇四年
- 井上ひさし、小森陽一『座談会 昭和文学史 第一巻』集英社、二〇〇三年
- 茨木和生『茨木和生句集 木の国』邑書社、一九九八年。
- 茨木和生『季語を生きる』邑書林、二〇一六年
- 茨木和生『西の季語物語』角川書店、一九九六年
- 宇多喜代子『つばくろの日々・現代俳句の現場』深夜叢書社、一九九四年
- 宇多喜代子『宇多喜代子俳句集成』角川学芸出版、二〇一四年。
- 運河同人編『運河（松根久雄追悼特集）』運河俳句会、一九九九年三月。
- 塩見鮮一郎『作家と差別語』明石書店、一九九三年
- 王維撰、趙殿成箋注『王右丞集箋注』上海古籍出版社、一九八六年
- 屋代弘賢『近古文芸温知叢書 第七編』博文館、一九一一年
- 下中邦人『日本歴史地名大系三十一巻 和歌山県の地名』平凡社、二〇〇一年
- 夏石番矢『越境紀行——夏石番矢全句集』沖積舎、二〇〇一年
- 夏石番矢『楽浪』鈴木一民発行所書肆、一九九二年
- 河中郁男『中上健次論第一巻』鳥影社、二〇一四年
- 角川源義『角川源義全集第一巻（古典研究Ⅰ）』角川書店、一九八八年
- 角川春樹『<いのち>の思想』富士見書房、一九八六年。
- 角川春樹『句集：信長の首』牧羊社、一九八二年。
- 角川書店編『新版季寄せ』角川書店、一九八五年。

笠原芳光『純粋とユーモア：評論集』教文館、一九六七年。
鴨長明著、三木紀人校注『方丈記・発心集』（新潮日本古典集成）新潮社、一九七六年
吉田千亜『現在の＜差別＞のかたち』大月書店、二〇一七年
吉野裕子『蛇：日本の蛇信仰』法政大学出版局、一九九九年
宮地正人・佐藤能丸・桜井良樹編集『明治時代史大辞典 第二卷』吉川弘文館、二〇一二年
熊野原発反对闘争史編集委員会『井内浦 熊野原発反对史』一九九九年
熊野大学俳句部編集『俳句熊野大学（非売品）』一九九四年八月
五来重『増補 高野聖』角川書店、一九七五年
後藤綾子『句集：綾』菜殻火社、一九七一年
後藤綾子『句集：萱枕』富士見書房、一九八八年
高田衛『女と蛇 表徴の江戸文学誌』筑摩書房、一九九九年
高楠順次郎編『大正新脩大蔵経 第十七』大正一切経刊行会、一九二五年
高楠順次郎編『大正新脩大蔵経 第二四卷』大正一切経刊行会、一九二六年
高澤秀次『中上健次事典：論考と取材日録』恒文社、二〇〇二年
高澤秀次『文学者たちの大逆事件と韓国併合』平凡社新書、二〇一〇年
高澤秀次の『評伝 中上健次』集英社、一九九八年
高澤秀次監修『別冊太陽 中上健次没後二十年』平凡社、二〇一二年
根井浄『改訂 補陀落渡海史』法蔵館、二〇〇八年
桜井満、宮腰賢編『旺文社全訳古語辞典』旺文社、一九九〇年
三谷秀治『火の鎖 和島為太郎伝』草土文化、一九八五年
山口昌男編『火まつり』リプロポート、一九八五年
山中千春『佐藤春夫と大逆事件』論創社、二〇一六年。
四方田犬彦『貴種と転生 中上健次』筑摩書房、二〇〇一年
四方田犬彦『日本のマラーノ文学』人文書院、二〇〇七年
寺西貞弘『古代熊野の史的研究』塙書房、二〇〇四年
謝肇淛『五雜俎』中華書局、一九五九年。二三八頁
小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』小学館、二〇〇六年
小松茂美編『続日本の絵巻 24 桑実寺縁起 道成寺縁起』中央公論社、一九九二年
小松茂美編『続日本絵巻大成 13』中央公論社、一九八二年
小川徹『現代日本映画論大系第五卷 幻想と政治の間』冬樹社、一九七一年
松根久雄著、茨木和生、宇多喜代子編集『句集路地霊歌』禽獣社、一九九九年
松尾芭蕉著、中村俊定校注『芭蕉紀行文集』岩波書店、一九九一年
上田秋成『上田秋成集』有朋堂書店、一九三一年
上野元『神倉神社——紀伊熊野新宮に於ける火祭の民俗学的一考察』集文社、一九三七年
新村出編『広辞苑 第五版』岩波書店、一九九八年
森長英三郎『禄亭大石誠之助』岩波書店、一九七七年

水原秋櫻子、加藤楸邨、山本健吉『カラー図説日本大歳時記座右版』講談社、一九八三年。
赤松啓介『非常民の民俗文化——生活民俗と差別昔話』明石書店、一九八六年
泉鏡花『高野聖』角川書店、一九七一年
浅野麗『喪の領域：中上健次・作品研究』翰林書房、二〇一四年
前川真澄『神倉山と高倉下命』新宮保勝会、一九三四年
大江健三郎『大江健三郎 同時代論集1』岩波書店、一九八〇年
大島渚『大島渚著作集』至誠堂、一九六八年
瀧川政次郎ら編著『熊野速玉大社古文書古記録』清文堂、一九七一年
谷口智行『句集 藁嬬』邑書社、二〇〇四年
谷口智行『熊野、魂の系譜——歌びとたちに描かれた熊野』書肆アルス、二〇一四年
谷崎潤一郎『春琴抄』新潮文庫、一九五一年
中上健次、角川春樹『俳句の時代—遠野・熊野・吉野聖地巡礼』角川文庫、一九九二年。
中上健次著、高澤秀次編『中上健次と読む『いのちとかたち』』河出書房、二〇〇四年。
添田知道『添田唾蟬坊・知道著作集5 日本春歌考』刀水書房、一九八二年
添田知道『日本春歌考 庶民のうたえる性の悦び』光文社、一九六六年
渡部直己『中上健次論：愛しさについて』河出書房、一九九六年
藤原宗忠『中右記』（『神道大系 文学篇五 参詣記』）精興社、一九八四年
藤沢衛彦『日本伝説研究 第四巻』すばる書房、一九七八年
梅原猛『日本の原郷 熊野』新潮社、一九九〇年
梅棹忠夫監修『日本語大辞典 講談社カラー版』講談社、一九八九年
塙保己一編『続群書類従. 第八輯. 上』続群書類従完成会、一九三三年
柄谷行人、渡部直己編『中上健次と熊野』太田出版、二〇〇〇年
柄谷行人『坂口安吾と中上健次』講談社、二〇〇六年
堀本裕樹『句集 熊野曼荼羅』文学の森、二〇一二年
野口武彦『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』明石書店、二〇〇九年
柳瀬勁介『穢多非人』（『明治文化全集』（第二十一巻・社会篇））日本評論社、一九三〇年。
柳田国男『定本柳田国男集 第九巻』筑摩書房、一九六二年
梁石日『アジア的身体』平凡社、一九九九年
蓮實重彦『絶対文芸時評宣言』河出書房、一九九四年

『中上健次全集1～15巻』集英社、一九九五年～翌年

『中上健次発言集成1～6巻』第三文明社、一九九五～一九九九年

『中上健次エッセイ撰集 文学・芸能篇』恒文社、二〇〇二年

『中上健次エッセイ撰集 青春・ボーダー篇』恒文社、二〇〇一年

『牛王：熊野大学文集1～9号』熊野大学、二〇〇一～二〇一七年

『熊野回廊（瓦版）創刊号～6号』熊野大学、一九九〇年七月～十二月

- 『熊野誌第三十九号（特集中上健次）』熊野大学、熊野地方史研究会発行、一九九四年。
『熊野誌第五十九号』熊野大学、熊野地方史研究会、二〇一二年十二月。
『南紀熊野の説話』紀南の温泉社、一九三四年
『日本文芸思潮史論叢』ペリカン社、二〇〇一年
『俳句研究[夏の号]（特集宇多喜代子の世界）』角川SSC、二〇〇九年六月
『部落解放』解放出版社、一九九九年十一月
『文学界』一九九八年六月
『文藝』河出書房、一九八三年十一月
『別冊太陽 熊野 異界への旅』平凡社、二〇〇二年
『別冊太陽 中上健次』平凡社、二〇一二年
『民俗芸術』第三卷第七号、民俗芸術の会、一九三〇年七月
『群像 日本の作家 中上健次』、小学館、一九九六年
『群像』二〇〇三年六月
『現代日本思想大系 10 反近代の思想』筑摩書房、一九六五年
『現代俳句ハンドブック』雄山閣、一九九五年
『ヒューマンライツ』部落研究・人権研究所、二〇一七年五月
『ユリイカ 詩と批評』青土社、二〇〇一年二月
『ユリイカ』青土社、一九九三年三
『岩波講座 文学9』岩波書店、二〇〇二年
『季刊 日本思想史』ベリかん社、一九七七年十月